

正宗蓮日

教學小辭典

編輯部教學學會創

創 學 會

語句の解釈

あ

愛染明王 あいぜんみょうおう 真言密教の明王部の本尊の一つであって、不動明

王（生死即涅槃をあらわす）とともにこの部の最重要の本尊とされた。愛染は梵語では羅訶羅闍らがらじやという。愛貪染著あいどんせんじやくの義。日蓮大聖人の仏法にあつては、御本尊の左端にしたためられ、煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいの法門をあらわしている。上野殿母御前御返事（一五六九頁）等に出ている。経王殿御返事（一二四頁）に「さいはいは愛染の如く福は毘沙門びしゃもんの如くなるべし」とある。

阿逸多 あいつた 弥勒菩薩みろくぼさつの名。これよりすぐれた人はいないという意味。無勝むしょう、無能勝むのうしょう（人の能く勝るものなし）、無三毒と訳す。

愛別離苦 あいべつりく 八苦の一つで、死、またはその他のさまざまのことによって、愛する者と離別りべつしなければならぬ苦しみをいう。（聖愚問答抄四七四頁参照）

阿漚 あう 阿優あうとも書く。阿は無、漚は有の意。外道げどうの経には必ず阿漚の二字を置く。万法ばんぽうは有無の二を出ないとする。仏經典の初めに如是にやぜの二字を置くのは、外道が阿漚と置いて、有無の二道により、ものを判ずるのを破しているの

ある。（曾谷入道殿御返事一〇五七頁参照）

会加の小大夫 あいかのこだゆう 東条の御厨みくりやの御厨人の名と思われる。（新尼にいあま

御前御返事九〇六頁参照）

青麩 あおざし あうざしともいう。一種の食品の名。青麦を炒り、こ

れを臼でひいて糸のようによって作った菓子のこと。（松

野殿御返事一三九〇頁参照）

開伽 あか (1)功德、功德水、水等と訳す。転じて、特に仏前（墓

前）に供える水を意味する。（善無畏三藏抄八八六頁）

(2)船底にたまった水を、水というのをきらって、湊あかという

ことがある。（阿仏房尼御前御返事一三〇八頁）

不開門 あかずのもん 日蓮正宗総本山大石寺の境内、大客殿と大化城との

間にある小さな門のこと。広宣流布の時がきて、本門戒壇

建立の時に開かれる特別の門である。ふだんは誰も通さな

いので「あかすの門」という。創建は不明、第二十四世日

永上人のとき再建。

阿伽陀仙人 あかだせんじん 古代インドで通力をもっていたといわれる外

道。大通力をもつて十二年の間、耳の中に恒河の水をとど

めたという。

阿迦尼陀天 あかにだてん 色界十八天の最上天をいう。十八天を初、二、

三、四の四禅天に分け、第四禅天を最上品とし、その最後の

辺を阿迦尼陀と名づける。阿迦は色、尼陀は究竟の意。色界の有情は欲界をきらい静慮を修行して生じたものであるから、清浄無垢の色質をもち苦患憂苦におかされることがない。特に最上品の四禪を修した者の住む阿迦尼陀天の果報は、有色界中第一であるといわれる。旧訳に無下天というのも、これ以上の色界の天がないからである。

阿耨多王 阿耨多は梵語、无（無）勝と訳す。随羅然国のバラモンの豪族の小王。釈迦および五百の比丘を請じておきながら、自ら快樂にふけて、供養することを忘れて、釈迦の一行を餓死させようとした。そのため釈迦は、馬が食べる麦を九十日間も食べて飢えをしのいだ。釈尊の九横の大難の一つ。

安芸の僧正 承久三年、後鳥羽上皇を主とする朝廷が、北条氏の鎌倉幕府討伐のために承久の乱を起こしたが、それに先立って、朝廷側では十五壇の法といわれる密教の調伏を行じ、北条打倒を祈願した。そのなかの「威徳王」「金剛竜子法」の調伏を行じたのが、この安芸の僧正である。詳伝不明。一説によれば、天台宗寺門派園城寺の別当・覚朝ともいわれる。（祈禱抄一三五三頁参照）

秋元太郎兵衛尉 下総（千葉県）印旛郡白井の荘の人。文応

元年（一二六〇年）、日蓮大聖人が松葉ヶ谷の法難を避けて下総中山に行かれたとき折伏されたという。正応四年（一二九一年）九月十七日没。その家は秋本寺となった。曾谷氏や太田氏と親しく、富木氏とは親類であったともいわれている。日蓮大聖人より秋元御書等をいただいている。（慈覚大師事一〇一九頁参照）

悪縁 悪知識と同じ意。悪道に落ちる助縁となるもの。兄弟抄（一〇七九頁）に「悪縁にすかされて法華経を捨つる心つきにけり」と述べられている。仏道修行を妨げるものもろの縁。

悪鬼神 人の功德や智慧を失わせ、また人の寿命を奪い害する悪鬼、悪神のこと。修羅、夜叉、鬼子母神、十羅刹女、魔王のたぐい。この悪鬼神が権力者などの身に入り代わり正法護持者に災難を起こし魔の働きをする。ただし法華経の会座においては、法華経の行者を擁護し、これにあだをなすものを破し、正法を守護することを誓った。（富士一跡門徒存知の事一六〇二頁参照）

悪左府 平安時代の政治家・藤原頼長のこと。保元の乱を起こし、源義朝、平清盛らに打たれて滅びた。（新池殿御消息一四三七頁参照）

惡趣 あくしゅ 惡道のこと。趣は境界のこと、十惡五逆謗法等の惡

業を行じた衆生が落ちる苦惱の状態をいう。四惡趣（界）

とは地獄、餓鬼、畜生、修羅をいう。

惡瘡 あくそう 惡性のできもの、はれものをいう。阿闍世王は謗法の

罪により大惡瘡を身に生じた。

惡象 あくぞう 性質狂暴で、人畜を傷害する兇惡な象。涅槃經に惡知

識の恐るべき對比として惡象をあげてあるが、その御文は

御書のいたるところに見えている。提婆達多が阿闍世王の

大惡象を酒に酔わせて、仏を害そうとした話は有名である。

惡知識 あくちしき 善知識に対する語。仏道修行を妨げて不幸におとし

入れる者をいう。しかし、たとえ惡知識でも、それを縁と

してかえって信心が強盛になるならば善知識といえる。

惡人の成仏 あくにん じょうぶつ 惡人が成仏すること。惡人とは五逆、十惡等の

惡業を重ねる者、仏に敵対する者のことで、そのような惡

人でも三大秘法の南無妙法蓮華經によって即身成仏するこ

とができるということである。爾前經で説く惡人の成仏は

惡人が善人にならわって成仏するという改転の成仏で、惡人

そのまま成仏することではない。法華經にいたり対惡顯

善が終わって善惡不二、邪正一如、逆即是順の原理が示さ

れて、惡の全体がそのまま善と顯われ、提婆達多は法華經

提婆達多品第十二で、天王如來の授記を受けるのである。

阿含經 あこんきょう 釈迦一代の教説を天台が五時に判じたなかで、最初

の華嚴時の次に説かれた經。増一阿含經五十一卷、中阿含

經六十卷、雜阿含經五十卷、長阿含經二十二卷からなり、四

阿含經ともいう。阿含經は小乘經で、十二年間に、波羅奈

国の鹿野苑で説かれた。法門は四諦の法輪である。衆生の

機根が幼稚で先に説いた華嚴經を了解できなかったので、

三乗が満足できるように誘引の法を説いた。阿含經を依經

とする宗に、律宗、俱舍宗、成実宗があり、劣應身を本尊

とし小乗の戒律を重んずる。（一代聖教大意三九〇頁）

阿含經の小釈迦 あこんきょうのしょうしやか 阿含經で説き明かされる釈迦のこと。初地

以前の凡夫二乗に対して応現する一丈六尺の仏身であり老

比丘の相をしている。八相成道の仏身で、三身中の応身

仏、たんに小乘藏教の教理を説くだけの劣應身。四土のな

かには凡聖同居土に住む。

阿含三藏教 あこんさんざうきょう 阿含時に説かれた小乘教のこと。阿含經の教

法。三藏は經藏（定藏）律藏（戒藏）論藏（慧藏）の三つ

をいうが、その本体は戒である。（諸宗問答抄三七六頁）

阿私陀仙人 あしだせんじん 阿私陀は梵語で、端正、端嚴と訳す。バラモン

の長老で、中インド迦毘羅衛国の仙人。悉達太子（後の釈

迦仏こたふが降誕こうたんのとき、太子の相を見て「もしも出家すれば仏になる人であり、自分はこれを見ないで死なねばならぬのをうらむ」といい、そのとおり太子の成道に先立って死んだ。

阿闍世あじやせ 阿闍世は梵語、未生怨みしょうおんと訳す。釈尊在世から滅後にかけてのインド摩竭陀まかだ国の王。父は頻婆沙羅王びんばしやらおう、母は韋提希夫人いだいしき。太子であつたとき、提婆達多だいばだつたにそそのかされて、仏弟子である父王を殺して王位につき、さらに釈尊を害して、提婆達多を新仏にしようとして、醉象さいぞうを放つて仏を踏み殺させようとした等のことがある。後に、提婆達多は謗法罪ぼうぼうざいによつて阿鼻獄あびに落ち、阿闍世王は大惡瘡だいくそうを生ずるなどの法罰をうけて、ついに釈尊に帰伏した。後に法華経等の結集をして大いに仏法に尽くした。未生怨のいわれは、阿闍世王は生まれる前、山中に住む仙人であつたが、頻婆沙羅王は、早く子供がほしいと思い、仙人を殺した。そこで生まれる前から、怨みをもっているところから、未生怨の名がある。

阿闍梨あじり 梵語。聖者しょうじや・出苦者しゅつくしや・尊者そんじや・正行しょうぎやう・軌範師きはんし・教授等きやうじゆと訳す。これを称するのは条件があるが、日本では師よりゆるされるのと官職として与えられるものとの二種があつた。

た。日蓮大聖人が門下にお用いになったのは、大指導者たるべき信行学をつまれた方にのみ与えられたものである。

阿闍仏あじくふつ 東方妙喜世界の教主で、種々の経に出てくる。法華經化城喻品第七によれば、大通仏十六王子の第一智積王子ちせきの後身とある。有徳王うとく、覺徳比丘かくとくは後に阿闍仏の第一、第二の弟子となつた。

阿輸舍國あしゆしゃこく 阿踰闍あゆじやとも書く。不可戰国と訳す。中インドの大國である。玄奘三蔵げんじようの大唐西域記だいとうさいいきに詳しく勝鬘經しょうまんにも出ている。大唐西域記によれば、この國の周圍は五千余里、大都府は周圍二十余里（當時の一里は現在の六分の一）、農業盛んで穀類・果樹は繁茂し、人心、氣候ともに温和、風俗善順で勤勉、学芸に励む。仏寺百余か所、大都府に古き大伽藍がらんがある。天親菩薩てんじんがこの國で数十年にわたり大小乗の諸論を造り、國王、沙門婆羅門しゃもんばらもんのために大講義した堂がある。無著菩薩むぢやくの遺跡もある。（開目抄上一九八頁参照）

阿修羅あしゆら 阿修羅は梵語で、帝釈たいしやくに敵対する神。十界の一つであり、怒りの生命をいう。

阿闍あせん 不樂欲、無欲、隨意作ずいいきさと訳す。唯識論ゆいしきろんの五種性のなかの第五。無性有情の一種で、成仏を欲しないところから、こ

の訳名がある。成唯識論には無性に一闍底迦、阿闍底迦、阿闍底迦の三種があると説く。無涅槃性の阿闍底迦に対し、一闍提と阿闍提は長い時を経て後に成仏するといわれている。しかし、これらの論は権大乘經の説で、日蓮大聖人の仏法からみれば一切衆生ごとく成仏できる。すなわち当体義抄(五一八頁)に「内道・外道・阿闍・阿闍・阿闍・皆悉く一切智地に到る」とある。

阿僧祇劫 阿僧祇は梵語で無数、劫は長時の義で、合わせて数えることのできない長い間の意。

阿育大王 阿育は梵語で、無憂と訳す。釈尊滅後一〇〇年頃にインドに出て、インドを統一した最初の王。性来、凶暴で戦を好んだが、後、仏教を信じ仁慈博愛主義に立ち、正法による治国を行なった。広大な領土に八万四千の大寺を造り、八万四千の仏舍利宝塔を建て、あるいは第三次の仏典結集をなし、高僧を四方に派して布教させる等の事跡があった。阿育王の生まれた因縁、すなわち砂の餅を釈迦に供養した子供が、後、阿育王と生まれたことについては、付法藏經、大智度論等に説かれている。

惡鬼神 惡鬼、魔と同じ。生命力を衰えさせ、思考の乱れを引き起こして、正法を行ずる者の妨げとなる働きをする。

惡鬼入其身 法華經勸持品第十三の偈文にあり「惡鬼其の身に入りて」と読む。惡鬼とは六道の一つの餓鬼道を鬼といひ、天竜等の八部を神という。鬼神、天神、夜叉神等のたぐい。人の身に入つては病氣を起こし思考の乱れを起こす。国家社会の身に入つては天変地天や思想の乱れを起こす。御義口伝上(七四九頁)には「惡鬼とは法然弘法等是なり入其身とは国王・大臣・万民等の事なり」とある。

惡口罵詈 法華經勸持品第十三の文に「もろもろの無智の人の惡口罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん」と説かれている。惡口をいい、ののしること。罵は面と向かつてそしり、しりぞけること。詈はそれとなくあてこすり、惡口をいう意味。

惡国・善国 惡国とは国主をはじめ万民が正法をきらつて正法弘通の妨げをする国であり、善国は逆に万民が正法に帰依し国土を安穩たらしめる国をいう。開目抄下(二三五頁)には、さらに惡国を、無智・惡人の充滿する国と、邪智・謗法の多い国に分け正法流布のあり方を示されている。すなわち無智・惡人の国土に充滿の時は授受を前とし、邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とする。現在の日本国は邪智・謗法の者多き国である。

熱原法難

弘安元年から約三年間、富士郡熱原の郷方面の日

蓮正宗信者の受けた法難をいう。日蓮大聖人は、この難を機として本門戒壇の大御本尊を建立された。（要語解説三

六一が参照）

阿那含・阿羅漢

小乗経に説かれた声聞の悟りで、第一須陀

洹果、第二斯陀含果、第三阿那含果、第四阿羅漢果であ

る。この位にある尊者は、欲界九品の惑を断じて、再び欲界に還つて来なかつたことをあらわしている。

阿那律 釈尊十大弟子の一人で天眼第一といわれた。過去弗

沙仏の末法に飢饉のあつたとき、飢えた辟支仏に稗の飯を

施したことにより、現身に宝を得、さらに九十一劫、人天

に生まれて果報を得、貧しさを味わうことなく、みな意の

ごとくになったという。また仏の説法中坐睡して叱責をう

け、それに発憤して眠りを断つたので眼病をわずらい失明

した。しかしこの縁によって天眼通を得たという。釈尊の

従兄にあたる。

阿難 釈尊十大弟子の一人で、多聞第一といわれた。提婆達

多の弟で、釈尊の従弟にあたる。法華経で、山海慧自在通

王仏の記別を受けている。

阿若憍陳如 中インドの迦毘羅衛国の入。釈尊から最初に化

導された五比丘のうちの一人。阿若俱鄰ともいう。

阿若俱鄰 梵語。釈尊より最初に化導された五比丘の一人で

中インド迦毘羅衛国の入。仏の四諦の説法を最初に聞いて

無の本際を解了した。阿若憍陳如ともいう。

阿菴樓駄 阿那律尊者のこと。無貧、無滅と訳す。釈尊十大

弟子の一人、天眼第一。

阿耨多羅三藐三菩提 梵語で、無上正徧知、無上正等覺と訳

す。阿耨多羅は無上または無答といい、三藐は正等または

正徧、三菩提は正覺または正知と訳す。無上にして清淨、

一切法に遍満する仏の智慧をいう。

阿耨池 無熱惱池、無熱池または清涼池と訳す。この池には

竜王がすむという。また閻浮提の四大河の発源池であると

いう。

頹鞞 釈尊が太子の位を捨て仏道を求めて旅立つたとき、父

王の命令によつて、そのあとを追つた五人の近親者、拘鄰

（阿若憍陳如）、頹鞞、跋提、十力迦葉、拘利太子の五比

丘の一人。初め釈尊と共に修行したが、途中疑つて去り、

釈尊が成道したとき、最初に弟子になったのがこの五比丘

である。

阿鼻地獄 阿鼻は梵語で、無間と訳す。無間地獄のこと。欲

界の最低、大焦熱地獄の下にある。五逆罪をつくる人が、

この地獄に落ちる。(顯謗法抄四四七頁参照)

阿鼻大城 阿鼻は無間と訳す。無間地獄の意。涅槃經十九に

「阿とは無といい、鼻とは間と名づく、しばらくも楽しみなきゆえに間といい、無間と名づく」とある。大城は無間地獄が広漠であつて凡力では抜け出ることができないほど堅固な所であるので城に譬えた。無間地獄については顯謗法抄(四四七頁)に詳しい。

阿鼻の依正 阿鼻地獄の依報、正報ということ。無間地獄の

依報である地獄の国土も、正報である地獄の衆生も、共に含めて地獄界の一切という意。妙楽の金鉉論に「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し」すなわち無間地獄の依報の国土も正報の衆生も、共に最極の聖人である仏の生命の中にあつて瞬時も離れることはない、とある。(諸法実相抄一三五八頁参照)

阿毘跋致 梵語、不退転の意。すなわち、仏道修行において、どんな誘惑や迫害があつても、退転しない境涯になる

ことである。天台は菩薩の五十二位のうち、初住の位をもつて不退としている。

阿仏房 阿仏房日得。京都の遠藤家で為盛と称し、順徳上皇

の北面の武士で、承久三年、上皇が佐渡に流されたとき供

をして佐渡に定住したという。日蓮大聖人の佐渡流罪中に

塚原三昧堂で大聖人を論詰しようとしてかえつて折伏され

念仏を捨て妻の千日尼と共に帰伏した。以来、二年余り、

大聖人に身命をかけてご給仕申し上げ、大聖人が身延に入

られてからも、八、九十歳の老体にかかわらず三回も御供

養をたずさえおたずねした。阿仏房の信心から出たお目通

りが現在の総本山の「お目通り」の儀式である。曾孫の日

満は年少より富士に上り日興上人に仕え、北陸における仏

法の中心者を命ぜられた。(要語解説三九〇頁参照)

啞法 バラモンの修行で人に向かつてものをいわず、ついに

啞のごとく黙りこんでしまふのを至道とした。立正安国論

(二一頁)に出ている。

阿防羅刹 地獄の獄卒を意味する。頭は牛、手は人という姿

で、剣を持ち罪人を罰するといわれる。なお羅刹とは鬼、

特に悪鬼の意。

阿弥陀 阿弥陀仏の略。無量光仏、無量寿仏ともいい西方極

楽世界の教主であり三種ある。①権教である觀經に説かれ

る阿弥陀である。今の浄土宗や浄土真宗は、この最も低級

な阿弥陀を本尊として立てているのである。法蔵比丘なる

僧が四十八の願いをおこして修行し十劫前に成仏したという。衆生が自分の名をいえば、ただちに極楽世界に往生せしむという。ただし五逆罪をおかした者と誹謗正法の者を除くと誓言している。②迹門の阿弥陀で、大通智勝仏の十六王子の一人で法華経大願の主の仏である。③本門の阿弥陀で、釈尊分身の阿弥陀である。これは天台宗で立てる阿弥陀である。しかし、これらの阿弥陀は、久遠元初の自受用身からみれば、すべて迹仏であり、権仏にすぎないのである。

阿弥陀經 浄土宗の依経、弥陀の三部経の一つ。方等部の經典。この世の中は穢土であり、そのためには阿弥陀仏の名号を唱えて、死後、極楽浄土へ往生することを理想の教えとしてゐる。

阿踰闍 阿踰闍は梵語、不可戦国と訳す。中インドの一大国である。阿輪舎国を参照。

阿羅漢 (要語解説二六六参照)

阿練若 無事閑静処という意味で人里を離れた山寺などのこと。法華経の勧持品第十三には、三類の強敵のなかの第三、憍聖増上慢の住所をあげ「或は阿練若に納衣にして空閑に在って云云」とある。すなわち憍聖増上慢の者が、静か

な山寺などにこもって、人々に邪法を説く姿をあらわしている。

安足国王 安足国の王。馬を好んで、人を馬にし、馬を人にしたという。千日尼御返事(一三二一頁)に、この王に馬にされた父を救った子供の話がある。

安徳天皇 八十一代の天皇(在位一一七八年—一一八五年)。高倉天皇の第一皇子で母は平清盛の息女・徳子(建礼門院)である。治承四年、三歳で即位し、源平の争いに壇の浦に身を投げて没した。(神国王御書一五一八頁参照)

安慧 延暦寺第四の座主。伝教、慈覚について学び、慈覚の没後、その跡を継いで延暦寺の座主となった。顯法華義抄十卷、即身成仏義一卷等の著書がある。(妙一女御返事一二五七頁参照)

安然和尚 天台宗の学僧で、伝教大師の俗縁ともいわれているが、詳細には明らかでない。幼少から比叡山に上り、安慧に師事し、また慈覚大師円仁の弟子となり、顕密の教義を学び、後、胎蔵界の法を受けた。天台宗の密教化を図り叡山汚濁の源を作った。真言教時義、教時諍論、菩提心義、広釈、悉曇蔵等を著わす。(撰時抄二八六頁参照)

天母山 静岡県富士宮市山宮にある小高い丘をいう。日蓮正

宗總本山富士大石寺の東方約四^キの地点に位している。この地域は、日興上人の時代から宗内にいろいろのいい伝えがある由緒^{ゆいしょ}ふかいところである。ふもとに広がる平地は万^{まん}坊^{ぼう}が原と呼ばれている。

安養 西方極樂浄土の異訳の名。阿弥陀^{あみだ}經によると西方十億の国土を過ぎた所にあるという。阿弥陀の浄土をいう。

または安樂世界とも極樂世界ともいう。

菴羅果 菴羅とは清浄無垢^{しょうじやうむく}と訳す。玄奘音義には「その果は小棗の如く花は白くして少なく果は胡桃^{なつめ}の如く、その味は酸くかつ甘し、菓品に加味すべし、經中に掌中の者を観るが如しというものなり」とある。毘那耶雜事^{びなやざうじ}には「此には余甘子^{よかんし}という。菴沒羅^{あんもら}とは全く別なり、声相みだるが為に惑^{まど}う。是れ掌中に観るものなり」とあり、觀賞用植物でもあった。十法界抄(四二〇頁)に「法華本門の觀心^{かんじん}の意を以て一代聖教を按^{あん}ずるに菴羅果^{あんらか}を取つて掌中に捧ぐるが如し」とある。菴羅果を掌中において眺^{なが}めるように、一代五十年の聖教の淺深^{せんじん}が明らかになることに譬^{たと}えたのである。

安樂行品 法華經第五、安樂行品第十四がこれである。仏滅後法華經を修行するもの、身・口・意・誓願^{せいがん}の四安樂行に住して弘通すれば、法難来ることなく、安樂に行じ得べ

し、と仏が文殊師利^{もんじゆしり}を対告衆^{たいこうしゆ}として説かれた經で、法華經における摂受^{しやうじゆ}の修行が説かれている。御義口伝上(七五〇頁)には「妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類^{るたぐ}いの修行は妙法蓮華經を修行するに難来るを以て安樂と意得^{こころう}可きなり」とあり、末法今時は、難こそ安樂であると心得て修行すべきことを説いてある。(要語解説六七

頁参照)

安立行菩薩 地涌の四大菩薩、上行、無逆行、淨行、安立^{あんりゆう}行^{ぎやう}のなかの一人。地涌の菩薩は涌出品第十五で大地より涌出した。御義口伝上(七五二頁)に「疏の九を受けて輔正記の九に云く『經に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無逆行は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名^{なづ}け断常^{だんじやう}の際^{きわ}を踰^こゆるを無逆行と称し五住^{ごじゆう}の垢累^{くまい}を超ゆる故に淨行と名^{なづ}け道樹にして徳円^{とくえん}かなり故に安立行と曰^いふなり』」とある。日蓮大聖人の仏法は常樂我淨である。生命の中に四徳あり、安立行は樂をあらわす。また、安立行とは道樹にして、ものごとに対して、すぐ道をとおし、あくまで正論は正論としていいきつていける、みていける生活、または世の中を如実知見^{にょじつちけん}していける人生である。

安祿山 胡人。玄宗皇帝に愛されて平盧・范陽・河東の三節

度使を兼任。また楊貴妃と結んでその養子となる。天宝の末、叛乱を起こし、洛陽を攻落、長安に迫り、大燕皇帝と自称したが、子の慶緒に殺された。

い

威音王仏 法華經常不輕品第二十に説かれている仏で、同号

の仏が二万億いたという。常不輕菩薩は、この最初の、威音王仏の像法時代の末に出て但行札押を立て折伏を行じたが、時の上慢の四衆が迫害した。

威儀 威容儀礼の義であり、威厳とおごそかさのある容姿をいう。厳しい規律にしたがった起居動作である。仏法では、これを行住坐臥の四つに分けて四威儀というが、末法においては無用である。

威儀具足 威儀とは、厳しい規律にしたがって起居動作をすること、これを行住坐臥の四つに分けて四威儀という。また三千威儀、八万細行等といい、戒律を保護する細規をいうこともある。この威儀を具足して欠けることのない姿を威儀具足という。

遺教経 仏遺教経、仏垂般涅槃略説教誡経ともいう。阿含

小乗部の最後の結経で、主に戒を説いている一卷五紙。姚秦の鳩摩羅什三蔵の訳で有名な大蔵二大文といわれる。

易行道 難行道に対する語。浄土宗とくに法然が立てた邪

義である。末法は機根が悪くなっているから、法華経等の難行道では往生できず、易行道である称名念仏こそ末法の機になつていふという。易行道、難行道という言葉の起源は竜樹の十住毘婆沙論であり、菩薩が阿毘跋致（不退地）にはいるのに二種の道があると難易の二行道を示した。しかるに中国の曇鸞は難行道は聖道門、易行道は浄土門とし、法然はさらに曲解して難行道に法華経も入れてしまった。

池上右衛門大夫宗仲 鎌倉幕府の作事奉行であつた池上左衛

門大夫康光の子、兵衛志宗長の兄。宗仲、宗長の池上兄弟は日昭の甥であつた関係で建長八年ごろから大聖人に帰依していた。しかるに父の康光は極楽寺良観の熱心な信奉者で、特に文永十二年と建治三年の二回にわたり兄の宗仲は勘当された。初めの勘当に際し大聖人から励まされたのが兄弟抄である。（要語解説三八四頁参照）

池上相承書 身延相承書と共に、大聖人が御入滅の直前、

日興上人に血脈付法の証拠として与えられた御付嘱状であ

る。この二個の相承こそ、日興上人への唯授一人の御相伝書であるだけでなく、末弟一同に与えられた広布達成の御命令書である。池上相承書は弘安五年十月十三日、御入滅の当日、池上で書かれた。「釈尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家出家どもの輩は非法の衆たるべきなり。弘安五年壬午十月十三日、武州池上、日蓮在御判」と。この二個相承は北山本門寺と西山本門寺の争いが原因で、武田の兵乱により紛失したいきさつが多く史料で明らかである。

池上と中山 (要語解説三九六頁参照)

池上兵衛 志宗長 (要語解説三八四頁参照)

已願真実 無量義経の「四十余年未願真実」に対する語。未

願真実とは「未だ真実を願わさず」と読み、釈迦が四十余年間に説いた爾前権経をいう。已願真実とは「已に真実を願わせり」ということで、すなわち釈迦の出世の本懐として四十余年後、最後の八年間に説いた法華経をさす。

懿公 周の王。鶴を愛して奢侈にふけり、臣下に見放された。北狄に捕われて、肉を食べられ、肝と骨を捨てられた。

た。(公胤の項参照)

謂己均仏 「己れ仏に均しと謂う」と読む。「止観」および

「弘決」の一に出てくる言葉である。禪宗の人々が自己の凡夫心を、ただちに仏心なりとし、自己すなわち仏に等しいと考える大慢を破した語。

已今当説最爲第一 妙楽の疏に「たとい経ありて諸経の王というとも已今当説最爲第一といわざれば兼但对帯その義知んぬべし」とある。すなわち法華経こそ最後の極説であり已今当の中に、法華経が最も勝れているのである。

已今当説最爲難信難解 法華経法師品第十の文。「我が所説の經典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於いて、此の法華経、最も爲れ難信難解なり」とある。すなわち、法華経が最高の法であるとの文である。

ある。已説とは四十余年の諸経、今説とは無量義経、当説とは涅槃経のことである。法華経は、序分である無量義経に四十余年の年限をあげて、華嚴・阿含・方等・般若等の諸経を未願真実と定め、正宗分の法華経にいたって、一代諸経の勝劣を決定するときに、「我が所説の經典・無量千万億・已説・今説・当説」の金言を述べ、しかもその中において、この法華経が最も難信難解であると説いた。

已今当の三説 法華経法師品第十の「我が所説の經典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の

中に於いて、此の法華經、最も為れ難信難解なり」の文から、法華經以外の前後の諸經、すなわち「已」は法華經以前の經、「今」は無量義經、「当」は涅槃經をさして已今

当の三説といった。

沙の餅 砂の餅。泥で作った餅。釈尊の在世に徳勝童子、無勝童子の二人の子供が、真心こめて仏に砂で作った餅を供養した。その功德によつて阿育大王という一閻浮提の四分の一を掌中に握る大王に生まれることができた。（上野

殿御返事一五〇八頁参照）

為實施権 施開廢の三釈のうちの一つ。「実のために権をほどこす」と読む。天台大師が妙法蓮華經の題号を釈するのに、蓮華の二字を当体蓮華、譬喻蓮華の二つに解し、その譬喻蓮華を、本門迹門におのおの三義を設けて六重の蓮華を釈する。そのなかの迹門譬喻の第一の譬えを為實施権と

いう。
易信易解 難信難解に対していう言葉。「信じやすく解し

やすし」と読む。難信難解は法華經をいい、易信易解はその他の經をいう。法華經は仏の御意をそのままに説かれた經であるから、仏とはるかにかけはなれた凡夫には、その意はなかなか知りがたい。しかし、その他の經は、仏が衆

生の意に同じて、すなわち隨他意といつて、他の意にしたがつて説いた經であるから、凡夫の心に信じやすく、また悟りやすいというのである。

以信代慧 （要語解説三二二頁参照）

以心伝心 「心をもつて心に伝える」と読む。人間対人間の

心のふれあい、心のつながりをいう。ただし禪宗の教外別伝、不立文字などは邪義である。

以信得入 「信を以て入ることを得」と読む。法華經譬喻品

第三の偈の文に「汝舍利弗、汝尚此の經に於いては、信を以つて入ることを得たり、況や余の聲聞をや、其の余の聲聞も、仏語を信するが故に、此の經に隨順す、己が智分に非ず」とある。信するということが根本であり、その信によつて仏の境涯にいたることができるのである。

韋提希夫人 釈尊在世のインドの王・頻婆沙羅の後、阿闍世王の母である。阿闍世王が、提婆達多の甘言にのり、父・頻婆沙羅王を幽閉し餓死させようとしたとき、体に蜜を塗つて王を養った。（阿闍世王の項参照）

異体同心 異体同心事（一四六三頁）にいわく「異体同心なれば万事を成し……日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと

覺へ候」と。異体同心の「心」は、觀心の心であり、信心の心である。觀心とは、受持即觀心といって、弘安二年十月十二日の一閻浮提總与の大曼荼羅を、余行をまじえず、ひたぶるに信心し奉ることである。（要語解説三一五頁）

参照）

一雨所潤 法華經藥草喻品第五に「一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し」とあり、雨も一様に降り、大地も同じでありながら、そこに生ずる草木は千差万別であることを例に、実相一味の法が、三乗五乗と分かれることを譬えた。いわゆる三草二木の譬えである。御義口伝上（七二九頁）には、一地所生一雨所潤は南無妙法蓮華經で、爾前の諸經はもちろん法華經二十八品といえども、その南無妙法蓮華經の一雨一地から生じた千草万木の一つにすぎないと明かされている。また一雨所潤とは御本尊の無差別の平等を説いているのである。

一會 會とは會座の意味で、仏の説法の會座をいう。一會には、一回の法會という意とその會座全体という意と両意がある。

一閻浮提 閻浮提は梵語で、閻浮とは樹の名、提は州と訳す。古代インドの世界観では、われわれの世界の中央に須弥山があり、その南方を南閻浮提といって仏法が行なわれる場所と考えた。今日で考えれば、一往、地球上すべてが南閻浮提であり、これを一閻浮提ともいう。

一閻浮提の座主 一閻浮提とは全世界の意で座主とは會座の主、一山の寺務を総理する首座の僧職をいう。すなわち全世界の主であり、仏の教えを説く立ち場の最高の位置の人である。日蓮正宗においては、日蓮大聖人より第二祖日興上人、第三祖日目上人へと嫡々の相承があり、代々の親下は大聖人の遣使還告のお姿である。特に日興上人より日目上人への讓狀・日興跡条条の事には「本門寺建立の時は新田卿阿闍梨日目を座主として日本国……一閻浮提の内

に於いて山寺等の半分は日目嫡子分として管領せしむべし、残る所の半分は自余の大衆等之を領掌すべし」とある。すなわち一閻浮提の座主とは総じては代々の御法主上人であり、別していえば日目上人である。

一往・再往 一往とは、ひととおりの意味とか、そのままの意味。再往とは、一重立ちいたったという意味。たとえば、法華經の十神力を現在と滅後に分けるのは天台の一往の解釈であり、再往、日蓮大聖人の定義は一向に滅後末法のためとなる。

一往名通・再往義別 法華經二十八品のいずれも通じて題号

に妙法蓮華經とあることを一往名通という。しかし一往はすべて妙法の五字ではあるが、再往は義（内容）が異なる。すなわち迹門本門ともに妙法の名はあるが内容は天地雲泥の相違があるのを再往義別という。

一行阿闍梨・一行禪師 中国唐代の天台宗の学僧で、二十一歳で荊州景禪師について出家し、その後、嵩山の普寂禪師について禪門をきわめたという。常に一行三昧を研精したところから一行といわれた。晩年、大日經疏を著わし、天台の一念三千を盗みとって、仏法を乱した。

撰時抄（二七五頁）に「天台宗の中に一行禪師という僻人一人ありこれをかたらひて漢土の法門をかたらせけり」とある。

一行筆受の相承 唐の玄宗皇帝のとき、インドの善無畏が中国にわたり真言宗を伝えた。このとき善無畏の勧めで一行阿闍梨が大日經翻訳の筆受にあたり、また大日經疏を執筆した。一行は善無畏に誑惑され、大日經と法華經を一味とし、真言宗こそ三密相応の秘法であって、大日經は印と真言があるから法華經に勝れているという邪義をかまえた。しかし無量義經に「四十余年未顕真実」とあるごとく、

法華經こそ諸經の王である。この一行の誑惑は撰時抄（二七五頁）に詳しい。これ以降の真言宗は理同事勝という邪義を立てたのである。

一偈 偈とは偈他の略。一偈とは①經の字数が八字で四句つづけて三十二字をいい、これを通偈という。②八字と限らず四字、五字、六字、七字が四句連なったのをいい、これを別偈という。また一偈は四句の經文からできあがっているから一四句偈ともいわれる。その場合二句のものを半偈という。

一眼の龜 一眼の龜の浮木の譬え。優曇華の譬えと同じく、衆生が正法に巡り会い、さらにそれを受持することがいかにむずかしいかを譬えたもの。（松野殿後家尼御前御返事

一三九〇頁参照）

一業所感 善惡の業因によってそれぞれ善惡の果をうけるのは因果の理法である。一業所感とは一つの業因によって感ずる果をいい、また多くの人が同一の業因によって同一の果を感ずることもいう。

一毫未斷見思の者 一毫は一本の毛すじという意味で、きわめて少ないことをいう。すなわち、とるにたらぬ煩惱や思想の惑を断じていない者の意。

一極・一極の玄宗 一極とは一仏乗の極地、宇宙本源の実相

をいう。すなわち、釈迦五十年の説法では法華經、末法にはいつては南無妙法蓮華經をいう。玄宗の玄とは幽玄ゆうげんということで奥深い、あるいは深遠しんえんなということ。宗とは根本。これは妙法をいかえて表現したもの。妙法こそ一仏乗の極地であり、宇宙本源の実相であり、究極の教えであり、深遠にして三世十方の諸仏がこれを根本として仏になつたところの一極の玄宗なのである。（願仏未來記五〇六頁参照）

一塵十小劫 法華經化城喻品第七の文。過去において大通智勝だいつうちが、魔を降くだしてから正覺を成ずるまで、十小劫の長い間、默然もくねんとして座ざしていたことをいう。

一時 ①衆生の機縁が熟じやくして仏がこれに感應こんごうした時。②わずか、すこしの時。③釈迦一代五時説教中の一つをさす。④末法。

一字五種の妙行 一字とは妙の一字で、妙の一字に五種の修行がすべてそなわっているとの意。五種の妙行とは、受持じゆ、読どく、誦じゆ、解説げかい、書写しよしゃをいい、法華經を修行する行。傳教の修禪寺相伝日記にある。しかし末法では三大秘法の御本尊に五種の妙行が具足ぐそくしていること。（要語解説一二四

頁参照）

一字三礼 經文を書写しよしゃするとき、一字書写することに三度礼をすること、寫經の最も敬虔けいけんな態度をいう。しかし書写の行は正像しょうざうの行であり、末法は受持じゆの一行によつてのみ成仏できる。（種種御振舞御書九二三頁参照）

一子地 一子地とは初地しよちであり、法界の衆生をことごとく慈念じねんするといふ意。

一四天下 全世界といふこと。太夫志殿御返事（一一〇四頁）に「三千大千世界と申すは東西南北・一須弥山しよみせん・六欲梵天を一四天下となづく」とある。一つの四天下をいう。四天下とは古代インドの世界觀で須弥山のまわりに東西南北の四洲があり、一洲を一天下として四天下といふのである。一乘妙典 典はふみと訓くんじ書冊のこと。妙典は一乗の理を明らかにする妙經。すなわち法華經または南無妙法蓮華經のこと。

一代応仏 釈尊一代五十年に説くところの三身さんじん（仏身）は、いづれも応身おうじんの分域を出ないので、これを一代応仏といふ。すなわち法華經本門の釈迦仏も應仏昇進おうぶつしやうじんの自受用身にすぎない。

一代五時 釈尊が、中インド迦毘羅衛國の太子に生まれ、十

九歳で出家し、三十歳で成道してから、八十歳で涅槃するまでに、華嚴・阿含・方等・般若・法華の経々を説いた。

それを、天台が判釈して、説法の順序にしたがつて一代を五時に分けて論じた。

一代五時の妙典 釈尊一代の説法を五時に分けた經典で、特に妙典は法華經。

一代五十余年 釈尊一代の説法をいい、三十成道、八十入滅の五十年のこと。

一大事因縁 法華經方便品第二の文。「諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以つての故に、世に出現したもう。舍利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以つての故に、

世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以つての故に、世に出現したもうと為づく」これは、諸仏が世に出現した理由を説いたものであり、一大事因縁とは南無妙法蓮華經であ

る。(御義口伝上七一六頁・要語解説九一頁参照)

一代聖教 釈尊が三十歳で得道してから八十歳で入涅槃するまで、一代五十年間に説かれた経教をいう。中国の天台は、これを五時八教に立て分けている。

一代超過 釈尊一代説法中、他の一切諸經に超越してすぐれていること。すなわち一代超過の經とは法華經をさす。法華經は已今当の三説に超過する教である。

一大秘法 一大秘法とは本門の本尊のことである。すなわち三大秘法總在の大御本尊をいう。開けば三大秘法となり、六大秘法となるのである。合すれば一大秘法となる。(依義判文抄参照)

一日經 書寫の行の一つ。一部の經を一日に寫し終えること。頓寫。諸經に通じていうが、主に法華經の頓寫をいう。末法の修行ではない。

一入 入とは相互に関係し合うことを意味する。六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)と六境(色・声・香・味・触・法)を十二入といい、その一つ。

一念三千 仏教の極理。釈尊は出世の本懷として、法華經迹門方便品第二で諸法實相に約して理の一念三千を説き、本門壽量品第十六にいたって、因果国の三妙に約して仏身の

振舞いのうえから事の一念三千を説いた。さらに、末法にはいつて、日蓮大聖人がご出現になり、法華經の文底に秘沈した三大秘法の南無妙法蓮華經を説かれた。(要語解説

一七九(参照)

一念三千即自受用身 伝教の秘密莊嚴論にある言葉。一念三千と自受用身とは一体不二であるということ。大聖人の仏法では、一念三千とは事行の一念三千の大曼荼羅であり、自受用身とは久遠元初の自受用身である。すなわち人法一箇の御本尊をあらわす。

一念寂照 一念とは生命の究極であり、寂照とはそのままにして成仏の境涯をいう。御本尊に照らされた一念の働きが寂照であり、生命の本質、本体である。

一念信解 法華經修行の位。法華經分別功德品第十七に説ける四信五品のなかの現在の四信の第一。すなわち「八十億那由他劫の間、仏道のために布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五波羅蜜を修行する功德を、この一念信解の功德に比するのに、百千万億分の一にもおよばない。一念信解には勝れたる功德がある」と説かれており、この一念信解を生ずる人は、退転することがないといわれている。

一念隨喜 法華經信仰の最初の信心の位である。隨喜とは隨

順慶喜であり、信順して歡喜すること。一念とは瞬間の生命であり、法華經の一句一偈をきいて、少しでも信ずる心のある状態をさす。普通には四信五品の初隨喜と同じ意味に用いられる。

一谷 佐渡の国(新潟県) 雑太郡、石田郷にある村の名。いまは新潟県佐渡郡佐和田町大字市野沢。大聖人が佐渡に流罪された時、塚原三昧堂から、ここへ移され、鎌倉にお帰りになるまでこの地の一谷入道の屋敷におられた。

一谷の入道 前述の一谷の住人で、身分のある土豪。大聖人に帰伏しながら、内心では大聖人の弟子檀那であったが、外面は周囲の圧迫、思惑を恐れはばかり、念仏者であったため、大聖人はこの人が成仏できるかどうか心配であるといわれている。

市の中の虎 市虎ともいう。中国の故事で「市虎、三人になる」という言葉がある。その意味は、市に虎がいる道理がなくとも、これをいう者が三人になれば、ついには信ずるようになるということ。無根の言も多くの方がいえば、ついには人を惑わすにいたる譬えである。

一由旬 長さの単位。帝王一日の行軍里程。地形の險易の度で大中小に分け、中国の里程で四十里、三十里、十六里あ

るいは八十里、六十里、四十里などの諸説がある。

一機一縁 特定の対告衆に与えられたものを一機一縁という。法華経は万機に通ずる根本の教えであるから一機一縁ではない。しかし、爾前教は種々の機類に対して説法されたものだから一機一縁という。御本尊でいうならば、日蓮大聖人のご在世中、特定の信者に与えられた御本尊を一機一縁の本尊と申し上げる。本門戒壇の大御本尊は一閻浮提総与といって、全体に通ずるので、一機一縁ではない。日蓮大聖人門下御所持の仏像について日寛上人は、一機一縁のために許されたものであり「継子一旦の寵愛の如し」と仰せられている。

一因 表面では法然選択の謗法をさす。邪宗のこと。立正安国論（二四頁）にある。

一劫 一つの劫のこと。劫とは時または分別の義。仏法上は極めて長い時間を示す単位。劫は経論により多説がある。大別して小劫、中劫、大劫あるいは成住壊空の四劫がある。小劫とは住劫のはじめ、人寿無量歳より百年に一歳を減じつつ、ついに人寿十歳にいたる。これを第一減劫とす。次に人寿十歳より百年に一歳を増して人寿八万歳にいたる。また八万歳より百年に一歳を減じ人寿十歳にいたる。

これを第二の増減劫とする。以下、第十九にいたるまで、このように増減すること十八回、最後に人寿十歳より百年に一歳を増して無量歳にいたる。これを第二十の増劫とする。第一はただ一減、第二十はただ一増であるけれども、その時節の長さは各中間の一増減に等しい。この一増減の時節を一小劫と名づける。したがって一小劫は千六百万年より二千年を減じた数にあたる。中劫とは、以上のように住劫の一減より中間十八の増減、第二十の一増にいたる。この二十増減の時節を合して中劫とする。すなわち一中劫は二十小劫にあたる。大劫とは四中劫をいい、四中劫とは成住壊空をいう。

一切義成就菩薩 釈尊の成道以前の名。薩婆多悉達は梵語で、一切義成就と訳す。仏祖統記第二に「王、婆羅門を召して云く当に太子為り何等の名と作すべし、答えて云く太子生死一切の宝蔵皆悉く発出す所有の諸瑞吉祥に非ざること莫し、当に薩婆多悉達と名づくべし、此れ一切義成就と云う」とある。

一切經 佛教聖典のすべてをいう。大蔵經ともいう。
一切衆生喜見如来 釈尊が釈尊の乳母の摩訶波闍波提比丘尼に勸持品第十三で記別を授けた名前。

一切種智 三智の一つ。透徹した仏の智で、すべてを見とおすもの。

一切衆 一切衆生を仏と成す道を説く教え、すなわち法華經のこと。

一切世間多怨難信 法華經安樂行品第十四の文。「一切世間に怨多くして信じ難し」と読む。仏が法華經を説こうとする時は、仏法を知らない世間のあらゆる人が仏を怨み迫害して、なかなか信じようとしないうこと。

一切智地 一切智を証得する位、すなわち仏の境涯・智慧をいう。釈迦仏法でいえば、衆生を種々の方便によって化導するが、最後には皆に法華經を説いて成仏させる。このときの説法は、皆法華經を中心とし法華經に源を発するものである。つまり法華經は、よく衆生に一切の智を生い茂らす大地なるゆえに一切智地という。日蓮大聖人の仏法では

当然、南無妙法蓮華經の御本尊である。

一色一香無非中道 天台大師の止観・玄義・文句等のなかにある言葉。「一色一香中道に非ざること無し」と読む。一色とは青・黄・赤・白・黒の五色をいう。すなわち、あらゆる物質をさしているのである。一とは法性であり、すべてに仏性があるということ。中道法性をさして一というので

ある。あらゆるものに十界三千の生命がそなわっているということである。そしてこの色香とは草木成仏である。口決に「草にも木にも成る仏なり」とある。

一四句偈 經文等において四句を一偈とせるものを称する語。たとえば有名な涅槃經の「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」等がそうである。

一種の禪人 天台の摩訶止観第五、第七等に偏觀の者を破した文中、謗法の徒をさした言葉で、止観では、特に北齊の慧文禪師（南岳の師）以前の一群の禪人（禪を修行した者）をさしているが、これは達磨の禪宗にも通じてあてはまることから、禪宗の破折の引文とされている。

一生成仏 現在のこの身が一生の間に成仏すること。直達正觀とも、即身成仏ともいう。すなわち生まれかわらないで仏になる意である。

一生補処 一生の後に仏の跡を継いで、やがて仏位に上り仏処を補う意。また略して補処ともいう。菩薩の五十二位のなかの等覺の菩薩のこと。釈尊の一生補処は弥勒菩薩で、阿弥陀仏の一生補処は觀世音菩薩という。補処には又跡を継ぐ立ち場という簡単な意味に用いる場合もある。

一心三觀 天台宗の奥義、觀心修行の法門。一心とは、われ

われ凡夫の無明の一心である。三觀の三とは空・仮・中の三諦、相・性・体の三如是、法・報・応の三身で、觀とは詳しく見る、明らかに見る等の意味である。すなわち、森羅万象のことごとく三如是、三諦、三身を明らかに見ていくことが三觀である。したがって、一心三觀とは、わが己心の生命は、三如是・三身・三諦等であり、それぞれ三つが別にあるものではなく、即一身にそなわっているものとして明らかに見ていくことをいう。

一心三諦 一心とは一念三千の一念と同じ意味であり、觀念的な心という意味とは違う。三諦とは空諦・假諦・中諦である。結局、一心三諦とは一心に三諦が相即してそなわっていることであり、別教の隔歴の三諦に対し円融の三諦をいう。

一心三智 三智を一心のなかに同時に具していること。三智とは、仏のそなえている智慧で一切智、道種智、一切種智の三つをいう。

一身即三身 如来寿量品第十六の「如来秘密神通之力」の八字を釈せる文中の語。文句の九に「一身即三身なるを名けて秘となし三身即一身なるを名けて密となす又昔より説かざる所を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為

す」とある。三身とは法身・報身・応身であり、これが即一身に具するという法華經の教え。

一闡提 梵語で不信の意。すなわち、どうしても仏法を信ずることのできない者。

一龜一妙 龜は龜法、妙は妙法。円実の妙法に対して偏權の法を龜法という。法華迹門の諸法実相の円妙の義によつて、華嚴經を判釈すれば、華嚴經は一龜一妙となる。般若部が二龜一妙、方等部が三龜一妙、阿含部が但一龜一妙となるのに対す。すなわち法華迹門の義によつて華嚴經の文を判ずれば、華嚴經にも一念三千の義が少分説かれている。

一致門流 日蓮宗一致派をいう。大聖人ご入滅後、法華經の本門と迹門に勝劣があるかないかで論争が起り、本迹一致を主張した系統が、身延山を本山とする日蓮宗（単称）である。そのおもな寺と系統は、身延山久遠寺（日向、日朝）池上本門寺（日朗）中山法華經寺（富木日常）京都妙顯寺（日像）京都本國寺（日朗）不受不施派（日興）不受不施講門派（日講）などである。大聖人ご入滅後、日興上人以外の五老僧は大聖人が御本仏なることや種脱相對を知らず、また官權の圧迫に退転した結果、現在的一致門流のごとき姿となつてしまったのである。

一、天四海 古代インドの世界観で、世界の中央に須弥山があり、これを輪状に囲んで八つの山があり、おのおのの山と山とに囲まれた部分に海がある。そのいちばん外側の山に囲まれた海のなかに四州があるといわれていた。この世界観からみて、四州を四天下といい、総括して一天といった。また四海とは四方の海のことである。したがって、一

天四海とは世界全体をさす。

一、刀三札 仏像などを彫刻するとき、一刀を下すごとに三度札拝して信をいたすこと。叡岳記下巻最澄大師一生記に「一

削に三たび札を成し仏像を造立し奉る」とある。

一、品二半 一品二半とは、法華経如来寿量品第十六の一品と涌出品第十五の後半品および分別功德品第十七の前半品をいう。これに二意があり、いわゆる天台所立の一品二半と

日蓮大聖人の一品二半とである。(要語解説一五七頁参照)

伊東の流罪 弘長元年五月十二日より弘長三年二月二十二日

までの約二年間、日蓮大聖人が第一回の法難で伊豆の伊東へ流罪された。立正安国論を執権北条時頼に奉って国家諷曉したがこれを用いないのみか諸宗の悪徒が結束し、ご草庵に放火し、そのうえ日蓮大聖人を捕えて流罪したのである。

大神人 「つるめそう」とも読む。神人とは祭儀をつとめたもの。神人のなかに境内のそうじや不浄の物の取り捨てをした賤民もあった。平素は弓矢を作り行商して生活していたので「つるめそう」ともいわれた。

意念往生 念仏宗で使う言葉で、臨終のとき声を出さず意で阿弥陀の名号を念じて往生する者をいう。(当世念仏者無

間地獄事一〇五頁)

異の苦 人々が因縁果報によって各自異なった苦をうけることをいう。

伊予房 六老僧の一人である伊予阿闍梨日頂のこと。母が下総国若宮の領主で大聖人の俗弟子の富木常忍に再縁したので、伊予房も義理の子となった。大聖人ご入滅後、第二祖日興上人に反逆したが、後に日興上人を慕って富士の重須にきて日興上人に心身ともに帰伏した。

伊蘭 梵語。臭気ある悪木で、蓖麻の一種。その形状は茎の高さ六尺——八尺、葉の直径一、二尺にして色は緑色、時には赤色をおび、楓のごとく七裂片がある。葉柄八、九寸にして互生し、花は総状をなし、雄花は上部、雌花は下部にある。種子に毒分があつて、これの油をしぼり、下剤として有効である。

遺竜 いりよう 中国唐の国にひじょうに字のじょうずな親子がいた。

父の名を烏竜ありよう、子の名を遺竜いりようといった。父烏竜は道教を信じ、法華經をきらい、そのため、身は八つに裂けて地獄に落ちた。子の遺竜は父の遺言ゆいごんにしたがって法華經だけは書かなかったが、王に責められ、法華經八卷の題号六十四文字を書いたところ、このことによつて親子とも成仏するこゝとができた。(上野尼御前御返事一五八一等参照)

印 いん 手の形や手まねをいう。仏・菩薩の手や指の造像上の特定の姿で、仏像の種類を特徴づける第一の条件である。真言では大事そうにいうが、われわれの合掌がっしやうも印である。

因位 いんい 果位くわいに対する九界の位。仏に対して菩薩の位。

印可 いんか 印は信用し認める。可は許可する意。仏が菩薩の成仏を許すこと。転じて一般に技芸などで師が弟子の修学成就を認めることをいう。真言宗(密家)では印法灌頂いんぽうかんちやう(秘印を授ける儀式)を印可と称している。

因果 いんが 因とは原因、果とは結果である。因果には、十界各具の因果、九界を因として仏界を果とする因果、三世にわたる因果等がある。

因果俱時 いんがぐじ 因果の二法は宇宙、万物を貫く法則であり、因果俱時と因果異時の二つの見方がある。信心は因で唱題は果

であり、一念の刹那せつなにこの因果を具す。これを妙法蓮華經といい、「因果俱時不思議の一法」というのである。春種をまき、秋実がなるのは原因と結果が時間を異にするから因果異時というが、生命の本質では因果俱時になる。(要語解説一九五等参照)

因果国 いんがこく 本因妙、本果妙、本国土妙の三妙を略していった言葉。天台は玄義げんぎに本門の十妙を立て、そのなかの三妙をさす。法華經寿量品第十六に因果国に約して一念三千が説かれてゐる。我本行菩薩道が本因妙、我実成仏已来が本果妙、娑婆世界説法教化が本国土妙の依文である。大聖人の文底もんてい仏法では本因妙は日興上人、本果妙は日蓮大聖人、本国土妙は別しては日本国そのなかでも富士大石寺となる。総じていえば、妙法広布の世界、地域全体が本国土妙となる。(要語解説一六六等参照)

因果互具 いんがごぐ 因果が互いにそなわっていること。十界に因果のあることは爾前經でも説いている。法華經になつて十界互具が説かれるゆえに十界の因果もまた互具するのである。

因行果徳の二法 いんぎやうくわくとく 因行は仏が九界の因位で修行した万行をいい、果徳とは成仏して見えてゐるところの万徳をいう。

印契 いんけい 印相いんさうとも密印みついんともいい、略して印ともいう。仏や修行

者がつくる特定の手や指の形をいい、本尊に向かつて合掌するものも印契である。密教では諸仏の悟りや誓いをあらわすものと解釈している。(法華真言勝劣事一二三六)

印真言 印相と真言。印とは決定不改または印可決定の義であり、手指を種々に組み合わせて諸仏諸尊のおのおのその内証の徳を表示する形式。真言は真実の言葉という意味で一種の呪文のようなもの。

院宣 院政を行なった上皇または法皇が出した文書の一つである。

白河天皇が政を院中に開いた後、院政時代には、勅宣よりも重い勢力があった。院宣の形式は、院中に奉仕する有司が、院宣を承つて、これを執達下知する文書である。

因陀羅 最勝または無上の義。主あるいは帝と訳す。帝釈天のこと。須弥山の頂上にある忉利天喜見城に住し、他の三十二天を統領する天主。(富木殿御書九六九六)

因中有果 「因の中に果有り」とする迦毘羅外道の教え。人生の苦しみや幸福は因果が一体なものであるという。

因中無果 「因の中に果無し」とする遍楼僧伽外道の説で、人生の幸・不幸は自然のものであるから、あきらめる以外ないとする。

陰徳 人に知られない間に行なう善業。

因縁 果を生ずべき直接の原因を因といい、因を助け果にいたらしめるものを縁という。たとえば植物の種子は因で、日光や雨や土などは縁である。この因と縁が和合して芽を生ずる。一切衆生の心中の仏性は因で、それが諸法を縁として成仏の果をあらわす。

因縁約教 本迹 観心 天台が法華文句で用いた四種の釈。因縁・約教釈・本迹釈・観心釈。因縁釈は四悉をもつて釈し、約教釈は藏通別円の四教をもつて釈し、本迹釈は本地と垂迹、観心釈は観心をもつて釈する。

殷の村・殷の村王 紀元前十二世紀ごろの、中国殷代の最後の王名は辛。殷は湯王に始まり三十代六四四年で紂の代に滅んだ。智能や腕力がすぐれていたが姐己を溺愛して逸楽にふけり暴政の限りを尽くしたため、民心離れ、後に周の武王に攻められ焼け死んだという。夏の桀王と共に桀紂と呼ばれ悪王の典型とされる。

印板 印刷のための版木のこと。

因謗墮惡必因得益 謗法の因によって惡道に墮す者は正法に縁を結んだという因によって必ず後に大利益を得る。妙樂が法華經不輕品第二十によって逆縁の功德を説いた文。

う

有為の郷しやば 娑婆世界、人間世界のこと。

有為無常 有為は無為に対する語で為作があること。因縁に

よつて生ずる種々の法を有為という。有為の法には生住異滅の四有為相があり、常住でないから有為無常という。

上野賢人 南条七郎次郎時光のこと。大聖人は熱原の法難で

示された時光の強信ぶりを称嘆されて、弘安二年十一月六

日付けのお手紙（竜門御書）のなかで、特に上野賢人と記

された。初め上野聖人と筆をおろされたが、青年（時光こ

の時は二十三歳）に対して穩当をかくと思われたのである

うか賢人と書き改められた。

有縁の仏 釈迦仏は娑婆世界の教主であるのに対して、阿弥

陀は西方安養世界の教主であるから、釈迦仏法上の有縁の

仏は釈尊である。しかるに末法有縁の仏は日蓮大聖人であ

つて釈尊ではない。

有戒無戒 戒とは非を防ぎ悪を止めるの義。釈迦仏法では大

乗戒や小乗戒として多くの戒律を説く。

これらの戒を受けた者を有戒といい、いまだ戒を受けな
い者を無戒という。ひとたび戒を受けた後、これを破る者

は破戒、毀戒という。

有教無人 教えのみあつて実際に成仏するものがないことを

いう。藏教、別教などは、その仏果にはいる前に、ことごと

く転じて円教の人となってしまうのを行い、法華経と爾

前経を相對すれば爾前経にとどまるものなく、ことごとく

過去の下種による法華にはいるゆえに、爾前経はことごと

く有教無人である。文上と文底を相對すれば文上法華経は

有教無人である。

有解無信 學問があつても信心のない者をいう。新池御書

（一四四三頁）には「有解無信とて法門をば解りて信心な

き者は更に成仏すべからず」とある。さらに「有信無解と

て解はなくとも信心あるものは成仏すべし」とあり、末法

では信心第一が大切である。

氏神 ある氏族がその祖先を神と名づけたもの。また、一定

の地縁的あるいは血縁的集團が信仰する神のこと。

烏瑟 梵語で烏瑟膩沙といい、略して烏瑟。仏頂、無見頂相、

肉髻相などと訳す。仏の三十二相の一つ。頂骨隆起して

髻のようなさまをなす。

丑寅の時 開目抄下（二二三頁）に「日蓮といふし者は去年九
月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国

にいたりて云云」とあり、また上野殿御返事(一五五八頁)

に「御臨終のきざみ生死の中間に日蓮かならず・むかいに

まいり候べし、三世の諸仏の成道はねうしのをわり・とら

のきざみの成道なり」とある。丑寅の時は陰の終わりであ

り死の終わりをいう。そして陽の始め生の始め、陰陽生死

の中間である。日蓮大聖人は子丑の時に頸をはねらるとい

われるように、垂迹凡身の死の終わりをいい、寅の刻は久

遠元初の御本仏としての生の始めである。ゆえに魂魄とい

うのである。現在の時間でいうと午前二時から六時の間を

いう。仏法上で重要な意義をもち、日蓮正宗総本山富士大

石寺においては、丑寅勤行といわれて、広布達成の祈願が

現下によつて七百年間、一日も欠かさず行なわれている。

有羞の僧 悟りを得た僧を真実の僧というのに対し、いまだ

悟りを得ていない僧をいう。いまだ悟りを得ていない者

は、悟りの体たる第一義天と悟りを得た聖人とに対して慚

愧の念をいだくゆえに有羞(恥を知る)の僧という。しか

し、いまだ悟りを得なくとも、自らそのあやまちをみとめ

れば、これ真実の僧となる。すなわち、自らのいたらない

ことを深く反省し、勇猛精進、仏道に励む者を有羞の僧

有上有容 有上とは、これより以上のものがまだあるという

こと。有容とは「容受する所有る」の意、すなわち、まだ

説くべきことが残されているとの意で有上と同じ。

右將軍 源頼朝。

鳥仗那國 鳥仗那は梵語で、國の意。北インド健駄羅の北方

にあった國。大唐西域記によれば、周圍五千余里、氣候は

溫和、ブドウなどの果物よくとれ、人の性格よく、文字、

札儀を重んじ、仏法を崇重し、特に大乘仏法を敬信した。

昔は一千四百の伽藍と僧徒一万八千の多きを数えた。北イ

ンドの釈迦の布教地で多くの遺跡がある。昔の雪山童子、

樂法梵師などにちなんだ山や伽藍もある。善無畏はこの

國王であつた。

有情非情 有情は生物で非情は無心の草木国土等をいう。

鸞頭羅弗 釈迦の外道の師匠であつた仙人の名。

有待 (1)凡身のこと。凡身は食衣住を待つて生存するから、

有待の身という。(2)他にたよつて存在する相對・差別・無

常の世界。(3)初心の行者をいう。初心の行者は供養を待つ

て仏道を成就する。(庵室修復書一五四二頁参照)

優陀延王 優陀延は梵語。釈迦在世における僑賞彌國の王。

その國が伐撻地方にあるので、鄔陀演那伐撻王ともいう。

優填大王と同じ。もと臣下であり出家して羅漢の悟りを得

た賓頭盧尊者が、王の睡眠中に説法したことを怒って黒蟻

の巢を尊者の身にまわして苦しめた。また賓頭盧尊者を

蔑如して国王の位を失った。

有智無智 智慧ある者と智慧のない者。一代聖教大意（三九

八頁）に「有智は舍利弗・無智は須利槃特」とある。ただ

し仏教でいう智慧の意味は世間でいう賢愚より一重深い。

有頂天 三界のなかの色界の十八天の最上に位せる天、色究

竟天という。これは有色界の最頂という義。これに対し非

想非非想天は、三界のなかの無色界の四天の最高に位せる

天である。

内房 地名。駿河国（静岡県）庵原郡の北東、富士川の岸に

ある小さな村。ここに大聖人の俗弟子で内房尼御前が住ん

でいたが、姓その他は明らかでない。

優填大王 橋賞弥国の王である。皇后の力で釈尊に帰依し熱

心な外護者となった。釈尊滅後、群臣に勅して牛頭栴檀を

もって五尺大尊像を刻まされたという。インドにおける仏

像造立のはじめといわれている。優陀延王ともいう。

有徳王と覺徳比丘 （要語解説三一四頁参照）

優曇華 ヒマラヤ山麓、セイロン地方に産する閼葉樹。仏典

に出てくる優曇華は、三千年に一度咲き、そのとき金輪王、
仏世尊が出現するという。この華にあいがたきことに、仏
のあいがたきを譬える。

優婆塞 仏教を信ずる在家の信女。

優婆塞多 優婆塞多ともいう。付法藏の第四。第三に末田地

が入って第五とする説もある。釈迦滅後、その予言どおり

インド摩突羅國に生まれ、長じて商那和修に師事して法藏

を付せられた。阿育大王を化導した。

優婆塞・優婆塞 仏教を信ずる在家の男子と女子、すなわ

ち、俗男俗女のこと。

優婆離 優婆離とも書く。悉達太子の執事であつた。後に釈

迦の十大弟子の一人となる。持戒第一といわれ、戒律をた

もつことに秀でていた。釈迦滅後、第一回經典結集に際し

阿難が經を誦出し、優婆離は律を誦出した。

有名無実 名ばかりで、その事実がないこと。本迹相對の上

で述べると、迹門の一念三千を有名無実という。真の一念

三千があらわれないからである。迹門はただ名のみあつて

実義がないから有名無実である。また迹門の二乗作仏も有

名無実である。

有門・空門 有門とは小乗教のことであり、空門とは權大乘

教のことである。化法の四教に配すれば有門は藏教、空門は通教、亦有亦空門は別教、非有非空門は円教となる。御義口伝上（七一五頁）には「有門は生なり空門は死なり：有門は題目の文字なり空門は此の五字に万法を具足して一方にとどこうらざる義なり」とある。

孟蘭盆 梵漢の合成語。孟蘭は梵語で倒懸と訳す。倒懸とはさかさづりの苦しみの意で、餓鬼道の苦痛をあらわしている。盆は漢語で物を盛る器のこと。すなわち、餓鬼道倒懸の苦を扱うために、盆に百味の飲食を盛り、十方の聖衆に供養するゆえに孟蘭盆という。一種の供会であって、仏教における行事の一つである。その起こりは、目連尊者が神通を得て、母の餓鬼道に落ちたのを救おうとしたができず、仏がそのために孟蘭盆会の法を授けたことに始まる。

漏 漏は煩惱を有するの義、無漏に対する語。煩惱をいう。煩惱によつてあらわれた苦果と迷いの世間をさして有漏と

有漏の依身 凡夫の肉体をいう。有漏とは煩惱のこと、依身とはこの煩惱所依の身をいう。すなわち六道の凡夫は前世

の煩惱の業果によつて三界に生まれ、またその肉体によつて有漏の業をつくり、来世に再びその苦を招くところから凡夫の肉体を有漏の依身という。（曾谷二郎入道殿御返事

一〇六九頁参照）

有漏の禪定 有漏禪、有漏の坐禪と同じ。無漏禪に対する言葉。三界を九地に分け六行観（外道の修行法）によつて上地を喜び下地をきらつて、しだいに上地に進む坐禪觀法のこと。三界を離れるには無漏禪を修する以外にない。

雲閣月卿 雲閣とは雲上の人、雲客ともいわれ殿上人のこと。四位・五位および六位の藏人のなかで昇殿を許された者をさしている。月卿とは公卿のこと。太政大臣、左大臣、右大臣を三公または公といい、大・中納言、参議および三位以上を卿といい、これを合わせて公卿といった。（観心

本尊抄二四七頁参照）

雲自在灯王 法華經化城喻品第七、常不輕菩薩品第二十に説かれた仏の名。雲自在来ともいう。不輕菩薩が威音王仏の像法の時に出現して、ただ礼拝を行じ、命が終わつて後、

二千億の日月灯明仏のところへ法華經を説いた。この因縁をもつて、また二千億の雲自在灯王を号する仏の法のなかにおいて、受持、読誦して法華經を説き、成仏することを

得た。

雲音王仏

法華經妙莊嚴王本事品第二十七に説かれている

雲音宿王華智仏の略称。妙莊嚴王を教化した仏。その夫人、淨徳夫人はこの仏に八万四千の鉢を供養して、その功德により妙音菩薩となった。

え

永遠の生命

生命は永遠に続く。キリスト教の「靈魂の永遠」

は非科学的である。仏教では、生命は色心不二であり、法

身（生命）報身（智慧・心）応身（振舞い・肉体）の三身

が即一の姿で、過去、現在、未来の三世にわたって続くも

のであり、しかも永遠の存在であることを説いている。

瞶眼 瞶とは、おおいにかくすという意。すなわち、曇つてか

すんだ目のことで、正しい仏法を見ようとしないう者。

榮啓期 中国周代の人で、生年、没年不明。三樂を歌ったこ

とで有名。すなわち、自分は人と生まれることができたこ

とが一の楽しみである。なかでも男として生まれることが

できた、これ二の楽しみである。いろいろの人生があり、

死をまぬかれない者もあるのに、自分はもう九十にもなっ

た、これ三の楽しみであると。

叡山 比叡山延暦寺の略。桓武天皇の御代、延暦七年、伝教

大師が開いた。法華經迹門の戒壇がある。

叡山の円頓戒 比叡山延暦寺の法華迹門の戒壇で授ける、大

乗円頓戒のことをいう。伝教が桓武天皇の時、入唐して、

天台山国清寺の道邃和尚から伝えられ、帰朝の後、叡山一

乗止観院で円澄以下百余人に授けた。しかし正式に迹門戒

壇で円頓戒によって授戒したのは、伝教の没後、迹門戒壇

の勅許を得て、弘仁十四年（八二三年）からである。円頓

戒とは円教の菩薩戒で、普通の菩薩戒すなわち梵網經、瓔

珞経等の十重禁戒、十無尽戒等とは異なるのである。

叡山の真言宗 伝教は桓武天皇の前で南都六宗と法論を行な

い法華一乗の義を宣揚した。入唐後、比叡山に一乗止観院

を建立し、ついで義真は勅を奉じて迹門の円頓戒壇を叡

山に建立した。しかるに、義真の後に円澄までは清浄な法

灯を守ったが、第三の座主・慈覚にいたって、真言の邪義

を取り入れ、理同事勝の邪義を説き台密といわれるようにな

つた。

衛の元嵩 中国唐代の僧。幼くして出家し仏道に入ったが、

悪心を起こして還俗し、政治的手腕にすぐれ、北周の武帝

に上表して、廢仏毀釈し、仏道を破った。

慧苑法師 唐代、華嚴宗の学僧。法蔵の弟子でありながら、法

蔵の立てる五教判を用いないで別に四種教を立てた。そのため法蔵の後は澄観が継ぎ中国華嚴宗の第四祖となった。

易 易は陰陽道といつて、中国の古聖はこれによつて天地の
交易を見、大業を決め、徳を修め、世を救い、時をはかつた。現代伝わる周易は八卦、六十四卦、三百八十六爻を重ね乾坤相次ぎ天地の位を正とする。これに繫辭を作つたのが周の文王であり、十翼は孔子が作つたと一説に伝えられている。

依義判文 「義に依つて文を判ず」と読む。依文判義に對する語。十章抄(一二七四頁)に「爾前は迹門の依義判文・迹門は本門の依義判文なり、但真實の依文判義は本門に限るべし」とある。(要語解説二一〇頁参照)

依義不依語 「義に依つて語に依らざれ」と読む。涅槃經に説かれてゐる法の四依の一つ。仏説の實義によつて、人師、論師の語によつてはならぬとの意。(守護國家論四五頁)

依經 各宗派がよりどころとする經説を依經という。すなわち俱舍宗、成実宗、律宗は阿含經を依經とし、法相宗は上生經、下生經、成仏經、解深密經、瑜伽論、唯識論等の經論を依經とし、三論宗は般若經を、その他、真言宗は大日

經、金剛頂經、蘇悉地經の三部經を、念仏宗は阿彌陀經、觀經、双觀經の三部經を、天台宗は法華經を、禪宗は楞伽經等を依經としてゐる。

疫癘 流行病、伝染病。

慧解脱 小乗三藏教の位である七聖の一つ。慧解脱と俱解脱の二つは、共に阿羅漢の位であり、いずれも見思の惑を断じ尽くして煩惱がないゆえに、再び三界六道には生まれてこないという。鈍根の者は慧解脱になり、利根の者は俱解脱になる。

慧眼 五眼(肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼)の一つ。二乗が空理を遠見する智慧の眼。凡夫の立ち場からいえば、深い知識體驗にもとづく物事の判断力。

依怙 よりかかり、たのみとすること。依怙依託と、一つの熟語として用ゐる場合もある。

回向 回轉趣向という意。すなわち、自らが仏道修行をして得たところの功德を、回し轉じて、衆生に向けてほどこし与へること。

壞劫 四劫の一つ。四劫とは成劫、住劫、壞劫、空劫の四つ。一つの世界が成立するまでの期間を成劫、成立以後、継続する期間を住劫、火災・水災・風災の三災で破壊する

期間を壞劫、消滅して空になる期間を空劫という。

依智不依識 「語に依って義に依らざれ」と読む。涅槃經に説かれてゐる法の四依の一つの依義不依語の反対語。これは誤った考えである。

衣座室 法師品第十に、法華經弘經の三軌としてあげられてゐる。信心・折伏の心構え。衣とは柔和忍辱の衣、座とは不惜身命の修行、室とは慈悲の心に任す等の意。

会三帰一 三乗を会して一乗に帰すること。三乗とは声聞、縁覺、菩薩で、一乗とは法華一仏乗のことである。

穢食 きたない、不潔な食物のこと。教えの勝劣をたとえるとき、すぐれた方を宝器、劣れる方を穢食とした。

壞色の糞掃衣 仏教僧侶の如法（法にかなった）衣の一つ。

釈尊時代の僧侶は衣に執着をもつてはならぬとして、普通の反物を用いず、墓場等で拾ひ集めた布切れを、さらに一般人の好まぬきたない色に染めた。薄墨はその一。この理をもつて日蓮正宗は、薄墨の衣以外着ないのである。

依識不依智 「識に依って智に依らざれ」と読む。涅槃經に説かれてゐる法の四依の一つの依智不依識の反対の語。これは誤った考えである。

会者定離 会える者は必ず離れるとの意。遺教經に「会う者

は必ず離ることあり、憂悩をいなくことなかれ、世相斯の如し」と説かれてゐる。この世の相の遷滅無常をまぬかれざるを「生者必滅、会者定離」と成語するのである。

会衆 仏の説法の座に集まつた衆生。四衆あるいは説会の四衆ともいう。發起衆、影響衆、当機衆、結縁衆の四種の衆生。

衣珠 法華經に説かれた七つの譬えの一つ。衣裏宝珠、衣内明珠、貧人繫珠ともいう。五百弟子受記品第八に、貧人が內衣の裏に無価の宝珠あるを知らず放浪したが、後にこれを知り歡喜したとある。この受記品で因縁周の富楼那や阿若橋陳如らに記別が与えられた。文底の意は、御本尊を信ずれば、われもともと仏なりと知りうるが、謗法のために知ることができないとの意。

依正 依報と正報。正報とは果報の主体で衆生の身であり、依報とは正報の所依となる非情の草木・国土。依正は二にして不二である。

依正不二 妙樂が玄義の十妙を解釈するため、釈籤に「十不二門」を立ててゐるが、その第六が依正不二門である。

依報と正報の不二なるをいう。正報とはわが身、主觀的立場であり、依報とは一切の對境をいい客觀的立場であるが、その二つが一体であるということ。瑞相御書（一一

四〇〇に「夫れ十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもつて此れをつくる」とある。

慧心僧都 慧心僧都源信のこと。比叡山の僧で永観二年、往生要集を著わして念仏を立てたが、後に悔い改めて、一乗要決を著わして法華経に復帰した。

慧心流 比叡山天台宗の主流であり、慧心僧都源信がその祖始である。他の一派を檀那流という。天台宗の相伝には教門に重きをおくものと、観門に重きをおくものがあるが源信は慈悲大師より観門の相承を受け、これを発展せしめた。(四条金吾殿御返事一一六頁参照)

浮囚の島 蝦夷の住んでいた北海道のこと。

依託 よりどころとする、たよりとすること。依怙依託として用いることもある。

依智 依知とも書く。現在の神奈川県厚木市の北部に依知の地名が残っている。鎌倉時代には本間六郎左衛門重連の邸宅があったところ。大聖人は竜口法難後、十月十二日に佐

渡流罪と決まるまでの一か月、ここに滞在された。

越後の守殿 極楽寺殿とは、北条義時の子の重時であるが、

この重時の五男・業時をいう。重時の子は長男・為時が若死に、次男の長時は三十五歳で、三男・時茂は三十歳で死に、四男の義政は出家し、五男・業時だけが建治三年に越後守に任ぜられて生き残っていた。

越後の国府 越後の国の首府。現在の新潟県直江津市の西南で、五智には国分寺の跡がのこっている。このあたりに国府が置かれた。

越後房 大聖人の門下で、日興上人の直弟子、越後房日弁のこと。下野房日秀と共に熱原滝泉寺の僧であったが、日興上人の折伏で改宗し、真剣に弘教に励み、熱原法難にもよく戦った。日秀は最後まで日興上人に随順したが、越後房日弁は後に日興上人に背いた。

依智六郎左衛門尉 本間重連の呼び名。重連は北条武蔵守宣時の家人で、佐渡国新穂の地頭だったが、本領が相模国の依智にあつたので、こう呼ばれた。

依智不依識 「智に依つて識に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれてある法の四依の一つ。智とは仏の智であり、識とは凡夫の浅い知識である。仏の智によつて、凡夫の浅識によつてはならない、との意。

会通 よく理解して、疑いや、とどこおりのないこと。

期間を壞劫、消滅して空になる期間を空劫という。

依語不依義 「語に依つて義に依らざれ」と読む。涅槃經に説かれてゐる法の四依の一つの依義不依語の反対語。これは誤つた考えである。

衣座室 法師品第十に、法華經弘經の三軌としてあげられてゐる。信心・折伏の心構え。衣とは柔和忍辱の衣、座とは不惜身命の修行、室とは慈悲の心に任す等の意。

会三帰一 三乗を会して一乗に帰すること。三乗とは声聞、緣覺、菩薩で、一乗とは法華一仏乗のことである。

穢食 きたない、不潔な食物のこと。教えの勝劣をたとえるとき、すぐれた方を宝器、劣れる方を穢食とした。

壞色の糞掃衣 仏教僧侶の如法（法にかなつた）衣の一つ。釈尊時代の僧侶は衣に執着をもつてはならぬとして、普通の反物を用いず、墓場等で拾ひ集めた布切れを、さらに一

般人の好まぬきたない色に染めた。薄墨はその一。この理をもつて日蓮正宗は、薄墨の衣以外着ないのである。

依義不依智 「義に依つて智に依らざれ」と読む。涅槃經に説かれてゐる法の四依の一つの依智不依義の反対の語。これは誤つた考えである。

会者定離 会える者は必ず離れるとの意。遺教經に「会う者

は必ず離ることあり、憂悩をいやくことなかれ、世相斯の如し」と説かれてゐる。この世の相の遷滅無常をまぬかれざるを「生者必滅、会者定離」と成語するのである。

会衆 仏の説法の座に集まつた衆生。四衆あるいは説会の四衆ともいう。發起衆、影響衆、当機衆、結縁衆の四種の衆生。衣珠 法華經に説かれた七つの譬えの一つ。衣裏宝珠、衣内

明珠、貧人繫珠ともいう。五百弟子受記品第八に、貧人が內衣の裏に無価の宝珠あるを知らず放浪したが、後にこれを知り歡喜したとある。この受記品で因縁周の富樓那や阿若憍陳如らに記別が与えられた。文底の意は、御本尊を信

ずれば、われもともと仏なりと知りうるが、謗法のために知ることができないとの意。

依正 依報と正報。正報とは果報の主体で衆生の身であり、依報とは正報の所依となる非情の草木・国土。依正は二にして不二である。

依正不二 妙楽が玄義の十妙を解釈するため、釈籤に「十不二門」を立ててゐるが、その第六が依正不二門である。

依報と正報の不二なるをいう。正報とはわが身、主觀的立ち場であり、依報とは一切の對境をいい客觀的立ち場であるが、その二つが一体であるということ。瑞相御書（一一

四〇六）に「夫れ十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもつて此れをつくる」とある。

慧心僧都 慧心僧都源信のこと。比叡山の僧で永観二年、往生要集を著わして念仏を立てたが、後に悔い改めて、一乗要決を著わして法華經に復歸した。

慧心流 比叡山天台宗の主流であり、慧心僧都源信がその祖始である。他の一派を檀那流という。天台宗の相伝には教門に重きをおくものと、觀門に重きをおくものとがあるが源信は慈悲大師より觀門の相承を受け、これを發展せしめた。（四条金吾殿御返事一一六頁参照）

浮囚の島 蝦夷の住んでいた北海道のこと。

依託 よりどころとする、たよりとすること。依怙依託として用いることもある。

依智 依知とも書く。現在の神奈川県厚木市の北部に依知の地名が残っている。鎌倉時代には本間六郎左衛門重連の邸宅があつたところ。大聖人は竜口法難後、十月十二日に佐渡流罪と決まるまでの一か月、ここに滞在された。

越後の守殿 極楽寺殿とは、北条義時の子の重時であるが、

この重時の五男・業時をいう。重時の子は長男・為時が若死に、次男の長時は三十五歳で、三男・時茂は三十歳で死に、四男の義政は出家し、五男・業時だけが建治三年に越後守に任ぜられて生き残っていた。

越後の国府 越後の国の首府。現在の新潟県直江津市の西南で、五智には国分寺の跡がのこっている。このあたりに国府が置かれた。

越後房 大聖人の門下で、日興上人の直弟子、越後房日弁のこと。下野房日秀と共に熱原滝泉寺の僧であつたが、日興上人の折伏で改宗し、真剣に弘教に励み、熱原法難にもよく戦った。日秀は最後まで日興上人に随順したが、越後房日弁は後に日興上人に背いた。

依智六郎左衛門尉 本間重連の呼び名。重連は北条武蔵守宣時の家人で、佐渡国新穂の地頭だったが、本領が相模国の依智にあつたので、こう呼ばれた。

依智不依識 「智に依つて識に依らざれ」と読む。涅槃經に説かれている法の四依の一つ。智とは仏の智であり、識とは凡夫の浅い知識である。仏の智によって、凡夫の浅識によつてはならない、との意。

会通 よく理解して、疑いや、とどこおりのないこと。

越王勾踐 中国春秋 戦国時代の越の王。

慧日大聖尊 釈尊を尊称せる語である。方便品第二にある。

会二破二 三論宗や法相宗で立てる邪義。会二とは、二乗を

会して一乗となし、破二とは、二乗を破して一乗をあらわすことである。しかし、この場合、一乗は菩薩乗のことで法華経で説くところの一仏乗ではない。

会入 会は合わせる、理解するなどの意で、入は入れる、お

さめるの意がある。すなわち、会入は、表面上相違する二つの論議の元意を、よく理解したうえで、同一のものに帰

入することをいう。

依人不依法 「人に依って法に依らざれ」と読む。涅槃経に説

かれてゐる法の四依の「依法不依人」の反対語。これは人

師の邪義である。

衣鉢 三衣一鉢のことで、袈裟と鉢のこと。三衣は僧の着る

三種の法衣、一鉢とは托鉢して歩くときに使う飯鉢、頭仏

未来記(五〇八頁)に「伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帶

持せるが如し」とある。衣鉢は法門の代名詞としても使わ

れる。

衣鉢伝授 禅宗において代々付法相伝の師として法衣と鉢と

を伝える儀式である。これはもと迦葉尊者が鷄足山にはい

って釈尊より授けられた法衣と鉢とをもって釈尊より仏法を相伝したしるしとして、五十六億七千万歳後の弥勒仏の出世の時にこれを捧げるとした経説にもとづく。

依憑集 伝教大師の著一卷。依憑とは依りたのむこと、もつ

ばらそれによりかかること。各宗各派の名僧大徳が、みな

天台宗に帰伏した事実を集めたもの。

依不了義経不依了義経 「不了義経に依って了義経に依らざ

れ」と読む。涅槃経の法の四依の一つの「依了義経不依不

了義経」の反対語。これは邪義である。

依法不依人 涅槃経の文で、法の四依の一つ。「法に依って

人に依らざれ」と読む。この文の意味は菩薩や人師の言に

はよらず、仏の説いた法門によっていきなさいということ。

江馬入道 光時のこと。四条金吾頼基の主君。光時は北条義

時の孫で、名越遠江守朝時の嫡子。謀叛の罪で入道して

伊豆の江馬に身を引いていた。四条金吾は父と共に無二の

忠臣として江馬入道父子に仕えた。

江馬の四郎 四条金吾頼基の主人である江馬入道光時の子

供・親時という。建治四年ごろ許されて江馬の四郎親時も

幕府に出仕していた。

依名判義 「名に依って義を判ずる」と読む。名体宗用教

の五重玄義で、南無妙法蓮華經の深義を判ずること。

右衛門大夫志 池上右衛門大夫宗仲のこと。弟の宗長と共に

池上兄弟は謗法の父を折伏し、強信に励んだ。

依文判義 「文に依りて義を判ず」と読む。經典に説かれた

文によって、仏の説いた真実の義を判断するということ。

依義判文という語に対する。

衣裏 法華經の七譬のうちの衣裏珠の譬えのこと。五百弟子

受記品第八に説かれている。

依了義經不依不了義經 「了義經に依って不了義經に依らざ

れ」と読む。涅槃經に説かれている法の四依の一つ。仏の

真実の教えを説く了義經によって、不了義經によってはな

らぬという意。

衣領樹 三途河の畔にあるといわれる樹木。奪衣婆・懸衣翁

が、その木の下にいて亡者の衣を脱がせ木に掛けるという。

罪の輕重によって枝の高さが違うという。十王經にある。

惠亮和尚 叡山の学僧。文徳天皇の二皇子に惟仁、惟喬があ

り、天皇はいずれに皇位を譲るかに迷って、相撲の勝敗に

よってこれを決しようとした。このとき惠亮は惟仁のため

に祈念し、この法力によって惟仁の側が勝ち、皇位を譲ら

れた。これが清和天皇であると伝えられている。

緣因仏性 緣因性ともいう。正・了・縁の三因仏性の一つ。

一切衆生の仏性を開發助顯して成仏する仏性。

円戒 伝教が比叡山に建立した迹門の戒壇のこと。

縁覺 十界の一つ。二乗の一つ。一つには仏の十二因縁の理

を觀じて修行覺道するゆえに名づけ、一つは飛花落葉の外

縁によって悟るゆえにいう。

炎火洞然 熱せられた空氣が炎の燃え上がるように大地より

昇るさまをいう。

円教 化法の四教のうちの一つ。三諦、十界、十如、三千の

諸法が円融・円満な教えをいう。この円教に爾前の円と法

華の円がある。末法の円教とは三大秘法である。

円極 一念三千の極理のこと。

円宗 天台宗の別称であり、円教のこと。円教たる法華經を

依經として立てた宗であるから、かく呼ばれた。

円智房 円智ともいう。安房国(千葉県)の清澄山の住僧。

詳しい伝はわからないが、大聖人に敵対した僧。学問的に

はすぐれていたらしいが、謗法を犯し現罰をうけて悲惨な

死に方をしたことは、御書によって明白である。(種種御

振舞御書九二三が参照)

円澄 比叡山天台宗第二の座主。伝教を師とした。伝教の教

現在のビハール州南部のバトナ県ラージギルにあたる。付

近に法華經を説いた靈鷲山その他、竹林精舍、祇園精舍な

どの遺跡が多い。頻婆沙羅王や阿闍世王の居城であった。

王舎城の丑寅 王舎城は中インド摩竭陀国の首都で、その丑

寅（東北）の方向に、釈迦が法華經を説いた靈鷲山があ

る。仏法の中心道場は王城の丑寅に建つのが仏法の習いで

ある。（上野殿御返事一五五八頁参照）

往生 この世を去って他の浄土に生まれることをいう。この

世を穢土とする念仏宗などの教えである。

王昭君 中国漢朝の元帝の宮女。当時、匈奴の侵入に苦しん

だ漢は、それとの友好関係を講じる一手段として、王昭君

を匈奴に嫁して、その地におもむかせた。

往生極楽 浄土三部經によつて代表される往生思想をいう。

この劣悪の世を去って彼の浄妙の境界にゆき、勝れた果

報の生を得るといふ。弥陀の名号を唱えれば西方の極樂世

界阿弥陀仏の浄土へ往生すると、念仏宗で主張している。

王城の鬼門 王城とは国王の住する都城で、釈迦時代は王舎

城。鬼門とは丑寅（東北）の方角。仏法の根本道場は王城

の鬼門に建立されるのが仏法の習いである。

往生要集 天台宗の首楞嚴院源信僧都の著。極樂往生に関

する經論の要文を集めたもの。三卷で本末を分ければ六卷

となる。

応身 梵語で阿羅漢の意。

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生 往生

には本地と垂迹、二には自行と化他、三には名字凡身と色相莊嚴、四には人法体一と人法勝劣、五には下種の教主と脱益の化主」と天地の開きがあることを示されている。

王仏冥合 「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて……」（三大秘法抄一〇二二）とある日蓮大聖人の御金言が、そのまま世界平和実現の大原理である。王法とは、全民衆、全社会を包含する内容を意味する。個人にとっては日常の生活であり、社会的にみれば政治、教育等社会全般の文化、それに連なる一切の現象活動である。仏とは仏法の略称で、宗教の意。もちろん、その時にかなった最高の宗教をいう。末法今日には日蓮大聖人の三大秘法の仏法がそれである。この王法と仏法が冥々のうちに合することをいう。政治、教育、芸術が自然のうちに仏法の真髓にかなひ、仏の大慈悲が文化の上に具現されていくところに、真の平和楽土の建設が実現されるのである。

王葬 前漢を滅し国号を新と改めた。

王陵が母 漢の王陵は沛の人、その母は敵にとらわれたが、

死んで子に忠道をまっとうさせた。

お会式 日蓮正宗の二大法要の一つ。大聖人の現有滅不滅常

住此説法のお姿を慶祝する儀式である。毎年、旧暦の十月十二、十三日の両日にわたって総本山富士大石寺および全国末寺で行なわれる。「お練り」「御説法」ならびに「三三九度の古式盃」の儀式等は、日蓮正宗独特の行事で深遠な意義を有する。

大石が原 日蓮正宗総本山富士大石寺を中心とする景勝の地を、その昔は、大石が原と呼んでいた。現在の静岡県富士宮市上条で、身延線富士宮駅より東北約八キロの地点にある。この素晴らしい景勝の地に大聖人の御遺命どおり本門寺（大石寺）の建立をみた。

大井莊司入道 甲斐源氏の大井の莊司で、甲斐の国中巨摩郡鰍沢方面の大邑であつて、日興上人の大井とはまったく関係がない。小室日伝の祖父であり日興上人の弟子である。

大田五郎左衛門尉 乗明 大田金吾ともいう。鎌倉幕府の間注所の役人。同僚の富木常忍に折伏され、以後、天台真言を捨て、富木常忍、曾谷教信、金原法橋等と共に下総（千葉県）中山を中心に大聖人の外護にあたつた強信者。三大秘法抄、転重經受法門など多数の御書をたまわつた。

大山の王子 大山守皇子という。応神天皇の皇子。母は高城入姫、菟道稚郎子皇子の庶兄であつた。大山の王子は稚郎

子皇子を快く思わず常にうらんでいた。応神天皇が崩じた時に、兵をあげておそおうとしたが大鶴鶴尊がこれを皇子に告げて備えたので、大山の王子は船をくつがえされておぼれ死んだ。

憶持不忘 身にも持ち、心にも銘記して忘れず、いかなる場合にも決してこれに違背しないで、よくそれを実現すること。法華經を行ずるには、もろもろの難ありと仏が説いている。これを聞いて信受し、いかなる迫害・法難がきても退転しないで、經のままに信じ行ずることが憶持不忘である。四条金吾殿御返事（一一三六頁）には「まことに聞き受くる如くに大難来れども憶持不忘の人は希なるなり」とある。

御座替わりの御本尊 日興上人が四十五歳の時、大石寺建立の年、正応三年十月十三日に顕わされた御本尊で、第三祖日目上人に授与された。現在の日蓮正宗総本山大石寺の大客殿の御本尊は、宝永三年、第二十四代日永上人がこの御本尊を模写彫刻したものである。

小樽法論 昭和三十年三月十一日、白雪におおわれた北海道小樽市の公会堂で行なわれた日蓮正宗創価学会と日蓮宗身延派との法論対決で「小樽問答」ともいわれる。その結果

は本尊論などで創価学会の大勝利、身延派の大惨敗に終わり、創価学会は宗教界の王者であることを広く天下に宣言し、一方、身延派はその後衰微の一途をたどることになった。（要語解説四一七頁参照）

乙御前 大聖人の帰依者である日妙尼（鎌倉に住した寡婦）の子供。乙御前は母にとりなわれて佐渡の大聖人をたずねている。その強信をたたえて、母・日妙は大聖人から日妙聖人の名をいただいている。

御室 第五十九代の宇多法皇が仁和寺を京都西山雙岡の地に建立し、御室を構えて住み始めてから御室の呼び名が起こった。御書のなかの御室は後鳥羽天皇の第二子である道助法親王をさす。

重須 日興上人が身延離山の後、正応三年に大石寺の開創となり、本六老僧も定まった。そして隣村重須の地頭・石河孫三郎能忠の願いにより、永仁六年、その地に移り学僧を指導し門弟の養成をはかられた。いわば日興上人の談所（学問所）と隠居所であり、将来は大石寺を中心に重須を含めた大本門寺の建立を考えられていた。今は重須（北山）本門寺の名を詐称している。

烏竜 中国の書道の名人。子の遺竜が法華の經題を書いた功

徳によつて救われた。遺竜の項参照のこと。

御藥口伝 御相伝書たる本因妙抄、百六箇抄等とならんで

大聖人の奥義を教示されたものとして重要な御相伝書である。大聖人の内証の立ち場から法華經の講義を、日興上人が筆記されて大聖人の御允可を得たもの。大聖人の文底下種の法門が明かされている。(要語解説二八〇頁参照)

懇懃 ねんごろ、親切ていねい。

飲食齋疎 般泥洹經に説かれてゐる八種の大難の一つ。食物

に不自由し、また粗末なものしか得られないこと。

飲食不節 天台の止観第八の上に説かれてゐる病氣になる原

因の一つ「二に飲食節せずんばまたよく病をなす」と、食

物等に節制を欠き、食べたり食べなかつたり、あるいは暴

飲暴食をすることをいう。

御式目 貞永式目のこと。

怨嫉 法華經を説き行ずる者、すなわち正法を守る者をあだ

みねたむこと。

園城寺 滋賀県大津市園城寺町にある天台宗寺門派の総本

山。山門(延暦寺)に対して寺門といい、三井寺ともい

う。教侍和尚の建立。天智、天武、持統の三天皇が誕生の

時、ここの井水を汲んで浴場としたので御井寺と称した。

後、智証がこれを三井と改めた。

遠法妙道 天台の文句の一に「後五百歳遠く妙道に沾わん」

とある。三大秘法が末法に広宣流布することの依文。日寛

上人の依義判文抄および撰時抄文段にこれを釈して、遠法

とは流布の義、妙とは能歎の辞、道とは所歎の三大秘法で

あるといわれている。道の字の三義は、一に虚通の義即本

門の本尊、二に所踐の義即本門の戒壇、三に能通の義即本

門の題目である。すなわち末法万年尽未来際に三大秘法の

南無妙法蓮華經が広宣流布すること。

宛然 さながら、そのまま等の意。

陰陽五行説 中国古来の思想。陰陽の二元に木火土金水の五

元素を配し、これを自然、人事のすべてに適用して考え、

吉凶、物忌、相性などを解釈する。日本においては律令制

度のもとに中務省内に陰陽寮がおかれていた。陰陽道は

俗信として深く民衆の生活にはいった。葬式の時の友引、

結婚式の大安、家の方向の鬼門などの類いは陰陽道のなご

りである。

陰陽師 中国から伝えられた陰陽および五行の思想にもとづ

いて、卜筮、天文、暦あるいは疾病治療などのための技術

的知識をもった人のこと。

か

果 因に対する言葉。原因によつて報いられる結果をいう。

また、過去、現在、未来の三世にわたる善惡の報いをいう。

戒 非を防ぎ惡を止めるの義。戒定慧の三學の一つ。小乘の

戒に①五戒②八齋戒③十戒④具足戒⑤二百五十戒⑥五百戒

⑦十善戒などがあり、大乘の戒に①十重禁戒②四十八輕戒

③菩薩五種戒④八律儀戒⑤三聚淨戒などがあり、法華經の

戒には①一乘戒②三如来室衣座の戒③普賢四種の戒などが

ある。末法の戒は釈迦仏法の戒は用いず無戒であるが、三

大秘法の御本尊を嚴然と受持すべき虚空不動戒、金剛宝器

戒がある。（要語解説三七頁参照）

海印三昧 大集經に説かれてある三昧であつて、菩薩がこの

三昧を得れば、一切の事物の像が海中に映るように、一切

衆生の心行を、己心にはつきり映し出して知ることができ

る、と説かれている。

開會 開頭會融または開頭會歸の義で、眞實を開き顯わして

一つに合わせること。諸仏の心は南無妙法蓮華經の御本尊

の立ち場から、すなわち絶待妙の立ち場から見るときに初

めて顯われ、會通し、了解することができるといふ意味で

ある。

開經 一つの經説の序説となる經。結經に対する語。法華經

では無量義經一卷が開經、普賢經一卷が結經となつてゐる。

戒賢 法相宗の第五祖。護法難陀から法を受け、さらに玄奘

に法を伝えた人。

開顯 閉じたのを開き、隠れたものを顯わし、眞實の相を示

すことを意味する。

開眼 開眼は開光、または開明、開光明等ともいう。新しく

彫刻し、鑄像し、塗像し、繪像し、書寫した仏菩薩等の像

を、法をもつて供養して、本尊の心を入れ生身の仏菩薩

と同じにすること。これを開眼供養ともいう。「今の木繪

二像を眞言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして權仏な

り權仏にも非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木な

り、又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり……法華を心

得たる人・木繪二像を開眼供養せざれば家に主のなきに盜

人が入り人の死するに其の身に鬼神入るが如し」（木繪二

像開眼之事四六九頁）と、日蓮大聖人は三大秘法の御本尊

をもつて開眼供養する以外にないと述べられている。

回鶻国 中国の北西に位置した国で、現在の中国新疆ウイグ

ル自治国の主要部分をいう。

開權顯實 「權を開いて実を顯わす」と読む。權教方便を開

して眞実相を顯わす。すなわち法華經迹門の開顯をいう。

事に約して二乗作仏のこと、教に約して三乗を開して一乗を顯すこと、理に約して十界互具・百界千如の実相を顯わすことをいうのである。

開近顯遠 法華經の本門に説かれ、近（始成正覺）を開いて

遠（久遠実成）を顯わすこと。略開近顯遠と広開近顯遠の

二種がある。

開三顯一 三乘（声聞・縁覺・菩薩）の權を開して一仏乘の

実を顯わす。法華經方便品第二に「一仏乘に於いて分別して三と説きたもう」「一乗の法のみ有り、二無くまた三無し云云」というのがこれである。（要語解説八八頁参照）

開山上人 日蓮正宗第二祖白蓮阿闍梨日興上人のこと。日蓮

大聖人の滅後、地頭・波木井実長や日向など五老僧の謗法により、汚濁した身延山を離山し「富士山に本門寺の戒壇を建立せよ」との大聖人の御遺命を奉じ、大石が原の勝地に富士大石寺を開いたので開山上人と呼ばれる。

開示悟入 法華經方便品第二の広開三顯一の文。「諸仏世尊

は衆生をして仏知見を開かしめ……仏知見を示さん……仏知見を悟らしめん……仏知見の道に入らしめんと欲するが

故に世に出現したもう」と。御義口伝上（七一六頁）に

は、開とは信心の異名、示とは南無妙法蓮華經を示し、悟とは即身成仏と悟り、入とは悟る当体直至道場となることであり、そして信心の開仏知見が正意であるといわれている。（要語解説八九頁参照）

開迹顯本 迹門を開して本門を顯わす。発迹顯本と同じ。

戒定慧 三学という。藏教にも通教にも別教にも円教にも、

それぞれの三学がある。阿含小乗教においても三学を論ずるけれども戒律が主体となっており、また經教によつては、あるいは定が、あるいは慧が主体となっている。戒とは非を防ぎ惡を止めるの義で、仏道修行の過程でやつてはならないことを守ること。定とは静慮であつて心を散乱させないで悟りを開くこと。慧とは照明の義で煩惱や惑障を断破して真理の本性を証得すること。日蓮大聖人の仏法では、定を御本尊としてご建立になり、戒は戒壇、慧は題目の三大秘法である。（要語解説三七頁参照）

皆成仏道 法華經方便品第二にあり「諸の衆生、皆已に仏道

を成じき」と読む。三世を通じて法華經を信受する者は皆

ことごとく成仏するという意。

皆是吾子 法華經譬喻品第三にあり「一切衆生は皆是れ吾が

子なり」と読む。末法では御本仏日蓮大聖人が父であり、一切衆生はことごとく日蓮大聖人の子となる。仏には主師親の三徳がある。

皆是真実 法華經見宝塔品第十一で多宝如来が、法華經を証明した言葉である。「釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆是れ真実なり」とある。

戒体 戒の四別たる戒法、戒体、戒行、戒相の一つ。戒法を受けた人の生命に収まって防非止惡の働きをする状態になった時をいい、大乘、小乗を通じていわれる。末法では大聖人の仏法の戒は受持即持戒であり、御本尊を受持するわが身そのままが戒体である。

戒壇 戒とは非を防ぎ惡を止めるの義で、戒を授ける壇場を戒壇という。その戒には、時と所によつて、小乗戒、大乘戒、法華迹門の戒、本門壽量の円戒などがあり、壇の戒式もさまざまである。（要語解説二三八頁参照）

我一切本初 「我は一切の本初なり」と大日經にある文。大日經転字輪曼荼羅行品第八の文で法華經と大日經とを同様にみなして、本初を壽量の義であるとしている。すなわち理同の釈を作ったわけである。一切の本初とは法身本有の理に約していった言葉で本有の仏性をさしたものであり、

法報応の三身を明かした文ではない。これを真言宗では無理に一念三千の出処であるとして、法華經より大日經が勝れているという彼等の邪義の根拠の一つとした。

改軀の成仏 諸大乘經で女人は女身を改め男に転じて成仏し、惡人は惡心を改め善人に転じて成仏する等の意である。すなわち、女人も惡人も、その身そのままで即身成仏すると説く法華經の一念三千の成仏と違ふ。

開塔 法華經宝塔品第十一で、虚空に涌現した多宝塔が開かれることで、これより靈山会から虚空会に移る。天台の文句に「開塔は即ち是れ開權なり」阿仏房御書（一三〇八頁）に「開塔は迹門・開塔は本門」とある。

界内界外 三界六道の内と外。

戒日大王 四世紀のはじめに、北インドを統一したグプタ王朝末期の王で、玄奘の入竺した時代の国王。この王の治世には三十年間、戦争が起らず大いに善政を施した。また仏教の興隆にも力を尽くした。

界如 十界と十如是とを合わせ、略して界如という。

開廢俱時 施開廢の三釈のうち開と廢が同時であること。開廢同時ともいう。施とは開の準備、廢とは開の結果をいい、開會することを開という。

開仏知見 法華經方便品第二の四仏知見の一つ。仏知見とは

衆生にもともとそなわった仏の生命で、この生命を法華經によつて開き、顯わすことをいう。

戒法 戒の四科（戒法、戒体、戒行、戒相）の一つ。釈尊の制定した戒律の法であり、大小乗教を通じて、それぞれの戒法がある。

戒名 ①受戒によつて授かる名。初めて沙弥戒を受けるとき、師より法名を授かつて俗名を捨てる。②後世になつて生前戒を受けることはなくなり、死後、僧侶からつけられた法名をいう。

開目抄 大聖人が佐渡ご配流中、文永九年二月、聖寿五十一歳の時のご著作で、四条中務三郎左衛門尉頼基に与えられた。末法下種の人本尊開顯の書であり、日蓮正宗では一代諸經の勝劣・浅深を判じ五段の教相を説くゆえ教の重といわれる。（要語解説二一四頁参照）

誠文 教え戒められた文。

戒律 戒とは非を防ぎ惡を止むることで、律とは律法禁制の義である。

可延定業 定業といえども三大秘法の御本尊によれば、必ず転ずることができ、延ばすことができるのである。可延定

業書（九八五頁）に「業に二あり一には定業二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや」とあり、また阿闍世王が定業を延べ、天台大師の兄にあたる陳臣、そして不輕菩薩等が法華經によつて定業を延べたことが述べられている。

花押 日蓮大聖人のご消息文および御著述その他に多く出ている。また「押写」「花書」ともいう。印判に対する後世の名。

鵝王 仏の相好、仏の三十二相の一つである手足指縷網相のこと。これが転じて仏の異称となつた。

果海円満 十八円満の一つ。諸法の自性を尋ねれば、まったく無作の三身で、仏所証の果海にはいらぬものはない。すなわち一切諸法はことごとく無作の三身の仏果の大海にはいるということ。

餓鬼 十界、六道、四惡趣の一つ。欲に支配された貪りの状態で、時間に追われたり、物質の不足を常に感じ満足できない生命の状態。

瓦器戒 金器戒、銀器戒に対する語。瓦器とは、すやきの土器、かわらけの意である。瓦器戒とは、こわれた瓦器が修理できないようなもので、小乗阿含經の二乗の戒をいう。

瓦器金器 清浄毘尼方広経にある。声聞戒を瓦器に、菩薩戒

を金器に譬えている。

火坑三昧 心を統一して他念に煩わされない境涯のこと。ま

た苦悩にあえぐ衆生を救うため、そのなかに自己を投ずる

菩薩の境涯。さらに末法今時の修行からみれば、三大秘法

の南無妙法蓮華経を一心に唱えること。

瑕瑾 瑕は玉の疵、瑾は美玉。瑕瑾で、傷、欠点、短所の意

味に用いる。

覚意三昧 修行して得る三昧の一つ。仏の力の加護により、

仏の意を悟り、経々を覚え持つて忘れないようになること

である。

各謂自師 俱舍論疏に「もろもろの外道は各自師をこれ一切

智なりといえり」とある文により出た言葉。すなわち自分

の派の師が、仏の一切智を得て仏の真意を伝えるのである

と思ひ込んでゐる者のこと。

学生 学問を修める者。日本では、もと大学寮に在籍する生

徒をいい、後に大寺において仏典を学ぶ者をいうようにな

った。たとえば伝教が定めた比叡山の学生式では毎年学生

二人が年分度者として選ばれ、十二年間、山門を出ないで

止観・遮那の両業を修めた。

学生式 伝教大師の作「山家学生式」をいう。この書は「天

台法華宗年分学生式」「勸奨天台宗年分学生式」「天台法華

宗年分度者回小大式」の三編よりなる一巻の書。

学乘房 大聖人の弟子。詳細不明。佐渡の学乘房と同一人で

あるという説や、佐渡から身延に参り、帰途、富士方面の

折伏に協力したという説がある

学乘房 大聖人の弟子。佐渡一の谷の人。（千日尼御前御返

事一三一四参照）

覚前の実仏 円教に説かれている無作三身如来のことで「夢

中の権果」に対する言葉。

覚知 種子を覚知することを成仏という。したがって迹門、

本門、文底のそれぞれ種子の異なるところから、迹門は大

通下種であるから当分の覚知で、本門は五百塵点劫の下種

を覚知すること。文底は久遠元初の下種となり、究極の

種子は文底にある。

覚徳比丘 涅槃経に説かれる。過去世に歓喜増益如来の入滅

後、仏法まさに滅せんとき、正法を堅くたもっている覚徳

比丘を、正法誹謗の比丘たちが刀杖で迫害した。このとき

の国王の有徳王は護法のため謗法者と戦い覚徳比丘を守り

命終した。この功德で阿閼仏の国に生まれ、有徳王は第一

の弟子となり、覺徳比丘は第二の弟子となった。また未来世では覺徳比丘は迦葉仏、有徳王は釈迦仏となった。現在にあてはめれば、覺徳比丘とは総本山大石寺であり代々の猊下である。（要語解説三三四参照）

轉燃 高温に熱せられたさまをいう。

学仏法成 本来は外道でありながら仏法の義を盗んで、自義に混入し、小乗教のあるいは大乘教の義を立てる者を附仏法成、学仏法成という。そのなかで学仏法成は大乘の義を立てる外道をいう。すなわち一代聖教大意（四〇三）に「外道に三人あり、一には仏法外の外道（九十五種の外道）・二には附仏法成の外道（小乗）・三には学仏法の外道（妙法を知らざる大乘の外道なり）」とある。

学無学 学とはこれから勉強すべき無智の者をいい、無学とは学問の修行が終了した有智の者をいう。釈迦仏法では法華經授学無学人記品で学無学二千人が宝相如来と授記せられてゐる。

鶴林 釈尊が死んだ所で拘戸那城阿夷羅跋提河の畔にある。

釈尊が死んだとき、林の色が變じて白きこと白鶴のようになったためにこの名がある。また、ここで涅槃經が説かれたので、涅槃經の別名にもなっている。

学林 仏教講学の寮舎のこと。日蓮正宗には富士学林がある。

鶴勒 付法蔵の第二十三祖。（要語解説三三七参照）

我見 見惑に十使があり、二分して五利使、五鈍使となるが、この五利使のなかの身見をいう。自己に執着して起す謬見。

加護 一般には神仏が力を加えて守ることだが、法華經には

諸天善神が法華經の行者を守ると説かれている。

過去常 仏が過去において常住であつたということ。

過去莊嚴劫の千仏 三世の仏を釈せるなかの一つ。「過去莊

嚴劫千仏名經」に出ている。

過去の七仏 毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏の三仏は過去の莊

嚴劫に出世し、拘留孫仏・俱那含仏・迦葉仏・釈迦牟尼仏

は現世賢劫に出世した仏であるが、いずれも入滅した仏で

あるから過去の七仏という。

過去の宿習 過去世に植えた種々の因によって、現世に結果

となつて現われてくること。宿縁、宿業、宿命などと同じ。

過去の種子 過去における下種のことで、下種とは仏に会つ

て仏になる種をうることである。

華山 中国の五岳の一つで、西岳ともいう。

我実成仏已来 法華經寿量品第十六の文。本門十妙の本果妙

の依文。文上顯本では久遠五百塵点劫本果の成道をいい、

文底顯本では久遠元初の成道を説く。

我此土安穩 法華經壽量品第十六「自我偈」の文で「我が此

の土は安穩にして」と読む。世間がどんなときでも三大秘法の南無妙法蓮華經を受持しければ我此土安穩の仏国土となる。

火持如来 大日天子（日天）の成仏の宝号。

過時不雨の難 藥師經に説かれている七難の一つで、雨の少ない季節を過ぎて雨期にはいつてもなお雨が降らない天の

異変。

賀島の莊 現在は静岡県富士市に属しているが、当時は駿河

の国賀島の莊といい、熱原の法難の起こる原因となった滝

泉寺は、この賀島の莊にあつた。

呵責・駈遣・挙処 呵責は口で弾劾する、駈遣はそのところ

を追いはらう、挙処はその罪過を検挙処分し世をあげ国を

あげて謗法者を処分することをいう。

呵責謗法滅罪抄 大聖人ご執筆の御書（一一二五頁）。文永

十年、五十二歳御作。流罪中の佐渡から鎌倉の四条金吾頼

基に与えられた。内容はわが身の謗法滅罪の法は、どんな

に悪口されても少しも退転なく正法を信じ折伏を行ずるこ

とにあるということ。

迦葉 釈尊の声聞の十大弟子の一人。頭陀第一といわれる。

嘉祥 中国・梁代の三論宗の祖、吉蔵法師の異称。

迦葉仏 過去の七仏のなかの第六で、現在賢劫の住劫第九の

減・人寿二万歳の時出世した仏。

迦葉菩薩 ①涅槃經の迦葉菩薩品の対告衆で迦葉童子、迦葉

童子菩薩ともいう。摩訶迦葉とはまったくの別人。仏に三

十六の問いを發し、仏より刀杖をもって正法を護持すべき

ことを説かれた。

我深敬等の二十四字 法華經不輕品第二十に不輕菩薩が四衆

を礼拝して説いた文をあげて、「我深敬汝等 不敢輕慢所以

者何汝等皆行菩薩道当得作仏」とあるのをさす。「我深く

汝等を敬う、敢えて輕慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の

道を行じて、当に作仏することを得べし」と読む。二十四

文字の法華經ともいわれる。

跨節 当分に対する語。当分・跨節は一往・再往と同意。当

分はそのまま、そこで意で、跨節はその一関一節にまた

がり一重立ち入った意。

迦旃延 梵語、摩訶迦旃延の略。釈尊十大弟子の一人、論議

第一。

画像本像

画像は絵に書いた仏菩薩の像で、木像は木に彫つ

た仏菩薩の像。一念三千の法門によつてのみ意義がある。

華陀 中国後漢末の名医。字は元化。沛漢譙に生まれ徐上に

遊学し、経史に通じ養生の術をさと、百歳になつてもな

おかつ若々しかったという。著書に「中蔵経」がある。

搗打 ながる、打つ。

火大 五大の一つ。五大は宇宙に遍満し万物を構成している

要素で、そのうち火大は物や生物を温暖成熟、火熱燃尽

する性、力または状態。御義口伝上(七五一頁)では火大

を上行菩薩の徳に配されている。

価値論 (要語解説四四九頁参照)

羯鞠 羯鞠の略。満州北東の松花江、黒竜江等の沿岸に住した

民族の名で、転じて国名に用いた。唐代に起こつた渤海国

もこの種族の一つであつた。

月愛三昧 阿闍世王を救わんがために釈尊がはいつた三昧。

涅槃経梵行品に「世尊この三昧に入りて大光明を放つ、その

光り清涼にして往いて王の身を照して身瘡をいやし、邪熱

を除き、耆婆大臣王の為に月愛三昧の名義を説く」とある。

月光菩薩 薬師如来の脇士たる菩薩。右辺にあつて、左辺の

日光菩薩に対す。

月氏震旦 月氏はインド、震旦は中国。

合掌 左右の掌を胸の前で合わせること。インドで古くか

ら行なわれた敬礼法の一つで、仏を礼拝し恭敬するときに

用いる作法。御義口伝上(七二二頁)には「合掌とは法華

経の異名なり……合とは仏界なり掌とは九界なり……」と

ある。

月蔵経 大方等大集月蔵経十巻のこと。月蔵経は大集経の一

部に含まれているが、独立の経としても扱われている。釈

尊が、佉羅帝山で比丘菩薩をはじめ多くの魔王、阿修羅、

天、竜、鬼神等を化して帰仏させたことを記した経である。

月蔵菩薩 大方等大集月蔵経に説かれている菩薩。仏が月蔵

経を説法したときの發起衆、影響衆の役目をし、その化導

を助けた菩薩。

月天 月天子ともいう。月を神格化したもので阿含経には月

宮殿に住し帝釈天王の内臣とする。月天の本地は勢至菩

薩。法華経序品第一には釈提桓因(帝釈天)の眷属として

名月天子の名が出ている。

羯磨 ①諸尊および衆生等の所作の行為。②僧などの受戒の

儀式。懺悔等の作法。

果徳 因行によつて得た果上の徳。仏が九界の因位にあつて

修行した万行によって成仏してそなえているところの万徳をいう。

迦式志迦王 かにしきおう 仏滅後四百年ごろ、インドに出現して健駄羅國 けんだらかこく

を建てた。広い土地と多くの国をもち、初めは仏法を輕毀 きやうき していたが、後に仏教に帰し、大いに力を尽くし、ガンダラ芸術で有名な、ガンダーラ文化を築いている。阿育王 あそか とならび称せられる、仏教を保護した大王。

夏の桀王 けつおう 夏は中国古代の国、禹王より始まり十七代四百三十九年で滅ぶ。桀はこの最後の王であつて本名は履癸、奸臣 けんしん を用い悪政を施し暴虐 ぼうぎやく を極めたので桀と呼ばれた。殷の湯王のために打たれて滅んだ。

我波羅蜜 がはらみつ 我は常樂我淨の四徳の一つ。波羅蜜とは「彼岸に到る」との意で、仏果にいたる修行をいう。

迦毘羅衛國 かびらえこく 釈尊が誕生した国で、ヒマラヤ山麓 さんろく、現在のネパール国タライ地方にあった。

迦毘羅外道 かびらげどう インドの数論学派の祖、全七十論を作る。止觀輔行に迦毘羅は石となり、陳那菩薩石上に全七十論破折の偈 げ を書くに石化して水となつたと伝えられる。

我不愛身命 がふあいしんみょう 法華經勸持品第十三で大菩薩が仏滅後の弘法 くほう を誓い「我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」と説いている。

果分 かぶん 仏果。九界を因となし仏界を果となす。

果分不可説 かぶんふかぜつ 果分とは因分に対する語で仏界の内証 ないしやう をいう。

不可説とは「説くべからず」といつて成仏を説かなかつたことをいう。すなわち果分不可説とは成仏を説かない爾前 にぜん 經 きやう をさす。同じく因分可説果分不可説は、因分の菩薩の修行のみを説いて仏果の内証を説かない方便の經をさす。

果報 かほう 果は必然の結果、報は必然の報酬 ほうしゆ。果は心にうける結果で、報は色にあらわれる報いで、善惡に通じて用いられる。

下方の發誓 はつせい 大地の下より涌出した地涌の大菩薩のみが滅後の弘法 くほう を誓つたことをいう。

我本行菩薩道 がほんぎやうぼさつどう 法華經壽量品第十六の文で「我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命」云々とある。本門の十妙の本因妙 ほんいんみょう を明かす文。この本因初住の文底に南無妙法蓮華經が秘沈 ひしん されている。

果満 かまん 因円に対する言葉で、一切の功德を円満に具足 ぐそく する仏果。法華經の因円を行じて成ずる眞實最高の境涯。

我慢 がまん 七慢の一つで、自分をたのみたかぶつて、我意 がいう を張り他を輕んじて従わぬこと。

我慢偏執 がまんへんしやく 我見が強く、慢心があり、片寄つた邪見に執著 しやくちやく していること。

神 一般に神について多神教、唯一神教、汎神論などがあ

る。特に天地創造の絶対唯一神や八百万の神などがその典型である。これに反して仏法上の神は一に法性神、二に有覺神たる諸天善神、三に邪横神に分けられる。

神天上法門 大聖人が立正安国論に、謗法の国土では正直の神が守護の本土を捨て天界の本地へ去り、そのあと悪鬼魔神が入れ替わり種々の災難が起ると仰せである。

鷲毛 鷲鳥の毛。白色柔軟で軽く、暖かく、臘を防ぐ。(千

日尼御前御返事一三一六が参照)

伽耶始成 久遠実成に対する言葉。伽耶とは仏陀伽耶で釈尊が正覺を成じたところ。始成とは始成正覺のこと。すなわち伽耶始成とは、釈尊が爾前経や法華経の迹門で、三十歳の時、伽耶城の近くの菩提樹の下で初めて正覺を成じたこと、説いたこと。しかし法華経本門で伽耶始成説は否定せられ、久遠実成が説かれた。

伽耶城 釈尊成道の地に近いところにある中インド摩竭陀国の都城である。現在のインド、ベンガル州ペトナ市の西南方百キロにあるガヤ市はこの地にあたる。この南方十余キロに成道の地である仏陀伽耶がある。

華洛 都のこと。華洛は王城の意。

伽羅陀山 地藏菩薩の住处とされている。

瓦礫 かわらとこいし。また、黄金や珠玉等の価値大なるものに対して、価値の低劣な、つまらぬものの譬えとして用いられる。

迦留陀夷 梵語、その身は黒く、よく輝くゆえに黒曜、黒光、黒上、大鹿黒などと訳す。仏弟子であり、もとは六群比丘の一人であつたが、後に道果を得て阿羅漢となつた。

迦楼羅 梵語、八部衆の一。インド伝説の怪鳥のこと。

元意 根本、本意ということで、細科や付文に対する語。

鴈宇 伽藍のこと。

勧誡二門 勧門と誡門のこと。勧門はすすめて仏法に導く門であり、誡門はいましめて仏法に導く門である。

歡喜増益如來 涅槃經金剛身品に説かれている仏。この品には歡喜増益如來の滅後、覺徳比丘と有徳王のことが説かれている。

陳曉 総じていえば、いさめさとすこと。別していえば、国家などの安危について、その責任者に進言すること。

觀經 觀無量壽經の略称、浄土宗の依經とする三部經の一つ。觀行五品 天台の教法では六即位のなかの觀行即を五位に立

汲み取って、その頂に灌ぐ儀式を行なうゆえに、この名がある。

感応 声のひびきに応ずるように、天月の池水に映ずるよう

に、衆生の機感と仏の応用とが、互いに通じ融合すること。

感応道交 衆生の機感と仏の応赴と相通じて一道に交わるこ

と。衆生に機あつて仏の出世を感じ、仏はこれに応じて出

現し法を説くこと。

観音 観世音菩薩をさす場合と法華經の觀世音菩薩普門品第

二十五をさす場合とがある。

観音經 妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五のこと。

観音玄 天台の著作中五小部と呼ばれるなかの観音玄義をい

う。法華經觀世音菩薩普門品の大綱と題目を釈したもので

二卷。

観音品 法華經觀世音菩薩普門品第二十五のこと。寿量品の

仏が不思議の化用をたれ、觀世音菩薩が三十三身の普門示

現の用をたれて衆生済度することを説く。しかし寿量品に

比すれば「藥王品已下の六品得道のもの自我偈の余殘な

り」(法蓮抄一〇四九頁)とあり、御義口伝下(七七六頁)

にも「今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え

奉る事は観音の利益より天地雲泥せり」とある。(要語解

説七五頁参照)

観音賢菩薩行法經 (要語解説八〇頁参照)

観仏三昧 観仏とは仏の相好、功德、理体等を觀想觀念する

ことで、これを観仏三昧とも念仏ともいう。しかし所詮は

爾前權教の修行にすぎない。

観仏三昧經 観仏三昧海經の略で観仏經ともいう。方等部に

属し十卷十二品の經。釈迦が父王の淨飯王らのため、観仏

三昧に住することによって解脱をえられると教えている。

観法 法を觀すること、觀念、觀門などと同じ。法を觀ず

るとは、定心に住して智慧によって對境を思察、分見、照

見すること。大聖人の仏法では、信心によって御本尊の功

力を証得すること。

勸発品 普賢品とも略す。法華經普賢菩薩勸発品第二十八。

神力品以下の付属流通中の自行流通を勧めてゐる。普賢菩

薩が東方宝威徳上王仏の国にいて、この娑婆世界で、釈尊

が法華經を説くのを聞いて來至し、仏の滅後いかにしてこ

の法華經を持つかとの問いに對して、釈尊は、四法成就を

説いて法華經を再演したことをあらわしている。

元品の法性 元品とは生命の本質という意味で、これを法性

真如の一理ともいう。法性はこの場合悟りをいう。すなわ

ち根本の悟りを元品の法性という。末法今時では三大秘法の御本尊を信じて人間革命することである。

元品の無明 生命に本来そなわった根本の迷いをいう。一切の煩惱、悪業等は、みなこれから起こる。元品とは生命とということ、迷えば無明となり、悟れば法性である。この元品の無明を対治する利剣は南無妙法蓮華経である。御義口伝上（七五一頁）に「元品の無明を対治する利剣は信の一字なり」とある。

桓武天皇 人皇第五十代の天皇。光仁天皇第一の皇子である。桓武天皇は平安遷都で有名。伝教大師を親任され天台宗を信じた。

勸門 戒門に対する語。戒門がいましめる意であるのに対し、勸門はすすめるという意。信仰生活にあてはめれば、功德は勸門で罰は戒門である。

勸文 朝廷または幕府の役人や、または無位、無官の者などから上へたてまつる書をいう。

願文 神や仏に願いをかけ、願い事を書いた文である。また寺塔や経蔵などをつくる時願主の趣意を述べた敬白文をいう場合もある。

甘露 切利天の甘味の靈液で、よく苦悩をいやし、長寿に

し、死者を復活させるという。転じて煎茶の上等のものや物の美味のものをいう場合もある。これが変じて美味なもの、衆生を喜ばせるものの意に転じた。

鹹鹵 鹹は、塩からい、鹵は、塩気を含んだ土地、不毛の地等の意があり、鹹鹵とは、塩分が強く作物ができないこと。

き

記 ①記別の略。未来世の成仏に対する印可。②妙樂が天台

の法華文句をさらに解釈した法華文句記の略称。③経論の注釈、講説の筆受の文などをいう。

鬼 仏法上、鬼とは鬼神をいう。鬼神とは、六道の一つたる餓鬼道を鬼といい、天竜等の八部を神という。人の功德や生命を奪い害する働きをし、病を引き起こす原因となる。また鬼神は人の思考の乱れをも引き起こす。しかし鬼神は究極では妙法に照らされて、諸天善神と同じく法華経の行者を守護する働きをする。

機 一般には事が起こるきっかけ、万物自然の変化などの意であるが、仏法では仏の教化をうける衆生の生命の可能性またその状態をいう。在世の八機、滅後の三機などがある。

（要語解説一三六頁参照）

義 ①文に対する義。經文の所詮の実理、道理、立義、教義、

意味などをいう。②仏の実義をさして義という。③儒教に

おいては五常の一つ。

機縁 衆生に善の機根があつて、仏の教法を受ける縁となる

こと。

祇園精舎 インドの室羅伐悉底国、舍衛城の逝多林にあつた

精舎。精とは無雜といい、正法の修行者が住むところをい

う。釈尊が多年にわたつて化導を行なつた所。

毀戒 戒律を破ること。

祈願 一般には神仏に利益を祈り願うこと。日蓮正宗では三

大秘法の大御本尊を信じ奉り題目を唱え利益を願うこと。

祈りは仏道修行の根幹である。

儀軌 化儀の軌範、儀式の軌則のこと。

機教相應 衆生の機根と衆生を化導する教えが相應している

こと。

喜見菩薩 一切衆生喜見菩薩のことで、法華經藥王品第二十

三に「一切衆生喜見菩薩は、豈異人ならんや。今の藥王菩

薩是れなり」とある。喜見菩薩は藥王菩薩の前身で法華經

のため我が身を焼いて日月淨明德仏を供養したという。

起後の宝塔 天台は、文句に、法華經宝塔品第十一の多宝の

塔を釈して、証前の宝塔、起後の宝塔の二つの意味がある

とした。すなわち宝塔品で多宝の塔が涌現して多宝如来が

「善哉善哉……妙法蓮華經皆是真實なり」と証明したので

あり、これを証前（迹門を証するの意）の宝塔という。次

に多宝の塔を開かんがために十方分身の諸仏を集め二仏並

座して、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して寿量

品（本門）を説く起となる。これを起後（本門を起すの

意）の宝塔という。

機根 教えを受くべき衆生の性根をいう。

喜根菩薩 過去無量無辺不可思議阿僧祇劫に師子吼鼓音王如

來の末法に出現した僧で、強い折伏によつて正法を弘め

た。反逆した勝意比丘は現身のまま大地獄に落ち、多くの

苦を受けたのち文殊師利菩薩となつた。

季札 中国春秋時代の呉王・寿夢の第四子。

毀告 そしりとがめること。

龜茲国 中国の甘肅省の西、新疆省の北部にある国の名であ

つて、今の庫車である。羅什はこの国で大乘を修した。

鬼子母神 三千世界の人々の寿命を奪う惡鬼であるが、法華

經陀羅尼品において法華經守護の誓いを立てている。ま

た、この鬼子母神は、人の母の性質、つまり人の子を殺し

でも自分の子をかかわいがる本能的性質をよくあらわしたもののといえる。十人の娘があり十羅刹女という。

耆闍崛山 靈鷲山のこと。法華経等を説法した所である。

起請 神仏に背いたならば罰をうけてもかまわないと誓いを立てて、神仏に願ひ事の成就を請いたてまつること。

疑請 疑を晴らしてくださいとお願いすること。

記小久成 記小は迹門諸品の二乗作仏の授記で、久成は本門

寿量品の久遠実成の顕本である。(要語解説九四頁参照)

義浄房 浄願房と共に、清澄寺道善房の弟子で大聖人の法兄

である。大聖人立宗後、いずれも熱心な弟子となった。

鬼神 六道の一つたる餓鬼道を鬼といい、天竜等の八部を神

という。鬼神・竜神・天神・夜叉神等がある。人に対しては病

気を起こし、また思考の乱れを引き起こす。また国家社会

に対しては天災地変や思想の混乱等を起こす働きをなす。

起信論 大乘起信論といい、インドの馬鳴菩薩の著。漢訳に

二ある。

義真和尚 比叡山延暦寺第一の座主。相模の人。幼少にして

叡山にのぼり伝教大師に師事し、付嘱を受く。(要語解説

三七五頁参照)

鬼星 二十八宿のうち、南方に属しており、この鬼星の光り

が衰えるのは不作の兆という。

徽宗皇帝 中国北宋の第八の皇帝、性は趙、名は佶、神宗の

第十一子。仏教を弾圧し、道教を庇護した。

鬼賊 夜叉、羅刹のように最も恐るべきもの。

吉祥草 草の名。茅薄に似た草で湿地に生じ、または水田に栽

培される。釈尊は成道の時に、この草を座に敷いたという。

吉祥天女 功德天女ともいう。インド古来の神とされ、人々

に福德を与える神として知られているが、仏教に種々にこ

れを説く。

吉蔵大師 中国梁代の三論宗の祖で、嘉祥寺に住んでいたの

で、嘉祥大師ともいう。七歳で出家、はじめ中論、百論、

十二門論等の疏を作り、般若第一の義を立て三論宗の祖と

された。しかし、後に天台大師に心身ともに帰伏した。

吉蔵の疏 吉蔵が著わした経論の注疏。

祈禱 神仏にいのること。祈とはいのる、もとめる等の意が

あり、禱とはいのる、まつる等の意がある。

祈念 心をこめて祈り念すること。経王殿御返事(一一二四

頁)に「あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せし

め給へ、何事か成就せざるべき」とある。

義農の世 伏羲と神農の世という意味で、共に中国古代の理

想的平和時代である。

義の戒壇 事の戒壇に対していう。本門の戒壇に事と義がある。義の戒壇とは三大秘法の御本尊を安置し奉る一切の所をいう。事の戒壇とは、化儀の広宣流布の時に立つべき民衆立の戒壇である。

耆婆大臣 釈尊に帰依した有名な医師。阿闍世王を折伏して、ついに釈尊に帰依させた。

驢尾 伝説上の、一日千里を行くという駿馬の尾。

記別 「汝は成仏する」という仏の印可の割り符のようなもので、これを授けるのを「授記」という。

鬼弁婆羅門 インドのバラモンの一種。釈迦時代の外道であって、一種の逆説的理論をもてあそんだ。

帰命 梵語の南無の訳。自己の生命を御本尊に帰入させること。生命をかけて御本尊を信ずること。信ずる対象を本尊といい、これに人と法とがある。人とは日蓮大聖人に帰命することで、法とは南無妙法蓮華經に帰命するのである。帰とは色法すなわち肉体のことで、命とは心のことである。すなわち肉体と心は一致し、そこに生命の極致がある。

龜毛兎角 龜のこうらの毛、ウサギの角。同じように、ありやうもないデタラメな法門をいう。

鬼門 丑寅の隅、すなわち東北の方角をいう。二つの意味が

あり、仏法の住所と邪鬼の住所。

逆縁 一般に、教えを聞いてすなおに信ずる人を順縁とい

い、反対しつづける者を逆縁という。正法に反対し、三年も七年も反対を続け、ついに地獄の相で死んでいく者等は逆縁である。また毒鼓の縁ともいう。謗法の罪によって、地獄に落ちるけれども、御本尊に縁をもった功德によって、必ずその罪を滅し終えて、また御本尊に巡り会って成仏する。この衆生のことを逆縁の衆生という。（要語解説

二九四頁参照）

逆罪 惡逆を犯した罪で、五逆罪、七逆罪、八逆罪、二十惡罪などがある。

客殿 ①一般には來客に對面するために設けた殿舎。②日蓮正宗の大客殿は独自の意義と使命をもち、総本山富士大石寺に威容を誇っている。御法主上人が広布の祈願、丑寅の勤行をされ、また満山供養等、総本山での大法要の場所として使用する。現在の大客殿は第三代池田会長が世界の名産を集めて建立供養された近代建築である。

隔別の三諦 隔歴の三諦ともいい、円融の三諦に對する語。空仮中の三諦が別々に説かれ円融していないこと。隔

別の三諦は無得道、円融の三諦は得道の教えである。

逆路伽耶陀 逆は漢語、路伽耶陀は梵語。訳して順世外道と

いい、弟子として、師の説に敵対することをいう。

九界 九界の項を参照。

丘澗 丘とは高い土地、澗は低い土地、すなわち土地に高低

のあるさまをいう。

給仕第一 給仕とは、いつもそば近くにいて仕えることをい

い、仏法上では仏に心服して随侍することが、仏法を学ぶ

ための肝要である。末法の御本仏日蓮大聖人に常随給仕し

た日興上人は給仕第一というべきである。

九十五派のバラモン (要語解説四二〇ページ参照)

九包淵 中国春秋戦国時代の人。秦の穆公のために天下の馬

を鑑定したが、その鑑定は、馬の外見や毛色などに少しも

とらわれないで、よくそのすぐれた性質をとらえて狂いが

なかったといわれている。

旧本門宗 (要語解説四〇五ページ参照)

教 梵語の設婆恒羅の訳。「おしえ」と訓む。玄義第一上に

「教とは聖人下に被らしむるの言なり」とあるように、聖

人が人に対して説いた訓をいう。教には八教、宗教の五綱

のなかの教、教行証の教がある。(要語解説一三五ページ参照)

經 梵語、修多羅の訳。仏の説いた教法を經といい、經典、

經文ともいう。一切經、大藏經は經、律、論を含めた呼稱

であり、經はそのなかでも根本となるものである。

境 境界の略で、主觀的智慧の対象となるべき客觀世界のこ

とをいう。この境には六境、十境などがある。

輕易 輕蔑しあなどる。

行位全同 行位とは四妙のなかの行と位。修行と位とがまっ

たく同じであるとの意で、久遠元初の自受用身の修行(南

無妙法蓮華經を唱える)と位(名字凡夫位)が、末法の御

本仏日蓮大聖人の行位とまったく同じであることをさす。

境淵無辺 境の淵がほとりなく、仏の智慧が限りなく広大で

あることをいう。

堯王 中国古代の帝王。帝堯、堯陶唐氏、また唐堯という。

父は黃帝のひ孫たる帝嚳高辛氏、母は陳鋒氏の女。古来、

善政を施した名君として名高い。

經王御前 四条金吾とその妻・日眼女との間に生まれた娘。

大聖人より四条金吾に与えられた御書に經王御前御書(一

一二三頁)や經王殿御返事(一二四頁)がある。

巧於難問答 法華經涌出品第十五の地涌の菩薩をほめたたえ

る文で「難問答に巧み」と読む。日興上人の二十六箇条遺

誠置文（一六一九）

にも「一、巧於難問答の行者に於ては先師の如く賞翫しょうくわんす可き事」と述べられている。現在では折伏、法論等に巧みなこと。

教学きょうがく 大聖人の教えを学ぶこと。信行学の一つ。創価学会には教学部があり大聖人の色心不二しきしんふにの大生命哲学の研鑽けんさんに励んでいる。

行学ぎょうがく 修行と教学のこと。信行学のうちの二つ。諸法実相抄（一三六一）に「行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候」とある。

叫喚地獄きょうくわんじごく 八大地獄の第四。顕謗法抄（四四四）に詳しい。

経巻相承きょうまんそうじょう 相承とは相對授承の義で、血脈相承、師資相承等がある。ここでのいう経巻相承とは、後世の者が経巻を読んで師の真意を悟り付嘱ふしよくを受けたと自称することで、顕本法華宗の日什にちじゆなどがいつている。仏法における真実の相承は血脈相承、師資相承であり、このような経巻相承は仏法を乱す邪義である。

教観二門きょうくわんにもん 教相門と観心門のこと。天台では、教相とは仏の教法の同異を分別ぶんべつすることで五時八教等を明かし、観心とは教法によって己心を觀じ十法界をみる実践の行で一念三

千、一心三觀等を説く。大聖人の仏法よりみれば、天台の教観二門とも教相となり観心とは御本尊を信じて題目を唱えることである。

行基菩薩ぎょうきぼさつ 法相宗の僧。天智天皇の九年、和泉国大鳥郡蛸田郷家原村に生まる。史首と名づく。父は高志史洋、母は蜂田薬師古、百濟王の子である。幼少より仏道に志し、十五歳で薬師寺に投じて出家し、二十四歳で徳光禪師にしたがつて具足戒を受け、瑜伽、唯識の奥秘をきわめた。橋、道路等を作った。

教行証きょうぎょうしやう 教とは仏説の教法、行とは教によって立てた行法・修行、証とは教行によって得た果徳のこと。（教行証御書一二七六参考）

教行人理きょうぎょうにんり 天台が文句に説いた「教一、行一、人一、理一」の四一の説を合わせてよんだもの。教は仏の説いた教法、行は教法に示された修行道、人は教を受け行を修する者、理は証道すべき法理をいう。

行解ぎょうげ 行はおこない、修行であり、解は理解すること。すなわち仏法を修行し教えを理解し悟ること。止観に「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至隨う可らず畏る可らず」とある。

教外別伝 釈尊一代の経のほかは釈尊から迦葉に、文字によ

らずひそかに伝えられ、その法を伝えているという説で、

禪宗の邪義である。

脇士 仏の脇に侍立する菩薩。仏徳を表わし、化導を助け、

また用務をはたす侍聖のことをいう。観心本尊抄(二四八

頁)に「正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士

と為し権大乘並に涅槃・法華経の迹門等の釈尊は文殊普賢

等を以て脇士と為す」と、法華経本門の釈尊の脇士は上行

等の四菩薩であり、文底独一本門の教主すなわち南無妙法

蓮華経の脇士は、まず釈迦・多宝の二仏がならび、さらに

上行等の四菩薩がならぶ。これを両重の脇士という。

僧尸迦 梵語、帝釈天の別称で、帝釈天が、前世において人

であつた時の姓である。

行者 仏道を修行する人をいう。異様な風体で滝にうたれた

り呪術などを行なうのは誤りである。

教主 教法の主尊。教法能説の主尊。教主とは、仏の異名。

行住坐臥 行とは歩行、住とは一所に止まり立つ、坐はす

わる、臥は横に寝ること。仏教では常にその行状を戒め行

住坐臥で威儀を失わないことから四威儀という。末法では

三大秘法の御本尊を信じ唱題することが最高の四威儀。

教主釈尊 教主とは教法の主尊で、教主釈尊に①藏教の釈

尊②通教の釈尊③別教の釈尊④法華経迹門の釈尊⑤法華経

本門の釈尊⑥法華経本門文底の釈尊即久遠元初自受用身の

六種類の教主釈尊がある。

堯舜 堯王と舜王のこと。共に中国古代の帝王で、善政を

行なった名君として名高い。

形状醜陋 顔かたちの醜く卑しいこと。

教禪 禪宗を分類した三種の禪の一つ。釈尊の教によって立

てた禪をいう。

輕賤憎嫉 法華経譬喻品第三に、法華経の行者を輕んじ賤し

み憎み嫉む者は必ず阿鼻地獄に落ちるとある。

教相・観心 (要語解説二六二頁参照)

更増壽命 法華経常不輕品第二十の文。可延定業書(九八

五頁)に「不輕菩薩は更増壽命ととかれて法華経を行じ

て定業をのべ給いき」とあり、死ぬべく定まった壽命も、

法華経修行の功德によつて死なないのみならず、さらに壽

命を増すことをいう。寿命品には「更賜壽命」とある。

鏡霜法師 唐の武帝の命により国中に弥陀念仏を興行して歩

き、唐の国に自界叛逆難と他国侵逼難を巻き起こした僧侶。

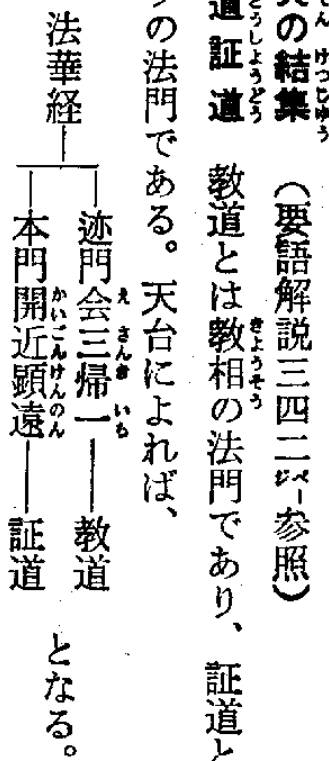
行体 修行する法体、また修行をしている姿をいう。

兄弟抄 大聖人が文永十二年四月、五十四歳の時、池上兄弟に与えられた御書。兄の宗仲が勘当されたとき、兄弟の信心指導のためお認めになり、止観第五の「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る」の文を示され、門家の明鏡とせよと申されている。

境智行位 天台の迹門の十妙のうち、初めの四つをいう。境妙とは対境で客観世界、智妙とは境に冥合する妙智すなわち主観世界、行妙とは智に基づいて起こる行動、位妙はその場合の位、位置をいう。

境智冥合 境は客観世界、智は主観的智慧。智とは信心ということで、御本尊を境として題目を唱えることが境智冥合である。（要語解説二五九頁参照）

經典の結集 （要語解説三四二頁参照）
教道証道 教道とは教相の法門であり、証道とは内証の悟りの法門である。天台によれば、



京都の一致派 （要語解説三九七頁参照）

儒墨弥 インド刹帝利種族中の一つ。普通、釈尊のおぼである摩訶波闍波提比丘尼のことをいう。

脇比丘 付法蔵の第九。（要語解説三三九頁参照）

行敏 念仏の僧。日蓮大聖人を迫害した。

行布 差別の意。本来、行布とは菩薩の位を五十二位に分けて、しだいに行列布置して差別を設ける意味であるが、転じて爾前経において二乗不作仏として、二乗を差別していることを示すのにも使われている。

教法流布の先後 宗教の五綱の一つ。教法の弘まる順序次第を判定すること。教は低い教えから高い教えへと弘まっていくもので、逆に高い教えの弘まった後から低い教えを弘めるわけにはいかない。（要語解説一四〇頁参照）

樂法梵志 釈尊の因位のときの名。菩薩行を修していると、仏の一偈を聞くために、皮をはいで紙とし、骨を抜いて筆とし、血を墨として書写した。

行満座主 行満は中国蘇州の人で、天台法華の僧・妙樂の高弟である。道邃と共に伝教に法を伝えた。二十歳にして出家し、二十五歳にして具足戒を受け、律を学ぶこと五年、さらに天台の三大部を学んだ。（要語解説三七三頁参照）

教弥実位弥下 「教えいよいよ実なれば、位いよいよ下し」と弘決の六にある。すぐれた教えほど、功德・威力が強くて、ますます下劣の者を救うから、これを修行する者の位

は低いということ。これに反対の語は「教えいよいよ権なれば位いよいよ高し」である。

況滅度後 法華經法師品第十の文。「いわんや滅度の後をや」と読む。法華經を弘める者は、釈尊在世においてすら難をうけたのに、いわんや釈尊の滅後に法華經を弘める者には数々の大難があるということ。この滅度の後は、正・像・末の三時にわたるが、正意は末法である。

教門・觀門 教相と觀心であり、門は能入の門の意。

鄴洛の禪師 禪宗の祖師・達磨のこと。鄴は春秋時代の齊の都、洛は洛陽で、後漢、西晉、後魏などはみなここを都とした。共に達磨の法が弘められた土地の名。

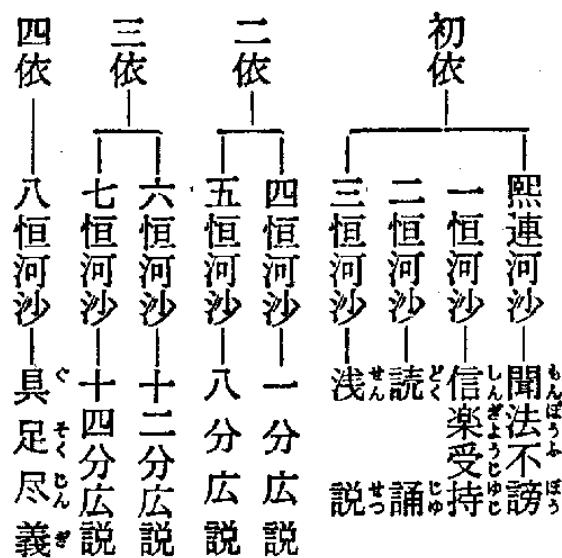
經律論 經藏、律藏、論藏のことで総称して三藏という。仏法の教典はこの三つに分類される。經とは經本・經典、律とは戒律、論とは經典を解説したものを用いる。

教令 教え示して、命令すること。

清澄寺 安房国清澄山中宇妙見山にあり、天津より登ると一里半、境内一万八千坪。日蓮大聖人は十二歳の時この山に登り、道善房を師とし、天台、真言の学を修め、出家した。鎌倉時代は天台宗であったが、その後、真言宗に変わり、さらに、昭和二十四年、日蓮宗に移って大本山となった。

訖利多王 北インド迦淫弥羅国の王。僧侶・信徒を追い、仏法を破ったが、雪山下王に滅ぼされた。

熙連恒沙 ①熙連と恒（恒河）は、共にインド拘尸那城のそばを流れる川の名。沙は砂である。全体としてこれらの河の砂の数のように多いという譬えに用いる。②釈迦仏法における仏法修行の段階の名。涅槃經および疏によれば、これを四依に配当して次のように示している。



日蓮大聖人の仏法において一口に南無妙法蓮華經と唱える者は、名字即の凡夫であるから法を聞いて謗らず、信樂して受持するという位すなわち熙連河沙・一恒河沙の者といえる。（四信五品抄参照）

禽獸に同ず 父母を知らない者は、禽獸と同類であるところ

から、末法の主師親を知らぬ者を禽獸と断じた。

金星 太陽系に属する惑星の一つで、太陽側から数えて二番目に位置する。太白星、明星ともいい、この星に異変があるのは飢饉の前兆であるという。

緊那羅 八部衆の一。梵語で疑人、疑神、人非人等と訳す。

く

空 三諦の一つである。瞬間の生命活動をとらえ、如是性とみれば空諦である。各経にいろいろの空が説かれる。藏教では但空の理、通教では不但空の理、円教では三諦円融のうえから空を論じている。

空観 総じて空観とは、一切の森羅万象をことごとく空と観ずることである。空とは、三観（空・仮・中）の一つで、万法の一切の性分のことである。すなわち、方便品に如是性と説き、一切の法を空なり、如なりと観するのである。

また、生命観の一つ。ドイツ哲学は「有る」ということと「無い」ということと、この二つを根源にしている。仏法には「有る」と「無い」とのほか「空観」という、一つの生命問題を考える根幹がある。たとえば、眠っている間は

心はどこにもない。しかし目をさますやいなや心は活動する。眠っている時は心が無くて、起きている時には心がある。起きている時には「有る」けれども、夜床につくと無くなるのである。夜眠っている時には心は「無い」が、起きればまた活動して「有る」ことになる。いったい有るのが本当なのか、無いのが本当か、有るといえば無くなるし、無いといえば現われてくる。このように有無で論ずることができないとする考え方を「空観」とも「妙」ともいうのである。一生成仏抄（三八四頁）に「抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり」とある。

空仮中の三諦 諦とは「つまびらか」「あきらか」という意。

空仮中とはあらゆる法の本来的にそなわっている性徳。仮諦とは現実にいまあるものは仮の姿とする見方を仮諦とい

う。空諦とは、一切のものが仮和合の存在であるゆえに空
といい、中諦とはこの空であり仮でありながら本質的には
一貫している、これを中諦という。(要語解説二〇頁参照)

空閑 人里離れた静かなところ。

九横の大難 釈尊が受けた九つの大難をいう。すなわち孫陀
梨の謗、金鑽またはバラモン城の漿、阿耆多王の馬麦、瑠
璃の殺釈すなわち無量の釈子が波瑠璃王に殺されたこと、
乞食空鉢、旃遮女の謗または旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせ
たこと、調達が山を推す、または提婆が大石をとばしたこ
と、寒風に衣を索む、阿闍世王の醉象を放ったこと。(要
語解説五二頁参照)

久遠 一般に久しく遠い昔という意であるが、釈迦仏法では
五百塵点劫をさし、大聖人の仏法では久遠元初をさす。な
お御義口伝下(七五九頁)には「久遠とははたらかさず・
つくろわず・もとの儘と云う義なり」とある。

久遠元初 一般には久遠とは久しく遠い昔、元初とはもとも
との始まり。文底仏法では大聖人の明かされた無作・本有
常住の生命、無始無終の生命をいう。久遠元初らしい宇宙と
共に実在する本有常住の仏を久遠元初の自受用身という。

久遠下種 衆生が初めて仏の説法を聞くのを下種という。釈

迦仏法においては五百塵点劫に下種をうけ、大通仏、爾前、
法華迹門の長い調熟を経て寿量品で得脱したという。大

聖人の仏法では久遠元初の下種を明かし直達正觀を説く。

久遠下種の一類 釈迦仏法で久遠下種をうけ大通覆講のとき
発心し退転せず成仏した者を第一類、発心したが退大取小
の者が第二類、発心しなかった者を第三類という。

久遠実成 法華經寿量品にいたって五百塵点劫の成道を説き
仏の本地を明かした。爾前經および法華經迹門では釈尊が
インドに出世して、三十歳の時、菩提樹下で始めて成仏し
たことが説かれているが(これを始成正覺という)、本門
寿量品では五百塵点劫という久遠の昔にすでに仏であった
と説かれた。これを久遠実成という。すなわち、長遠の生
命を説き明かしたのである。

久遠大通の者 久遠とは五百塵点劫において、久遠実成本果
の釈尊に結縁して下種をうけた者。また、大通とは三千塵
点劫の昔に出現した大通智勝仏の第十六の王子に結縁し下
種をうけた者。

久遠名字即 ここで久遠とは久遠元初のこと、名字即とは
天台の六即の一つで初めて仏法を信じた位をさし、大聖人
の仏法では名字即の凡夫が即身成仏する。久遠名字即とは

大聖人のこと。(要語解説二五七頁参照)

九界 生命活動の範疇を十種に分け十界と称するが、そのなかから仏界を除く他の各界の総称である。迷悟からみれば迷は衆生即九界であるが、大聖人の仏法では即身成仏を説くゆえに九界即仏界である。

苦岸等の四人 過去の大莊嚴仏の末法に出家した弟子は、分かれて普事・苦岸・薩和多・將去・跋難陀の五部となる。普事のみ真法を知ったが、その他いっさいの人は苦岸等の四比丘の邪説を信じ、師弟ともに阿鼻地獄に落ち、八大地獄を巡って極苦を一大劫の間うけたという。

苦岸比丘 大莊嚴仏の末法における謗法の惡僧で、他の三比丘六百四万億の弟子と共に大苦をうけ、後に一切明王仏にあつて修行し、さらに九十九億の仏にあつて修行するも、前々の惡因によつてなお仏果をうる事ができなかった。

日蓮大聖人に敵対する者は苦岸比丘と同じである。

瞿伽利 惡時者、守牛と訳す。釈迦族の出で、淨飯王の命により出家して仏弟子となるが、後に提婆達多を師匠として舍利弗、目連を誹謗して、生きながら地獄に落ちた。

究竟即 天台が法華經の円意で立てた修行の位である六即位

(理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、究竟即)の最

高の位。無作三身の仏であることを悟る状態。

究竟等 法華經方便品の十如实相の一つが本末究竟等であり、究竟して等しいの意。如是相を初め如是報を終わりとして本末の体が究まって中道一実の実相であるのを本末究竟して等しいという。また三如是と七如是も同じ三諦ゆえに究竟等といい、九界即仏界の義も本末究竟等である。

苦・空・無常・無我 小乗經の四念処の法門をいう。大乘佛教の「常・樂・我・淨」に対比される。

弘決 妙樂が天台の摩訶止觀を註釈した書。「摩訶止觀輔行伝弘決」のこと。

口決相承 師資あいついで法を伝承するのを相承といい、師資親しく面授して相承するのを口決相承という。仏法の奥義は口決相承によらなければならない。ゆえに神力品の付嘱も、大聖人らしい日蓮正宗の相承も、口決相承である。

驅遣 追い出すこと。

口業誦誦 身口意の三業のなかで口で読むことをいう。誦は經文を見て読み、誦は見ないで誦する。大事な仏法の実践は身業誦誦である。

求財不利 般泥洹經にあり「財を求むるに利あらず」と読む。過去の惡業の結果として、いろいろの罪報をうけるが、そ

のなかの一つで財宝をいくら求めても利益がなく幸福になれないこと。(佐渡御書九五九が参照)

苦治くじ 厳きんしく対治する。

九思くし一言いちげん 一言でもおろそかにしないこと。論語に「孔子曰く、君子に九思あり、視は明を思い、聴は聰を思い、色は温を思い、貌は恭を思い、言は忠を思い、事は敬を思い、疑は問を思い、忿は難を思い、得を見ては、義を思う」と考察の方法のあることを示している。この考察を加えての言でなければ出してはいけないことを、九思一言という。

九識くしき 心識を分別するに、小乗では六識を立て、法相宗では八識を、天台では九識または十識を立てる。真言宗では、その上にさらに十、十一識、無量識を立てる。これは唯識論で、九識が妙法の境涯きやうがいをいうのである。

九識心王くしきしんのうしん真如みまろの都みやこ 天台宗、華嚴宗等では識を九つ立て、第九識をもって如来蔵識・清淨識しやうじやうしきといい、これを心王という。今これを説明すると、眼、耳、鼻、舌、身、意の六におのおの識ありと立てる。識とは心が内外の対境に対して、あれは何、これは何と、その異同を知る作用をいう。すなわち、眼識とは色を縁えんとして物の区別異同いどうを知る識、いいかえれば眼で物を見て、これはコップだ、あれは茶わ

んだと区別することができるのは眼識によるのだと説く。

以下同じ。俱舎宗等の小乗にはこの六識しか立てておらず、第六識をもって心王としている。第七識は未還識、思量識ともいわれる。すなわち、思量によつて物事を判断していく識である。第八識を阿頼耶識あらやしきという。執持負とも養識しきともいう。この第八識は染淨の二法を含む。淨法は菩提染法は煩惱ぼんのうとなる。ゆえに法相宗においては、これを含蔵識こんざうしきといい、この八識を色心縁起の根本として、心王といっている。天台・華嚴宗ではさらに、染淨含蔵こんざうの第八識に対して、真淨識しんじやうしき、根本淨識こんぽんじやうしきを立て、これを第九識として、染と淨を含蔵するといふ第八識と区別している。ゆえに天台・華嚴においては、第九識をもって清淨無染の根本識、すなわち心王というのである。心王とは心の主作用をいい、心王に対する語は心数しんすうといって、心の伴作用をいう。真如とは真実にして虚妄こもうをはなれ、不変不改ふへんふかいであるのを真如という。すなわち、心王の住所なるゆえに都といい、九識は真如の本識なるがゆえに真如の都といわれる。日向記(八〇八頁)にいわく「究竟即くきやうじやくとは九識本覺くしきほんかくの異名いみょうなり、九識本法の都とは法華の行者の住所なり」また同じく(八二六頁)「此の九識法性とは、いかなる所の法界を指すや、法

界とは十界なり、十界即諸法なり、此の諸法の当体・本有の妙法蓮華經なり、此の重に迷う衆生の為に、一仏現じて分別説三するは、九識本法の都を立出するなり、さて終に本の九識に引入する、夫れを法華經とは云うなり「日女御前御返事（二二四四六）にいわく「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王真如の都とは申すなり」九識とは識を分ければ六識は二乗、八識は菩薩、九識は仏である。また御本尊第一の純真な信心の姿、清らかな心で不幸な人を救おうというその心を九識という。

拘尸那城 中インド橋薩羅國にあり釈尊滅度の地である。

俱舍宗 天親菩薩の俱舍論を所依とする宗派。南都六宗の一つ。

つ。八宗の一つ。小乗の三宗の一つ。

俱舍論 阿毘達磨俱舍論といい、天親が著わし玄奘が訳したもの。

もので三十巻。わが国では一般に諸宗から仏教の入門書として兼学されていた。

九十五究竟道

仏道を一究竟道というのに対して、外道は九十五種の流派があり、おのおの究竟道であるという外道の言。

究竟道とは、その道とするところの最極無上であること

とをいうのである。

俱生神 人が生まれたときから、常に人の両肩にあつて、その善惡を記して天に報告するという同名、同生の二神。

九山八海 仏教における一世界、すなわち三千大千世界の單位たる世界が地輪の表面に現われたものを九山八海とする。

その中心は須弥山として九山を数え、中央の須弥山から第八の持地山にいたる山と山との中間に各香水海があり、この七を内海といい、持地山と小鉄围山との間に大鹹水海があり、これを外海といい、合して八海となる。この大鹹水海中に人の住する四洲があると説く。

具足戒 具足とは満足の意、戒とは防非止惡である。小乗の比丘は二百五十戒をもつて具足戒とし、比丘尼は五百戒をもつて具足戒とする。

具足の道 すべてを満足している一念三千の教え。完全円満なる教え、すなわち、妙法蓮華經のこと。

俱体俱用 体とは本体、用とは働きのこと。この体用を共にそなえていることを俱体俱用という。爾前迹門の場合は、法身を体として報身、応身を用としている。また色相莊嚴の仏であるから無作三身ではない。本門では、三身俱体、三身俱用であるから俱体俱用である。そして名字凡身のもの

とのままであるから無作三身である。ゆえに俱体俱用の無

作三身とは、日蓮大聖人の御事である。われわれが妙法信受の力用によって即日蓮大聖人と願われるのである。すなわち人法一箇の御本尊を信ずることによって、われわれもまた当体蓮華仏となる。また一応、俱体俱用の義は迹門に通ずる。法身に即するときは、報応二身は共に体となる。

報応に即するときは、法身は用となる。

具勝本種 妙楽大師の文句記の「脱は現に在りと雖も具さに本種を騰ぐ」という文で、寿量品文上の儀式は、脱仏が脱益

の法門を説き、衆生は皆得脱するというのであるが、その文底には、久遠元初の種が蔵されているということ。その本種を悟った者は等覺が一転して名字妙覺に入るのである。

功德 梵語の求那の訳で功能福德の意。利益と同意で、御本尊を信じてえられる。

苦得外道 釈迦在世の六師外道の一つで、釈尊の弟子であつた善星比丘を退転せしめた悪知識、悪僧の名。

功德聚 曼荼羅の訳。もろもろの功德の本源をいう。輪田具足ともいう。すなわち、三大秘法の御本尊のこと。

功德林菩薩 華嚴会上の四菩薩の一人。

瞿曇沙門 梵語。多くは外道等が釈尊を呼ぶのにいう。涅槃

經に「諸の外道の輩、阿闍世王の所にいたり、釈尊をさし

て、一大惡人あり瞿曇沙門という」とある。提婆が釈尊を怨んで用いた語。

拘那含仏 過去七仏の第五、現在賢劫千仏の第二。

國を知る (要語解説一三八頁参照)

九の意 摩訶止観第七に釈尊一代の聖教を正しく解釈し、行ずるための条件を、十意をもって釈してある。そのうち、第九は梵語より漢語への訳經、第十は觀を成ずとなつてゐる。今、第九とは初めての九意をさすとの説と第九意の訳經をさすとの兩説がある。

鳩槃荼 梵語、人の精氣をくらう鬼。

九部の法 仏經の内容を分類して九種とする。小乗の九部、

大乘の九部がある。法華經方便品に「われこの九部の法は衆生に隨順して説く」とあるのは小乗の九部をさし、涅槃經の「かくのごとき等の九部の經典をもつて他のために広説す」とあるのは大乘の九部である。

九品往生 念仏宗、浄土宗における教義で、觀無量壽經に説かれた方便の説。九品の人がおのおのその行を修行して、

それぞれの九品の弥陀の浄土に往生すると稱している。

鳩摩羅炎 妙法蓮華經の訳者として有名な鳩摩羅什の父。

鳩摩羅什 梵語、童寿と訳す。父は鳩摩羅炎といつてインド

の国相、出家し亀茲国に行つて国師となつた。国王の妹の耆婆をめぐつて、羅什を生んだので父母の名をとつて鳩摩羅耆婆ともいう。容姿端麗、聰明英俊であつた。多くの大乘經を翻訳し、その数は三百八十四巻におよぶということである。そのなかでも法華經の訳出について最も心血を注いだ。自分が死んで、舌が焼けたら、わが訳經を捨てよといったが、その予言どおりに、舌のみ焼けなかったという。鳩摩羅耆 仏滅後付法蔵の第十八。功德深淵にして菩薩道を行じ、知弁海のごとくであつた。美名童子の称がある。

求名 弥勒菩薩の過去世の名で、求名菩薩のこと。法華經序品第一に求名菩薩について「利養に貪著し衆經を忘失する者だが、善根をうえた因縁で諸仏にあい供養恭敬、尊重讃歎した」とある。

旧訳・新訳 漢訳された經典のうち、唐の玄奘三蔵以前に訳されたものを旧訳といい、玄奘が訳したものより以後を新訳という。鳩摩羅什三蔵や真諦三蔵の訳が旧訳にはいり、主として玄奘の訳が新訳である。

供養 仏法僧の三宝や、または死者などに諸物をそなえ、回向すること。法華經における十種供養や、死者に対する塔婆供養、追善供養等がある。仏法だけにかぎらず、一切の

社会に供養はある。税金は国への供養であり、食物はわれわれを供養していることになり、勤労は会社に対する供養である。折伏は法の供養であるともいわれ、御本尊に対する第一の供養になる。(要語解説三二九頁参照)

求羅 虫の名、迦羅求羅虫といい、その身は微細であるが、風を得れば大となり、繁殖するという伝説がある。

拘留外道 インドの勝論学派の祖。報恩抄(三一頁)に「拘留外道は石となつて八百年・陳那菩薩にせめられて水となりぬ」とある。

拘留孫 小乗經に説かれてゐる過去七仏の第四の仏である。過去七仏とは過去莊嚴劫の三仏と現在賢劫の四仏とをいう。すなわち拘留孫は現在賢劫千仏の第一仏である。

紅蓮・大紅蓮 紅蓮地獄と大紅蓮地獄のこと。共に八寒地獄の一つ。鉄圀山の外側の暗黒界にある地獄。この地獄に落ちた者は酷寒のため皮膚が裂け真つ赤になり、ちやうど紅色の紅蓮華の花に似てゐるところから名づけられた。大紅蓮地獄はさらに苦痛が激しく最も恐ろしい所である。

薰習 しみとおること、移り沁むこと。物に香りが移り沁みこむように善悪などの行為、思想がその余勢を心に残し留めること。染浄迷悟の諸法は薰習の力によって生起される

ものであるとする。

拈拾遺囑 拈拾とは拾い取る意で、法華経で総別の付嘱が終わってなお漏れた衆生のために重ねて説いた付嘱をいう。
薰発 薰とは薰習の意。発とは縁にふれて起こること。あるいは、縁によって外面に現われること。

け

偈 頌と訳す。仏徳や教理を賛嘆する詩。一偈を一四句偈ともいう。①通偈は経の字数を八字で四句つづきの三十二字で一偈とする。②別偈は長行でない偈頌をいう。四言、五言、六言、七言等あつて、いずれも四句を一偈とする。
慧果 中国唐代の僧。真言宗東寺派では大日如来から法を受け継いだ第七祖とする。不空に仕え、後に弘法にその教えを伝えた。

計我 十四誹謗の一つ。自分のひとりよがりな考えで仏法をおしはかり解釈することで、厳に戒めなければならぬ。
松野殿御返事（一三八二頁）に出ている。

契経調伏対法 契経は経蔵のこと。調伏は律蔵のこと。律は人々の煩惱を伏するを主とするところから調伏という。対法は論蔵、智慧をもつて理境を対弁するということから

対法という。三蔵のこと。

判牒大師 唐の妙楽大師湛然のことである。天台宗第九祖で、天台宗中興祖といわれている。著書に、天台三大部の注釈書たる法華玄義釈籤二十卷、法華文句記十卷、止観輔行伝弘決十卷等がある。（要語解説三七二頁参照）

警中明珠の警 法華経の七譬の一つ。頂珠の譬ともいう。安樂行品の第十四に転輪聖王が戦いにおいて最も勇健な者に無上の宝珠である警の中にある明珠を与えた。この明珠は法華経であると説く。文底の意は御本尊こそすべての宝に超過した最高唯一の明珠である。

繫縛殺害瞋諍 繫縛とは身をしばる意味で、罪人を逮捕すること。殺害とは殺人。瞋諍はケンカ争い。

尉賓国 北インド地方の古い時代の国名。普通は迦淫弥羅国をさすが、中国の六朝までは健駄羅をさし、唐の中期以後は今のカブール地方をさすなど、一定していない。

啓蒙 書名。不受不施講門派の日講が著わした録内啓蒙三十六卷の略称。

華界 仏堂をいい、通じて仏菩薩の住所をいう。蓮宮と対称し、蓮華世界の略ではないかといわれている。立正安国論（二三三頁）にある。

化儀 化法に対する語。仏が衆生を化導する儀式をいい、その説教の形式、仕方という。釈迦仏法では頓・漸・秘密・不定を化儀の四教という。一般に化儀というと、勤行の仕方、御本尊の取り扱いに関する事、仏壇・仏具等に関する事をいう。日蓮正宗の化儀は日有上人の「化儀抄」等に定められている。

化儀抄 大石寺第九世日有上人が、日蓮正宗における化儀上の種々の問題について指南されたものを、弟子の南条日住が書き留めておいたもの。

化儀の四教 化法の四教に対する語。頓・漸・秘密・不定の四教。化法の四教をもって衆生の機根を調熟してゆく教化の方法をいう。(要語解説九頁参照)

華香 仏に供養する華と香のこと。日蓮正宗では香木の檀を御本尊に供養する。

華光如来 釈尊の十大弟子たる舍利弗尊者の未来成仏する時の名号である。舍利弗は、法華経譬喻品で、この記別を受けた。

下剋上 「下、上を剋す」と読む。臣下でありながら、君主を軽んじ、実権をにぎって主君を倒し、自分もまた臣下から機をうかがわれるというような風潮で、鎌倉時代から室

町時代にかけて盛んであった。自界叛逆の姿をもたらすものである。

下根 上根、中根に対する語。仏道を実践していく力がとぼしく、機根の劣っていること。低級な能力者等の意味。しかし文底仏法では、下根の者でも御本尊を信じ折伏に励むなら一生成仏は疑いない。

華嚴經 大方広仏雑華嚴飾經または大方広仏華嚴經という。

釈尊が寂滅道場菩提樹下で正覺を成じた時、三七日間、大菩薩のために説いた教え。旧訳は六十巻で七処八会三十四品。新訳は八十巻で七処九会三十九品。教主盧遮那仏の化身たる釈尊が利根の菩薩のために説いて事事無碍円融の妙理。唯心法界の法門を説く。

華嚴宗 華嚴經を依經とする宗派。杜順・智儼が開き、澄観

の時、天台の一念三千を盗んだ。(要語解説一六頁参照)

華嚴宗の五教 華嚴宗で立てる教判(一代仏教批判の基準)で一小乗教、二大乘始教、三大乘終教、四頓教、五円教の

五教を立てる。

華嚴心造 華嚴經の「心が一切法を造る」という偈文を指す。華嚴の唯心法界ともいう。心をたくみな画師にたとえて説くため「心如工画師」の呼び名で広く依用される。

華嚴の唯心法界 新華嚴經の覺林菩薩の偈に「心はたくみな

る画師のごとし、よく諸の世間を画く、五蘊ごとくよく
りて生じ、法として、造らざるはなし、心のごとく仏もま
た爾なり、仏のごとく衆生も然なり、まさに知るべし仏と
心と体性皆無尽、若し人心行、普く諸の世間を造ると知ら
ば、是の人は即ち仏を見、仏の真实性を悟るなり、心は身
に住せず、身も亦た心に住せず、而も能く仏事に作すこ
と、自在にして未曾有なり、若し人三世一切の仏を了知せ
んと欲せば心に法界の性を観ずべし、一切唯心の造なり」
とある。華嚴宗の澄観は、この結末の三句によって、まさ
しく唯心法界觀を立てて成仏の真道としている。

袈裟 梵語、迦羅沙曳、袈裟野ともいう。僧の身に着する法
衣。インドでは袈裟を身にまとうので袈裟を法衣法服とも
いう。また中国、日本等においては、袈裟の下にさらにい
わゆる衣なるものを着して区別している。日蓮正宗の法衣
は薄墨の素絹を五条用いる。

華色比丘尼 蓮華色比丘尼ともいう。阿羅漢を得た仏在世の
比丘尼。初め姪女であったが、目連の化導を受けて仏の所
にきて、摩訶波闍波提（釈尊の養母）について出家し、つ
いに阿羅漢果を得た。

下種 仏の種を衆生の心田におろすことをいう。下種益、熟
益、脱益を三益といい、この三益のなかでは、下種益が最

も大事なものである。日蓮大聖人の仏法を下種仏法、釈迦
仏法を脱益仏法というのは、日蓮大聖人の時代の衆生は本
未有善であり、釈尊の時代は本已有善の衆生だからであ
る。すでに善根を積んだ者には熟脱仏法でよいが、末法の
われわれのように善根のない者には、日蓮大聖人の下種の
南無妙法蓮華經でなければならぬのである。

下種の教主 下種益の仏法の教主。末法の御本仏たる日蓮大
聖人をさす。（百六箇抄八六三頁参照）

下種本因妙の教主 下種益の仏法すなわち本因妙の南無妙法
蓮華經を説く教主。末法の御本仏たる日蓮大聖人をさす。

釈迦は脱益本果妙の教主である。（要語解説二五一頁参照）
化城即宝処 かりのものである化城が、実は、そのまま宝処

であるということ。法華經化城喻品にあり、生命は永遠で
あり常住不滅であり、無常を即常住と開いていくこと。御
義口伝上（七三二頁）に「化城即宝処とは即の一字は南無
妙法蓮華經なり」とある。

化城喻品 法華經の第三卷化城喻品第七がこれである。三周
の声聞のなかの第三因縁周の正説を説いたものである。法

説・譬説の二周では、まだ領解しない下根の声聞のために、久遠以来の師弟の宿世の因縁を説いて、ついに得道させるのである。宝処にいたるための化城の譬喩が説かれているが、日蓮大聖人は、御義口伝に法華經の意は化城即宝処であるとされ、「南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心妙法と開くを化城即宝処と云うなり」(七三二頁)と仰せである。

(要語解説六三二頁参照)

灰身滅智 灰断ともいう。色身を灰焚し心智を滅失するとい

う小乗教の二乗の理想とする義。

華藏世界 蓮華藏世界とも華王界ともいう。華嚴の教主毘盧遮那如来がその昔莊嚴した世界であると説く。天台はこれを実報土の姿であると判じた。

解脱 戒めをとぎ、障りを脱するの意。三徳の一つ。この世の中を楽しんでいける境地。

解脱堅固 大集經に説かれている五箇五百歳の最初の五百歳をいう。仏道修行する者が盛んに解脱し悟りを開くことができる時代。

灰断 身を灰にして、なにもものもなくすという二乗の修行法。灰身滅智のこと。

結縁 ①法に縁をむすぶこと。未来に得道の縁をつくるこ

と。②南無妙法蓮華經の仏種を心田に植えること。③四衆の一つ。結縁衆のこと。

血脈抄 日蓮正宗に伝わる相伝書のこと。①百六箇抄②本因妙抄のこと。

血脈相承 師資相承ともいう。一人の大導師から唯一人の弟子に秘伝されるのが血脈相承である。仏法はすべて唯授一人の血脈相承である。

血脈相承書 血脈相承の次第を示す書。日蓮大聖人から日

興上人に対する血脈相承書は、身延相承書(一六〇〇頁)

と池上相承書(一六〇〇頁)のいわゆる二箇相承である。

結跏趺座 仏法の座法の一つに左足を曲げて右ものの上にのせ、右足をその下側より曲げて左ものの上にのせる座法で

正座のうち最も安定したものである。項脊端直、不動、不揺、不萎(こごまぬこと)、不倚(よりかからぬこと)

を満足する姿勢が得られる。

結経 本經を説いたあとで、さらにその流通を結する經をいう。開經に対する語。法華經の結経は觀普賢菩薩行法經。

決權實論 伝教大師の著述で一卷、法相宗の一乘方便三乘真

実五性各別の迷いを破るために著わした書。

結集 仏の死後、諸の弟子が集まって仏の遺教を収集する

ことをいう。釈迦仏法の結集は三回もしくは四回行なわれたという。釈尊入滅の直後は迦葉等が阿闍世王の外護により、滅後百年ごろには第二回、滅後二百年、五百年にも、それぞれ結集があった。

決定作仏 決定成仏と同じ意。成仏することが少しも疑いない、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華經によつて必ず成仏することという。

決定性 法相宗で人間の性質は本来五種の決定的差別があるとして五性をたて、その中で声聞、緣覺等になることが決定していて仏になれない種性を決定性としている。

決定性の二乗 法相宗で説く、五種の種性のうち声聞定性、緣覺定性のこと。法相宗では声聞と緣覺を二乗に決定して永久に成仏できない決定性の者であると説く。

結要 要を結ぶと読む。法の主要点をくくつて肝要を選ぶこと。法華經神力品第二十一で釈尊が法華經一部をくくつて

上行菩薩に付嘱した。これを結要付嘱という。

結要付嘱 法華經神力品第二十一において、釈尊が本化の上首たる上行菩薩に妙法蓮華經を付嘱したことをいう。その文は「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の藏、如来の一

切の甚深の事、皆此の經に於いて宣示顯説す」というものである。天台は、これを五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とされている。

外道 仏法以外の教えを外道という。それに対して仏教のことを内道という。仏教は、因果の道理をわきまえ、宇宙の根本を説き明かした科学的な教えであるのに反して、外道は因果の道理を無視した低級なものである。釈尊の時代には九十五派のバラモンがあり、中国にはいつてからは儒教・道教があり、現在では、キリスト教・回教等すべて含まれる。

化導の始終不始終の相 天台が爾前經と法華經を相對して玄義に説いた三種の教相すなわち第一根性の融不融（迹門方便品）―権迹相對、第二化導の始終不始終（迹門化城喻品）―権迹相對、第三師弟の遠近不遠近（本門壽量品）―本迹相對の第二。仏が衆生を教化示導して成仏の境涯を得させる段階には下種、成熟、得脱の三つがある。法華經にはこの種熟脱の過程が説かれているゆえに始終であり、爾前經には説かれていないゆえに不始終である。

介爾 ほんのわずかばかり。

化法 化儀に對する語。衆生を教化するために用いる種々の

教法をいう。天台は釈尊一代の説法を藏通別円の四に分けた。これを化法の四教という。日蓮大聖人の仏法では、三大秘法の大御本尊ならびに御書に説かれた法門が化法にあたる。

化法の広宣流布 法体の広布ともいう。日蓮大聖人の御在世における広布で、弘安二年十月十二日に本門戒壇の大御本尊を建立されたこと。この御本尊の流布が化儀の広布といわれる。

化法の四教 藏・通・別・円の四教。藏教とは三藏教ともいい阿含經の意。通教とは大乘の初めの権大乘で、藏教にも後の別教にも通ずる。別教とは五十二位の菩薩を説き藏通二教とも後の円教とも別である。円教とは三諦、十界、十如、三千の諸法が円融円満なのでこのようにいい、爾前の円と法華の円がある。(要語解説五頁参照)

下品 ものの等級を三種類に分けて、その最下級を下品という。上品、中品に対する語である。普通には衆生の機根の最低に用いる。

外凡・内凡 仏道修行の位であって、いまだ聖位にはいらないう者を凡位、または賢という。凡位のなかである程度理のわかった者を内凡といい、いまだまったくわからない者を

外凡という。化法の四教の別によってその次位を分けると、三藏教の外凡は三賢・内凡は四善根、通教の外凡は乾慧地・内凡は性地、別教の外凡は十信・内凡は十住十行十回向、円教の外凡は五品弟子・内凡は十信となる。(要語解説八頁参照)

外用 内証に対する語。①仏が衆生教化に出るを外用という。②一つの本体があつて、それから外に現われる作用をいう。③内証をかくして外部にみせられた相貌をいう。すべてのものに内証と外用がある。日蓮大聖人は、外用の浅近にのぞめば上行の再誕日蓮であり、内証の深秘にのぞめば、久遠元初の自受用報身の再誕日蓮となるのである。

(要語解説二〇八頁参照)

外用浅近 内証深秘に対する語。外面の浅く近い面。大聖人は外用浅近は上行菩薩の再誕であるが、内証深秘は久遠元初の自受用身の再誕である。

外用内証 仏が衆生教化のため内証をかくして外部にみせた姿を外用という。内証とは内心の悟り、自己の心証によって仏法の哲理を体得すること。(要語解説二〇八頁参照)
顕戒論 伝教大師の著書。弘仁十年、伝教大師が大乗戒壇を建立し、仏教の統一を請うたのに対し、南都六宗の激しい

反対にあつたので、その迷妄を破折するために本論をつくり天奏したものである。

玄義 法華玄義十卷の略称。天台三大部の一つ。天台教学の中心書である。

顯教密教 真言宗で重視する教判。顯教とは仏の真意をあらわに説いた教え。密教とは秘密にして説いた教え。真言の邪義では、大日経は仏の真意を秘密にして説いた密教だから勝れ、法華経はあらわに説いた顯教だから劣ると説く。だが真実の密教は法華経である。

賢劫 三劫の一つで、現在の住劫をいう。これは釈迦仏出世の時代をさす。また、賢劫経の略。釈迦仏法の滅尽を予言した經典である。

減劫 増劫に対する語。百年ごとに人寿一歳を減じて人寿八万歳より人寿十歳にいたる時節をいう。

現在の四信 法華経分別功德品第十七は流通分にはいつて現在の四信、滅後の五品を説く。現在の四信とは一念信解、略解言趣、広為他說、深信觀成。滅後の五品とは初隨喜品、讀誦品、説法品、兼行六度品、正行六度品である。

見思 三惑の一つ。三界六道の苦果を招く惑で見惑と思惑である。見惑とは無常・無我等の真諦の道理に迷って起こす

常見・我見の邪想である。思惑とは欲界に貪瞋癡慢、色界に貪癡慢、無色界に貪癡慢とあて八十一品とする。思惑とは世間の諸事に迷うこと。（要語解説一九六参照）

玄旨 おくふかい趣旨のこと。

遣使還告 法華経寿量品第十六の良医の譬えに「使を遣わして還つて告ぐ」というのをさす。文底から読むと、使をつかわされたということは、別しては、代々のお山の御法主上人である。また、総じては、日蓮大聖人のご精神を奉じて折伏を行ずるわれわれである。

見思の惑 三惑の一つ。三界六道の苦果を招く惑で見惑・思惑である。見惑にまた十使あり、五利使、五鈍使とし、さらに三界の四諦にあてて八十八使となる。思惑は欲界に貪瞋癡慢、色界に貪癡慢、無色界に貪癡慢とあてて八十一品とする。かんたんにいうと、見惑とは道理に迷うことであり、思惑とは物事に迷うことである。これは釈迦仏法においてであるが、末法においては根本の惑はただ一つ、三大秘法の御本尊を信じない者が元品の無明惑で、信じた時は煩惱即菩提、生死即涅槃と開覺するのである。（要語解説一九六参照）

見思未断 見思の惑を未だ断ぜずということ。

現証 (要語解説一四九頁参照)

玄奘三蔵 中国法相宗の開祖。十七年間インド各地を歴遊し唐の太宗の時、中国に法相宗を伝えた。多数の経論を翻訳した。

現世安穩後生善処 法華経藥草喻品第五の文。法華経を信ずる者の功德を明かしている。すなわち、妙法を信ずる人は現世では安穩な生活をし、来世でも善処に生まれるという。阮籍 竹林の七賢人の一人。道德を無視して虚無の思想にふけていた。

玄籤 法華玄義釈籤の略称。全二十卷。唐の妙楽大師湛然の書。天台の法華玄義全十卷を解釈したもの。

眷属 したしく随従付属するもの。妻子、奴僕、または仏の脇士。また仏の説法を聞き、それを信じ行ずる者は、すべてその仏の眷属である。われわれは、日蓮大聖人の眷属である。眷属妙という場合には、迹門十妙の一つで仏の所に集まる諸大菩薩の不思議力あるのをいう。

眷属妙 天台の玄義、迹門十妙の一つ。天台は生命の不思議を妙と名づけ、実相の理を本門の十妙、迹門の十妙に分別している。第九眷属妙とは、仏が出世すれば十方の諸大菩薩が皆出生してきて仏の化導をたすけ信受する。ある者は

神通力をもち、宿願をもち、また応現をもって生まれてくる。これらはみな眷属といい、共に妙不可思議であること

をいう。

兼帯 円教を主として権教を兼ねおびているとの意。阿弥陀経も般若経も兼帯とは与えた判釈であつて本来は爾前権教である。

乾闥婆 八部衆の一つ。食香、尋香等と訳す。天界の樂神であり、帝釈天の前で音楽を奏する。帝釈の後の祖父であるといわれている。

兼但对帯 仏の爾前經の化儀(教え方)をいう。仏の四時の化導を兼但对帯の四字をもってあらわし、華嚴の化儀は円に別を兼ねるゆえ兼といい、阿含の化儀は但三蔵教のみなるゆえ但といい、方等の化儀は蔵・通・別・円の四教並対するゆえ対といい、般若の化儀は円に通別の二をおびるゆえ帯という。

還著於本人 法華経觀世音菩薩普門品第二十五にある句「還つて本人に著きなん」と読む。法華経の行者をそしり、害せんとする者は、かえつて自らの身に、それをうけるようになるという意味。(要語解説三〇一頁参照)

建長寺道隆 建長寺は鎌倉七大寺の一つであり、臨済宗建長

寺派の本山。道隆はその住職であり、日蓮大聖人ご在世当時、極楽寺良観とならび称せられた邪宗の元凶。鎌倉中の人をたぶらかしていた。「建長寺道隆への御状」(一七三六)がある。

現当二世 現在世と当来世、すなわち、現在と未来をいう。

また過去世に対する言葉でもある。われわれの信心は、現当二世のためにするのである。

身毒国 インドのことで天竺ともいう。月氏と訳す。

慳貪 慳吝貪著のこと。人に与えることを惜しむ。餓鬼界の生因とする。末法今日では、化他行をしないことは、この罪にあたる。

建仁寺、寿福寺、建長寺 いずれも臨済宗(禅宗)の寺、建仁寺は京都五山の一つであり、寿福寺と建長寺は鎌倉五山の中に数えられる。

懸衣翁 奪衣婆と共に、三途の川の端にいて衣装をはぎとる鬼のこと。亡者の衣類をはぎとって衣領樹にかけるものとされるが、その高下によって罪を判ずるといふ。

堅慧菩薩の宝性論 西暦五世紀ごろの人といわれる。インド

摩竭提国那爛陀寺の学者。いわゆる那爛陀の八大学者の一人。宝性論は大乗の義を説き小乗教徒を破した書。

賢王 愚王に対する語。政教に通じ賢良を任じ、善言を聞き、正法をもつて国を治める王をいう。化儀の広布への道をまっしぐらに進む創価学会の姿は、日蓮大聖人が観心本尊抄(二五四頁)に御予言なさっている仏法上の賢王の姿といえる。

見宝塔品 (要語解説六五頁参照)

願本遠寿 久遠の本地を開願して、仏の寿命の長遠なることを示すをいう。発迹願本、開近願遠と同義。法華経寿量品第十六に説かれている。

還滅 流転に対する語であり、寂滅涅槃の本源にかえることをいう。煩惱を滅して生死の憂悲苦悩を脱し、生命の本源の実相である涅槃の境涯に還帰すること。

願益・冥益 (要語解説三〇九頁参照)

願了の相 説法形式の一つ。はつきりと悟りのままに説き示す相。

見惑 三惑の見思惑の一つ。事物の道理に迷う惑。

こ

胡 中国から見て、インドを胡という。

五趣 五趣、五道ともいう。地獄・餓鬼・畜生・人・天の

五界のこと。

五緯 五行すなわち五大星をいう。木星、火星、土星、金星、水星である。

挙一例諸 一つの事実をあげて他の多くの例とする意味。

劫 きわめて長い時間の単位。(要語解説四九が参照)

業 ①善惡を問わず、身口意の種々の所作のすべてをいう。善業と惡業がある。②寿命のことをいう。定業と不定業の二つがあり、定業とはあらかじめ定まっている寿命で不定業とは定まっていないう寿命のこと。

公胤 中国春秋の世、衛の懿公の忠臣。他国に使いに行っている間に主人が敵に殺されて肝を捨てられた。それを知った公胤は、自分の腹をさいて主人の肝を入れて死んだという故事。日蓮大聖人は、主人に身を捨てた忠臣としてお引きになつてゐる。弘演と同じ。(開目抄一八六が参照)

業因感果 業因あれば必ず果を感じるといふ生命の法則をいう。惡因あれば惡果を感じ、善因あれば善果を感じる。

弘演 公胤の項参照。

広開近顯遠 (要語解説九六が参照)

広開三顯一 広く三乗を開いて一乗を顯わすことで、法華經

以前に声聞・緣覺・菩薩の人を分けて説き、これを三乗の

法といったが、法華經にいたり真実の仏の教えはただ一つであるとして一仏乗の法を説かれたのである。法華經方便品第二より人記品第九までの間に三乗の法を開會して一乗の法を説かれたものである。

亢旱 日照りでひからびること。干ばつのこと。

劫国名号 仏が記別を与える場合に、仏になる時と所と名前を授ける。これを劫国名号という。劫は仏の寿命を三十二

小劫等というがごとく、国は「国を離垢と名づけん」等のごとく、名号は「当に作仏することを得べし号を華光如来等」というがごとく(以上いずれも舍利弗の例)皆このように劫国名号を賜わっている。

後昆 後世、子孫の意。

後災 未来に來たるべき災い。諸經に説かれる難のなかで未だ起こっていない難。すなわち藥師經の七難のうち他國侵

逼、自界叛逆の難、大集經中の兵革の災い、金光明經中の他方の怨賊國內を侵掠する難、仁王經の四方の賊來たつて

國を侵すの難をいう。

兢持 つつしみ深い態度をいう。

公処 公の場所。

劫燒 大の三災の一つたる火劫をいう。一大劫は成住壞空

の四中劫よりなるが、この壞劫くわうけつの時は火風水の三災が起こって一切を破壊し尽くす。これが大の三災である。この三災は大劫の順序により一災ずつ現われるので、火災のみ起こる大劫を火劫といい、その時の火災をさして劫焼けつしょうという。業障ごうしょう 三障の一つ。悪業のために正道を障礙しょうがいされるのをいう。兄弟抄けいぎしょう（一〇八八頁）に「妻子等によりて」とある。

広宣流布こうせんりゅうふ 仏法を広く宣べ流布すること。法華経薬王菩薩本事品第二十三に「我滅度めつどの後、後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提えんぶだいに於て断絶せしむること無けん」とある。大聖人は三大秘法が必ず広宣流布することを予言されている。

高祖こうそ 高祖には、前漢の劉邦りゅうほう、唐の李淵りえん、北齊の高歓こうかん、後秦の姚興りょうこう、五代後漢の劉知遠りゅうちえんの五人いるが、一体に漢・唐の二代の創業の帝をさしている。御書に引用されるのは前漢の劉邦のこと。

皐諦女こうだいによ 十羅刹女じゅうらくしやくによの一人。本地は文殊菩薩である。山海いかなる所においても法華経の行者を守護するといわれ、九惡一善として皐諦女を一善と定められ、十惡の煩惱の時は偷盜にあたる。

光宅こうたくの法雲ほううん 中国南北朝時代における高僧。南三北七の十流の邪義のうち最強のもの。一代仏教を五時に分け華嚴第一、

涅槃第二、法華第三との邪義を立てた。光宅寺に勅住するので光宅という。俗姓は周氏、義興陽羨の人、晋の平西將軍周処の七世の裔であり、母は呉氏である。

広長舌こうちようぜつ 仏の三十二相の一つ。すなわち、仏の舌は軟かで薄く、広く長いことをさす。舌を出すのは、いうことが真実であるとの証明であるというのがインドの習慣であり、神力品では十神力の第一に天界までとどく長い舌を出して真実なりと証明している。

興福寺こうふくじ 奈良にある法相宗の本山。和銅三年、藤原不比等の建てた寺で南都四大寺、七佛寺、十大寺の一つに数えられる。弘法こうぼう 日本真言宗の開祖で空海という。

広目天こうもくてん 四天王の一つ。帝釈の外将である。須弥山の中腹の由健陀羅山の四峰におのおの居し、広目天は西の一天下を守っている。

高野山こうやさん 真言宗の開祖・空海の創建した金剛峰寺の山号で地名によって名づく。紀伊国伊都郡の山中高野地にある。亢陽かうよう 大気や土地が熱しきるありさま。

広略要こうりやくよう たとえば、法華経一部八卷二十八品を受持読誦するのを広といい、方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するのを略といい、題目ばかりを唱え護持するのを要という。

日蓮大聖人は広略を捨てて要をとられた。

呉王夫差 中国の周の世の呉国の王をいう。夫差はその子供である。呉王は伍子胥を用いて国勢大いにふるったが、越王に破られた。子の夫差は越王を破って父の仇を報いたが、伍子胥の諫めを用いなかったので、越王の子の勾踐に殺された。日蓮大聖人は、忠臣の諫めを用いない国王の滅びる例として用いられている。種種御振舞御書（九〇九頁）にある。

五陰 新訳には五蓋といい旧訳には五陰という。三世間の一つで色・受・想・行・識、すなわち人間の五体をいう。色は色形で衆生の肉体および草木・国土等である。受は衆生が外界にあるものをわが身に受け入れること。想はひとたび受け入れたものを常に想って忘れないこと。行はこの想いによって起こすところの行。識は以上のことを内より起こさせる意識・心である。（要語解説・一一〇頁参照）

五陰三毒 五陰は色受想行識をいい、三毒は貪瞋癡である。

五戒 在家男女のたもつべき戒で不殺生戒・不妄語戒・不飲酒戒・不偷盜戒・不邪淫戒の五つ。

五官 ①筆五官の時は五本の意。②五佐ともいう。陰陽五行家の説で、五帝をもって木・火・土・金・水の五行の神と

し、これを東・南・中・西・北の五方に配し、五官をもつて司る官とする。

後漢の光武帝 前漢の景帝の子・長沙王のことで新に滅ぼされた漢を再興し、後漢と称した。

後漢の明帝 後漢第二代の皇帝、第一代光武帝の第四子で顕宗孝明皇帝という。

孤疑 疑いためらうこと。

五義 宗教批判の原理の一つ。宗教の五綱ともいう。仏法を弘めるにあたっての必要義で、教・機・時・国・教法流布の先後のことをいう。

五畿七道 古代における日本の地方区分。山城・大和・河内・和泉・摂津の五か国と、東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海・西海の七道。

五逆罪 （要語解説四三頁参照）

五經 詩經・書經・春秋・易經・礼記の五部の經書をいう。四書と共に儒学の宗典である。

五行 中国五行家の説。水・火・木・金・土をいう。天地の間を運行してやまぬ元素であって、万物はこれによって組成されているという。

虚空会 二処三会といって、法華經説法の儀式は、初めに靈

鷲山、それから虚空会、最後にまた靈鷲山というように靈山と虚空の二所で三回の説法の儀式が行なわれた。その一つが虚空会である。法華經の見宝塔品第十一の終わりから囑累品第二十二の半までは、仏も大衆もすべて虚空の中に在住する、これを虚空会と名づける。

虚空蔵菩薩 智慧、功德が虚空のごとく、あたえることも虚空のごときゆえの名である。大集經によれば、一宝莊嚴如来の弟子という。日蓮大聖人は修行中、清澄山でこの菩薩に「日本一の智者になさしめ給え」と祈願されたことが善無畏三蔵抄（八八八頁）にある。

虚空不動慧 大聖人の三大秘法の仏法の一つ、本門の題目をさす。虚空のごとく無量無辺であり、永遠にして不滅、不動なる智慧の意。

曲会私情 自分の見解に執着して、仏意を曲げて經文を解釈すること。

極円明 純淨の本識 天親菩薩の唯識論を玄奘が解釈した成唯識論の文。きわめて円満で欠けるところなく、明らかでまじりけなく、淨らかな本識。第八識の淨分は、第七識以下が染・缺・迷であるのに異なるの意で、この根本第八識を大門鏡智とも名づける。

黑繩地獄 八熱地獄の第二。熱鉄の黒なわですみうたれ、そのなわに随ってきり、さき、けずられる。その苦しみは等活地獄の苦の十倍、その寿命は忉利天の一千歳を一日一夜として一千歳である。

獄卒 五逆罪、誹謗正法などの罪により地獄に落ちた罪人を呵責する獄吏のこと。

国土世間 三世間の一つ。国土とは、十界の衆生が住する依報・非情の国土をいい、世間とは差別のことをいう。五陰世間と衆生世間は迹門までにおいても説いてきたが、法華經寿命品第十六にいたって正しくこの娑婆世界が本国土であると明かす。これは仏の行動、生活のうえから一念三千が説かれたのである。（要語解説二一〇頁参照）

黑白二虹 金光明最勝王經第六卷四天王護國品に説かれている。不祥の相をあらわすといわれている。われわれの見る七色の虹ではなくて、急激な氣候の異変によって生ずる悪氣流のようなものである。楞嚴經釈要には「虹蜺」として出ている。

斛飯王 釈尊の叔父。提婆達多および阿難尊者の父であり、淨飯王の弟にあたる。

極樂寺良觀 真言律宗の忍性房良觀をいう。良觀房とは法

字で、諱は忍性。建保五年七月十六日、大和国磯城島に生まれた。十一歳で出家した。鎌倉時代の仏教界の重鎮であり、生き仏のようにあがめられていた。文永八年六月、幕府より命を受けて雨ごいをしたが、日蓮大聖人にその法力のないのを知らされ、徹底的に破折された。

五眼 肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼の総称。肉眼は普通の人間の目、天眼は天界所具の目で近くでも遠くでも昼でも夜でも物事を見ることが出来る。人間界にもときどきこれを有する者がある。慧眼は二乗の人空無相の理を遠見する智慧の目で、われわれ凡夫においては深い知識体験にもとづく物事の判断力。法眼は菩薩が諸の仮名の法に達して誤らず、一切衆生を度するために法門を照了する智慧の目で、われわれにすれば仏法の法則のうえから、一切の事物を判断する力。仏眼は三世十方にわたり、一切の事物を見通す仏の目。

五箇の鳳詔 鳳詔とは天子のみことのりをいう。仏法上では、仏の金言をいう。鳳は鳳凰のことで鳥のなかの王をいい、天子をあらわす言葉に用いられる。五箇とは法華經の宝塔品の「三箇の勅宣」と提婆品の「二箇の諫曉」とをいう。(要語解説一〇一頁参照)

五五百年 釈尊滅度の後第五番目の五百年、すなわち末法の

初めのこと。釈尊は大集經に未來の時を予言して第一の五百年は解脱堅固、第二の五百年は禪定堅固、第三の五百年は讀誦多聞堅固、第四の五百年は多造塔寺堅固、第五の五百年は闍諍言訟・白法隱没と定めている。(要語解説一七五頁参照)

五根 六根のなかの意根を除く他の五根をさす。仏道修行について、功德を成就すべき五種の根。一に信根不疑。二に進根不退。三に念根不忘。四に定根不動。五に慧根不昧。其罪畢已 「その罪おえおわって」の意で、法華經不輕品第二十にある語。自分の過去世の罪障が消滅して、初めて大利益を得ること。

五時 (要語解説二頁参照)

伍子胥 中国春秋戦国時代の人。呉王夫差に仕えた重臣であった。越王勾踐は夫差に敗れて降伏し、夫差は、これを許さぬとしたのに対し、伍子胥は理を尽くして諫めたが聞き入れられず死刑にされた。彼は三年にして呉が滅亡せんと予言していたが、まさにその通りになった。日蓮大聖人が立正安國の大義をもって国家諫曉せられたため、幕府は刀杖、流罪、死罪をもってこれにむくいたのは、伍子胥に対

する夫差のごときものである。

五重玄 天台大師が法華經を解釈するにあたって説いた名・

体・宗・用・教をいう。(要語解説一九九頁参照)

五重三段 一切の教法を序分・正宗分・流通分の三段によ

つて五重に立てて批判し、文底下種本門こそ仏の正意であ

ると立てられた法門である。(要語解説一五一頁参照)

五十展転 法華經隨喜功德品第十八に出ている。釈迦仏の滅

後、法華經(御本尊)の功德を隨喜して他に伝え、伝えら

れた人が順次にこの功德を伝え、かくして五十番目の人が

その功德をたたえる功德は、絶大である。いわんや、最初

に聞法して隨喜した人の功德は測り知れない。折伏の功德

を示す。(要語解説三〇七頁参照)

五十二位 釈迦仏法の別教において立てる。菩薩の修行す

る位。(要語解説一一九頁参照)

十信(信心・念心・精進心・慧心・定心・不退心・回向

心・護法心・戒心・願心)

十住(發心住・治地住・修行住・生貴住・具足方便住・正

心住・不退住・童真住・法王子住・灌頂住)

十行(歡喜行・饒益行・無違逆行・無屈撓行・無癡亂行・

善現行・無著行・難得行・善法行・真實行)

十回向(救護衆生離衆生相回向・不壞一切回向・等一切諸

仏回向・至一切処回向・無尽功德藏回向・入一切平等

善根回向・等隨順一切衆生回向・真如相回向・無縛無

著解脱回向・入法界無量回向)

十地(歡喜地・離垢地・發光地・焰慧地・極難勝地・現前

地・遠前地・不動地・善慧地・法雲地)

等覺

妙覺

五重の相對 内外相對、大小相對、權實相對、本迹相對、種脱相

對をいう。宗教批判の原理の一つ。(要語解説一四〇頁参照)

五住の煩惱 われわれの生命に本然にそなわっている煩惱。

一に三界の見惑(一切處住地の煩惱)二に欲界の思惑(欲

愛住地の煩惱)三に色界の思惑(色愛住地の煩惱)四に無

色界の思惑(無色愛住地の煩惱)五に根本無明惑(根本無

明住地の煩惱)である。

五種頓修の妙行 五種の妙行のこと。五種法師ともいう。

五種とは受持・誦・誦・解說・書寫をいい、この五つを一

時に修得するという意で、末法では南無妙法蓮華經と唱え

ること。(要語解説一二四頁参照)

五種の藏 六波羅蜜經といわれている仏典の五種の分類をい

う。一索咀纏：経蔵、仏の説をそのまま書きとどめたもの。

二毘奈耶：律蔵、戒律を説かれたもの。三阿毘達磨：論蔵

經の意義を哲學的に解明したもの。四般若波羅蜜：慧蔵、

諸法に通達し断惑証理する仏の智慧を説いたもの。五陀羅

尼門：秘密蔵、總持とも名づけ禪定も修行せず戒律もたも

たず煩惱におおわれた者を、そのままただちに解脱せし

め、涅槃の境界にいたらしめるために説かれた教え。

五種法師 天台宗で妙經を信行弘布する人を五種に分ち、

受持法師、読經法師、誦經法師、解説法師、書寫法師と五

種妙行を修行する人をいう。

五種妙行 法華經法師品第十に、法華經を修行する五つの

行が説かれている。五種の一般的仏法修行方法である。受

持・読・誦・解説・書寫をいう。読とは經文を見ながら読

むことで、誦とは暗誦することである。現在の仏法では、

日蓮大聖人の仰せのごとく受持をもって正行とし、他は

それに隷屬せしめている。すなわち唱題・受持は正行であ

り、方便・壽量の二品読誦は助行となり、他は勤行に用い

ず、解説は化他だけに用いるものであり、書寫は在家とし

てほとんど用いていない。(要語解説一二四頁参照)

五處 五体と同じ。頭と手足の五か所。

五障 女人の五つのさわりをいう。法華經提婆品の竜女成仏

の段に、舍利弗尊者が女人は法器に非ず等と難じ、さらに

女人の五障を数えて成仏を難する文に「又女人の身には猶

五つの障あり。一には梵天王となるを得ず、二は帝釈、三

には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり、云何ぞ女

身、速かに成仏するを得ん」というのがこれである。

五乘 人を乗せて、おのおのの果地にいたらしめる五つの教

法。すなわち菩薩乘、二乘、人天乘をいう。

五常 儒教の道德で、仁・義・礼・智・信の五つ。常とは永

世に変わらないの意。

五性各別 法相宗の依經、深密經に出る。人の性質は本来五

種の決定的差別があり、したがって仏法はただ一法でない

という説である。五性とは一聲聞種性、二独覺種性、三如

來種性、四不定種性、五無有出世功德性。

五乘の異執 妙樂の弟子・東春の智度法師が著わした天台法

華疏義續第五のなかの語。人・天・声聞・緣覺・菩薩の五

乗に対する執着をいう。

五濁 五濁とは、劫濁・衆生濁・煩惱濁・見濁・命濁であつて生命の濁りの姿を五つに分類したものである。劫濁とは

時代の濁り、衆生濁とは衆生社会の濁り、煩惱濁とは貪瞋癡慢等の煩惱からくる濁り、見濁とは思想からくる濁り、

命濁とは生命自体の濁りである。(要語解説四六頁参照)

五濁惡世 法華經方便品第二にあり、劫濁・衆生濁・煩惱濁・

見濁・命濁の五つが特に盛んな悪い世の中のことで、末法の時代をさす。

五塵の境 五境ともいい、眼・耳・鼻・舌・身の五識の働き

が対象とする五つのもの、すなわち色・声・香・味・触をいう。

五衰 天人の果報が衰えたときに現ずる五つの相をいう。涅槃經には、一には衣裳垢つき汚れ、二には頭上の花萎(頭

がだんだん衰えていくこと、またハゲてくるという意味も

ある)、三には身体臭く穢れ、四には腋下に汗出ず(心配

したり、苦しんだり、恐しいことなどで、冷や汗をかく)、

五には本座を樂しまず(自分のいる所に応じて天上界でな

くなること、どこにいても安心立命の境涯でない。何かあ

るとすぐに崩れてしまう)とある。俱舍論には大小の五衰

を説いており、大の五衰とは死にあたり、この五相が現ず

ると、必ず死ぬという。

牛頭・馬頭 衆合地獄の獄卒をいう。身体は人間の形をして

いながら頭は牛や馬の形をしている。

五節供 宇多天皇の時、初めて五つの賀節を定め、時の膳物

を供して賀事を行なわした。年中の奇月五個について五つ

の節を立てる。すなわち元旦(または七日または十五日)、

三月三日(上巳)、五月五日(端午)、七月七日(七夕)、

九月九日(重陽)。後世にいたって、一月七日を七草の節

供、三月三日を桃の節供、五月五日を菖蒲の節供、七月七

日を七夕の祭り、九月九日を菊の節供という。(秋元殿御

返事一〇七〇頁参照)

五千席を去り 法華經方便品第二の広開三頭一にはいるとき

「此の語を説きたもう時、会中に比丘、比丘尼、優婆塞、

優婆夷、五千人等有り。即ち座より起つて仏を礼して退き

ぬ。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にし

て、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと

謂えり。此の如き失あり。是を以って住せず。世尊默然と

して制止したまわず」とあるのをいう。

五千の上慢 法華經方便品第二の説法するとき、五千人の増上

慢の比丘がおり、釈尊の説法を聞くことができなくて席を

立ったことをさす。

五藏 仏典の五種の分類をいう。經藏、律藏、論藏の三藏

に、菩薩の慧藏と真言陀羅尼藏を加える。弘法は真言陀羅

尼を密教とし、前の四つを顯教とする。

五大 地水火風空の五大をいう。宇宙のもとをあらわした言葉である。妙法蓮華經の異名でもある。われわれの体にと

とえれば、地とは骨、水は血液、火とは熱、風は呼吸、空は生命全体である。宇宙も同じように、大地があり、水があり、火があり、空気があつて、それ自体が全体といえる。

五台山 中国山西省の山で、一名清涼山という。華嚴經に

「東北に菩薩の住処あり、清涼山と名づく、現に菩薩あり、文殊師利と名づく」とあるゆえ、文殊の住処とされた。

五大部 日蓮大聖人の御書のなかで、最も重要な五編。①立

正安国論②開目抄③觀心本尊抄④報恩抄⑤撰時抄。

五大力 仁王經受持品にある。一金剛吼菩薩、二竜王吼菩薩、三無畏十力菩薩、四雷電吼菩薩、五無量力菩薩をい

い、国王が眞の仏法を信奉すれば、この五大力菩薩が、国

王および国民を守護するという。

誇談 大言壯語すること。

五智 眞言密教に説くもので、法界体性智（大日如来智）大

円鏡智（阿閼仉智）平等性智（宝生仏智）妙觀察智（無量寿

仏智）成所作智（釈迦牟尼仏智）をいい、一切の仏はこの五

智を具する。ゆえに開会すれば妙法蓮華經の五字となる。

五鎮の大星 五星のこと。鎮は土星を中心にして木火金水の

四星がこれを助けているような配置をしているので、総称して五鎮という。

国家諫曉 （要語解説三五〇頁参照）

穀貴 五穀の価が高いこと。すなわち物価の暴騰であつて、インフレのごとき経済状態をいう。大集經に説かれてい

る。三災の一つ。

乞眼の婆羅門 昔、舍利弗（身子）が、禪多羅仏の末法にお

いて菩薩の修行をしていた時、片眼の婆羅門に目をくれと

いわれ、与えたところ、地になげつけたのでうらめしくな

つて菩薩道を退転し、無量劫の間地獄に落ちた。日蓮大聖

人は「南無妙法蓮華經の目をいただくわれらが、謗法の人に信心を妨げられるのが、目をとられるということである、妙法の信心を捨てるな」という意味のことを教えられて

いる。乞眼の婆羅門とは謗法の人である。

乞食空鉢 釈尊の九横の大難の一つ。釈尊が阿難をつれ乞食

のためバラモン城に入ろうとしたとき、王は民衆が釈尊に

帰依するのを恐れ、布施させなかった。

劫初 住劫の初めをいう。

五帝 古来多くの説があるが、和漢王代記（六〇二頁）では

少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜をあげている。中国古代の伝説的帝王。

五天竺 インドの全体を称する語、東天竺・西天竺・南天竺・

北天竺・中天竺をいう。

五天四州 五天は五天竺、東西南北中である。四州の対であ

り、ともに人界を示す。四州は四方にある四つの州をいう。すなわち東方の弗婆提、南方の閻浮提、西方の瞿耶

尼、北方の鬱單越をいう。

御伝士代 三師御伝士代の略。三師とは日蓮大聖人、日興上

人、日目上人で、その歴史を日道上人が記録されたもの。

五道 五趣ともいう。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人の五。

五鈍使 見惑に五鈍使と五利使の十使がある。五鈍使は、

貪、瞋、癡、慢、疑をいう。

五乳 乳に五味あることをいう。第一は乳牛よりしぼったま

まの乳。第二は酪、乳を精製したもの。第三は生蘇、酪を

精製したもの、第四は熟蘇、生蘇を精製したもの、第五は

醍醐、熟蘇を精製したもの、これを乳の極味とする。涅槃

経には、仏の五時の説法をこの五味に譬える。

五百七十七等 法華経において法説・譬喩説の後、化城喩品第

七、五百弟子受記品第八にいたって宿世の因縁を説かれて

得道した千二百人の阿羅漢をいう。すなわち五百弟子受記品に「爾の時に、千二百の阿羅漢の心自在なる者、乃至、仏此等の心の所念を知しめして、摩訶迦葉に告げたまわく、是の千二百の阿羅漢に、我今当に、現前に次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授くべし。乃至号を普明如来云云」とあるをいう。

五百塵点劫 法華経如来寿量品第十六に釈尊の成道久しきを明かした。五百千万億那由佉阿僧祇の三千大千世界を粉末としてことごとく微塵とし、その数だけ五百千万億那由佉阿僧祇の世界を集め、さらにこの無量の世界を再びことごとく粉末として微塵とし、その一微塵を一劫としたものにして、すぎること百千万億那由佉阿僧祇劫より成仏しているのだと説いた。釈尊はインドで仏になったのではなく、このよるな昔に仏になったのだと宣言したのである。この長い時間を五百塵点劫という。この時の仏を久遠実成の釈迦如来といい、文底の立ち場から、これを迹中化他の第一番成道といっている。日蓮大聖人の仏法では五百塵点劫の当初、すなわち久遠元初に出現した仏を南無妙法蓮華経という。

(要語解説九三頁参照)

五百塵点劫の当初 久遠元初と同じ意。五百塵点を久遠とい

い、元初を当初ともいう。

五百弟子 法華經五百弟子受記品にいたり成仏の記を与えられた五百人の釈尊の弟子をいう。因縁説周である。文底の立ち場からみれば、十界三千の衆生ことごとく五百弟子であり、南無妙法蓮華經の弟子である。ゆえにみな成仏するのである。

五百弟子受記品 (要語解説六三六参照)

五仏章 法華經方便品第二の広開三顯一の正説段の長行および偈の総称。「仏舍利弗に告ぐ、是くの如き妙法は、諸仏如来時に乃之を説きたもう、乃至余乗あることなく唯一仏乗のみなり」をさす。五仏とは總諸仏・過去仏・未來仏・現在仏・釈迦仏をいい、これら五仏は皆同じく分別して法を説き、教・行・人・理ともすべて同じであると説く。

五仏章の仏 「五仏章」とは法華經方便品第二の広開三顯一の正説段の長行および偈の称で、五仏とは、總諸仏・過去仏・未來仏・現在仏・釈迦仏をいう。この五仏の説法は必ず前權後実の儀式によって最後に法華經を説くことに一定する。これを五仏道同開權顯実という。

五仏道同 三世のあらゆる仏が同じく法華經を説くことを出世の本懐として述べていることを述べたもの。五仏とは總諸仏・

過去仏・未來仏・現在仏・釈迦仏をさす。

五分法身 仏法によって淨化された生命のこと。凡夫の色受想行識が、戒・定・慧・解脱・解脱知見の五分法身を成ずると説く。

五瓶 真言の修法中の一種。五箇の瓶で修法壇上を莊嚴し、灌頂の時はこの瓶水を受者の頂にそそぐ。

護法 中インド那爛陀寺の学匠。唯識十大論師の一人。世親の唯識論の解釈である「成唯識論」を著わした。

御宝蔵 ①一般的に、宝を収めてある蔵の敬称。②日蓮正宗總本山大石寺にある。大客殿の裏、杉木立の中にある土蔵造りの建て物。本門戒壇の大御本尊も奉安殿の建立以前にはこの御宝蔵で内拝を許されていた。

五味 ①飲食物の五つの味、甘・酸・苦・辛・鹹をいう②釈尊の華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時を、牛の乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐の五味に譬える。③六波羅蜜經には五蔵を五味という。

護命 法相宗の僧。天平勝宝二年、美濃に生まれ元興寺に学ぶ。南都六宗の第一といわれた。弘仁九年、伝教大師と祈雨の争いをして敗れたことがある。

五無間 無間地獄へ落つべき五種の罪業で、五逆罪のこと。

五欲 色欲・声欲・香欲・味欲・触欲の五つ。すなわち五根（眼・耳・鼻・舌・身）が五塵の境に対しておこす欲望。

五樂 六根のうち意根を除く五根をいう。仏道修行について、功德を成就すべき五種の根、眼根は色境に対して眼識を生ずる、耳根は声境に対して耳識を生じ、鼻根は香境に対して鼻識を生じ、舌根は味境に対して舌識を生じ、身根は触境に対して身識を生ずる。凡夫は五根の対境である五塵（色・声・香・味・触）において樂欲執着するからこのようにいう。

五利使 五濁のなかの見濁をおこすところの、身見、辺見、見取見、戒取見、邪見の五煩惱、偏見をいう。

五輪觀 真言宗では万物の構成要素を地・水・火・風・空の五大であるとなし、また五大を五輪と名づけ、阿・縛・羅・訶・佉の五をその種子とする。此の五大・五輪を五智（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智）とも五仏（大日・阿閼・宝生・弥陀・釈迦）ともなす。

孤露 孤はみなし子、露は慈愛でおおわれていないもの、すなわち久遠の本仏を知らない者。

五老僧 大聖人の弟子の日昭、日朗、日向、日頂、日持の五人の高僧。六老僧のうち日興上人を除くこの五人は、大聖

人の仏法および第二祖日興上人に背いた。

牛乳の二乳 大論および顕揚大戒論に出ず、牛乳と驢乳はその色は同じであるが、牛乳は精すれば生蘇となり醍醐味までなるが驢乳は精すればふんとなる。これを外道と内道に譬え、また小乗戒と大乘戒とに譬える。

勤加精進 勤勉に努力精進する等の意。文底の意は勤加精進とは南無妙法蓮華經を受持することである。

權教・實教 權は「かり」の意で方便である。すなわち、四十余年の経々はぜんぶ衆生の機根に応じて説かれた方便である。実とは真実、すなわち八年の説法、法華經をさしている。宇宙の根本哲理、生命の眞實觀を説いているのである。

金剛身 金剛石は堅くて壊れないところから、三十二相八十種好をそなえた仏身を金剛身という。

金剛智三蔵 中国真言宗三三蔵の一人。中インド刹利王伊舍那跋摩の第三子である。十歳の時、那爛陀寺に出家し、寂靜智に師事した。三十一歳の時、童智三蔵のもとにゆき七年間つかえて密教を学んだ。後、唐土に向かい開元七年、広州に達し、翌年、洛陽にはいった。弟子に不空がいる。

金剛頂經 真言三部秘經の一つ。金剛頂宗の法門を説く。胎藏界の大日經と共に密教の根本聖典。

金剛不壞 金剛のように極めて堅固で、他の何ものによつて

も破壊されないこと。

金剛宝器戒 戒を金剛に譬えていった語で、梵網經に説く大乘戒をいう。われわれの立ち場からは御本尊を持つ者の戒で、何ものも破ることができない戒である。(教行証御

書一二八二頁参照)

金光明經 日蓮大聖人のご引用に二種類ある。一には金光明經四卷、北涼の曇無讖の訳。二には金光明最勝王經十卷、唐の義浄訳。

金色王 金色王經に出てくる過去世の王。飢饉のとき、蔵の五穀を人々に施し、さらに王自身に残された最後の一食分の飯を辟支仏に供養した。その功德で、天からさまざまな品物が降り、人民は長い間貧窮からまぬかれた。この金色王は釈迦仏自身であるという。

今此三界 法華經譬喻品の文で釈尊がこの娑婆世界において主師親の三徳を兼ねそなえること、すなわち仏なることを明かしたものの。「今此の三界は、皆是れ我が有なり(主)、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり(親)、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す(師)」いまは、日蓮大聖人が今此三界の主師親である。

(要語解説一一二頁参照)

金翅鳥 八部の一つたる迦楼羅の訳名。インド古代の伝説上の鳥。鳥類の王であるという。その翅や頭が金色なのでこのように呼ばれる。両翅が三百三十六万里あり、常に竜を食うという。

權実相對 (要語解説一四二頁参照)

權実の法 化他のために説く方便の教えが權であり、仏の智慧をそのまま説く教が実である。また九界を權となし仏界を實となす。このように權と實は相對されるが、權といえども必ず実があり、実といえども必ず權がある。九界即仏界、仏界即九界のごとく權実の法は互いに欠けないのである。

金人 明帝が永平二年(あるいは三年、四年ともいう)ある夜、金色の身長一丈六尺の貴人を夢に見た。翌朝、太史傅毅が皇帝にいうには、西域(インド)に仏図という悟りを開いた者がある。陛下の夢に見たのはその人であろうと奏上したので、王尊等十八人が西域に使して同八年、インドの僧・摩騰迦、竺法蘭の二名と白馬に乗せた仏經と共に後漢の都・洛陽に帰った。

衆 米の汁、おもゆ、米を煮た汁。釈迦の九横の大難の一つにバラモン城の漿がある。

混同無二 般若經に説かれてゐる法門で「一切諸法混同無

二」の略。九法界の修する法と仏界の法とは、その性において

は差別はなく、みな同一法性であると説かれてゐる。

権の大夫義時 北条義時のこと。北条幕府第二代の執権。

根敗 根は五根の意、すなわち五官の作用を破壊したものが

五欲の樂しみをうけることができないと同様に、二乗は煩

悩を断尽して成仏を求めようとしないから成仏の功徳をう

けることができないという意味。

金緯論 金剛錍論という妙樂の著。華嚴の澄觀が非情に仏性

なしとする説を破折し仏性は情・非情にわたることを顯わ

した。

根本有漏定 有漏定とは煩惱を断尽することのできない禪定

のことで、外道の修行は根本的にこの有漏定を出ない低い

禪定であるから根本有漏定という。

根本大師 伝教大師のこと。天台宗の日本の開祖、比叡山を

開いた根本の大師であるとの意。

昆明池の大魚 漢の武帝の故事を引いたもの。昆明池は武帝

が水戦の演習のために造った池。ある夜武帝は釣針をのんで

に明珠を手に入れた。これは魚が帝の恩に報いたもの。

金竜陀仏 舍利弗の過去の名。法華文句に「若し身子の化を

見るときは、則ち竜陀の本を見る」とある。

金輪聖王 四輪王の一人。転輪王のうち、金の輪玉を感得し、

四天下を領する聖王をいう。

崑崙山 中国古代より神聖な山として伝説多し。中国西部、

新疆の南、チベットの北に位置す。昔から名玉の産地。

さ

西域 中国の西方地域のこと。したがって中央アジア地方に

あたる。仏法が弘まった地域でシルク・ロードの通商路に

もあたつた。

最爲難信難解 法華經法師品第十の文。「最も爲れ難信難解

なり」と読む。法華經が一代諸經のなかで最も信じ難く解

し難く、最も勝れているということ。

再往 一往に対する言葉で、一重立ち入ってみれば、一重立

ち入った觀察等の意。一たび往いて義を求めるのを一往と

いい、再び往いて義を求めるのを再往ということから転じ

たもの。一往・再往と当分・跨節とは同じ意である。

齋戒 心の不浄を清めることを齋、身のあやまちをいさめる

ことを戒という。

西海侵逼 文永十一年十月および弘安四年五月に西方の元が

わが国に襲来したことをさす。

災怪首尾 災害凶事が絶え間なく続いて起こること。

在在諸仏土常与師俱生 法華經化城喻品第七に「大通智勝仏

の時、第十六王子たる釈尊によって化度せられた人々は、

智勝仏の滅後、ありとあらゆる十方の仏土に、常にその師

と俱に生まれる」と説かれている。過去の大通智勝仏に十

六王子があつて、出家して沙弥となり、一々の沙弥が六百

万億恒河沙等のもろもろの衆生を化導した。大通智勝仏の

滅後、このもろもろの闍法者は、ありとあらゆる十方の仏

土に、常にその師（十六王子の菩薩）と共に出生するとの

因縁を明かされた。師弟不二の原理を示したものである。

細視徐行 獵師が獲物を細目ににらみながらしだいに近づい

て行くありさまをいい、涅槃經の文にある。末法における

邪宗の僧侶の姿を述べられたもの。

罪障 過去の罪業が現在の信心を妨げること。

再生敗種 再生ともいう。焦種に対する語。法華經に説く二

乗作仏を譬える法門。敗種とは、仏種のなくなつた二乗を

いい、諸經ではいずれも再び生ぜぬものと棄てられている

が、法華經で二乗さえも再生して成仏できたことをいう。

在世結縁 大通結縁の第三類は、大通智勝仏のときに法華經

を聞いたのであるが信じなかつたので聞かないのと同じで

あり、初めて三千年前に釈尊の法華經を聞いたとしてい

る。これを釈尊の在世に結縁したという。そして釈尊の在

世、正法時代、像法時代に成仏していく。

在世の本門 五重三段のうち第四の三段・文上脱益三段で

論ぜられる法門で、釈尊の法華經本門十四品をさす。

摧尊入卑 「尊きを摧いて卑しきに入れる」と読む。尊い仏

法を摧いて卑しい外道の教えに入れること。

再誕 ある前世があつて再びこの世に生まれてくること。末

法においては、大聖人は、外用は上行菩薩の再誕である

が、内証深秘の辺は久遠元初自受用身如来の再誕である。

（要語解説二八八頁参照）

最澄 伝教大師をさす。

相模殿 北条時宗をさす。

坐禅入定 静かなところに端坐して、心が一所に定まって動

じない境地に入るといふ禅宗の修行。

薩埵王子 釈迦仏が因位るとき、摩訶羅陀大王の第三王子と

して生まれ菩薩行を修したときの名。飢えのため子を養育

できないトラのためにその身をトラに与えた。金光明經、賢愚經に出てゐる。

左伝 「春秋左氏伝」で春秋は周代のこと。魯国の史記である。

佐渡公 大聖人の六老僧の第四、日向のこと。房総方面の出身で交名を佐渡公といい後に民部阿闍梨日向と称した。大聖人滅後、日興上人に身延で学頭に任ぜられたが、後に退転し地頭波木井日円を誘惑し身延汚濁の原因をつくった。

作札而去 「札を作して去りにき」と読む。法華經普賢菩薩

勸発品第二十八にある文で、法華經の最後の文であるから序品第一の初めにある如是我聞に対する文である。

沙羅双樹 インドに咲く沙羅樹のことで、学をリュウナウカウカといい沙羅木科に属する。釈尊は拘尸那城外の沙羅双樹に四方を囲まれて入滅した。

三惡趣 三惡とも三惡道ともいう。他に三途、三趣ともい

う。十界の中の最下である地獄、餓鬼、畜生の三惡道をいう。過去世および現世における正法誹謗、五逆罪等の報いとして衆生がうける苦惱の世界および状態をいう。

三惡道 前述の三惡趣のこと。

三因仏性 成仏する因となる三つの性分で、天台が立てた法

門。あらゆる森羅万象にはことごとく仏性がある。その仏

性を正・了・縁の三因仏性という。御本尊の功德によつて仏身を成ずるときには法・報・応の三身如来と現われるのである。(要語解説二〇〇頁参照)

三衣 仏教の戒めによつてきめられた袈裟のことで、僧の身につける法衣。三衣は僧服で僧伽梨、鬱多羅僧、安陀会をいう。僧伽梨は重衣、大衣、雜碎衣、高勝衣、五条より二十五条にわたる。鬱多羅僧は上衣、中伽衣、入衆衣と釈し七条からなる。安陀会は内衣、中宿衣、雜作衣で五条である。この条とは、得る所の布帛を割裁して条とし、これをぬいつづつて五、七、九等の数を得る、その数の最も少ないものを五条といい、最も多いのを二十五条という。

三界 仏教の世界観で、欲界(欲望の世界)、色界(物質の世界)、無色界(精神の世界)をいう。(要語解説三二頁参照)

三階 中国隋朝の信行禪師が開宗した。全仏教を時と所と人について三階すなわち三段に分類し、末法思想にもとづいて普真普正の仏法を唱導した。

三誠四請 法華經寿量品第十六で、釈尊が五百塵点劫の顕本を説くときの儀式。すなわち釈尊が弥勒等に初めから「汝等当信解。如来誠諦之語」と誠め再び「復告大衆。……」

と誠め、三度目に「又復告。……」と誠められる。そこで

弥勒等は「世尊。唯願説之。我等当信受仏語」と三度請じてさらに四度目に釈尊に説法を請うて初めて「汝等諦聴。如来秘密。神通之力」と説法が始まる。この汝等諦聴を四度目の誠めとすると四誠四請となる。普通の経でも大事を問うときには三誠三請の儀式をふむが三誠四請、四誠四請はそれ以上に重大な儀式といふべきである。

三界の火宅 法華経譬喻品第三に説かれてゐる譬え。三車火宅の譬ともいう。三界とは欲界、色界、無色界のことで、悪思想のため迷いの煩惱にわざわざいされていつまでも六道輪廻を繰り返している悩みの娑婆世界である。この悩みの世界を猛火に焼ける宅に譬える。長者が火宅に遊ぶ諸子を救うため、大白牛車を与えようとしたが信じないため、羊の車（声聞）鹿の車（縁覚）牛の車（菩薩）の三乗を示して火宅の外に誘い出し、後に一仏乗の大白牛車を与える。方便と真実との関係を明かしたもの。文底の意は、人生の目的は一生成仏にあり、大白牛車とは三大秘法である。

三界六道 三界とは欲界、色界、無色界で、六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天である。どちらも悪思想や煩惱にわざわざいされた、迷いと苦悩の世界である。

三学 戒定慧の三学。戒定慧は仏家の軌則であり、蔵教、通

教、別教、円教ともに戒定慧の三学がある。すなわち仏教はいかなる経教でも必ず戒定慧を論ずるから仏家の軌則という。戒とは非を防ぎ悪を止めるの義で、仏道修行の過程でやってはならないこと。定とは静慮であつて、心を散乱せしめずして悟りを開くこと。慧とは照明の義で、煩惱や惑障を断破して真理の本性を証得すること。

三観 空観、仮観、中観をいう。仏法における三種の観法。観心修行の法門で、三つの立ち場よりの物の見方、考え方を三観という。これに別教の次第三観と円教の円融三観とがある。

三観三諦 三観とは天台の一心三観で、三諦とは空仮中の三諦である。境智の二法をあらわす。三観は能観の智、三諦は所観の境である。当体義抄（五一二頁）に「三観・三諦・即一心に顕われ」とあり、日寛上人は「三諦はこれ境、三観はこれ智、すなわち境智の二法をわれらが一心に悟り顕わし、本門寿量の当体蓮華仏と顕わるるなり」といわれている。すなわち三観三諦とは南無妙法蓮華経である。

三軌 天台の法華玄義にあり、真性軌・觀照軌・資成軌の三つをいう。また衣・座・室の三法を名づけて三軌ともいい、これは法華経法師品第十にあり、弘教の三軌と名づける。

滅後弘教の者は柔和忍辱をもって衣となし、一切法空をもつて座となし、大慈悲心をもつて室となすべきをいう。

三帰 三帰は仏・法・僧の三宝に帰依すること。

山規 一山を統制するための法規。日蓮正宗では、日興遺誠置文、有師化儀抄など、これにあたる。しかし、これらは法規としてより信条としての意味が強い。

三祇・百劫 三大阿僧祇・百大劫のこと。三蔵經の菩薩は初阿僧祇に七万五千の仏を供養し、二阿僧祇に七万六千の仏を供養し、三阿僧祇に七万七千の仏を供養し、この間は六度を行じて化他を専らにする。次に百大劫の間に百福を修して、自行を専らに修するをいう。

三教 三教にもいろいろな種類のものがあるが、通常、天台所立の五時八教の教判における三教のことである。すなわち、藏・通・別の三教で、爾前教のこと。

懺悔 一般には、過去の罪惡を悔いて謝るということ。仏教では五悔の一つ、二十五法の一つで、懺は梵語、詳しくは懺摩といい、悔過と訳す。

三玄 有・無・亦有亦無等の玄をいう。有の玄は周公の立てたもので、天地陰陽等を有に約して立てた教えである。無の玄は老子によって説かれ、虚無を本として教えを立て、

虚無の道は天地も分かつた万物も生じないところに立てた道理としている。亦有亦無の玄は莊子によるもので、自然を本となし、自然には有の辺もあり無の辺もあると立てた。

三鈷 三鈷杵のこと。真言密教の祈禱に用いる道具。インドの武器に由来している。日本の真言の開祖、弘法空海が中国からの帰途、海外で投げた三鈷が高野山から出たという珍説があるが、もちろん曲説であり、大聖人は報恩抄（三一八頁）に徹底的に破折されている。

三業 身口意の三業をいう。身体と言語と心意においてなすところの業。

三皇五帝 中国の伝説の有徳帝王八人の総称。和漢王代記（六〇二頁）では伏羲、神農、黃帝を三皇とし、少昊、顓頊、帝嚳、唐堯、虞舜を五帝としている。

三公 周の三公にかたどって名づけられた東南に現われる三つの星。三公とは中国の場合、周の太師・太傅・太保。前漢の大司徒・大司馬・大司空。後漢の大尉・司徒・司空のこと。わが国では太政大臣と左右の大臣の官名をいう。

三国 インド・中国・日本。

三国四師 インドの釈尊、中国の天台大師、日本の伝教大師、日蓮大聖人をいう。（願仏未来記五〇九頁参照）

三五下種 三とは三千塵点劫、五とは五百塵点劫をいう。下

種とは仏種を衆生の心田に植えることである。法華経迹門
化城喻品第七には、仏の弟子に対する化導の始まりを三千
塵点劫の昔であると説いている。また法華経本門寿量品第
十六には、仏の久遠の本地を開顯し、釈尊は実は五百塵点
劫の昔に成仏し、それ以来この娑婆世界に出現して衆生を
教化してきたと説いている。

三五の遠化 迹門では化導の最初を三千塵点劫の昔とし、本
門では五百塵点劫と説く。このように久遠の下種、久遠の
本地は法華経にきて、はじめて説かれるのである。

三五の塵点 三千塵点劫と五百塵点劫のこと。

三箇の勅宣 法華経の説会の中、虚空会（宝塔品）において
釈尊が遠化と他方來の菩薩とになした三つの教勅をいう。

三箇の鳳詔とも諫勅ともいう。（要語解説一〇一頁参照）

三災 劫末に起こる三種の災害をいう。これに大の三災と小
の三災とがある。住劫の時の小の三災は穀貴、兵革、疫病。

穀貴とは五穀の価が高いこと、すなわち物価の暴騰であつ
て、インフレのごとき経済状態をいう。兵革とは兵は劍等
の武器、革は甲冑の意であつて、戦争のこと。疫病とは伝
染病、流行病、また思想の混乱のこと。壊劫の時の三災は

火災・風災・水災であり、これを大の三災という。

三災七難 （要語解説四四頁参照）

三三藏 真言宗の開祖である三本の三藏をいう。すなわち善

無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏のこと。

三史 「史記」司馬遷の作、「前漢書」班固の作、「後漢書」

苑曄の作を三史という。これに対し異説もある。

三師御伝土代 三師とは日蓮大聖人、日興上人、日目上人。

この御三方の歴史を第四代日道上人が記録されたのをい
う。最も古い大聖人の正確な伝記といえる。

三止四請 三止三請重請許説のこと。法華経方便品第二で

略開三願一から広開三願一に移るときの説法の儀式をい
う。三たび請いたので三たび止め、さらに請うたので仏は

初めて広開三願一を説き始めるのである。

三時の弘教 （要語解説一六八頁参照）

三車火宅の譬 法華経譬喻品第三に説かれている譬えで、法

華経の七譬の第一にあたる。（三界の火宅の項参照）

三趣 地獄・餓鬼・畜生の三惡道のこと。

三十三身 法華経觀世音菩薩普門品第二十五に説かれている

觀世音菩薩の示すべき三十三の身のこと。

三十三天 忉利天のこと。欲界の第二天で、須弥山の頂上に

あり、中央を帝釈天として四方に各八天あるので合わせて三十三天となる。

三十四心 煩惱を断ずる位。八忍八智の十六心と九無礙九解脱の十八心とをいう。十六心は見惑を断じ、十八心は思惑を断ず。この三十四心で見思惑を断じて成道するのを三十四心断結成道と名づける。

三十四身 法華經妙音菩薩品に出ており、妙音菩薩の示現するところの三十四身をいい、その機により時により、便宜の身を現じて法を説き、衆生を利益するということ。

三十二相 応化の仏が具有すべき三十二の相をいう。この相を現じて人中の天尊、衆聖の主なることを知らしめるためのもので、八十種好と一具して仏の相好をいう。その名称および順序は、經論の記載にいくらかの異同があるが、竜樹の著「大智度論」巻四によって示すと次のようになる。

- 一・足下安平立相、二・足下千輻輪相、三・手足長指相、四・足跟広平相、五・手足指縵網相、六・手足柔軟相、七・足趺高滿相、八・伊泥延膊相、九・正立手摩膝相、十・陰藏相、十一・身広長等相、十二・毛上向相、十三・一孔一毛相、十四・真妙金色相、十五・面各丈光相、十六・細薄皮相、十七・七処隆滿相、十八・兩腋下隆滿相、

十九・上身如師子相、二十・大直身相、二十一・肩円好相、二十二・四十齒相、二十三・齒齊相、二十四・四牙鮮白相、二十五・師子王頰相、二十六・常得上味相、二十七・広長舌相、二十八・梵音深遠相、二十九・真青眼相、三十・牛眼睫相、三十一・頂上肉髻相、三十二・眉間白毫相。(要語解説三五頁参照)

三周の聲聞 三周は三説ともいう。法華經の迹門正宗八品にある法説周、譬喩説周、因縁説周の三説法をいう。声聞の弟子が次々と成仏を許されて授記を受ける。まず、舍利弗等は方便品の法説を聞いて得道する。これを法説周という。次に譬喩品等の譬喩話を聞いて須菩提、迦旃延、迦葉、目連等が得道する。これを譬説周という。第三に大通智勝仏以来の因縁を聞いて富樓那等が得道するのを因縁周という。このように三種類に分かれていても、いずれも大通(三千塵点劫)の下種を覚知して成仏した。(要語解説九〇頁参照)

三周の説法 法華經迹門正宗分の方便品第二から人記品第九までの八品にある、法説周、譬喩説周、因説周の三つの説法の形式をいう。この三説法を、上・中・下の機根に応じて説法し、声聞の弟子に成仏を許し、授記を受けさせている。

(要語解説九〇六参照)

三重の相伝 三重秘伝のこと。日蓮正宗のみに伝わる相伝の

一つ。

三重の劣 真言の弘法の立てた邪義で、大日経第一、華嚴經

第二、法華經第三という判釈。弘法の十住心論のなかにある。事實は法華經に比すれば真言は七重の劣である。

三重秘伝 三重とは権実相對、本迹相對、種脱相對の三相對

をいう。第三の種脱相對は日蓮正宗のみに伝えられた法門で他門は知らないゆえに秘伝という。開目抄上(一八九六)

の「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」の文のなかで、但法華經は権実相對、但寿量品は本迹相對、但文底秘沈は種脱相對となる。(要語解説

一四九六参照)

三種禪 禪を分け、一に世間禪、二に出世間禪、三に出世間

上上禪をいう。世間禪を、また根本味禪・根本淨禪とし、出世間禪を、また無漏禪といい、觀、練、熏、習の四がある。出世間上上禪は、自性禪、一切禪、難禪、一切門禪、

善人禪、一切行禪、除惱禪、此世他世樂禪、清淨淨禪の九

の大禪をいう。

三種の教相 天台の法門で、一に根性の融不融の相、二に化導

の始終不始終の相、三に師弟の遠近不遠近の相。日蓮大聖

人の法門ではこの一、二が第一法門になり権実相對を示

し、三が第二法門で本迹相對を示し、第三の法門は種脱相

對で、日蓮大聖人の寿量文底の南無妙法蓮華經すなわち文

底下種の法門である。(要語解説二二二六参照)

三種の世間 三世間ともいう。五陰世間、衆生世間、国土世

間の三つをいう。世間とは差別の義。大智度論にもある

が、天台は一念三千の成立で三世間を説いた。五陰世間と

は、色、受、想、行、識である。衆生世間に十界の差別あり、国土世間とは衆生が住んでいる国土、自然界の差別を

いう。(要語解説二一〇六参照)

三種の方便 三方便ともいう。一に法用方便、二に能通方便、

三に秘妙方便をいう。天台が法華文句に説いている。法用

方便とは、衆生の機根に応じて衆生の好むところに従って

説法し、真実の門に誘引しようという教えの説き方。能通

方便とは、衆生が低い經によつて悟ったと思つてゐることを、だめだと彈呵して真実の門に入らしめる方便である。

秘妙方便とは、長者窮子の譬えや衣裏珠の譬えのごとく、

末法の衆生は種々の悩みや愚かな境涯に住んでいるが、その身そのままだと悟ることである。(要語解説二〇五

（参考）

三種の法華經（要語解説八六頁参照）

三種の身 法身、報身、応身の三身の仏のこと。現代語でい

えば、法身とは生命であり、報身は智慧・心であり、応身は肉体・姿をいう。この三身は即一身である。

三証 宗教の優劣・浅深を定める基準の一つで、文証・理証・

現証の三つをいう。文証とは文献的証拠、理証とは道理、

現証とは現実の証拠。三三蔵祈雨事（一四六八頁）には、「日

蓮仏法をこころみるに道理と証文とはすぎず、又道理証

文よりも現証にはすぎず」とある。（要語解説一四七頁参照）

三障四魔 仏道修行の途中で、それを妨げようとする障害。

三障とは煩惱障（貪・瞋・癡等から）業障（妻子等から）

報障（国主・父母等から）をいう。四魔は陰魔（五体から）

煩惱魔・死魔（修行中の者の若死に等から）天子魔（第六

天の魔王）をいう。陰魔を病魔ともいう。（要語解説二九

七頁参照）

三乗方便 三乗とは声聞、縁覚、菩薩。法華經は一仏乗を目

指すが、三乗の法たる爾前經は法華經のための方便である。

三心 一に至誠心、二に深心、三に回向發願をいう。浄土に

往生することのできる者の具する三種の心。これを觀無量

壽經の三心という。他にも三心を説く。

三身 法身、報身、応身の三身の仏のこと。爾前經にも三身は説かれて

いるが、法華經では三身即一身、一身即三身、三身常住が

明かされている。（要語解説一九二頁参照）

三身如来 三身とは法身、報身、応身をいう。この三身が即

一身にあらわれた久遠元初の自受用無作三身の仏のこと。

三途の河 極悪でも極善でもない罪人が、死んでから中有の

旅路に渡るべき河のこと。三途とは地獄、餓鬼、畜生の三

惡道のこと。岸には奪衣婆、懸衣翁という二人の獄卒がい

て罪人の着物を奪い三惡道の方へ追いやるという。

三聖 三聖には、中国でいう三聖、世界でいう三聖といろい

ろあるが、法華經の三聖とは、釈迦・多宝・十方分身の諸

仏をいう。

三精氣 地精氣・法精氣・衆生精氣をいう。地精氣とは大地

の生命力、たとえば五穀、草木等を繁茂させる力で、衆生

精氣とは人間社会の生命力、たとえば一民族が興隆した

り、また、衰えたりするそのものになる民族自体の力、法

精氣とは仏法の力をいう。

三世間 一に五陰世間、十界の五陰におのおの差別があるの

をいう。二に衆生世間、上は仏界より下は地獄までの衆生

におのおの差別があるのをいう。三に国土世間、衆生所依の境界は十界おのおのに差別があるのをいう。世間とは差別のことである。(要語解説二一〇頁参照)

三世常住 過去、現在、未来の三世がばらばらでなく続いているということで、生命の永遠を示す。

三説 法華經法師品第十の已・今・当の三説。すなわち過去・現在・未来に説かれた、また説かれる一切の經をいう。法華經法師品第十には「我が所説の經典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於いて、此の法華經、最も為れ難信難解なり」と説かれている。已は爾前經、今は無量義經、当は涅槃經である。すなわち、法華經が最高であることを示す時に用いられる。

三仙 インドのパラモン外道の開祖といわれる迦毘羅・憍楼僧伽・勒婆婆をいう。開目抄(一八七頁)の最初に出ている。

散善 定善に対する語。微徳小善のこと。

三千塵点劫 法華經迹門において、釈尊が結縁の衆生との化導の始まりを明かしたものの。法華經化城喻品第七にあり、その時の仏を大通智勝仏という。(要語解説九三頁参照)

三千大千世界 三千年前のインドの宇宙觀。仏教では須弥山を中心にして、太陽、月、四洲(地球)六欲梵天(他の惑星、衛

星)を含むものを一世界とし、それを百億倍(一千万倍)したもの、を小千世界、さらに千倍したものを中千世界、さらに千倍したものを大千世界または三千世界または三千大千世界という。宇宙にはこのような三千大千世界が数限りなく存在するとする。現在の宇宙觀とも一致する。

三藏 經・律・論の三つをいい、經とは仏所説の經をいう。律とは戒律、論とは仏みずから法相を問答決釈したもの。**三藏教** 三藏經ともいう。天台の立てた五時八教判において、化法の四教の最初の藏教をいう。三藏教とは小乗教の別名で、阿含經等にその教理が説かれている。

三草二木 法華經藥草喻品第五に説かれている譬喩。法華經の七譬の一つ。三草とは、下の藥草が人天、中の藥草が二乗、上の藥草が藏教の菩薩の譬喩であり、二木とは、小樹が通教、大樹が別教の菩薩の譬喩である。そしてすべてが一地一雨すなわち一仏乗から生まれたことを説いている。

三大秘法 日蓮大聖人の出世の本懐で、弘安二年十月十二日御図頭の大御本尊が三大秘法總在の本尊である。三大秘法とは、すなわち本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇のことである。(要語解説二二二頁参照)

三大部 天台大師の法華玄義、法華文句、摩訶止觀の三大部

で、各十巻合して三十巻ある。玄義は法華經の幽玄なる義旨を概説し、この經の一代仏教における最尊無上の教義たることをあらわした書。文句は法華經八巻の文々句々について科段を分割し、字句を解釈し、旧解を批正して法華独尊の旨義を明かしたもの。止観は法華經方便寿量二品本迹二門に建立せる一念三千の法門に諸大乘の円義を総摂し、己心修証の方法として、十境十乘の行門を明かし、もって法華円頓の行法とした。三大部は第一の弟子たる章安大師が筆録したものである。

護論 護は護言、論はへつらうこと。すなわち他人を落とし入れるために、権力者にへつらうて他人を中傷護言すること。

三徳 仏の徳をいい、主の徳・師の徳・親の徳と、法身・般若・解脱の三徳がある。

三毒 貪(むさぼり)瞋(いかり)癡(おろか)の三煩惱。

三土・四土 三土は三變の国土で同居・方便・実報土のこと。

居士は凡夫と聖者が同居する土。方便土は二乗、実報土は菩薩、寂光土は仏の住する国土である。

三度の高名 高名とは名高きこと、功名すること等の意。大聖人の三度の予言、国家諫曉、大功績をいう。第一回は文

応元年七月十六日、立正安国論を宿屋入道をとおり北条時頼に奉り幕府を諫めた。第二回は文永八年九月十二日、松葉ヶ谷の草庵で召し捕りにきた平左衛門尉を諫めた。第三回は文永十一年四月八日、佐渡の国から鎌倉へ帰られ平左衛門尉と対面したとき諫められた。そしてことごとく大聖人の予言は的中したのである。(撰時抄二八七頁参照)

三衣一鉢 僧の行儀をいい、三衣は僧の法服であり、一鉢とは鉄鉢一箇をいう。衣鉢ともいう。

三王 中国古代の五帝に次ぐ聖王で、夏の禹王、殷の湯王、周の文王。あるいは周王について子の武王をとる説があるが、父の文王が即位前に死し、子の武王が父の功を推して諡与したといわれるからである。

山王七社 天台宗比叡山延暦寺の守護神、大三輪神をまた大比叡神と称し、比叡山に延暦寺の建立されるときに比叡山の地主であるというので、山王として祭られ、上七社、中七社、下七社ができた。いまの日吉神社がこれである。

三平等 法華經見宝塔品で多宝如来の証明した「平等大慧」の義について、天親菩薩が法華論に釈している乗平等・法身平等・世間涅槃平等のことである。

三部經 浄土の三部經という場合は、觀經・双觀經・阿彌陀

經をいう。真言宗で三部の秘經という場合は大日經・金剛頂經・蘇悉地經をいう。

三仏 法華經に顯われている釈迦仏・多宝仏・分身仏をいう。

三仏の証誠 釈迦、多宝、十方分身の三仏が法華經の眞実なることを証明したことをいう。方便品に「要説眞実」とあるのは釈尊の証明であり、宝塔品に「妙法華經……皆是眞実」とあるのは多宝如來の証明、神力品に「舌相至梵天」とあるのは十方分身の証明である。

三墳 伏羲・神農・黃帝等、三皇の著書にして外典の書。

三墳五典 中国古代の伝説上の天子である三皇五帝の著わした書で、尚書の序に、三皇の書を三墳といい、五帝の書を五典というところ。

三變 法華經宝塔品で三度国土を變じて、淨土となしたことをいう。すなわち同品で多宝如來の宝塔が涌現し、釈尊はその塔を開かんと欲して、まず白毫の光りを放って娑婆世界を變じて清淨ならしめ、さらに八方のおの二百萬億那由他の世界を變じて清淨ならしめ、さらに八方のおの二百萬億那由他の世界を變じて清淨ならしめ、十方分身の諸仏を集めて多宝の塔を開き十方世界通一仏土の相を現じた。これを三變土田という。釈籤第七には三變土田をもつ

て同居の淨土に約し、かねて、実報・方便土となしているから、三變は同居土の淨土、方便、実報の淨土である。

三變土田 三變土田とは、法華經宝塔品において多宝如來が十方の諸仏を集結すれば釈尊の説法の証明をするというので、釈尊が十方の諸仏を集結して、三度国土を清淨にする儀式が説かれている。すなわち、はじめに、白毫相を現じて娑婆世界を清淨ならしめ、次に二百萬億那由他の国土を變じて清淨ならしめ、次に三たび二百萬億那由他の国土を變じて清淨ならしめた。すなわち凡聖同居土・方便土・実報土の三土を、三たび清淨に、すなわち仏国土と變じたことをいうのである。（要語解説九二頁参照）

三宝 仏宝・法寶・僧宝のこと。（要語解説一九六頁参照）

三方便 天台の文句三に、方便品の題を釈し、法華經で説かれた方便の意と、他經で説かれた方便の意を區別するために三つの方便を明かしている。一に法用方便、二に能通方便、三に秘妙方便をいう。法用方便、能通方便は小乗教、權大乘教で用いる方便で、一つは導き、一つは否定して、この二つの方便を用いて、衆生の機根を法華經に導こうとするもの。秘妙方便は仏だけが知っていて、われわれ凡夫には考えることができない方便である。凡夫が仏であると

いうのがそれである。また罰と功德は秘妙方便である。

(要語解説二〇五(六)参照)

三昧 さんまい 心を一处に定めて動かさず、正しく所観の法を受け、心の暴 ぼう を調え、曲がれるを直し、心の散れるを定めることである。法華三昧は、われわれの立ち場では御本尊に唱題するとき、自分の種々な思い起こさず、御本尊、広宣流布のことだけを考えて唱題すること。

三摩耶 さんまや 一には「時」という意味である。また真言家でいう三摩耶は「本誓 ほんぜい」の意であり、諸仏菩薩の本誓願をあらわす。三摩耶曼荼羅 まんだら とは密部四種曼荼羅の一つ。

三位日順 さんみにちじゆん 重順談所 おもむす の二代学頭。甲斐の国巨摩郡下山郷に生まれ、八歳で寂仙房日澄の弟子となり出家した。日澄が身延の日向の邪義を捨て日興上人に帰伏 きふく したとき同じく富士にきて大聖人の正義を学んだ。日澄に続き二代の学頭に任ぜられ、大いに興学に努めたが過労のためか前世の宿業 しゆくごう か、一眼を失明した。日興上人の指導で多くの著書をあらわす。主なものだけでも、表白、五人所破抄、用心抄、本門心底抄、摧邪立正抄、念真所破抄、本因妙口決などがある。日興上人の指導で、本仏論、本尊論、戒壇論を説き、また五老僧の邪義を破折している。

三明 さんみやう 小乗の仏。阿羅漢果 あらかんか の聖者がもつ三つの明智である。

一に宿住智証明で過去のことに通達する。二に死生智証明で未来のことに通達する。三に漏尽智証明で現在のことに通達する。

三妙合論 さんみやくごうろん 仏自らの因果 いんが と、所住の国土とに約して、時間、空間にわたって生命の真実の姿を明かしたのが三妙合論である。三妙とは、本因妙 ほんいんみやく、本果妙 ほんがみやく、本国土妙 ほんこくどみやく をいい、法華經壽量品にこの三妙が整足して説かれる。すなわち我本行菩薩道が本因妙、我実成仏已来が本果妙、娑婆世界説法教化が本国土妙である。末法の文底仏法では、本因妙は血脈付法の日興上人、本果妙は日蓮大聖人、本国土妙はご本尊の居ます所すべて本国土妙である。(要語解説一六六(六)参照)

山門 さんもん ①三井の園城寺を寺門 じもん というのに対し、比叡山延暦寺を山門 さんもん という。②寺院の正面に存する楼門をいう。

三類の強敵 さんるいごうてき 末法に法華經を弘通 くわつう するとき、正法の行者を迫害する強敵をいう。一に俗衆増上慢 ぞくしゆくぞうじやうまん、二に道門増上慢 どうもんぞうじやうまん、

三に僭聖増上慢 けんしやうぞうじやうまん である。(要語解説二九五(六)参照)

三論宗 さんろんしゆう 嘉祥寺 かじやう の吉蔵 きちざう が立てた宗で、提婆菩薩 だいば の百論、竜樹菩薩 りゆうじゆ の中論、十二門論の三論によって立てるゆえに三論宗と名づけた。

三惑 見思・塵沙・無明の三惑。見思は見惑と思惑であり、見惑は道理に迷うこと、思惑は事物に迷うこと。見思は、共に三界六道の界内を対象とする煩惱で、二乗はこれを断じて空理を悟る。塵沙惑は広く十界にわたる煩惱で、菩薩はこれを断じて諸法を了知する。無明惑は根本の惑で元品の無明等という。(要語解説一九頁参照)

し

四惡趣 惡業の因によって趣くべき四つの惡處、すなわち地獄、餓鬼、畜生、修羅のこと。四惡道ともいう。

四惡道 四惡趣と同じ。

四阿含經 天台の教判によれば、最初の二十一日間に華嚴經を説き、次の十二年間に説かれたのが阿含經である。この阿含經は増一阿含、長阿含、中阿含、雜阿含の四部からなっている。四阿含または四阿含經という。

四安樂行 法華經安樂行品第十四に説かれた授受の修行法の意。身安樂行、口安樂行、意安樂行、誓願安樂行の四つ。

四威儀 行・住・坐・臥の四をいう。道を修めるものの態度・動作が法にかなない威儀を失わないのをいう。

四章陀 インドのバラモンの經典で一には讃誦、二には祭

祀、三には歌詠、四には穢災で、韋陀とは分という意。

四一開會 この四とは、教・行・人・理の四法をいう。天台が法華經方便品第二の開三顯一・開示悟入の文を教・行・人・理の四義に立て分け、法華經では、教・行・人・理ともに、唯一仏乘であることを明かしたものの。

四依 仏法を修行する者の四種の依止所をいう、大別して行の四依、説の四依、人の四依、法の四依となる。この四依のうち行・説の四依は在世のための四依で、このうち行の四依は在世の比丘の修行であり、説の四依はインド応詠の釈尊の四依である。人、法の四依は滅後の者のための四依で、このうち人の四依は正法を護持し、弘通して衆生の依怙依託となるべき導師をいい、法の四依は、衆生を利益する導師が必ず遵守する四依を法の四依という。したがって末法今日においては人・法の四依をもちいるのである。

四裔の親疎 四方の親しい者も疎縁の者もの意で、あらゆる人々ということ。

四依の菩薩 人の四依と同意。依は依止所の意である。仏の滅後、正法を護持し、正法を弘通し衆生済度の中心人格となる菩薩。位を四段階に分け、初依、二依、三依、四依とする。四依の菩薩に四類あり、藏・通・別・円のそれぞれ

であり、これらの菩薩の位の配立は諸説がある。

四恩 心地観經には、一に父母の恩、二に衆生の恩、三に國王の恩、四に三宝の恩を説いている。(四恩抄九三七頁に詳しい)

慈恩大師 唐代法相宗の第二祖、十七歳で玄奘三蔵の弟子となる。「成唯識論述記」「法華玄賛」等多くの疏釈がある。

持戒 戒律をたもつこと。または戒律をたもつ者のこと。

慈悔 相手を救うための厳格な教訓。

四海一州 日本国中の意。

四誠三請 法華經壽量品の初めに釈尊は三誠し、菩薩大衆の

三請の後に、さらに四誠して説法に入つたこと。(三請四

誠の項を参照)

持戒の比丘 正法をかたくなもつ僧。

自界叛逆 同士打ち、内乱をいう。七難のうちの一つ。

四角四堺の集記 四角は四隅、四堺は四方の意で、都の四隅

に疫神を祭り、国の四境で祭るといふ陰陽道の儀式の一つ。

慈覺大師 日本の天台宗第三の座主。入唐八家の一人。諱は

円仁、十五歳で叡山で伝教大師の弟子となる。伝教の弟子

でありながら、真言の悪法を取り入れた。「金剛頂經疏」

「蘇悉地經疏」を著わす。

自我偈 法華經壽量品第十六に説かれた偈のこと。自我得仏

来から速成就仏身までの偈をいう。法蓮抄(一〇四九頁)

に「自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法

華經は一代聖教の骨髓なり自我偈は二十八品のたましひな

り」とある。(要語解説一〇九頁参照)

止眼断眠 「眼を止め眠を断つ」と読む。寸暇を惜しんで精

進することという。富木殿御書(九七〇頁)に「我が門家

は夜は眠りを断ち昼は眼を止めて之を案ぜよ一生空しく過

して万歳悔ゆること勿れ」と仰せである。

止観円頓の大戒 伝教が入唐して道邃和尚、行滿等から伝授

された大戒で止観の理の一念三千のことをいう。

色界 三界の一つ。色は物質の義あるいは変礙の義である。

この色界の諸天は世間の禪定ならびに上品の十善を修して

この報を感じるのである。色界には通じて十八天がある。

色香美味 法華經壽量品第十六にある經文。天台では、色と

は戒、香とは定、味とは慧、すなわち色香味を三学なりと

説く。また色は般若、香は解脱、味は法身すなわち三徳な

りとも説く。文底の仏法では、色とは虚空不動戒・本門寿

量の大戒、香とは虚空不動定・本門寿量の本尊、味とは虚

空不動慧・本門寿量の題目、すなわち三大秘法なりと説

く。これを図示すれば次のようになる。

色…戒—本門の戒壇 色…般若—報身

香…定—本門の本尊 香…解脱—応身

味…慧—本門の題目 味…法身—法身

色心不二 色とは肉体、心とは心で、この二つは別々のものではなく一体のものである。一体のところに生命の極致がある。御義口伝上（七〇八頁）に「色心不二なるを一極と云うなり」とある。（要語解説二五〇頁参照）

直達正観 歴劫修行に対する語。直ちに正観に達する意。

爾前経では歴劫修行を立て菩薩が六度万行を永遠に修していくのが成仏の道であると説いたが、法華経では即身成仏を説いている。しかし釈迦仏法は熟脱の機根の衆生が対象である。真実の直達正観は御本尊を受持して即身成仏することである。（要語解説二八三頁参照）

食法餓鬼 十界、六道、四悪趣の一つである餓鬼界三十六種の一種である。自分の名聞名利のために仏法をもてあそぶ餓鬼である。

事行 理行に対する言葉で、一般的には実践すること、生活のなかに具体化して実現することをいう。仏法では、天台の一念三千が理であり、学問のうえで論じ、その理を通じて得

道するのに対し、三大秘法の南無妙法蓮華経は日蓮大聖人のご生活、お振舞い等それ自体で、それが久遠元初の自受用身のお振舞いと少しも変わりなく本有常住の一念三千の当体であらせられる。ゆえに事行の一念三千というのである。

自行化他 修行の立ち場でいえば自行とは、自分が利益を受けるため修行することをいい、また自利とも名づく。化他とは、他をして法の利益をうけられるよう化導するをいう。自行化他は、また自利利他とも名づく。われわれの仏道修行においては、自行とは朝夕御本尊に勤行することをいい、化他とは折伏行をいう。また法体の立ち場でいえば、衆生の機根に応じて説かれた経を化他の法門といい、法華経のように仏の悟りそのままを説いたのを自行の法門という。（要語解説三一八頁参照）

四教の果・四教の因 四教とは、化法の四教と化儀の四教とあつて八教という。ここでは蔵・通・別・円の化法の四教である。釈尊は寿量品以前の蔵教にも通教にも別教にも円教にも「仏」を説き、成仏の因たる修行を説いている。しかし寿量品にいたつて、これら四教の「仏」が始成正覚の迹の仏であると、その仏果を打ち破っているゆえに、成仏修行の因もすべて打ち破られたのである。（開目抄一九七頁）

四教の色身 藏・通・別・円の四教を説く仏の身形は、それぞれ教に應ずる色身を現じて衆生を利益せしめた。これを四教の色身という。

持經の人 正しい仏法を信じ持つ人。

私曲の思 自分自身でかつてに立てた妄想。

四弘誓願 一切の菩薩が初発心するとき、必ず起こす四つの願い。すなわち衆生無辺誓願度・煩惱無數誓願断・法門無尽誓願知・仏道無上誓願成をいう。

竺の道生 中国東晋の世の高僧。沙門竺法汰について出家、のち羅什三蔵の弟子として修行した。青園寺に住し、頓悟成仏の説を立て「二諦論」「仏性当有論」「法身無色論」等の著があり、また闡提成仏の義を立てた。これにより衆僧の怨嫉するところとなり大衆のために追放せられた。そのとき、道生は「わが所説、もし經義に反せば現身に厲疾を表わさん。もし、実相と違背せずんば、願わくは寿終の時、師子の座に上らん」と誓つて蘇州の虎丘に去った。のち道生の説の正しいことが明らかとなり、その誓いのごとく宋の元嘉十一年、廬山において法座に登り、説法が終わると共に眠るがごとく入滅したといわれる。

竺の法蘭 中国後漢の時代、初めて中国に仏教を公伝したと

いわれる、中インドの僧。後漢の永平十年、明帝のとき迦葉摩騰と共に漢土に來たり「仏本生經」などの五部を訳出した。

四句の要法 法華經神力品第二十一の結要付嘱の文。「要を以てて之を言わば、如来の一切の所有の法(名)、如来の一切の自在の神力(用)、如来の一切の秘要の蔵(体)、如来の一切の甚深の事(宗)、皆此の經に於いて宣示顯説す」これが三大秘法を表わすことは、三大秘法抄(一〇二一頁)に明らかである。(要語解説二二九頁参照)

四苦八苦 四苦は生・老・病・死であり、八苦はさらに愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦が加わる。

自解仏乘 天台大師を賛嘆する十徳中の一つ。大師が師伝を待たずに、自ら法華の教理を悟ったことをいう。法華は成仏の法なので仏乘という。天台のみならず、日蓮大聖人も当然自解仏乘であらせられる。

四見 涅槃經で、衆生がそれぞれの機根にしたがって、同じ沙羅林を同居・方便・実報・寂光の四土と見たことをいう。示現 仏菩薩が衆生を救うために種々に身を変じてこの世に現われることをいう。

示現生 「菩薩の示現生の者」とは、菩薩が衆生を救済する

ために縁に應じて畜生等の六道の形を現すること。

持估 たより、よりどころ。

四劫 成劫・住劫・壞劫・空劫をいう。この四劫は仏教の宇宙觀であつて、一つの世界が成り立つまでの時代を成劫、成立以後、繼續する時代を住劫、壞滅する時代を壞劫、形体のない空の時代を空劫という。この各劫は平均して二十小劫といわれる。この二十小劫というのは、住劫の初め人壽無量歲から百年に一歲減じて人壽十歲にいたるまでを第一減劫といい、次にこの十歲から百年に一歲を増して八萬歲になり、再び百年に一歲減じて十歲になるまでを第二の増劫および減劫という。このようにして二十の増減があり、最後第二十の小劫は十歲から無量歲までにいたる間の増劫のみをいう。

四皓 商山の四皓といい恵帝の老臣である。東園公・綺里季・夏黃公・冉里先生の四人をいう。

地獄 地は最底の義、獄は不自在拘制の義であり、国土世間からみれば地球の中心、重力作用によつて赤熱の集まる状態であるとされているところ、また火山のほのお等。衆生世間からすれば不具者、病者、邪宗教の僧侶等。五陰世間においては日常生活において子に死なれる、借金に悩

む等の煩悶懊惱する状態をいう。その種類は八大地獄から、一百三十六地獄にわたり、別に八寒地獄がある。

持国天 四天王の一つで東北の守護神である。民を安んずる働きをもつ。

四箇の格言 (要語解説一〇頁参照)

持齋 齋とは戒法の一つで、戒法を持つことを持齋という。

また齋法を持った法師を持齋法師という。八齋戒とは、一に不殺、二に不盜、三に不姪、四に不妄語、五に不飲酒、六に不坐高太牀、七に不作倡妓樂、八に不過中食である。

師子座 仏を師子王として、その座を師子の座という、狓座とも同じ。

師子尊者 釈尊滅後千二百年前後、中インドに生まれ、鶴勒夜那につき法を受け、後、罽賓国において仏法を流布した。

その国王・檀弥羅は邪見が強盛で多くの寺塔を破壊し、多くの僧を殺害し、ついに師子尊者の首をも斬った。そのとき、一滴の血も流れず、ただ白い乳のみが涌き出た。ここにおいて死身弘法の行者、付法蔵二十四人の最後の伝灯者として、その名をとどめている。なお、国王・檀弥羅は、仏法に帰依していたのだが、外道にだまされて師子の首を斬ったとする説もある。

四悉檀（しじつだん） 世界悉檀（しじつだん）・為人悉檀（いじん）・対治悉檀（たいじ）・第一義悉檀（だいいぎ）の四つをいう。悉檀とは偏く施すということ。世界悉檀は樂欲悉檀（がくよく）ともいい、世間一般の欲するところにしたがって説法すること。為人悉檀は、各各為人悉檀（かくかくいじん）といい、人々のさまざまに機根（きこん）に応じてよろしきにしたがって法を説くこと。対治悉檀は断惡悉檀（だんあく）とも称して、破惡の益を与えるもの。第一義悉檀とは真實義悉檀（じしつぎ）ともいい、入理の益があるとされている。世界、為人悉檀は攝受的（しやうじゆく）なものであり、対治、第一義悉檀は折伏型（せふくがた）のものである。（要語解説二〇四頁参照）

四時（しじ）の經（きやう） 釈尊（しやくそん）一代五十年の説法を五つの時期に区分して、第一華嚴（くわいん）の時、第二阿含（あこん）の時、第三方等（ほうとう）の時、第四般若（はんにや）の時、第五法華涅槃（ほふわねはん）の時と天台大師は判じた。四時の經とは第四般若の時までをさす。「四十余年末顯真實（しじゅうにふたひやくにんねんまけんじしつじつ）」の文により法華經が説かれたら廢せらるべき經々である。前四味（ぜんしむい）、爾前（にぜん）の經（きやう）のこと。

四衆（ししゆ） （要語解説二一四頁参照）

四州（ししゅう） 須弥山（しゆみせん）を中心とした古代インドの世界觀であり、東に弗婆提（ふつぱだい）、西に瞿耶尼（くくやに）、南に閻浮提（えんぶだい）、北に鬱單越（うつだんごつ）の四州。

四重（しじゅう） 四重禁戒（しじゅうきんがい）をいい、一に不殺生戒（ふせつしょうじ）、二に不偷盜戒（ふちゆうとうじ）、三に不邪淫戒（ふじゃいんじ）、四に不妄語戒（ふもうごじ）で、これを犯せば教団を放逐（ほうしやく）され

るといふ、出家としての最重罪であるとされていた。

四重興廢（しじゅうかうはい） （要語解説一五〇頁参照）

四十八願（しじゅうはちがん） 阿彌陀如來（あみだにょらい）が法藏比丘（ほふざうびく）だったとき、世自在王（ぜじざいおう）の所にあつて立てた誓願（せいがん）であり、無量壽經（むりやうじゆきやう）で説く阿彌陀（あみだ）の四十八種の誓願をいう。二百十億の諸仏（しよぶつ）国土（こくど）より選択（せんたく）攝取（じやく）した大願（だいがん）なので選択本願（せんたくほんがん）という。

四十余年末顯真實（しじゅうにふたひやくにんねんまけんじしつじつ） 「四十余年には未だ真實（じしつ）を顯（あらわ）さず」と読む。法華經（ほふわきやう）の開經（かいきやう）たる無量義經（むりやうぎきやう）にあり、釈尊（しやくそん）が四十二年間説いた教（しやく）えは方便權教（ほうべんこんきやう）で真實（じしつ）の教（しやく）えではなく、法華經（ほふわきやう）こそ、いまだかつて聞かざる大法（だふほふ）であるという意。

四種三昧（ししゆさんまい） 略（りやく）して四種（ししゆ）ともいわれる。天台（たいたい）の止觀卷二（しがんくわん）に説かれてゐる。一、常坐三昧（じやうざさんまい）、また一行三昧（いぎやうさんまい）。九十日間、坐禪（ざぜん）入定（にやうじやう）して余事（よじ）を行ぜざるをいう。二、常行三昧（じやうぎやうさんまい）、また仏立三昧（ぶつたつさんまい）。九十日間もつぱら阿彌陀（あみだ）を唱念（なうねん）するをいう。三、半行半坐三昧（はんぎやうはんざさんまい）。七日の方等三昧（ほうとうさんまい）と三七日の法華三昧（ほふわさんまい）をいう。共に懺悔滅罪（ざんげめつざい）を主としたもので、行（ぎやう）と坐（ざ）とを兼ね修（しゆ）するもの。四、非行非坐三昧（ひぎやうひざさんまい）、方法（ほふほう）、期間（きかん）を定めず、六塵六識（じろくしき）によつて起こす念（ねん）に対して、四句（しきう）をもつてこれを觀（くわん）じ、一心三觀（いしんさんくわん）に達（たつ）するのをいう。

四種の身（ししゆのみ） 仏（ぶつ）が四十余年の間、種々（しゆしゆ）の姿（すがた）を現（あらわ）じ、衆生（しゆじやう）を教化（くわくわ）

するが、涅槃經の文において、四種の仏身を現ずること

と、四種の仏身を衆生の機根により四種とみること。

自受法樂 自ら受ける法樂、法の楽しみである。大御本尊を拜むことによって、自身の胸中に仏の生命が湧現する、すなわち幸福をつかむのは、自らの信心によってつかむということである。

自受用身 仏自身の働きによって、一切の衆生を救うために、自ら出現した仏。他受用身に対する語。正確には自受用報身如来である。「ほしいままにうけもちいる身」と読み、自由自在の成仏の境涯である。自受用身に、久遠元初の自受用身（日蓮大聖人）と応仏昇進の自受用身（本果第一番成道の釈尊）がある。（要語解説二七四頁参照）

自受用身即一念三千 自受用身と一念三千が一体不二であること。自受用身とは久遠元初の自受用身すなわち末法に出現の日蓮大聖人である。一念三千とは事行の一念三千の南無妙法蓮華經である。ゆえに自受用身即一念三千とは人法一箇の御本尊である。

自受用土 自受用報身如来の住处である。すなわち南無妙法蓮華經と唱える者の住处は、三界のいかなる所も寂光土であり、自受用土である。

自受用報身如来 自受用身と同義。

四処 生処、得道、転法輪、入涅槃の四種の住处。この四処を仏の生身の四処という。

四生 衆生の四種の產生の意と、四たび生を受けるの意の二つがある。四種の產生とは、一に胎生は人間等のごとく母の胎内で育って生まれるもの、二に卵生は鳥のごとく卵から生まれるもの、三に湿生は虫等のごとく湿気の中より生まれるもの、四に化生は業報によってうける天上界のごときもの。

四聖 声聞・縁覺・菩薩・仏を、それ以外の六道に対して四聖という。また儒家では尹寿・務成・太公望・老子の四人を四聖という。

四請三誠 三誠四請と同義。

始成正覺 「始めて正覺を成ず」と読む。法華經本門の久遠実成に対する。爾前・迹門で、十九出家三十成道と説く。すなわち、この世で修行して仏に成ったと説くのをいう。

自性涅槃 一切法のもっている、そのものの自体の性分そのま

まが、涅槃の相であるとの意。
四身 仏の四身をいう。①楞伽經の四身は、化仏、功德仏、智慧仏、如如仏。化仏は応身、功德仏と智慧仏とは報身、

如如仏は法身にあたる。②唯識論で説く四身は、自性身、他受用身、自受用身、變化身。自性身は法身に、他受用身と自受用身は報身に、變化身は応身にあたる。③涅槃經で説く四身は、丈六（劣応身）小身大身（勝応身）盧舍那（報身）身は虚空に同じ（法身）である。④天台家においては法報応の三身に化身を加えて四身を説いている。

四信 四信五品の四信。法華經分別功德品第十七に法華經を修行するものの初心の功德をはかるときに四つの階位を説く。一念信解、略解言趣、広為他說、深信觀成の四つ。

死身弘法 章安の涅槃經疏にある文。「身を死して法を弘めよ」と読む。命がけで正法を弘めること。不惜身命・不自己惜身命・我不愛身命と同じ。

地神五代 「ちしん」とも読む。天神七代のあと、人皇である神武天皇に先立って日本を治め、皇統の祖神となったとされる五柱の神の時代。すなわち天照大神・天忍穗耳命・瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草不合尊。

四條金舌頼基 （要語解説三八二頁参照）

四信五品 法華經本門の流通分である分別功德品に、法華經を修行するものの初心の功德を量る時、その初心者階位を四信と五種の品類に分けて説いたものである。四信と

は、第一に一念信解、法華經の顯本の理を聞いて、即座にありがたいと思う心、この心をいう。第二に略解言趣、一念の信心が進んでいくと、その經の趣旨が、ほぼ了解される。一字一句から始まって、仏が教えを解いた意は、その趣旨は、目的はなんであるのかをほぼ理解していくことができる状態。第三に広為他說、広く他人のために法を説く状態、心に歡喜を生じて、他の人にも説きたくなること。第四に深信觀成、自分では理解したが人に話してみるとわからないことが多い、しかし、ますます信心を強めて、より以上にわかっていく、内鑑していくこと。五品とは、一に初隨喜品で法を聞いて隨喜の心を起こすこと。二に讀誦品。三に説法品で他人に向かって勧めること。四は兼行六度品で、自他ともに救う六度の行をも心がけること。五に正行六度品、正しく六度すなわち六波羅蜜の修行を行ずること。

持水（治水） 金光明經卷三に説かれている過去世の名医のこと。

四禪定 欲界の惑を離れて色界に生ずる四種類の禪定。初禪、二禪、三禪、四禪をいう。四禪定を修して色界に生じても、色界は物質だけが存在している天上界の一部であつ

て、真実の涅槃の境涯を獲得することはできない。よつて

四禪定を四有漏禪ともいう。

四禪比丘 一説には善星比丘ともいう。出家して仏道修行に

励み、欲界の煩惱を断じて四禪をえ、それが真の涅槃と思

い増上慢を起こし、仏に敵対して阿鼻地獄に落ちた。

地藏菩薩 釈尊より、忉利天の、一切諸仏天竜八部の大会の

中で付嘱を受け、釈尊滅後、弥勒出世以前の無仏世界の人

天の諸の衆生が苦しんでいるのを教化する菩薩とされて

いる。地藏とは、安忍不動は大地のごとく、静慮深密は秘

蔵のごとくなるゆえであるという。

四諦 諦は真実不虛の義、仏智をもつてあきらかにした誤り

なきものの意。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦の四つ。苦

諦は三界六道の苦報。集諦は貪瞋癡の煩惱から六根より起

こる愛着が苦の因となること。滅諦は前の苦集を滅し惑を

伏した真空寂滅の境涯。道諦は滅諦にはいるべき修行法。

(要語解説二九パー参照)

四大 四大種の略称で、四界ともいい、地水火風をいう。

四大海 須弥山をめぐる四方の大海をいう。古代インドの世

界観では世界の中央に須弥山があり、その四方に東弗波

提、西瞿耶尼、南閼浮提、北鬱单越の四大州があり、それ

をめぐる海を四大海という。

自体顕照 自身を明らかに照らし出して自覚すること。三大

秘法の御本尊を信じて湧現した姿が自体顕照である。

四大士 上行、無逆行、淨行、安立行の四菩薩をいう。本

化地涌の菩薩の統領たる四菩薩である。

四大声聞 釈尊の弟子のうちで、特にすぐれた四人の声聞を

いう。小乗経、権大乘経、法華経の各々に四大声聞があ

る。そのうちで法華経では、信解品第四において、一代五

時の領解を述べた一会の上足、すなわち譬喩品を聞いて領

解する中根の声聞であり、摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶目

犍連・慧命須菩提の四人をいう。

四大声聞の領解 須菩提・迦旃延・迦葉・目犍連の四大声聞

が領解の旨を述べた信解品第四の文をさす。

次第禪門 天台の撰。十卷あるいは十二卷。釈波羅蜜次第

法門、または禪波羅蜜ともいう。単に禪門ともいう。三種

止觀のなかの漸次止觀を明かしている。

四諦の相 苦諦・集諦・滅諦・道諦の四諦の法によって生命

の真相を説いた小乗教の教え。

四諦の法輪 四諦の法門をいう。(四諦の項参照)

四大不順 摩訶止觀に病の六因を明かしているが、その第一

の因で、身の病を起こす。四大とは地水火風をいう。

四大菩薩 法華經涌出品第十五において、とつぜん大地より

涌出した菩薩の代表であり、本化の上行・無辺行・淨行・

安立行の四菩薩をいう。また生命觀の上から、四菩薩は常

樂我淨の四徳をあらわす。御義口伝上(七五一頁)には「又

云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地

涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利

益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人な

り本法とは南無妙法蓮華經なり」とある。

四智 仏の具備する四つの智慧。真言密教に大円鏡智・平等

性智・妙觀察智・成所作智の四智を説く。諸説あり。

七鬼神 却温神呪經に説く七つの善鬼。一無多難鬼、二阿伽

尼鬼、三尼迦戸鬼、四阿迦那鬼、五波羅尼鬼、六阿毘羅鬼

七波提利鬼で、この名を書いて千門にはつておけば鬼魔が

近寄らないと説いている。

七逆 梵網經に述べられている。重き罪を犯す七つの大罪。

すなわち出仏身血・殺父・殺母・殺和尚・殺阿闍梨・破羯

磨転法輪僧・殺聖人の七つで、特に重罪は師匠に背く大罪

である。主に背く八逆、親に背く五逆、そして師に背く七

七子 涅槃經梵行品の七子の譬え。藏・通の声聞・縁覺

と、藏・通・別の菩薩、すなわち七方便に擬す。觀心本尊

抄、法華取要抄等に涅槃經の七子の譬えをひかれている。

大涅槃經にいわく「譬えば一人にして而も七子有るもの、

是の七子の中に一子病に遇う。父母の心は平等ならざるに

あらずといえども、然も病子に於いて心則ち偏に重きが如

し」と。すなわち不幸な衆生に対する仏の慈悲をあらわし

ている。

七宗 奈良時代の奈良の六宗に、平安時代の初期に弘法の弘

めた真言宗を加えて七宗という。俱舍・成実・律の小乗の

三宗と、法相・三論・華嚴・真言の權大乘の四宗。南都六

宗に天台宗を加えて七宗と称する説もある。

七重勝劣 法華經と大日經と比較して法華經は七重にすぐ

れ、大日經は七重に劣るという意味。すなわち第一に法華

經、第二に涅槃經、第三に無量義經、第四に華嚴經、第五

に般若經、第六に蘇悉地經、第七に大日經となる。

七宗の守護神 奈良の六宗に真言宗を加えた七宗の守護神。

七難即滅七福即生 仁王般若波羅蜜經受持品に「般若波羅蜜

經を講読せば七難即ち滅し、七福即ち生じ、万姓安樂にし

て帝王歡喜せん」とあるのをいう。七難とは仁王經では一

に日月失度難、二に衆星變改難、三に諸火焚燒難、四に時節返逆難、五に大風散起難、六に天地亢陽難、七に四方賊來難。藥師經では、一に人衆疾疫難、二に他國侵逼難、三に自界叛逆難、四に星宿變怪難、五に日月薄蝕難、六に非時風雨難、七に過時不雨難。その他諸説ある。

七譬 七喻と同じ。法華經には数多くの譬喩が説かれているが、そのうちの七つの大きな譬喩をいう。

- 一、三車火宅の譬え（譬喩品）
- 二、長者窮子の譬え（信解品）
- 三、三草二木の譬え（藥草喩品）
- 四、化城宝所の譬え（化城喩品）
- 五、貧人繫珠の譬え（五百弟子品）
- 六、譬中明珠の譬え（安樂行品）
- 七、良医病子の譬え（壽量品）

略して、火宅・窮子・藥草・化城・衣裏珠・頂珠（または髻珠）・医子の七喻ともいう。いわゆる法華の七大喩である。

（要語解説八七ツバ参照）

七方便 ①藏教の声聞・緣覺・菩薩と、通教の聲聞・緣覺・

菩薩と、別教の菩薩とをいう。これを両教（藏通）の二乗と三教（藏通別）の菩薩ともいう。この七種の行者は円教

の位でないから七方便と名づける。②藏教の聲聞の位に七方便がある。三賢四善根の七位の聲聞をいう場合である。

七慢 自分を恃んで、他人に対して高举するのを慢という。

七慢・八慢・九慢等があるが、次に七慢をあげる。

(1) 慢Ⅱ他に劣っているのに自分がまさるといふこと。おのれを高举する。

(2) 過慢Ⅱ自分と等しいものにまさるといい、自分が劣っているのに等しいといふこと。

(3) 慢過慢Ⅱ他人がすぐれているのに、自分が、さらにまさるといふこと。

(4) 我慢Ⅱ自分が自分だと、自分を恃んで他人を凌いで心を高举すること。

(5) 増上慢Ⅱまだ上聖の法を得ないのに、自分では、すでに証得したと思つていふこと。

(6) 卑慢Ⅱ他人が多分にすぐれているのに、自分は少しだけ劣るといふこと。あるいは自分の少能が他人の多能にかえつてまさるといふこと。

(7) 邪慢Ⅱ自分が徳がないのに、あるといい、邪見に執着するもの。

七味 甘・辛・酢・苦・鹹・澁・淡の七種の味。

七面七重の口決 中国天台宗の開祖、天台の説いた法華玄義・法華文句・摩訶止観の各十巻を、伝教がさらに七面七重の立ち場からこれを釈して口決治定したことをいう。(本因妙抄八七〇頁参照)

自調自度 自分のみが煩惱を調べ、自分だけが悟りを得るという意味で、二乗は菩薩のごとく衆生を救わんとする弘願がないことから自調自度という。

十界久遠 十界が久遠常住であるということ。迹門では本無今有の生命を説き諸法実相を明かしたが、本門にいたって十界の久遠常住を説き明かすのである。

十界互具 生命が地獄界より仏界にいたる十界のおのにおのの働きを具足していること。(要語解説一八二頁参照)

十界の因果 十界の因果とは地獄界、仏界等の十界におのの因果を具しているという場合と、九界を因となして仏界を果となすという場合とがある。

十境 天台が「摩訶止観」で述べたもの。一に陰界入境、二に煩惱境、三に病患境、四に業相境、五に魔事境、六に禅定境七に諸見境、八に増上慢境、九に二乗境、十に菩薩境。

執權 ①政治の実権を掌握すること。②院の庁の別当の称。

③鎌倉幕府の政所の長官。將軍を補佐して内外の政務を総

轄した、將軍に次ぐ要職。北条氏はこの職を世襲して鎌倉幕府の実権を握っていた。④室町時代における管領の異称。

実性 眞実の性。

実乗の一善 実乗は権乗に対する語で実大乘教のこと。一善とは最高善の意。すなわち、最高の教えである法華經、末法今日においては日蓮大聖人ご建立の文底三大秘法の南無妙法蓮華經である。

十信・十住・十行・十回向・十地 別教に説く菩薩の位で、等覺・妙覺を加えて五十二位に説いている。菩薩はこの段階を歷劫修行していくのである。

十地華嚴等 十地は十地經、華嚴部に属す。華嚴經十地品の別出の經とされている。

十方 四方八方に上下を加えた十方。あらゆる世界の意味に使われる。

実報華王の儀式 実報とは実報土のこと、すなわち別教の十地以上の位・円教の十住以上の位の菩薩の住所。華王とは蓮華藏世界のことで、実報華王の儀式とは華嚴經に説かれた儀式をいう。華嚴經は高位の菩薩、利根の機に対して説かれたものであるから、菩薩所居の実報土を説きあらわし、これを説いた仏も蓮華藏世界の仏の立派な相を示され

たので、このように呼ばれるのである。

十方台上の盧舍那 華嚴の結経たる梵網経に説かれる報身
仏すなわち華嚴の教主は華嚴世界、蓮華中台に坐し、蓮華の

千葉上に千釈迦、その葉中に百億の小釈迦がありとする。

十方台葉・毘盧遮那仏 十方台上の盧舍那というに同じ、華
嚴宗では盧舍那は毘盧遮那の略であるとするが、天台では

毘盧遮那は法身、盧舍那は報身であると説く。

實報土 菩薩のうちで中道を証し、無明を断破したものが所
居する土、四土の一つ。

十方の諸仏 十方とは、四方四維上下の總称。すなわち東・

西・南・北の四方と、東北・西南・東南・西北の四維と、

上下の二方を加えて十方となる。この十方におのおの諸仏
が住するので、これを十方の諸仏という。

十方唯一仏 十方に唯一仏ありといい、万物ことごとく仏

性があるとか、あるいは仏が十方の国土にいる等と説かな

い小乗の教え。一代聖教大意(三九〇頁)に「此の経(三

蔵教)の意は六道より外を明さず但し六道(地餓畜修人天)

の内の因果の道理を明す、但し正報は十界を明すなり、乃

至此の教の意は六道より外を明さざれば三界より外に浄土

と申す生処ありと言わず又三世に仏は次等・次等に出世す

とは云へども横に十方に並べて仏有りと云わす」とあ
る。すなわち、蔵教で説く法門である。

四天王 四天王のこと、帝釈の外将である。須弥山の中腹の由
健陀羅山の四峰におのおの居し、各一天下を守っている。

東は持国天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天(毘沙
門天)である。この四天王も法華經の会座に万眷属の天子

と共に連なり、陀羅尼品においては法華經の行者の擁護を
誓言している。

四天下 須弥山のまわりの四州をいう。

四顛倒 四倒ともいう。迷いの衆生が、常に正理を顛倒して

見解すること。これに四種がある。凡夫の四顛倒は世間の
実相の非常を常、非樂を樂、非我を我、非淨を淨となす。

二乗、菩薩の四顛倒は涅槃の実相の常を非常、樂を非樂、

我を非我、淨を非淨となすをいう。

四天王 須弥山四面の中腹由健陀羅山の四峰に住し、正法を

護持する天王。一に持国天王、二に広目天王、三に毘沙門

天王(多聞天王)、四に増長天王をさす。帝釈天王の外将

であり、法華經の序品において万眷属の天子と共に連な

り、陀羅尼品においては法華經の行者の擁護を誓ってい

る。①持国天王は東方を守り、一般には安民の働きをする

役目をもつ。②広目天王は西方を守り、悪を呵責する働きをもつ。③毘沙門天王は多聞天王ともいい北方を守り、一般には法を多聞して法座を守る働きをもつ。④増長天王は南方を守り、一般には不幸を免除する働きをもつ。

四天王寺 大阪市天王寺区にある和宗の寺。聖徳太子が用明天皇の二年に守屋を誅し、その冬に四天王寺を建てた。元興寺と共に日本最古の寺である。

四道の聖人 四道とは一義には須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢の四果をいい、一義には初依、二依、三依、四依の聖人ともいう。いずれにしても付法藏の二十四人のように仏の遺命により正しく仏法を弘めた聖人たちをいう。

示同凡夫 仏が衆生を化導するため、凡夫と同じ姿を示し、自ら凡夫即極の現証をあらわすこと。(要語解説二七二頁参照)

四土色身 四種の国土に応現する仏身をいう。法華經見宝塔品で十方分身の諸仏が集するにあたり、三度土田を變ずる。第一に同居の土を方便土に、第二は実報土に、第三は寂光土と變じた。これに従って仏身もまた同居土では劣応、方便土では勝應、実報土では報身、寂光土では法身とそれぞれ姿を現じた。

事と理 (要語解説一八一頁参照)

斯人行世間 法華經如来神力品第二十一の文。「斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」とある。別付嘱の文にあたり、御義口伝下(七七七頁)には「斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生闇とは謗法の大重病なり、能滅の体は南無妙法蓮華經なり今日蓮等の類い是なり」とある。

四念処 天台の説を章安が記したもので四卷。また、小乗を修するものが五停心觀の次に修するところの觀であり、四念処によつて智慧を練磨する。

事の戒壇 義の戒壇や理の戒壇に対する語。本門の戒壇に義と事がある。事の戒壇とは、広宣流布のときに本門戒壇の大御本尊を安置し奉る所である。(三大秘法抄一〇二二頁)

事の戒法 ①末法今日において衆生が持つべき唯一絶対の戒法は、大聖人の顕わされた三大秘法の御本尊を受持することであり、これを金剛宝器の大戒といい、また事の戒法とも呼ぶ。②本門の戒壇を建立すること。これ大聖人が末法の衆生に遺命された肝要である。(身延相承書一六〇〇頁)

慈悲 慈は与樂の義で、悲は拔苦の義。すなわち仏法修行の根本となるべき義である。キリスト教の愛と違い、一切のものを幸せにさせようという仏の働きをいう。

尸毘王 釈迦仏が因位（よき）のとき、布施波羅蜜（ふせはらみつ）を行じたときの名。

鷹（たか）に追われた鳩（はと）が殺されようとしたとき、わが身を施（ほ）して鳩を救ったという。

四表（しひょう） 東西南北の四方。世界あるいは国家の意。

四部衆（しぶしゆ） 比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をいう。比丘は男の僧、比丘尼は女の出家すなわち尼、優婆塞は男の信者、優婆夷は女の信者である。

四仏知見（しぶつちけん） 開示悟入（かいじごにゆう）と同じ意。法華經方便品第二、開三顯一の文で、仏の出世の一大事因縁（いちだいじいんねん）を説いて、一切衆生にことごとく仏の知見を開かしめ、これを示し、これを悟らしめ、これに入れしめるために仏は世に出現する意。

四分律（しぶんりつ） 小乗律のなかの一つ。仏滅後百年、曇無德羅漢（どんむとくらかん）が上座部律中から肝要な所を抜集（ぼつしゆ）した律本である。四度にわたって監修（かんしゆ）したので四分律の名がある。

四弁八音（しべんはちおん） 四弁は、仏の有する四無礙弁（むげべん）。一に法無礙弁（ほうむげべん）、二に義無礙弁（ぎむげべん）、三に辞無礙弁（じむげべん）、四に樂説無礙弁（がくせつむげべん）。八音は諸機（しよき）をして聞法し解悟させる仏の音声、言辞をいう。一に極好音（ごくこうおん）、二に柔軟音（にゅうなんおん）、三に和適音（わてきおん）、四に尊慧音（そんねおん）、五に不女音（ふにょおん）、六に不誤音（ふごおん）、七に深遠音（しんえんおん）、八に不竭音（ふけつおん）。

自法愛染（じほうあいぜん） 自己の信ずる法に執着（しゆうちやく）して他人の信ずる法を排斥（はい）すること。末法の折伏行は決して自法愛染ではない。

斥（しやく）すること。末法の折伏行は決して自法愛染ではない。

四菩薩（しぼさつ） ①華嚴經の四菩薩は、法慧、功德林、金剛幢、金剛藏（ぞう）をいう。②金胎両部の胎藏界では、文殊、普賢、弥勒、観音をいう。③法華經の迹門では、文殊、普賢、藥王、観音をいう。④本門では法華經涌出品第十五で突然、大地より涌出した地涌の菩薩の代表であり、上行、無辺行、淨行、安立行の本化の四菩薩をいう。

四無礙（しむげ） 一に法無礙・二に義無礙・三に辞無礙・四に樂説無礙。仏の備えている徳の一つで、何らさわりのないことをいう。

四無所畏（しむしよゐ） 仏菩薩が説法するにあたって、四種の無所畏をうるゆえに怖畏（おそ）するところがなく、勇猛にして安穩であることとの徳をいう。仏の四無所畏と菩薩の四無所畏がある。

四無量心（しむりやうしん） 慈・悲・喜・捨の四心。慈は衆生を愛念し、常に安穩の樂事を求めて饒益する。悲は衆生が六道のうちに、種々の心身の苦を受けるのを愍念し、喜は衆生をして樂いにしたがって、歡喜を得せしめんとし、捨は三種（慈悲喜）の心を捨て、ただ衆生を念じて憎まず愛せざるをいう。

四門觀別・見真諦同（しもんかんべつけんしんたいどう） 四門とは小乗の有門、空門、亦有亦空

四門觀別・見真諦同（しもんかんべつけんしんたいどう） 四門とは小乗の有門、空門、亦有亦空

四門觀別・見真諦同（しもんかんべつけんしんたいどう） 四門とは小乗の有門、空門、亦有亦空

四門觀別・見真諦同（しもんかんべつけんしんたいどう） 四門とは小乗の有門、空門、亦有亦空

四門觀別・見真諦同（しもんかんべつけんしんたいどう） 四門とは小乗の有門、空門、亦有亦空

門、非有非空門をいう。すなわち小乗の悟りを得る修行の方法は四門に分かれているが、真諦を見る、すなわち悟りを得るといふ点についてはいずれも同じであるということ。

遮会 遮はさえぎり、会は会通するの意。

舍衛国 室羅伐悉底、または室羅伐国、舍婆提城、戸羅跋提等という。舍衛はその訛略。意識して聞物、聞者、無物不有等という。憍薩羅國の都城であり、その都城の名をもつて国名となすともいう。

舍衛の三億 釈尊在世に仏法の広宣流布した舍衛國の九億（九十萬）家のうち、三分の一の三億は釈尊の教えを眼のあたりに聞き、三分の一の三億は仏のいることを耳にしたが見たことはなく、また三分の一の三億は見たことはおろか聞いたこともなかったという。したがって全体の三分の一が入信すれば広宣流布といえる。（要語解説一七八頁参照）

釈迦仏像を本尊としない理由 （要語解説二四四頁参照）

娑竭羅竜王 八大竜王の一つ。雨を供給する神で、その宮殿は七宝をもって飾られ、天と異なることがないという。

釈子 一往は釈尊の弟子をいう。再往は文底の釈尊たる久遠元初自受用身の弟子。

寂滅場 寂滅道場に同じ、華嚴經の説処である。

釈尊の一生 （要語解説三三六頁参照）

釈尊の九横の大難 （要語解説五三三頁参照）

釈提桓因王 帝釈天のこと。

迹中化他 本地自行に対する語。釈迦仏法において色相莊嚴の仏が世情に随順して法を説くこと。これに対し本地自行とは久遠元初の自受用身が南無妙法蓮華經を説くこと。

折伏 法を弘める方法で破折屈伏の義。（要語解説二九二頁参照）

（参照）

迹仏 本仏に対する語。一、教に約すれば迹門の仏をいう。すなわち本門久成の釈尊が垂迹して本無今有の一念三千、十界の理常住を説く仏。二、体用本迹に約すれば、凡夫は体の三身だから本仏であるというに對し、用の三身たる仏を迹仏という。三、諸經諸宗に通じて本地仏に對する垂迹化現の仏。御本仏日蓮大聖人以外はすべて迹仏となる。

寂滅道場 釈尊が華嚴經を説いたところ。華嚴經卷一に「是くの如く我れ聞きき一時仏摩竭提國寂滅道場に在りて始めて正覺を成ず」とある。釈尊がはじめて煩惱を寂滅して、無上等正覺を得た場所の意味である。

迹面本裏 天台は法華經迹門を面とし、法華經本門を裏として、理の一念三千を説いた。これを迹面本裏という。

迹門 本門に対する語。法華經二十八品のうち序品第一より

安樂行品第十四までをいう。迹門の肝心は方便品第二にあり、諸法実相に約して理の一念三千を説き、また二乗作仏を説いている。(要語解説八四頁参照)

釈門 仏教界。

迹化の菩薩 本化の菩薩に対する語。法華經の迹門までに来至した迹門の菩薩をいう。すなわち弥勒菩薩、文殊菩薩、などがこれにあたる。

寂光土 真の円仏、本仏の住処をいい、本土という。これに對して実報・方便・同居の三土を迹土という。

寂光の本土 娑婆世界が即仏国土であるとのこと。三大秘法の御本尊を受持する者の住処をいう。

遮那 毘盧遮那仏のことで、遮那とは梵語で、遍一切処という義。法身仏をいう。

娑婆世界 釈尊の教化し主領する仏国土の名。娑婆は梵語。勘忍の義。この世界の衆生は十惡に安忍して出離を肯んじないゆえに名づける。

謝表 謝罪状。

捨閑闍 法然の選択集にある。念仏一宗を建立せんがために、觀經等の浄土三部の經典以外は一切の諸經を廢捨す

るのに用いた言葉。浄土・易行・正行を用いて、聖道・難行・雜行を捨てよ、閉じよ、闍けよ、抛てと説いて、この

四字をもつて一切を迷わした。(立正安國論二三頁参照)

沙弥 沙弥は梵語。旧訳には息慈、息惡、行慈などという。共に惡を止めて慈を行ずるの意である。新訳には勸策男という。男子の出家で、十戒を受けた者の通稱をいう。

沙門 僧侶。善を勧め惡を息むるの意。

沙羅林 中インドの跋提河の畔にあり、釈尊は最後にここで涅槃經を説いて入滅した。

舍利 舍利は梵語で身骨、骨分と訳す。このように遺骨等を舍利というときは生身の舍利とか碎身の舍利といい、法体をさすときは法身の舍利等という。

舍利弗 釈尊の声聞の弟子で、釈尊の初成道より数十年にわたって修行してきた十大弟子の一人である。舍利弗は身子と訳し、智慧第一と称された。

十惡 十種の惡業のこと。十善に対する言葉。殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡、以上を十惡という。初めの三は身に行なう三惡、次の四は口の

四惡、次の三は心の三惡である。

從因至果・從果向因 從因至果は從因向果ともいい、因より

果に至ること。真実究竟せる成仏の理を顯わせるなかで、特に述門における説法としては、迷いの衆生も修行の妙因により成仏の妙果を得ることを明かす。百六箇抄（八五五）にいわく「從因至果・中間今日の本迹、像法の修行は天台・伝教・弘通の本迹は中間・今日の述門を因と為し本門修行を果と為るなり」と。從果向因とは果より因に向かうこと。御義口伝上（七二九）に「末法に至って從果向因の一雨を弘通するなり一雨とは題目に余行を交えざるなり」と。因に向かうとは久遠にたちもどるということであり、百六箇抄（八六三）には「本果妙は釈迦仏・本因妙は上行菩薩・久遠の妙法は果・今日の寿量品は花なるが故に從果向因の本迹と云うなり」またいわく「今日（在世）の本果は從因至果なれば本の本果には劣るなり」（八五五）從果向因は下種独一本門の法門である。信心の立ち場からいえば、御本尊を根本とした場合には從因至果である。釈迦仏法は、八万法蔵から御本尊を見ているから、從果向因である。（要語解説一二八参照）

宗教の五綱（要語解説一三四参照）

十玄 華嚴宗で説く十種の根本原理。智儼の釈による十玄と法蔵の釈による十玄で多少の相違があるが、法蔵の釈によ

つてその名目を示せば、①同時具足相応門 ②一多相容不同門 ③諸法相即自在門 ④因陀羅網法界門 ⑤微細相容安立門 ⑥秘密隱見俱成門 ⑦諸藏純雜具德門 ⑧十世隔法異成門 ⑨唯心廻轉善成門 ⑩託事顯法生解門である。

十号 仏の十号をいう。天竺の俗法に十名あり、天上は利根なので百名を立てるが、釈尊は人界示現なるがゆえに十号を具す。一に如来、二に応供、三に正徧知、四に明行足、五に善逝、六に世間解、七に調御丈夫、八に天人師、九に仏、十に世尊。以上の十号について世間解を無上士と世間解に開して二となし、仏までで十号を成じ、以上十号の徳を具するがゆえに世尊という、とする説もある。

周公旦 周の文王の子で武王の弟、姓は姫、名は旦という。

文王の死後、武王を助けて紂王を討ち、天下を統一し、また武王の早逝した後は、幼い成王をよく助けて周の天下が安泰する基を成した。

鷲子 舍利弗のこと。鷲子とは鷲の子で、舍利弗の眼がこの鳥に似ているところからこの名がある。

十四誹謗 法華経譬喻品の文から十四種の誹法を立てる。一に憍慢、二に懈怠、三に計我、四に淺識、五に著欲、六に不解、七に不信、八に聲譽、九に疑惑、十に誹謗、十一に

輕善、十二に憎善、十三に嫉善、十四に恨善。（要語解説）

二九九（参考）

十重禁戒 十重の罪を禁じ戒めること。殺生戒、偷盜戒、

邪淫戒、妄語戒。酤酒戒、談他過失戒、自讚毀他戒、慳生

毀辱戒、瞋不受謝戒、毀謗三宝戒の十戒をいう。

十住心 弘法所立の真言宗の教判。大日經の住心品に基づ

いて、衆生の心の安住するところに十個の品等を分けて、

その思想の高下・優劣を判じたものである。

從地涌出品 （要語解説六八（参考））

十誦律 小乗律のなかの一つ。小乗の薩婆多部には八十誦あ

ったが、後に略して十誦とした。

十乘 十乗觀法のこと。天台が「摩訶止觀」で述べたも

の。一に觀不思議境、二に起慈悲心、三に巧安止觀、四に

破法遍、五に識通塞、六に修道品、七に對治助開、八に知

次位、九に能安忍、十に無法愛。十境に對してこの十乗觀

法を修するのである。

十神力 法華經神力品において釈尊は十種の神力を現じて上

行菩薩に法を付屬している。その十種とは、出広長舌、毛

孔放光、一時譬喩、俱共彈指、地六種動、普見大会、空中

唱聲、咸皆歸命、遙散諸仏、十方通同。

十善戒 殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、

瞋恚、愚癡の十事をかたく行じないことを十善戒という。

十大弟子 釈尊の十人の高弟をいう。すなわち大迦葉、阿難、

舍利弗、須菩提、富樓那、目犍連、迦旃延、阿那律、優婆

離、羅喉羅。（要語解説五二（参考））

十大部 日蓮大聖人の重要御書十編をいう。第二祖日興上人

の選定されたもので、唱法華題目抄、立正安國論、開目抄

觀心本尊抄、撰時抄、報恩抄、法華取要抄、四信五品抄、

下山御消息、本尊問答抄の十書。（要語解説二一六（参考））

十二因緣 三界における迷いの因果を十二に分けたものであ

る。（要語解説二九（参考））

十二入 六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）と六境（色・声・

香・味・触・法）であり、入とはその關係を意味する。十

二処ともいう。

十二部經 仏教の經文の、形式上の類別を十二に分ける。一

に修多羅は長行で長短の字数にかかわらず義理にしたがつ

て法相を説く。二に祇夜は重頌といって前の長行の文に応

じて重ねてその義を述べる。三に伽陀は長行を頌せず偈句

を説く。四に尼陀那是因緣として一切の根本緣起を説く。

五に伊帝目多是諸菩薩弟子過去世の因緣を説く。六に闍多

伽は仏・菩薩の往昔の受生のことを説く。七に阿浮達摩は
仏の神力不思議等の事実。八に婆陀は機根の劣れる者のた
めに譬喩をかりて説く。九に優婆提舍は問答論難して隠れ
たる義をあらわす。十に優陀那は無問自説。十一に毘仏略
は大乗方等經典のその義広大にして虚空のごとくなるをい
う。十二に和迦羅は弟子等に対して成仏の記別を授けるこ
とをいう。

十如是 法華經方便品の略開三顯一の文であり、一念三千の
法門の出処である。諸法実相を相・性・体・力・作・因・
縁・果・報・本末究竟等の十如是として、宇宙のあらゆる
森羅万象や依正をあらわした。一瞬の生命を分析して、こ
の十に分けることができるのである。御本尊のことを一念
三千というが、十如是というのは、御本尊のお姿を略して
説いたものである。（要語解説一八四頁参照）

十八空 般若經の十八空と、法華經安樂行品の十八空がある。
一内空（般若）二不顛倒（法華）、二外空二不動、三内外
空二不退、四空空二不転、五大空二如虚空、六第一義空二
如実相、七有為空二不生、八無為空二不出、九畢竟空二無
所有性、十無始空二不起、十一散空二無障、十二性空二無
名、十三自相空二無相、十四一切法空二一切語言道断、十

五不可得空二実無所有、十六無法空二無辺、十七有法空二
無量、十八無法有法空二無礙。（順不同）以上十八空を一
切法空の下に統歸する。日蓮大聖人は一代聖教大意（四〇
四頁）に「般若經・開会の文は安樂行品の十八空の文」と
述べておられる。

周武 周の武王で西伯の子。殷を滅ぼして天下を統一し、周
と号した。すでに父の西伯は死んでいたが父を推して文王
とした。

十不善業 十種類の業因をいうのであつて、殺生・偷盜・邪
淫は身に行なう三悪、妄語（うそをつく）・綺語（おせじ
をいう）・両舌（二枚舌を使う）・惡口は口の四悪、貪欲
（欲張り）・瞋恚（いかり）・愚癡（ばか）は意の三悪、
以上十悪である。

十仏刹・十仏刹塵 仏刹は仏土のこと。十仏刹は十の仏土す
なわち十の三千大千世界をいう。十仏刹塵は、すなわちこ
の十の三千大千世界を微塵にした、その測り知れない数を
いう。

從本垂迹 「本より迹を垂る」と読む。本とは本地、迹と
は垂迹の意。仏・菩薩が本身は本住の地にあつて衆生利益
のためにさまざまな境涯に応化身を示して化導すること。

從本垂迹如月現水とは「本より迹を垂れ月の水に現るが如し」と読み、從本垂迹はあたかも月が水に映っているようなものだということ。

十妙 天台が「法華玄義」で述べたもの。迹門に、境・智・行・位・三法・感応・神通・說法・眷屬・利益の十妙。本門に、本因・本果・本国土・本感応・本神通・本說法・本眷屬・本利益・本涅槃・本壽命の十妙がある。

十無上 天親菩薩の法華論に、法華經の七譬・三平等について釈しているのが十無上である。十種無上の義を顕わすといわれ、種子無上、修行無上、増上力無上、令解種無上、清淨国土無上、說無上、教化衆生無上、成大菩提無上、涅槃無上、勝妙力無上のこと。

十喻 法華經は諸經中第一であることを藥王品に十喻をあげて述べている。一山喻・二水喻・三衆星喻・四日光喻・五輪王喻・六四果辟支仏喻・七帝釈喻・八大梵王喻・九菩薩喻・十仏喻で、仏喻の例をあげるならば「仏はこれ諸法の王なるが如くこの経も亦復是くの如し。諸經の中の王なり」と。
十羅刹 法華經陀羅尼品に出ている。日蓮大聖人は「十羅刹女仏道を成ず」また「十羅刹女と申すは十人の大鬼神女・四天下の一切の鬼神の母なり・また十羅刹女の母あり・鬼子

母神是なり乃至善鬼は法華經の怨を食す」(日女御前御返事一二四六頁)と仰せられている。十羅刹女は法華以前にあつては悪鬼であつたが、法華經においては善鬼として成仏した。法華經を護持するもの、すなわち御本尊を受持するものを守護する働きを持つ。(要語解説五一頁参照)
從藍而青 天台の止觀にある言葉で「青は藍よりいでて藍より青し」と読む。一般的には青色は藍よりつくられるが、その色を重ねればもとの藍色よりも濃くなる。このことから師匠以上に弟子が立派に成長していかなばならぬとの譬えである。末法今時に約せば、大御本尊の偉大さ、信心の偉大なることをいった言葉である。

十六王子 大通智勝仏が出家した時の十六人の王子をいう。この十六王子は父が出家し成道するのを見て、共に仏所に行つて大法を聞くことを請うた。その後仏は、妙法蓮華經を説いて禪定にはいり、八万四千劫を過ぎて三昧よりたつて、十六王子を賛嘆して、まさに作仏すべしと告げた。この十六王子のうち、第九が西方の阿彌陀であり、第十六が娑婆世界の釈尊である。御義口伝上(七三四頁)には「十とは十界なり六とは六根なり王とは心王なり子とは心数なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、今日蓮等の類い南無妙

法蓮華經と唱え奉る者は十六王子なり八方作仏とは我等が

八苦の煩惱即菩提と開くなり云云」とある。

授学無学人記品 (要語解説六四〇参照)

授記 十二部經の一つである。經中において、仏が発心の衆生に對し、当来作仏の記別を授与する部分をいう。また、仏が記別を授けたもうことをいう。

受記品 (要語解説六二〇参照)

儒教 (要語解説四二二〇参照)

宿縁深厚 (要語解説二八五〇参照)

宿業 宿習、宿縁とほぼ同じ意。過去世の身口意の業因により、今世に苦樂の果報をうけることをいう。良い宿業と悪い宿業とがあるが、一般に悪い方の意味に使われる。

宿種 過去世に植えられた仏種。末法の衆生は久遠元初に大聖人の仏法にあつて下種をうけた。

宿習 現世に福運をもつて生まれたり、苦惱の生活をしなければならぬという苦樂の果報は、過去世における善惡の行為が原因となつてゐる。これを宿習という。

受決作仏 仏より記別を受けて仏としての劫・国・名号が決定すること。成仏の印可を与えられること。

授決集 天台宗寺門派の開祖・智証の著二卷。彼が入唐(留

学)して学びえた手記を一本として、文を上下に分けて授決集と名づけたもの。

儒家・道家 儒家は孔孟の流れ、道家は老莊の流れをいう。

儒外内 儒教と外道と内道。中国古代の聖人たる三皇が説いた教を三墳といい、五帝の書を五典といつて、儒教はこれを源とし、各種流派を生じたが、今日は老莊の道教をも含めて儒教と称せられている。孔子が集大成した。同じく古代インドでバラモンの哲学が隆盛し、その流派が九十五派にも分かれて論争している時に釈尊が出世して仏教を説いた。仏教を内道といいバラモン等を外道と呼ぶ。

守護付嘱 仏の付嘱の三義(弘宣、伝持、守護)の一つ。佛法を護る付嘱なので守護といい、その付嘱の人は帝王であるから帝王付嘱ともいう。仁王經や涅槃經に、この原理が説かれている。すなわち覺徳比丘を護つた有徳王はこれにあたる。王仏冥合の実現をめざし総本山富士大石寺を守護し、この原理を實踐しているのは創価学会といえる。

主師親 一切衆生は皆、親に育てられ、師匠によつて智をみがかれ、主人に養われるゆえに、これを尊敬すべきであると開目抄にある。また、主師親の三徳を備えられた方を仏と申し上げる。「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」と

（開目抄二三七）と。（要語解説二五四）参照）

受持即觀心（要語解説二六三）参照）

種子無上 天親菩薩の法華論に説かれている十無上のなかの

一つである。法華經の種子の無上であることを説いたもの。

種熱脱 種熱脱の法門は仏法を論ずるにあたって肝要なこと

である。すなわち、下種し熟し脱するの過程が明らかにさ

れたのは、法華經の迹門化城喻品において、大通下種三千

塵点劫の法門が最初であり、次いで、本門寿量品において

は、五百塵点劫以来の種熱脱が明らかにされて、師弟の遠

近が説き示されている。釈迦仏法においては五百塵点劫の

下種より、大通仏および爾前四十余年・法華經の迹門まで

を熟益として、本門寿量品にいたって脱せしめるのが文上

至極の義である。末法においては寿量文上の脱益の仏法は

利益がなく、文底下種仏法のみが、末法の衆生を救う利益

がある。（要語解説一九七）参照）

種姓高貴 生まれながら貴い家柄であるということ。

衆生所遊樂 寿量品第十六の自我偈の一句で「衆生の遊樂す

る所なり」と読む。御本尊を持つ衆生が、その功德により遊

樂している姿をいう。日蓮大聖人は四条金吾殿御返事（一一

四三）に次のように仰せられている。「一切衆生・南無妙

法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に云く『衆生所

遊樂』云云、此の文・あに自受法樂にあらずや、衆生のう

ちに貴殿もれ給うべきや、所とは一閻浮提（世界）なり日

本国は閻浮提の内なり、遊樂とは我等が色心依正ともに一

念三千・自受用身の仏にあらずや、法華經（御本尊）を持

ち奉るより外に遊樂はなし」と。

衆生無辺誓願度 「衆生の無辺なるを度せんと誓願す」と読

む。四弘誓願の一つ。菩薩が無量の衆生を生死の苦より救

い尽くさんと誓うことをいう。四弘誓願とは、衆生無辺誓

願度、煩惱無數誓願断、法門無尽誓願知、仏道無上誓願成

であつて一切諸菩薩に共通の誓願である。

地涌千界 地涌は涌出品第十五において大地より涌出した本

化地涌の菩薩。千界とは神力品第二十一で「千世界微塵等

の菩薩摩訶薩、地より涌出せる者」等とあり、地涌千界は

六万恒河沙の地涌の菩薩をいう。

修禪寺相伝日記 伝教大師の記。二卷。第一卷は止観大旨、

第二卷は法華深義を説く。「修禪寺相伝私注」と合して

「修禪寺決」という。

須扇多仏 小品般若經に説かれている仏。須扇頭、須延頭とも

いう。甚浄または極浄と訳す。菩薩を化導するために仏と

なり、半劫の間菩薩のために法を説き、記別を与えおわつて滅度したといわれる。

須陀洹 小乗の聖者の位、四果の一つ。須陀洹は梵語。または須陀般那・窄路多阿半那・窄路多阿鉢囊という。古くは入流・至流・逆流などと訳し、新しくは預流と訳す。

種脱相對 (要語解説一四三頁参照)

須達長者 須達は梵語。訳して善与・善給などという。仏在世の舍衛国の長者である。あつく仏法を信じ、祇園精舎を造つて仏に奉つた。

修多羅 修多羅は梵語。漢語には經と訳す。その説くところ、よく理にかなひ、機根に合する意。

修多羅論、**修多羅白論** 修多羅とは經のことで、それぞれ不了義經、了義經と同じ意味。

出世間 世間に対する語。世間を出ること。総じて仏法をいう。仏教には、小乗・大乘・權教、實教、種々あるが、要するに世間六道を出ることを説く。声聞乘、緣覺乘等も同様である。まして菩薩乘、仏乘はみな世間を超出する。

出尊形の仏 尊形を出でたる仏という意で、色相莊嚴の仏に對して、凡夫そのままのお姿の仏をいう。すなわち、末

法の御本仏日蓮大聖人のことである。

出離生死 釈迦仏法では三界六道の生死の迷いを出で離れることであるが、日蓮大聖人の仏法では、生死即涅槃・即身成仏と、あきらかに悟ること。生死は生死の本質の姿、生命の真相をいう。

鷲頭・鷲足 鷲頭は王舎城の東北の靈鷲山のこと。鷲足は王舎城の西で迦葉の入定した所。

儒童菩薩 釈迦仏因位の時の名。瑞応本起經等に説かれる。

昔、五茎の蓮華を五百の金銭で買い取り、定光菩薩を七日七夜供養したという。

地涌の菩薩 宝塔品より仏が滅後の弘經を勧進し、大菩薩衆は勸持品で滅後弘經の誓願を立てたが、涌出品にいたつて

「止みね善男子」とて、諸大菩薩の弘經を制止したとき、

突然、大地より涌出した菩薩のこと。釈尊の久遠以来の弟子であり、本化の菩薩といわれる。末法においては、別しては日蓮大聖人が地涌の大導師・上行菩薩の再誕であり、総じてはわれわれをいう。(要語解説一六三頁参照)

鷲峯・雙林の日月 鷲峯は靈鷲山、雙林は沙羅林で、それぞれ法華經および涅槃經の説所であり、鷲峯・雙林の日月と

は、法華經および涅槃經をあらわす。

須菩提尊者 須菩提とは梵語、また蘇部底、須扶提とも書

く。空生・善吉・善業・善現等と訳す。釈尊十大弟子の一人で、舎衛国の長者・鳩留の子。よく空理に通じていたので解空第一と称せられる。

須弥 須弥山のこと。古代インドの世界観であつて、世界の中央に須弥山、その高さは水面より八万四千由旬、水底また八万四千由旬、全体の高さは十六万八千由旬という高山があり、これを輪状に囲んで八つの山があり、おのおのの山と山とに囲まれた部分に海があり、そのいちばん外側の山に囲まれた海の中に四州（四つの大陸）がある。東方を弗婆提、南方を閼浮提、西方を瞿耶尼、北方を鬱單越という。月日もこの須弥山を中心として運行するとしている。

須弥山 妙高または安明と訳す。インド古代の世界観で、世界の中央にある山。その周囲に九山八海があり、須弥山の四方に四州がある。南方にある州を閼浮提という。

樹木火 仁王經の七難のうちの第三難・諸火梵燒難の一つ。

日照りが続き大氣が乾燥して、樹木から火が出る。いわゆる山火事のこと。

修羅と帝釈 觀仏三昧經によれば、毘摩質多羅阿修羅王が乾闥婆大王の女を娶って一子舎脂を生み、帝釈はこれを妻としたが、後に舎脂は帝釈を嫉んで父の毘摩質多羅に讒言し

たので、修羅は帝釈の喜見城を攻めたために虚空から大刀輪が落ち下つて修羅の四肢を切り落としたので、修羅はついに遁走し、小身となつて阿耨池の蓮の糸孔の中に隠れたという。

壽量品の三妙合論 （要語解説一六六頁参照）

就類種・相對種 始聞仏乘義（九八二頁）に「夫れ末代の凡夫法華經を修行する意に二有り一には就類種の開會二には相對種の開會なり」とあり、法華經を修行する根本的意義を明かしたものである。「就類種の開會」とは、すべての衆生が共通かつ本然的にもっている正・了・縁の三因仏性が、三大秘法の南無妙法蓮華經を唱えることによって開発され、仏になれるということである。

始聞仏乘義（九八三頁）には「其の就類種とは釈に云く『凡そ心有る者は是れ正因の種なり随つて一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ縁因の種なり』等云云」と。また「相對種の開會」とは、衆生が本来具足している煩惱・業・苦の三道を、三大秘法の御本尊を受持し、題目を唱えることによつて、そのまま法身・般若・解脱の三徳と轉じて即身成仏する義である。

始聞仏乘義（九八三頁）には「其の相對種とは煩惱と業と

苦との三道・其の当体を押えて法身と般若と解脱と称する
是なり」とある。

鷲嶺 王舎城の東北にある靈鷲山のこと。

純円 純は二乗、三乗等の方便をおびないで一仏乗即身成仏
の意。円は偏することなく円融円満で欠けるところがない
という意。すなわち絶対に成仏できる高い教えをいう。

順縁 折伏をうけてすなおに入信し、この世で功德をうけ幸
福になる者。反対に正法に反対し、罰をうけて、後に帰依
する者は逆縁の衆生といわれる。法華取要抄（三三六頁）
に「逆縁の為には但妙法蓮華經の五字に限る、例せば不輕
品の如し我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり」とある。

（要語解説二九四頁参照）

順縁広布 逆縁広布に対する言葉。正法をすなおに聞いて信
心修行に励む衆生が多い広宜流布の姿をいう。法華經不輕
品第二十に説かれるように、不輕菩薩を迫害した者とは逆
縁広布を意味し、千劫阿鼻地獄に落ち大苦惱をうけ、その
罪を畢え已つてとは逆縁の功德を示し、後に不輕菩薩の教
化をうけ成道したとは順縁広布を示す。大聖人のご在世や
第二次世界大戦までは逆縁広布であり、現在は順縁広布と
いえる。なお大聖人ご在世中においても、法華取要抄（三

三六頁）に「我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり」とある。

順現業・順次生業

この二つに順後業を加えて三時業とい
う。順現業とは現在の世につくった業因が、現在の世に業
果となつて報いくる業。順次生業とは順次生ともいう。今
生の次の未来の世、次の生のこと。今生より来世、来世よ
りまた次の世へと生まれていくこと。順次に次第し無始無
終に連続する生命活動に厳然と因果の理法が存する。順次
生に向上と向下の二義がある。向上は正法を受持したため
の成仏への直道であり、向下は正法誹謗のため無間地獄へ
落ちる者の未来世である。順後業とは現在世になした業因
が、再来世以後に、果となつて現われる宿業。

純陀 釈尊の弟子。大工の子といわれる。釈尊は、純陀の家
で入滅し、そのとき、最後の供養を捧げた人といわれる。

章安大師 （要語解説三七一頁参照）

勝意比丘 過去、師子音王仏の末法の時代に出現した謗法の
僧。よく禁戒を護持し四禪四無色定を得て十二頭陀を行じ
ていたが、喜根比丘が師子音王仏の末法に諸法実相の義を
説いて世法を捨てなかつたとき、その説を喜ばず、衆僧の
なかで毀り、生きながら地獄に落ちた。

摂引門 一切の機をおさめて引導し、高きに誘うの門。すな

わち真実の教えに摂引すべき方便の門。

盛焰 じやうえん 阿鼻地獄の火焰の盛んなこと、転じて阿鼻地獄のこと。

勝応身 しょうおうじん 応身とは衆生を救うために衆生の機根にしたがつて

応現する仏身をいう。応身には勝応身と劣応身がある。勝

応身は、七宝菩提樹下に座して天衣をもつて座となし、す

ぐれた応身を現じ、小身または大身の姿を示す。大乘の初

門たる通教の仏身である。(要語解説四八頁参照)

正観 しょうかん 邪観に対していう。中正真実なる観念・観法・観行・

観慧等をいう。また止観の第六章までを方便とし、第七章

(第五卷)が正観章となっている。われわれから見ると

ば成仏ということになる。

貞観政要 じやうかんせいよう 唐の史臣・呉兢のまとめた書。四十編に分類され、

九卷にまとめられている。太宗が賢臣・魏徵等と政事を論じ

た語を四十門に分けて編録したもの。貞観は、当時の年号。

正勸付嘱 しょうかんふしよく 勧め励まして付嘱すること。題目の勸奨である。

法華經神力品第二十一で、釈尊は上行菩薩に妙法蓮華經を

付嘱し、滅後においての受持を勧め励ましており、天台は

文句で、この神力品の結要付嘱の依文を四つに分け「称嘆

付嘱、結要付嘱、正勸付嘱、釈勸付嘱」としている。

調機調養 じやうきじやうよう 衆生の機根を調べ、養い、熟せしむること。低い

教えから高い教えへ導くことを調機といい、調機された衆

生の機根をよくするため教化し養うことを調養という。す

なわち釈迦仏法で法華經を説く以前の四十二年間、はじめ

小乗教で誘い入れ、次に方等・般若の教で教導し養成した

が、この期間が調機調養である。その後、法華經で成仏の

記別を与えた。しかし、末法は直達正観の南無妙法蓮華經

のみ功德がある。(如説修行抄五〇一頁参照)

承久の合戦 じやうきうのかっせん 鎌倉幕府が成立してから、武家に政権が移り

天皇側に力がなくなつたため、後鳥羽天皇を中心として土

御門、順徳天皇等が側近とかたらい、近畿東国等の将兵を

集めてその機を待ったが、その大事が幕府にもれてむなし

く敗れてしまふ。三皇はそれぞれ、隠岐・佐渡・土佐の三

島に流された。このことについては、日蓮大聖人が、種種

御振舞御書(九二一頁)に「弘法大師の邪義・慈覚大師・智

証大師の僻見をまことと思ひて……あだみ給ひしかば還著

於本人として其の失還つて公家はまけ給ひぬ、武家は其の事

知らずして調伏も行はざれば勝ちぬ」とご教示のように、

真言の邪法をもって、倒幕の祈りをしたために、その事が

わが身にかえつて、敗れたのである。

上宮太子 じやうぐうたいし 三十一代用明天皇の第二皇子、聖徳太子のこと。敏

達元年正月一日、手に仏舍利を握り、身より光明を放つて、厩の中で誕生されたので、厩戸太子ともいう。八人の奏事を一時に聞かれたので、八耳の王子、または耳聰王子ともいう。南宮上殿におられたので、上官太子と名づけられ、また日本にっぽんの聖人であるから聖徳太子というのである。

定共道共 定共戒と道共戒。定共戒は静慮律義とも訳し、三種戒の一つで禪定を修するなかに、自ら防非止惡の徳ある戒。よく色・無色界に生まる、道共戒は無漏律義とも訳し、同じく三種戒の一つで、見惑断の無漏見道の智慧を、自ら備える防非止惡の徳。

昭君 王昭君のこと。斉國王穰せいかうの女、漢の元帝の宮女。帝は後宮が多いので絵に書かせ、その絵を見て寵愛した。宮女はみな画工に賄賂を贈ったが、昭君は美貌を恃んで賂しなかった。画工はこれを憎んで醜図にして帝に渡した。後に匈奴が攻めてきて美人を求めたとき、帝は醜図の昭君を行かせたが、辞する折に昭君を見て帝は大いに悔恨したが、およばず、昭君は怨思をいだいて匈奴に行ったという。

貞元入藏録 唐の徳宗の貞元年中に、僧円照が勅命によって選んだ經卷の種目。

成劫 仏教では世界が成・住・壞・空の四劫を順環すると説

く。成劫とは一つの世界が成立する期間。一つの生命が誕生して成長する期間をいう。

定業 生死の苦果を受けるのに定まった業因をいう。これは善惡の二ある。善の定業は必ず樂果を受け、惡の定業は必ず苦果を受ける。また善惡の定業におのおの三種があり、善惡の業を造つて、その世に直ちに苦樂の果を感じるのを順現受業といい、一世を隔ててその果を感じるのを順次生受業という、そして二世以上を隔て、その果を感じるを順後受業という。以上ともに定業中の差別である。可延定業書（九八五頁）に「業に二あり一には定業二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや、法華經第七に云く『此の經は則為閻浮提の人の病の良藥なり』等云云」とある。

定光菩薩 錠光仏すなわち燃燈仏のことで、釈尊が過去に儒童菩薩のとき、五莖の蓮華をこの仏に供養した功德で釈迦仏となったという。

淨居天 色界の十八天の最上の五天をさす、すなわち無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟天の五種の天界をいい、阿那含、阿羅漢という悟りを得た声聞の住所とされている。これを五那含天ともいう。

定散 浄土宗で立てる行法で、定善と散善の略。十六観を説

き初めの十三観を定善と称し、余の三観を散善という。

商山の四皓 綺里季、東園公、夏黄公、甬里先生の四人をい

う。秦の暴政を避けて商山に隠遁した隠君子である。漢の高

祖のとき、高祖が如意太子を廃して戚夫人の子・趙を太子に

立てようと欲した。如意太子の母はこれを憂慮して張良に

謀り、この四人の隠君子を招請して如意太子の補佐役とし

た。如意太子が高祖に謁見のとき此の四人を従えてはいる。

高祖は四人の年齢八十余り威風堂々たる人物を見てこれが

かねて崇めていた商山の四君子であることを知り、この四

人が補佐する太子の廢嫡の不可能なることを悟り、その決

意を翻したという。この如意太子が即位して恵帝となった。

生死一大事血脈 生死一大事血脈とは妙法蓮華經の略名であ

る。「夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり」と。

「生死」とは生老病死といつて苦しみと訳す場合がある。

また生生死死として、旋火輪のように永遠に伝わっていく

生命の実体と説く場合もある。この場合の生死とは生命と

いうことである。「一大事」とは妙法蓮華經のこと。「然れ

と解りて妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の血脈とは

云うなり」と。御本尊に題目をあげて、永遠の生命を會得

することが生死一大事血脈である。また「三世の生死に法

華經を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり乃至異

体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る處を生死一大事の

血脈とは云うなり」と。永遠に御本尊を離れず、和合僧の

なかにはいつて広宣流布に向かつて仏道修行することはい

うのである。（要語解説二六九頁参照）

小止觀 天台大師の作。修習止觀坐禪法要の異称で童蒙止觀

ともいう。大師の俗兄・陳鍼のために説いた。具緣・訶

欲・棄蓋・調和・方便・正修・善發・覺魔・治病・証果の

十章として、止觀を修するを明かしている。

正直捨方便 法華經方便品第二の文。法華以外の諸經を廢捨

することをいう。釈尊が説く眞實の教えは一つであるとい

うことを述べているのである。

生死即涅槃 生死とは迷いであり、涅槃とは悟りをいう。生

死がそのまま涅槃になつて生死の体も涅槃の体も一体不二

であることをいう。また、煩惱即菩提ともいう。

生死の河 煩惱に支配された迷いの生活、地獄から天界まで

の六道を輪廻する生活をいう。

摂折二門 摂受と折伏との二門。摂受は摂引容受の義で、

相手の違法を容認しつつ次第に誘引していく化導であり、

折伏とは破折屈伏の義で、あくまで相手の謗法を破折し正

法に帰伏せしめる化導方法である。このように摂受と折伏

は水火のごとく相容れない法門である。しかし、正像年間、

熟脱の機根のためには摂受が必要であり、末法には折伏を

肝要とする。(要語解説二九二頁参照)

小邪未覆 小乗教・邪教・未得道教・覆相教の略称。観心本

尊抄(二四九頁)の文底下種三段を明かす文中にあり、一

品二半(御本尊)よりの外は小乗教・邪教・未得道教であ

り、真実を覆いかくす覆相教であるとの意。

生住異滅 四有為相とも名づける。この四相に大小の別があ

る。大の四相とは①生の相。生命が母の胎内より生ずる。

②住の相。世間に長じて住する。③異の相。美少年が白髪

の老人になる。④滅の相。命が終わって死ぬ。次に、小の四

相とは、刹那の生滅をいう。①生の相。生命は一つの縁に

あうと一念が生ず。②住の相。その一念が念々住する。③

異の相。次の瞬間一念が変化してとどまらない。④滅の

相。対境の縁が変化すると先の一念が滅する。小の四相は色心両面に通ずる。

成住壞空 四劫のこと。宇宙、生命その他一切のものの流

転の方軌。たとえば地球の成立は成劫、衆生が住むのは住

劫、三災で破壊されるのは壊劫、消滅して空となるのは空

劫である。

正宗分 仏経を講ずるについて、総じて、序分と正宗分と

流通分とに分けるのを三段分文という。序分とは、まさに

説かんとする教義を開明する準備的部分。正宗分とは、そ

の主たる教義開説の部分。流通分とは、その主たる教義の

宣伝についての用意を明かした部分である。

小乗・大乘 教法を乗り物に譬え、小乗は小さい乗り物で

少数の人、わずかの人を救う教え、大乘は大勢の人全体の

人を救う教えである。

清浄法行經 菩薩が応現することを説いた經。儒教と仏

教との関係が説かれている。後世の儒学者はこれを偽經と

いう者があるけれども、孔子自身が儒教を仏教の初門とな

している。また天台大師、妙楽大師の釈等これを見るべき

である。

生身得忍 母より生じた肉体のままで、中道の無性法忍とい

う境涯になつたものをいう。無性法忍は無生忍ともいい、

不生不滅の実相を忍和して決定安住する位。(總勘文抄

五七一（参照）

生身の仏 法身の仏に対する言葉。五体をもつて実在する仏。

常隨給仕 弟子が常に師に随ひ給仕すること、仏道修行の

根本であり弟子の真実の信心の姿である。法華經提婆達多

品第十二には、過去の釈尊が阿私仙人に千歳給仕したことが

説かれる。また末法では第二祖日興上人が大聖人に佐渡

や伊豆でも常隨給仕された。

証前起後 天台の文句に、法華經見宝塔品第十一の多宝の塔

を釈した言葉である。すなわち見宝塔品で多宝塔が涌現し

て、多宝如来が「善哉善哉……妙法華經皆是真実なり」と

証明したのは前十品の迹門の真実なることを証明したので

あり、これを証前（迹門を証するの意）の宝塔といい、次

に多宝塔を開かんがために十方分身の諸仏を集め二仏並座

して、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して寿量品

（本門）を説く起となる。これを起後（本門を起すの意）

の宝塔という。以上のように、多宝の塔は二つの意があり、

一はすでに説いてきた迹門を真実なりと証明するため、二

には後に本門を説き起すためである。そして、この証前

起後に傍正があり、証前は傍、起後は正である。また本迹

と滅後末法を比較するならば在世は傍、滅後は正である。
すなわち証前起後の宝塔というも、まったく末法弘通の三
大秘法の本尊を説き起すためであり、かつこれを証明す
るために説かれていたのである。
淨藏・淨眼 法華經の妙莊嚴王本事品第二十七に説かれ
ている。過去の世に雲雷音宿王華智仏という仏が出現して
いた。そのときの王が妙莊嚴王で夫人を淨德夫人、二人の
子を淨藏・淨眼といった。淨藏・淨眼は母とともに仏の
教えを信じ父にも信仰するように勧めたが、父の王はこれ
に反対した。よって二人の兄弟は母とともに大いに仏道修
行を励み、ついに父を入信させて仏道を成就することがで
きた。釈尊は、いま法華經の会座にいる薬王・薬上の菩薩
が、すなわちその淨藏・淨眼であると説いている。（要語
解説一一三（参照））
誠諦 悟り。
青提女 生提女とも書き、目連の母。慳貪のゆえに餓鬼道に
落ちた。目連が神通を得て初めてこれを知り、仏に請い
ようやく救うことができたという。
称歎付嘱 称歎して付嘱すること。付嘱の法体である本門の
本尊の功德を歎ずること。天台は文句に法華經神力品第二

十一の結要付嘱の文を釈して、一に称歎付嘱、二に結要付嘱、三に正勸付嘱、四に釈勸付嘱の四つに分けている。日寛上人は依義判文抄に「初めに称歎付嘱とは將に之を付属せんとするに先ず所属の法体・本門の本尊の功德を歎ず故に称歎付属と云うなり」といわれている。

聖徳太子 厩戸皇子、上宮太子ともいう。第三十一代用明天皇の第二皇子。人王三十四代推古天皇のとき、四天王寺を建立し、法華經、淨名經、勝鬘經を置き、大いに仏法の興隆をはかった。

淨徳夫人 法華經の妙莊嚴王本事品第二十七にある。妙莊嚴王の夫人。二人の子供を淨蔵・淨眼という。(要語解説

一一三(参考)

淨土三部經 淨土宗、真宗の依經としている無量壽經、觀無

量壽經、阿彌陀經の三部經をいう。方等部に属す。

淨土宗の教義 (要語解説一一(参考))

淨土の三師 中国淨土宗の祖。曇鸞、道綽、善導の三人を

いう。

淨土門 中国淨土宗の祖・道綽の安樂集の文で、聖道門に対

する語。道綽は釈迦一切經のうち法華經を除く大小乗教を

聖道、淨土の二門に分け、聖道を捨て淨土に帰すべきであ

ると邪義を説いている。

商那和修 商那は衣の名。付法蔵の第三祖で、過去に商那和修が商主として諸の賈客五十人と共に、大海にはいつて珍宝を採取せんとした。そのとき、辟支仏の身が重病にかかつて苦しんでいるのを見てこれを療治し、心を尽くして看病したところ、ついに病が治って体力充足した。そして辟支仏に衣を供養した。後にそのことが因となって、商那和修は生まれながらにして商那衣を着ており、生々世々に衣は身を離れずにいたのでかくいわれている。(要語解説三三

七(参考)

聖人 世間、出世間ともに通ずる語で、賢人より優れた場合に用いる。仏法上では仏を意味し、聖人知三世事(九七四(一))に「委細に三世を知るを聖人と云う」とある。また正しい仏法を弘める僧の意。

小の三災 穀貴、疫病、兵革のこと。大の三災とは火災、水

災、風災。

少病少惱 仏の境界では病氣をしても少なく病み、煩惱も

少ないという意。

常不輕菩薩品 (要語解説七二(参考))

生仏一如 衆生と仏とが一体になること。すなわち妙法によ

つて即身成仏するをいう。

正法一千年間の弘教 (要語解説一六九頁参照)

正法眼蔵 禪宗で引用する「大梵天王問仏決疑經」(これは

偽經)に出てくる語。正とは正邪相對の正ではなく絶対中

正の心体、法とは心体より顯現する方法、眼とは心体をも

つて事々物々を照知する能力、蔵とは心体は一切方法を含

蔵するのをいうといっている。道元に同じ名の書がある。

淨飯王 釈尊の父で、インドの迦毘羅衛国の城主。提婆達多

の父・斛飯王の兄にあたる。ゆえに釈尊と提婆達多是從兄

弟同士になる。撰時抄(二五七頁)には淨飯王は釈尊に法

を聞き歡喜したことが説かれていた。

上慢の四衆 法華經不輕品第二十に出てくる増上慢の四衆の

こと、上慢とは七慢の一つ増上慢のこと。四衆とは比丘、

比丘尼、優婆塞、優婆夷のこと。上慢の四衆は不輕菩薩を

迫害し千劫阿鼻地獄に落ち大苦惱をうけたが、逆縁により

後にまた不輕に救われた。

証明と舌相 法華經宝塔品に多宝如来が出て釈迦牟尼仏の

所説は「皆是真実」と証明し、また神力品では十方分身の

諸仏が舌相梵天にいたって釈尊の所説が真実であることを

証明している。爾前の諸經でも証明はあるが、法華經とは

ぜんぜん比較にならない。

正妙二本 正法華經と妙法華經のこと。

杖木瓦石 杖木とは杖あるいは棒などの類、瓦石および瓦礫

は、瓦のかけらあるいは石ころなど。法華經の行者が、折

伏するときにうける迫害である。

声聞 声聞界、声聞道ともいう。十界、二乘、三乘、七方便

の一つ。仏の教える声を聞いて悟る人の意。弟子とも訳す。

声聞を生命論の立ち場からいえば、書物を読んである理論

をつかみ、理解できたり、先哲の業績を学びとることに上

つて知識を豊富にしたとき感ずる喜び、力の充足を感じずる

生命の状態をいう。

少欲知足 少欲は欲望の少ないこと、知足は少を得て満足す

ること。欲を少なくして足ることをいう。真実の僧のあり

方を示すもの。

常樂我淨 釈尊は当時のインドの社会が、現世主義、享樂主

義であるのを見て、この世は苦であり、空であり、無常で

あり、無我であると説いた。そして、このような苦・空・

無常・無我の世を捨て、道を求めよ、と説いたのが爾前經

である。しかして出世の本懷たる法華經には常樂我淨と説

いて、この世は、われも人も国土も、本有常住の実在であ

り清く楽しいものであると開顯かいけんしたのである。日蓮大聖人は地涌の四菩薩の徳をこの四徳に配せられている。御義口伝上ごぎくでんじょう（七五一）に「經に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す」とある。（要語解説二六七参照）

淨瑠璃 娑婆世界の東方にあるという薬師如来の淨土。

獐鹿 鹿の一種。この種の鹿は他のものに追われて危険が迫るとき、自分だけ助かることを望んで仲間や父母のことは少しも顧みないという。不孝者の譬たとえに引かれている。

撰論 無著菩薩の撰大乘論を依經とした宗派。後、玄奘げんじやうの法相宗に属した。

疏記 妙楽の妙法蓮華經文句疏記の略。一般には法華文句記、文句記などともいう。天台の法華文句の注釈書で三十卷。

助行 正行に対する語。正行の功德を助け願あらわす修行をいう。日蓮正宗では唱題しょうだいを正行とし、方便品と寿量品の読誦どくじゆを助行としている。方便読誦は所破・借文のためであり、寿量読誦は所破・所用のためである。また助行のなかにも方便を傍ほうとし寿量を正とす。

贖命重宝 大涅槃經十八に説かれた譬たとえで、人が種々の

宝を蔵していれば、もし賊ぞくがきて国を侵し、または惡王等にあうときは、その蔵する宝を出してその贖あがないとして命を助ける。それと同じように、涅槃ねはんの法門は命であり、この涅槃常住の法門が没するときに、諸仏の秘蔵たる前三教の法門をもつて衆生の外道見を破り、仏性ぶつじやう円常の命を保護するということ。

徐君 呉の季札はかつて魯に使用して、その途中、徐を通過したが、そのとき、徐の君は、季札が持っているところの宝剑を好んだが、あえてそのことをいわなかった。しかし、季札は心にこれを知り、劍を贈ろうとしたが、上国に使用する途中なので贈ることができなかった、帰途ふたたび徐を通過したが、徐の君はすでに死んでいた。季札は心約を重んじて、劍をその冢樹ぼうちゆにかけて去ったという。このことによつて、劍を愛する人なりと想像されるが詳伝はない。

所化 能化に対する言葉。化導けどうされるもの。人に約せば所化の弟子、所化の衆などといい、所に約せば所居しよこの土、所居の国などという。

疏釈 疏とは、經の文義を注釈ちゆしやくすることをいう。釈とは、論師、人師にんしの釈した釈義をいう。したがって疏釈とは、經論の文義に注釈を加えた釈義をいう。

初住位の本因と久遠元初の本因

(要語解説二七六頁参照)

序正流通 教法を論述するときに、序分、正宗分、流通分

の三段に分けてその内容を展開してゆく方法。序分は準備段階、正宗分は説法の中で本懷を述べる。流通分は正宗の法水を流れ通わすの意。

初隨喜 法華經修行の最初心の位。分別功德品に仏滅後の法

華經修行の位に五品あるを明かすなかの初めの位。

諸天の加護 (要語解説三二六頁参照)

諸法実相 「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず

十界・十界は必ず身土」といわれるように、すべての現象

は一念三千よりでたものであり、一念三千は必ず十如の働

きを伴なう。十如はまた十界を離れてはなく、十界あれば

必ず依報がある。すなわち妙法蓮華經の当体をいう。

初発心時 華嚴經に「初発心の時便ち正覺を成ず」の文を引

き、円教の菩薩が初発心の時より正覺を成ずるまでの長遠

の修行をさす。

序品 (要語解説五七頁参照)

尸羅波羅蜜 尸羅とは戒律のこと。六度、六波羅蜜の一つ。

持戒の行。

四輪王 金、銀、銅、鉄の四輪王で須弥山の四方にある東西

南北の四州を統治する王、すなわち人間世界を統治し善政を布く王等の意。

四論 竜樹の中觀論、十二門論、大智度論および提婆菩薩、

世親菩薩共著の百論、以上の四つを四論という。

地論 天親の十地經論によって立てた宗派で開祖は慧光、後

に華嚴宗に包含された。

身口意の三業 身と口と意と三所における所作である。身の

なす所、口の語る所、意の思う所、この三に惡を止めて善

を修すべきことを教えるのであり、仏道修行においては最

も大事なことである。

神功皇后 第十四代仲哀天皇が九州で戰陣に病没せられたの

で、自ら男装し兵を率いて三韓を征した。凱旋の途中で生

まれた方が応神天皇である。

信解品 法華經二十八品の第四で、譬說周のなかの領解段で

あつて、釈尊が前品で三車火宅の譬えをもつて、開三顯一の

旨を説かれたので、須菩提、迦旃延、迦葉、目連の四大声

聞が、初めてその旨を領解し、長者窮子の譬えを説いて領

解の旨を述べたのである。(要語解説六一頁参照)

秦項 秦は秦の始皇帝、項は楚の項羽のこと。

身業読誦 法華經の經文を身で読むこと。すなわち折伏の実

踐をいう。大聖人は法華經勸持品の二十行の偈を身業誦誦された。

真言三部經 真言宗の依經である大日經、金剛頂經、蘇悉地經をいう。

真言宗 中国密教が空海によってわが国に伝えられ、一宗として独立したもの。つぶさには真言陀羅尼宗といい、また秘密宗、曼荼羅宗、瑜伽宗、陀羅尼宗、三摩地宗ともいう。大日如来、金剛薩埵、竜猛菩薩等と相承して善無畏、金剛智、不空等にいたったと説いている。低級な権大乘の教え。(要語解説一三頁参照)

真言宗の千二百 真言宗でいう胎藏、金剛兩部の千二百余尊。身子 舍利弗のこと。

真俗二諦 真諦と俗諦。真諦はまた勝義諦、第一義諦といひ、俗諦はまた世諦、世俗諦という。諦はあきらかと思ひ、諦理、動かすべからざる理性、すなわち真理をさす。理について二諦を分けければ、俗諦は世俗の浅い思想で真諦は真実の深い道理である。

震旦 インドが中国を呼ぶ名。文明国の義であるという。一説には、中国の秦朝の威勢が外国まで響いたので、その名をインドに伝えたのだといい、また玄奘の西域記には

「日は東隅に出ず、その色は丹のごとし、ゆえに震旦という」とある。

身土 身は正報で五陰世間・衆生世間、土は依報で国土世間の意。

陳那菩薩 大城竜と訳す。仏滅後一千百年のころ、南インド・案達羅国の人。世親菩薩系統の人で、因明正理門論を著わして新因明を樹立した。すなわち九句によって因の三相を確立し、論式の五支作法を改めて三支作法として、古因明の比喩法なのを演繹法として、もって因明の論理的意義に一大革新を与えた。

真如 常住不変かつ平等なる万有いつさいの本体、すなわち南無妙法蓮華經である。法性真如、あるいは随縁真如、不變真如ということばがあるが、すべて、その体は妙法を示すのである。

侵襲 侵略、他の国にはいり込み占領してこれを思うままにする。嬖はもて遊ぶ意。

心如工画師 華嚴經に「心は工なる画師の種々の五陰を描くが如く、一切世間の中に法として造らざることなし」とあり、文意はわれわれの一心があらゆる諸法を形造ることは、あたかも巧みなる画師が種々の画を書いてあらゆる場合

を表現するときのものであると。華嚴宗の澄観はこの文を
依拠として、天台の一念三千を自宗の義となした。

秦王駿偽の鏡 秦の始皇帝が所有していたという鏡で、これ

に照らされるとその心の中がそのまま明らかにされるとい
われる。照心鏡ともいう。

心破作七分 頭破作七分ともいう。精神錯乱の意。

心仏及衆生是三無差別 旧華嚴第十卷夜摩天宮菩薩説偈品

第十六の如来林菩薩が説いた偈の文であって、すなわち

心、仏、衆生とは三法に説かれているが、事實は差別がな
いという意味である。

新発意の菩薩 新たに菩提心を起こしたところの菩薩のこ

と。仏道修行を始めて日浅く、いまだ不退位を得ることが
できない始行の菩薩のことをいう。

新訳の訳者 インドから仏教典が渡来して漢訳されたが、唐

の玄奘以前の訳を旧訳といい玄奘から以後を新訳という。

神力品 法華經第二十一の品で、地涌の菩薩が、釈尊の勅命

を受けて弘經することを説いたものである。神力品と名づ

ける所以は、深法を付嘱するために十種の神力を現するか

らである。(要語解説七三頁参照)

神力品の付嘱 釈尊が上行菩薩に対し説いた結要、勸持な

どの四付嘱のこと。すなわち称歎付嘱、結要付嘱、正勸付
嘱、釈勸付嘱をいう。神力品の付嘱は別付嘱ともいい、嘱

累品の摩頂付嘱を総付嘱ともいう。

塵勞の塵 貪瞋癡をさして塵勞という。塵は六塵で勞は勞倦
で塵によって勞を成すゆえに塵勞という。囂は人の集団。
苦しみ悩んでいる衆生のこと。

す

随縁真如 不変真如に対する語。真如とは、中道、法性、仏

性、生命等といい、真とは真実のことであり、如とは、そ

のままありのままの意。随縁真如の智とは縁にしたがって

刻一刻と変化してゆく事象に対応した幸福への生命活動の

ことであり、所詮、仏界を湧現することをいう。また随縁

真如は本門で、実践面、応用面である。水にたとえれば水

そのものは不変真如の理、波は随縁真如の智である。立正

観抄(五三一頁)に「両眼を開いて五塵の境を見る時は随

縁真如なるべし両眼を閉じて無念に住する時は不変真如な

るべし」とある。妙法という法則があるということそれ自

体は不変真如の理で、それを具現した御本尊は随縁真如の

智になる。(要語解説二七七頁参照)

随縁不變一念寂照 随縁とは随縁真如の智であり、妙法の

哲理が生命活動、生活活動として種々の作用を起こすこと。不變とは不變真如の理であり、永遠に変わらぬ絶対的真理、すなわち妙法の哲理である。一念とは生命の究極であり、寂照とは妙法の異名である。(一念寂照の項参照)

随喜功德品 (要語解説七一頁参照)

雖讀法華經還死法華心 伝教大師の秀句下、仏説諸経校量勝五の中の文。「法華經を讀すと雖も還つて法華の心を死す」と読む。伝教が慈恩の邪義を破折した言葉。法華經を讀み法華經を讚嘆していながら、かえつて法華の精神を殺し害毒を流している者がある。その誤謬の原因は、法華經も成仏得道ができるし華嚴經や大日經等の諸経も成仏得道するといふ考えである。

随自意 随他意に対する語。すなわち仏の内証の悟りそのまゝを説き示すこと。環境、機根、状況などに関係なく、仏道の本心のままに自由自在に振舞う境涯。権実相對のときは権教は随他意、法華經は随自意、本迹相對のときは迹門は随他意、本門は随自意、種脱相對のときは文上脱益の法華經は随他意、文底下種の南無妙法蓮華經が随自意となる。諸経と法華經と難易の事(九九一頁)に「仏九界の

衆生の意樂に随つて説く所の經經を随他意という譬えば賢父が愚子に隨うが如し、仏・仏界に隨つて説く所の經を隨

自意という、譬へば聖父が愚子を隨えたるが如きなり」と。

垂迹 本地に対する語で「迹を垂れる」と読む。仏が衆生利

益のため、種々のところに応化身を示す。初發得道の最初

を本地といい、化他面に現われるときに垂迹となる。垂迹

は本地の影であり働きのとなる。諫曉八幡抄(五八八頁)

に「諸の権化の人々の本地は法華經の一実相なれども垂迹

の門は無量なり、所謂跋俱羅尊者は三世に不殺生戒を示し

驚嘆摩羅は生生に殺生を示す、舍利弗は外道となり是くの

如く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初發得道の始

を成仏の後・化他門に出で給う時我が得道の門を示すなり」と

とある。諸仏・菩薩の場合は、釈尊を本地とする垂迹にな

り、釈尊の場合は、五百塵点劫が本地となり、それ以後に

あらわれる仏・菩薩が垂迹となる。しかし、五百塵点劫の当

初すなわち久遠元初が顕われると、釈尊の本地が垂迹とな

り化他のための応身仏となる。日蓮大聖人の場合は、本地

は久遠元初の自受用身であり、それ以後の仏、菩薩は五百

塵点劫の仏をはじめとして垂迹化他となる。われわれの場

合には、その本地は仏の本眷属たる地涌の菩薩であり願つ

て現在のような世の中に出てきたのである。そして、さまざまな姿で信仰活動に励んでいる垂迹の姿である。（要語

解説二八八頁参照）

垂迹化他 「迹を垂れ他を化す」と読む。仏が本地から迹を

垂れて他の衆生を化導すること。垂迹とは本地に対する言葉で、仏が衆生利益のため応化身を示すこと。化他は自行に対する言葉で随他意の教えの意。垂迹化他は迹中化他と同意で、本地自行に対する言葉。垂迹化他は歴劫修行の

釈迦仏法で、本地自行は大聖人の文底仏法である。

水上輪 水車のこと。

随他意 随自意に対する語。仏が衆生の機根に随つてまた衆

生の好むところに随つて説法し、真実の門に誘引する教え。ゆえに真実の教えでなく、方便の低い教えである。爾前経や釈迦仏法は随他意の教え、法華経や大聖人の仏法は随自意の教えである。

随方毘尼 毘尼とは戒と釈し、随方とは地方に随うこと。ゆ

えに大綱において仏教に違わざる限りその形式等は、その国情または地方のしきたりに随つてよいとの戒律。（要語

解説三二二頁参照）

随力弘通 各人の力に応じて全力を尽くして衆生を化導する

ために仏法を説くこと。（日興遺誠置文一六一八頁参照）

枢機 扉の金具、かんぬき等のことで、肝要の意。

須頭檀王 略して檀王ともいう。釈尊の過去における因位の

修行中における一事跡で、法華経提婆品第十二に説かれた正法を求めるために、王位を捨てて、阿私仙人に従い道を求め、果をとり水を汲み、薪を拾い、食を設けて、身をもつて師の牀座となして千歳の間給侍し、その功德により成仏したという。

数息観 五停心の一つ。出入の息を数えて心想の散乱を停止

する観法。

頭陀行 身心を修治し食衣住に関する貪欲等を払い除く修行

をいう。釈尊の弟子のなかで摩訶迦葉は難行苦行して頭陀第一となつた。

砂村問答 （要語解説四一四頁参照）

頭破七分 文句記卷四の十双歎の一つ。法華経陀羅尼品第二

十四の偈文で、鬼子母神・十羅刹女が法華経の行者を悩乱する者の頭を、阿梨樹の枝のように破るとの誓いを立てた。「心破作七分」ともいい、大御本尊および大御本尊を信ずる人を誹謗する者は、頭がわれ、心（精神）が錯乱し、支離滅裂になるとの意である。大御本尊の右肩の「若

悩乱者頭破七分」の仰せを拜すべきである。

修利槃特 兄弟二人の名。釈尊の弟子でバラモンの子。兄を修利、弟を槃特といい、共に愚鈍で、どちらを呼んでも二人返事をするくらいであつたが、釈尊に至心に信敬したため成仏し、法華經五百弟子受記品第八で兄弟とも普明如来の記別を与えられた。

須利耶蘇摩三蔵 須利耶蘇摩は、西域インドの莎車国の王子として誕生した。英才の誉れが高く、大乘を流布した。法華經の訳者・羅什に、大乘經を教えた人として知られている。すなわち羅什三蔵は、須利耶蘇摩三蔵に会って、大乘の化を受けたとき、須利耶蘇摩は「仏日西山に隠れ遺耀東北を照らす、この典（すなわち法華經）東北の諸国に有縁なり、汝慎んで伝弘せよ」と述べたという。そして、須利耶蘇摩三蔵の言葉どおりに、羅什はインドの東北にあたる中国に法華經を渡し、さらにその法華經が、インド・中国より東北にあたる日本の国に伝わってきた。このことは、守護国家論に述べられているが法華經が特に一閭浮提の中でも、日本に弘まり、日本に縁の深いことよせて引用されている。そして、日蓮大聖人は同じく守護国家論（七一）に「東北とは日本なり西南の天竺より東北の日本を指

すなり」と決定されている。

せ

西域 さいいきとも読む。中国より西方の諸国の総称。広くはインドをも含み、玄奘の西域記には百三十八国をあげている。別していえばインドを除き、今のトルキスタン、あるいは中央アジアと呼ばれる一帯の地域をさす。（付録地

図参照）

聖一 禅宗の僧、臨済宗京都東福寺の開山で名を弁円という。聖一は花園天皇より賜わった国師号、北条時頼に禅戒を授けたといわれる。

西王母 中国における伝説の神女であり、女子で仙人となつた者は皆この西王母に従つたという。崑崙の圃閭風の苑にいたるといわれ、この苑にある桃の木は三千年に一回実るという。遇い難いものの譬えとして引かれた言葉。

西夏 現在のインドの西北。パミール高原を中心とする一帯の地方をさすものと考えられる。

西施 周代の越の美女。家が貧しく、近くの山で薪を拾い、若菜を摘んだりして老母に孝養を尽くした。また越王勾践に引き取られたが、越王勾践が呉に敗れて後、夫差の許に

送られた。後、夫差は西施に溺れて国を傾けるにいたった。

勢至菩薩 詳しくは大勢至菩薩、または得大勢菩薩という。

梵語では摩訶娑他摩鉢羅鉢多という。権經の時は觀世音菩

薩と対し阿弥陀如来の右の脇士で智をあらわす。法華經で

は序品の時すでにその名を列し、見宝塔品の時、阿弥陀仏

と共に靈山会に参し、常不輕品では、勢至をもって対告衆

となした。

星宿変怪の難 星等の天体の運行に異変があつたり、彗星が

現われたりすること。藥師經の七難の一つ。(要語解説・

三災七難の項参照)

性善説と性惡説 (要語解説四三五頁参照)

齊朝の光統 中国における南北朝の齊・魏の時代の人で南北

十師のうち、北地の第三師である。仏陀禪師の弟子となつ

て恵光と名づけられ、国統の任にあつたところから光統と

呼ばれた。四宗(一、因縁宗、二、仮名宗、三、誑相宗、

四、常宗)を立て教判とし、菩提達磨と法論を行ないこれ

を誹謗したと伝えられる。

静謐 平和、太平、平穩ということ。

清涼国師 澄觀をいう。唐代の僧で五台山清涼寺に住し、華

嚴宗第六祖と称せられ天台の教義を華嚴に盗み入れた。

施戒慧 布施・持戒・智慧のことで、六波羅蜜の修行のなか

の三つをいう。

世界の益 四悉檀の利益であつて、世界の差別に依じてこと

ごとく施し、大歡喜する利益を得せしめるということ。

施開廢の三釈 一切經について、それを法華經の立ち場か

ら、開顯会入するにあたり、施開廢の三重の深義があるの

を、施開廢の三重という。また、これを解釈することを施

開廢の三釈という。施とは開の準備をいい、廢とは開の結

果をいい、開會することを開という。これに述門と本門と

の両重がある。述門は法のうえで、本門は仏のうえで釈し、

本迹の六義、また本迹の六釈という。述門の三義は、為

実施權、開權顯実、廢權立実である。本門の三義とは、從

本垂迹、開迹顯本、廢迹立本になる。これを蓮華に見る

ときは、蓮の実を守るために華が覆うのと、華が開いて蓮

の実が顯われるのと、華が落ちて蓮のみのるのとの以上の

三義に譬えられる。すなわち譬喩蓮華というのである。

施餓鬼 餓鬼に施すという意で、仏力、法力により餓鬼に食

を廻施することをいう。南無妙法蓮華經と唱題することが

最高の施餓鬼供養になる。

碩徳 高僧、徳望のある人。

是好良藥 法華經壽量品第十六の文。天台では法華經、文底

の仏法では三大秘法の大御本尊をいう。「是好良藥とは或は経教或は舍利なりさて末法にては南無妙法蓮華經なり、好とは三世諸仏の好み物は題目の五字なり」（御義口伝七五六）とある。

世親 天親ともいう。釈尊滅後九百年ごろ、北インド健陀羅国に生まれ、バラモンの学者・憍尸迦の第二子。無著菩薩の弟で初め小乗の論師であつたが、後、無著に論破され大乘に転じて千部の大論師となつた。（要語解説三六七頁参照）

世世番番の成道 久遠元初において名字凡夫位のまま当体蓮華を証得した釈尊が垂迹化他のために五百塵点劫の昔に本果第一番の成道を唱え、色相莊嚴の仏身を現じて衆生を化導してより、その後、世世番番に、すなわち時代時代に順次仏として出現し、八相作仏の姿を現わしたことをいう。

（總勘文抄五六八頁参照）

世尊 仏と同じ。仏の十号の一つ。仏は世界で最も尊い人であるから、世尊と名づける。文上（釈迦仏法）より読めば法華經本門の釈尊、文底より読めば末法の御本仏日蓮大聖人のこと。

雪山童子 雪山大士ともいう。釈尊が過去世に菩薩道を修行

したとき、雪山において苦行したので、この名がある。雪山童子が「諸行無常、是生滅法」の偈を聞き、あとの「生滅滅已、寂滅為樂」の半偈のために身を鬼神に与えた物語りは涅槃經にある。

絶待妙 相待妙に対する言葉。彼と此を相對して取捨を定めるものでなく、最も高いところからすべてのものを包含して用いていく立ち場をいう。釈迦仏法では法華經が最高であり、法華經のうえに立ち一切經を開會して用いること。

末法では三大秘法の立ち場から一切を開會すること。
刹帝利 古代インドの四姓（四つの階級）の一つである。四姓とはバラモン（祖先の祭礼等を司る宗教族）、刹帝利（王族）、毘舍（平民すなわち農業、商業に従事する階級）、首陀（賤民）である。国王・大臣・武人等の支配階級は、必ず、この刹帝利から出るとされている。

世法と仏法 （要語解説三二四頁参照）

施鹿林 中インド波羅奈国にある園の名。一般に鹿野苑といわれている。釈尊が寂滅道場菩提樹下で始めて正覺を成じ二十一日間華嚴經を説いた後、この施鹿林で憍陳如などの五比丘に四諦を教え阿含經を説法したゆえに小乗仏教の初転法輪の所といわれている。

善財童子 華嚴經入法界品第三十九に出る。福城の長者に五

百の童子があり、善財は、その一人である。福運あつて生まれるとき種々の珍宝が自然に降つてきたので、この名がある。発心して、法を求めて、文殊の所をおとずれたのははじめとして、善知識を求めて南に行き、百十の城をたずねて、五十三人の善知識に会つて、ついに悟りを得たといわれる。また勝熱バラモンの教えを受けたとき身を火聚に投じ菩薩安住三昧を得たという。

前三後三 (要語解説二一一が参照)

宣示顯説 はつきり説き示し説き顯わす意。

前四味 爾前經のこと。天台は一代仏教を判じて五時八教を

立てたが、そのうち五時とは説法の時によつて縦に区分したものの、すなわち華嚴、阿含、方等、般若、法華である。これを説明するに涅槃經の五味の譬えを引き、乳味、酪味、生蘇味、熟蘇味、醍醐味としている。前四味とは乳味より熟蘇味までの四味すなわち華嚴より般若までをさす。

旃遮女の謗 釈尊九横の大難の一つ。バラモンの旃遮女が腹に鉢を入れて釈尊のところに来て、釈尊の子であると誹謗した。そのとき帝釈がネズミに化けて、衣の裏の鉢をつないでいるヒモを噛み切つたため、鉢が地に落ちて衆人皆歎

喜したという。また旃遮女はこのため地裂けて無間地獄にはいつたという。

禪宗 中国の梁代のインドの僧・達磨に始まる。中国十三宗、

日本十宗の一つ。西天の二十八祖が相伝して達磨にいたり中国の第一祖となり、以来、法脈断絶せずという。「禪天魔の所為」とは、日蓮大聖人の四箇の格言の一つ。その理由は一に教外別伝と称して仏説違背のゆえに、二に不説に執して可説の大化を廢するゆえに、三に凡心を仏なりと誣いて教相を越却するゆえに、四に空見に偏して妙法実相の妙觀を没するゆえに、五に久遠長寿の本仏釈尊を遵奉せざるゆえに、その他種々の謗法邪見等がある。(要語解説一

二が参照)

專修念仏 日本の浄土宗の開祖・法然が唱えた邪義。選択集のなかで「専ら念仏の一行を修する」義にして、他の諸行を修しないのをいう。また五種の正行中、特に称名の一行を正業として専ら修する義とする。

禪定堅固の時 釈尊滅後第二番目の五百年間をさす。すなわち正法時代の後半をいう。禪定とは慮を静めて思惟の行をするということ。

僭聖増上慢 法華經勸持品第十三に説かれる三類の強敵の

第三。末法には法華經の行者を迫害する三類の敵人が競い起こるが、そのうちの最も手ごわい敵。僭とは悪がしこい意。したがって僭聖増上慢とは、世間からあつく尊敬され聖者のように思われているが、内実は狡猾で名聞名利を求め、高慢心をいだき、仏に怨嫉を起こし敵対する者をいう。大聖人ご在世は極樂寺良觀、現代では権力者など。

染淨の二法 染法と淨法をいい、染法（邪宗の害毒に染まること）は迷いとなり、淨法（宇宙のリズムに合った生活、妙法を信受した生活のこと）は悟りとなる。悟りはすなわち仏界であり迷いは衆生のことで、この迷悟の二法は二なりといえども法性真如の一理であり、生命の本質である。

当体義抄（五一〇頁）に「法性の妙理に染淨の二法有り染法は熏じて迷と成り淨法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の一理なり」とある。（要語解説二七一頁参照）

善星比丘 釈尊が出家する以前の子である。出家して仏道を修行し、第四禪定を得、これが真の涅槃の境涯であると思ひ、後、苦得外道に近づいて退轉し、かえって仏法を否定する邪見を起こし、仏に対しても悪心を懷いたため現身に地獄の大苦をうけた。このことから闍提比丘、四禪比丘の

名がある。

善神 民族と国土および法華經を守護する神、天照大神、八幡大菩薩等がこれである。

全身の舍利 舍利とは、仏の体、身骨、遺骨、遺身をいう。生身の舍利に全身と碎身の二種があり、埋葬の遺体を全身の舍利、火葬の遺体を碎身の舍利ともいう。また法身の舍利にも全・碎の二身があり、法華經は全身の舍利で余經は碎身の舍利である。

千世界微塵 大地微塵というように無量無數の意を表わす。

旃陀羅 旃陀羅は梵語で主殺人と訳す。獄卒の輩、屠殺者の種類

の総名をいう。四姓の外にあつて屠殺を業とする者であり、旃陀利ともいう。転じて身分が卑しいということ。

旃檀 インド原産の香木。仏教典にみえる旃檀は白檀科の白檀のこと。

旃檀林 旃檀は法華經に譬え、旃檀林は法華經流布の国土に譬える。旃檀を与樂と訳し、よく病苦を除いて安樂を与え

るといふ意味であるが、これは南インドの摩利山に産する香木である。

善知識 悪知識に対する語。仏道を成ぜしめる同志、先輩等をいう。（要語解説三三二頁参照）

選 択 集 法然の著書で「選択本願念仏集」といい、上下二

巻で念仏の功德を説き、法華經を捨開闢拋せよと書いてい
る。日蓮大聖人は、立正安國論（二四頁）のなかで、仏法
が乱れ、善神が去ることを嘆かれ「是れ偏に法然の選択に
依るなり」と厳しく破折なさっている。

千中無一 善導の往生礼賛第四の法華經を誹謗した文であ
る。法華經により成仏する者は千人のうちで一人もないと
いう邪義。

禪天魔 大聖人の四箇の格言の一つ。禪宗は仏法を破壊する
天魔の所為たる邪法であるということ。

善導 中国唐代の浄土宗の第三祖・道綽の弟子である。徹底
した念仏者となり、ついに気が狂い、柳の枝で首をくく
り自殺をはかったが、地面に落ち、十四日の間苦悶して死
んだと伝えられている。

善惡無記 三世諸仏總勘文抄（五六三頁）に「心の外に善無
く惡無し此の善と惡とを離るるを無記と云うなり」と述べ
られている。われわれの生命は善惡無記であり、南無妙法
蓮華經も善惡無記である。善とか惡とかいうようにどちら
か一方に限定することのできないのが生命である。生命は
縁にふれて善惡両様に働く中道一実の当体である。

善男子 普通は仏法を信ずる在家の男をいう。しかし法華經
では女人成仏も説くから、男女の別なく仏法を信ずる在家
の人を呼ぶ言葉である。

千日尼 阿仏房日得の妻。大聖人の佐渡流罪中、夫の阿仏房
と共に大聖人に帰伏し、強盛な信心で塚原三味堂に命がけ
で御供養を続けた。大聖人が身延にはいられてから阿仏房
を三度も大聖人のところへ送った。千日尼御前御返事（一

三一三頁）

先判・後判 釈尊一代の經教のなかで爾前經のなかで、おの
おのの經々の勝劣を判じたものを先判とし、法華經におい
て勝劣を判じたものを後判という。

阡陌 大勢の人々のこと。

千部の論師 一般には、竜樹・天親のこと。論師とはインド
の菩薩で論をつくって、仏の教義を解釈し弘めた人。「守護
國家論」に「竜樹・天親亦俱に千部の論師なり」といい、
摩訶止観に「竜樹の如きは千部の論を作る」といい、また
百論疏の序に「天親菩薩は本と小乗の学者として、小乗論
五百部を作り、乃至のちまた五百部の論を造る。時人呼び
て千部の論主と為す」というのによる。

懺法 懺悔滅罪の法ということ。わが国には、種々の懺法が

行なわれたが、觀普賢經に、この懺法の必要と、その方法を明かして「若し懺悔せんと欲せば、端坐して実相を思え、衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す」とある。大御本尊に對する懺悔は、大莊嚴懺悔といつて、最高の懺悔である。

宣明 天皇の言葉。

善無畏三藏 中インドの僧。唐の玄宗の時中国にはいり、玄宗皇帝の尊信をうけ、大日經を訳し、真言宗の祖となった。

善友 善知識のことで正法を教え、共に修行し、また、正法をたもつように守ってくれる者をいう。

仙予國王 釈尊が昔、閻浮提において大国の王と生まれ、名を仙予といった。そのときにバラモンが正法を誹謗するのを聞いて即座に殺してしまつたが、この因縁によつてそれより地獄へ落ちなかつたという。

そ

癩惡嫉恚 癩は粗（あら）い、嫉はねたみ、恚はけち。

雙觀經相 無量壽經のこと。方等部に属する淨土三部經の一つ。

つ。二卷よりなつてゐるので雙卷經、雙觀經という。淨土真宗では大無量壽經ともいう。上巻には阿弥陀の四十八願、下巻には安樂淨土への往生を説く。

莊嚴己義 自己の議論を理屈をつけて立派な議論のように飾りたてること。

相似即 天台大師が法華經の円意で立てた修行の位で六即の一つである。三障四魔を粉碎していく人。

相承 相伝、付嘱と同じ。相は相對、承は授承のことで、師弟相對して師より弟子へ、ただ一人の大導師を定めて民衆救済の大法を伝授すること。血脉相承、師資相承ともいう。増上慢 四慢・七慢の一つ。最高の法および証を得ないのに

これを得たと思ひたかぶること。

相待妙・絶待妙 天台の立てた教判。小乗經と大乘經とを比較すれば大乘が勝れ、小乗は劣り、また大乘經のなかで權大乘經は劣り実大乘經である法華經が勝れているというように、各經典を比較して、その勝劣を判ずるのを相待妙といひ、最高の法華經、究極は文底下種の南無妙法蓮華經があらわれれば、一切の經教はすべてこの一法に含まれ、一切が南無妙法蓮華經の一法に歸するとするのを絶待妙という。

（要語解説二〇六頁参照）

相伝 師より弟子に法門を伝えること。相統、伝授、直授などの意味。仏法上、最も大事なことがらである。付嘱、相承と同じ意で、仏法においては師資相承（師匠から弟子へ

の相承けちみやく）、血脈相承であり、ただ一人の大導師を定めて民衆救済の大法を伝授する。「此の経は相伝に有らざれば知り難し」(一代聖教大意三九八頁)「伝持の人無れば猶木石の衣鉢えはつを所持せるが如し」(願仏未来記五〇八頁)とある。したがって、日蓮大聖人より血脈付法の相承を受けたものでなければ正しく知ることはできない。それは日蓮正宗のみである。釈尊は上行じようぎように、天台は章安しやうあんに、伝教は義真ぎしんに、大聖人は日興上人にその所持しよじの法を相伝している。増長天王ぞうちやうてんのう 四天王の一人。帝釈天王たいしやくてんのうの外將。法華経陀羅尼品では他の三天と共に法華経の行者の守護しゆごを誓ちかっている。南方を守護して、不幸を免除めんりする働きをもつ。

僧統そうどう 僧の官職名。日本では、僧都そうずの位にあたる。開目抄かいもくしょうにお用もちいの意は、伝教大師当時の奈良六宗の碩学せきがくたる元興寺の護命等をさしたるもの。

増道損生ぞうどうそんしやう 法華文句もんくに「道を高に増し生を尽に損す」とある。法華本門の利益をいったもの。すなわち初住しよじゆう以上妙覺にいたる四十二位において、しだいに中道の智を増し、智によつて四十二品の無明むみようを断だんじ、しだいに變易へんいの生が損減そんげんすることをいう。

惣そうの三段さんだん 観心かんじん本尊抄ほんぞんしやうに説く五重三段のうち一代一經三段

と法華十卷三段をいう。三段とは序分じよぶん、正宗分しやうしゆぶん、流通分りつづぶんのこと。序分とは一經の序論で、正宗分は一經の本論、流通分はすでに説かれた經の趣旨しゆしを後代に伝える意である。

總罰そうばち 別罰べつばちに対する言葉。すべての人がうける罰。總罰の原

因いんは一國謗法ぼうぼうにある。(聖人御難事しやうにんごなんじ一一九〇頁参照)

總付嘱そうふしよく ①法華経神力品第二十一における地涌の菩薩への別付嘱べつふしよくに対して、嘱累品第二十二における一切の菩薩等への付嘱をいう。②二箇相承についても總別の付嘱がある。身

延相承書えんしやうじやうしよを總付嘱書と呼び池上相承書いけがみしやうじやうしよを別付嘱書と呼ぶ。總別そうべつの二義にぎ 総とは全体に対する意であり、別とは個々に対

する意義で仏法上重要な原理である。御義口伝下(七五二頁)に「如来とは釈尊・惣そうじては十方三世の諸仏なり別しては本地無作むさの三身なり、今日蓮等の類たぐの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那だんななり」とあるが、これは一例であつて總別の意は種々に使用される。

(要語解説二六八頁参照)

像法一千年間の弘教こうきやう (要語解説一六九頁参照)

草木成仏そうもくじやうぶつ 草木や土砂等の非情の物質が成仏すること

をいう。塔婆供養とうはくようも草木成仏の原理によるのである。(要語解

説二八六参照)

草木世間 三世間のうちの国土世間のことで非情界をさす。

桑門 沙門ともいう。出家して外道、仏道を修行する者を呼ぶ。

多。多くの悪法を破折するとの意。

蒼蠅・碧羅 青ばえと緑色のつたかずら。転じてつまらない

平凡の人物をいう。(立正安国論二六頁参照)

雑乱 大綱を失し中心を失い、本に背き、上下の秩序を乱す

ことをいう。

雙林最後 仏が涅槃された時と所をいう。雙林は拘尸那城跋

提河のほとりの沙羅林のこと。沙羅とは梵語で樹の名。釈

尊がこの地において八十歳の二月十五日に涅槃されたので

この涅槃の時をさして雙林最後というのである。

速疾頓成 即身成仏のこと。

俗衆増上慢 法華經勸持品第三に説かれた三類の強敵の第

一。末法に法華經を弘通する者に反対し迫害を加える大衆。

即身成仏 (要語解説二五三頁参照)

囑累品 (要語解説七三頁参照)

麤語 麤は妙に対して「あらい」の意。粗語、意を尽くして

いない語のこと。

祖師禪 禪宗を分類した三種の禪の一つ。教外別伝、不立文

字の句を立てる禪で、天魔の所為である。

率兜婆 藪儉籛、私儉籛、数斗波、輪婆、塔婆等と書く。も

とは身骨を安んずる所に建てられた建造物であったが、わ

が国では追善供養のために用いる板の塔婆をいう。

蘇武 武帝の天漢元年、平和使節として匈奴へ派遣され、そ

のまま拘留されて艱難辛苦をなめたが降らず、武帝が亡く

なつて昭帝の始元六年、十九年目に漢に帰つた。後、関内

侯の爵を賜わる。

龜法 粗雑な欠漏のある法のこと。妙法に対する言葉。化法

の四教中、藏通別の三教は円教に対すれば全て龜法である。

草極の衆生 仏のこと。一切の有情のなかで最もすぐれて尊

い衆生の意。

擯節 互いに礼儀をもつて敬い合うこと。

孫陀梨の謗 釈尊の九横の大難の一つ。釈尊が過去世に淨眼

といった時、いまの孫陀梨である姪女鹿相を殺し、辟支仏

にその罪を転嫁した因縁で謗ぜられるのであるという。

た

第一義悉檀 四悉檀の一つ。世界、為人、対治の三つが仮の

化導であるのに対し、第一義悉檀は真実の教えにはいらし

むるをいう。また第一義・対治悉檀は折伏型、世界・為人
悉檀は授受型といえる。

第一番成道 本果妙の仏である釈尊が五百塵点劫において仏
道を成じたことをいい、久遠実成の釈迦如来という。この

とき、五時八教を修行し五時八教を説く。

大怨 大怨敵の意。

大覺世尊 釈迦牟尼仏の別称。教主大覺世尊ともいう。

大經 大涅槃經の略名である。法華玄義の文中の語。

体空 通教の当体即空の理をいう。人も物もたえず変化して

いくもので実体ではない。仮にあるだけという見方である。

体空・但中・不但中の法門 体空とは通教の当体即空の理を

いう。人でも物でも絶えず変化していくのだから実体では

ない。仮にあるだけだという見方である。但中とは別教所

詮の理である。空仮中の三諦のなかで、空仮の二諦を除い

てただ中道を論ずるから但中という。不但中とは円教所詮

の理である。別教のごとく空・仮を除かねば中道は立たず

とはいわず、即空・即中・即仮と中道の理を空仮の二諦に

即して説くゆえに不但中というのである。

第九の滅・人壽百歳 二十小劫すなわち二十の増劫減劫のな

かで第九番目の滅劫中、人壽百歳の時をいう。

体外の權 仏の内証の実相実体の内を体内といい、その外に

取り出すのを体外という。華嚴經、阿含經等と独立して考

えるときは体外の權經である。法華經が説かれた後に会入

のうえで用いる權經は体内の權である。

醍醐 醍醐味のこと。五味の一つ。牛乳より精製するもの

で、濃厚甘美な最上の味をいう。転じて經文の最第一に譬

える。天台は五時八教の教判で一代聖教を華嚴、阿含、方

等、般若、法華涅槃の五時に分け、それぞれに乳味、酪

味、生蘇味、熟蘇味、醍醐味に配し、法華經を醍醐に譬え

最上の經としている。

太公 太公望のこと。渭陽で釣をしていた時、周の西伯(後の

文王)に会い西伯および武王に仕えて大いに勲功があった。

大綱 綱目に対する語。一切を支えもつ肝要、大もとの意。

成仏得道の教えを説く法華經は大綱であり、得道の文はあ

つても実義のない爾前經は綱目である。(要語解説二一九

頁参照)

対告衆 仏が説法する時の聴衆の代表者で、仏はその人を

中心に説法する。釈迦仏法の対告衆は舍利弗や文殊、弥勒

などである。

大御本尊への疑難を破す (要語解説二二一頁参照)

醍醐味 醍醐の項参照。

帶權隔歴 法華經の円融三諦に對する言葉。帶權とは權を

帶する円の意で爾前の円教のこと。隔歴とは離れ隔たつて

いる意で三諦隔歴という。すなわち爾前經は空假中の三諦

は別々に説かれ、しかも權を帶しているとの意。

第三結要付嘱 神力品のなかで、本化の四菩薩に付嘱するこ

と。初めから分段すると、第一に菩薩が命を受く、第二に

仏が神力を現ず、第三に要を結んで付嘱するところから第

三結要付嘱という。

第三時の教 法相宗では釈尊一代の經々を三時に分ける。す

なわち有教・空教・中道教の三つである。有教は差別觀を

中心に立てた教え、空教は空觀を立てた教え、中道教は唯

識中道を立てた教えという。

第三の教相 天台が法華經と爾前經との勝劣を判じた三種の

教相の一つ。本迹相對たる師弟の遠近不遠近の相をいう。

大聖人の第三の法門は種脱相對であり天台の法門の比では

ない。

第三類 下種を覺知しない者、未発心の者をいう。過去に大

通智勝仏が法華經を説いたとき聞いて信じて得道した者が

第一類（不退）、途中で退轉し權小の教えに落ちた者が第

二類（退大）で、第三類（未発心）はぜんぜん信仰しなかつた者をいう。

大士 大菩薩。

大師講 伝教大師の報恩講。叡山で六月四日、大師の命日に

これを行なう。法華八講等を執行して供養す。天台の忌日

である十一月二十四日にも報恩謝徳の大師講を営む。

対治悉檀 四悉檀の一つ。敵対治術の義。病に對して治術を

施すごとく、教をもつて一切衆生の煩惱の重病を除き、本

有の菩提心を開き、すなわち仏知見に住せしめるのをい

う。邪心・惡心を對治すること。

大史蘇由 周の昭王に仕えた人。瑞兆によつて仏教の興隆を

予言したという。大史は官名、仏祖統記に出ている。

大集經 方等部の經典で、大集部所屬の諸經を集成したも

の。大集經には、穀貴・兵革・疫病の三災、あるいは解

脱・禪定・誦誦多聞・多造塔寺・闍靜堅固の五箇の五百歳

などが説かれてゐる。

大事の難四度 日蓮大聖人が立宗の三十二歳より五十歳まで

の十九年間にうけられた四つの難。一、松葉ヶ谷草庵の焼

き打ち、二、伊豆流罪、三、小松原の法難、四、竜の口の

法難および佐渡流罪の四つの大難をさす。「王難すでに二

度に及ぶ」とは第二、第四をさしている。

帝釈 釈提桓因のこと。忉利天の主として須弥山の頂の喜見

城に住し他の三十二天を統領す。この天も、また、法華經

の会座に眷属二万の天子と共に連なり、梵天と共に法華經

の守護を誓っている。

第十八願 阿弥陀仏四十八願中の第十八願、念仏往生願のこ

と。しかし「唯五逆と誹謗正法の者を除く」とある。

大樹と神通 大樹とは大樹緊那羅所同經四卷、神通とは菩薩

行方便境 界神通變化經をさす。

大乘起信論 起信論とも略称す。馬鳴菩薩の著。大乘に対す

る正しい信仰を起こさせるために説かれた仏教書で、唯心

論的傾向をおびている。新旧両訳がある。注釈書に法蔵の

大乘起信論義記などがある。

大小相對 (要語解説一四一頁参照)

大進房 下総国出身の門下の長老で、早くから大聖人の門下

となる。熱原の法難のときに俗氣の強い大進房は名聞名利

にとらわれ、日興上人に怨嫉して退転した。滝泉寺院主代

行智の奸計にたぶらかされ、長崎次郎兵衛等と共に乗馬で

暴徒を指導し大聖人の門下を迫害したが、誤って落馬し死

大石寺 日蓮正宗總本山。多宝富士大日蓮華山大石寺という。

静岡県富士宮市上条二〇五七にある。開山は第二祖日興上

人。本門戒壇建立の地であり、世界最高の聖域である。

胎藏界の曼荼羅 真言密教の根本両界曼荼羅の一つで、金剛

界曼荼羅の智性に対して、理平等、実相法性をあらわした

もの。しかし法華經に比すれば七重の劣である。

退大取小 大乘の信仰を退けて小乗の信仰に落ちることをい

う。大通結縁の第二類または舍利弗が修行の途中で退転し

たことをさす。

大智度論 インドの竜樹が著わした書。鳩摩羅什が漢訳し

た。大智度論、中論、十二門論、百論を四論という。摩訶

般若波羅蜜經を詳しく注釈したもので全百卷。正には小

乗教、傍には外道を破折している。

大通結縁 三千塵点劫の昔に大通智勝仏という仏がおり、十

六人の王子に法華經を説き、王子は多くの衆生にさらに法

華經を説いた。これを大通覆講といい、その説法を聞いた

ことを大通結縁という。

大通結縁の第三類 大通とは大通智勝仏のことで、法華經化

城喻品第七に説かれてある。三千塵点劫という遠い昔に出

の王子があり、この王子が菩薩となつて、大通仏の説かれた法華經を弘通した。この第十六番目の王子が釈尊であつて、この時にこの釈尊から法華經を聞いた者のことを結縁といふのである。第三類とは、この時の結縁の衆生のなかで発心した者と未発心の者とがあり、発心のなかで不退の位にはいった者を第一類といい、退大取小すなわち法華經を退轉して小乗經に落ちインドにおいて再び釈尊とあい法華經を聞いて成仏する者、これを第二類という。舍利弗、迦葉、阿難等の三周の聲聞がこれである。最後の未発心の者が、第三類であつて釈尊在世では得脱できず、正法・像法の間においてほとんど得脱するのである。

大通智勝仏 法華經化城喻品第七で説かれた仏。釈尊以前の三千塵点劫の昔の仏で、第十六番目の王子は釈尊の因位である。大通仏が十六王子の請いに応じて説かれた法華經を、十六王子が、おのおのの国土で覆講し多くの衆生を化導した。これを大通の種子といい、その説法を聞いたことを大通結縁という。（要語解説一〇一頁参照）

大通覆講 （大通結縁の項参照）

大天 仏滅後百年にインドへ生まれた。自分の母と交つて父を殺し、母が、また他の男と交るを見て母を殺し、さらに

阿羅漢を殺し、三逆罪を犯して出家し、我見で仏法を乱し後に仏教界分裂の源となつた。

体内体外 仏の内証の真相・実体の内を体内といい、その外に取り出すのを体外という。法華經が説かれた後で、会入のうで用いる權經は体内の權であり、末法で、三大秘法が建立された後に大御本尊を信ずる立ち場で用いる權經は体内の權である。方便品・壽量品を讀誦するのも、体内の方便品・壽量品を讀誦するのである。しかし、同じ体内でも、權は実に劣り、迹は本に劣る。体外の權經は邪教であり無得道である。（要語解説二〇七頁参照）

大日 大日房能忍のこと。禪宗の僧。大日經、大日如来を略していうこともある。

大日如来 眞言密教の本尊。梵語で摩訶毘盧遮那仏という。本地法身と加持受用身との二種の身があるとするが究極においては無二無別と説く。胎藏界と金剛界の大日如来がある。東密では釈尊は大日如来の化身とし、台密では釈尊の異称を大日如来とするが、事實は大日如来は本門の釈尊より七重劣る仏である。

大日の三部經 眞言宗の依經で、大日經・金剛頂經・蘇悉地經。
大の三災 小の三災に対する言葉。火災、風災、水災をい

う。小の三災が成住壞空の住劫に起こるのに対し、大の三災は壞劫の終わりに起こる。

提婆達多 だいばだつた 釈尊在世に、釈尊をはじめ多くの弟子たちを迫害した大悪虐の人。提婆達多は釈尊に背き、阿闍世太子をだまして父の王を殺させて王位につかせ、また釈尊をも害しようとしたが、後、阿闍世王は仏罰をうけ先非を悔い釈尊に従った。時に提婆達多は王舎城にいたって王に会おうとしたが、王は怒って提婆達多を追放した。提婆達多が憤って門外に立っているとき、蓮華比丘尼が王宮から出てきて提婆達多の謗法を責めた。提婆大いに怒って拳を振って比丘尼を打ち殺した。このとき大地がにわかに裂けて、そのまま地獄の炎の中に落ちたという。後に天王如来という記別を受けている。(要語解説九九頁・三六四頁参照)

提婆達多品 だいばだつたほん (要語解説六六頁参照)

提婆菩薩 だいばぼさつ 付法藏第十四の迦那提婆のこと。迦那は片目の意。一眼を天神に供養したため、片目となったと付法藏經に伝えられる。南天竺の王の前で、諸の外道と法論を行ない、ことごとく屈伏せしめたが、なかに凶悪な外道の一人が恨みをいだき、隙をうかがって提婆を刺したが、提婆はかえってその狂愚をあわれみ、外道を救った。悲嘆にくれ

る弟子たちに対しては、自分の殺されるのは先業の罪を消すためであるといい終わって死んだと伝えられている。

大悲經 だいひききょう 高齊の那連提耶舍の訳で五卷ある。

大白牛車 だいびやくこしや 法華經譬喻品第三に説かれている三車譬喻の一つ。羊車を声聞、鹿車を縁覺、牛車を菩薩に譬えたのに対し、大白牛車は唯一仏乗の法華經に譬えた。縦広五百由旬

の車で金の輪、棟は銀、金の繩で八方へつり、八万四千の宝の鈴をつけ、くれないの錦の旗を玉のさおにかけ、欄干には四天王の番をつけ、車内には、あらゆる体の仏菩薩が坐して、帝釈は音楽を奏でている。日蓮大聖人は「直至道場的大白牛車にして其の疾きこと風の如し、所詮南無妙法蓮華經を等一大車と云うなり」(御講聞書八二〇頁)と。

大宇宙を、自由自在に飛びゆく車であり、しつかり信心して、この車に乗り靈山へくるように、と述べられている。

大法印 だいほういん 印は偽りない証として世間で用いているもの。法印

とは印のように誤りのない仏法という意で用いる。大法印は眞実絶対の仏法の意。觀普賢經では法華經を大法印としている。現在は三大秘法の大御本尊が大法印である。

大宝坊・白鷺池 だいほうばう びやくろち 大宝坊は大集經の説所、白鷺池は大般若經の四所十六会の中第十六の説所、これらの会座に種々の仏

土から、無量無數の大菩薩が来集した。

大梵天王 色界十八天の一つ。初禪天の第三の王。初禪天に住して娑婆世界を領す。この天のうちで初禪天の王を大梵天王という。帝釈と共に常に仏の左右にあつて仏を助ける。仏の出世の時には最初にきて説法を請う。

大摩訶衍 大乘と訳す。また声聞、縁覺の二乗に対して菩薩をさす。

大慢婆羅門 釈尊滅後正法時代に生存していたバラモンの僧。慢心を起こして外道の三神および釈尊の像を高座の四足として、わが徳四聖にすぐれたりと称していたが、国王に処刑されるにあたり、賢愛論師に請うて罪を滅じ、論師はこれを慰問したが、大慢なお論師をのしり仏法僧を毀辱したので、言葉が終わらないうちに大地たちまち裂けて現身に地獄に落ちたという。

平頼綱 平左衛門尉頼綱のこと。終始、大聖人に敵対した鎌倉幕府の実力者。熱原の法難より満十四年目、謀叛の罪で一族郎党すべて滅びた。これ法華の現罰である。

第六天の魔王 魔の主領である。欲界の六欲天（四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化乐天・他化自在天）の頂上に住む他化自在天王のこと。正法に反対し、われわれの成仏を

妨げる働きをなす。

大論 大智度論のことで、竜樹菩薩が大品般若経を釈したものの。百卷あり、四論の一つに数えられる。羅什の訳もある。

他国侵逼難 謗法の国に外国が攻め入る災難、侵略しようとして襲ってくる災難。仁王経、薬師経などの三災七難の一つ。

墮在泥梨 泥梨とは、梵語で地獄の意。地獄へ落ちること。

他受用身 仏が衆生を導かれる姿に他受用身と自受用身がある。他受用身とは、菩薩なら菩薩、声聞なら声聞と、相手のために出現して法を説いた仏である。劣応身、勝応身など、

世間の人情に順じて現ずる仏は、すべて他受用身である。

多造塔寺堅固 釈尊は、滅後の衆生が、どのような教えによ

って救われていくか、大集経に五百年ずつ区切って予言し

ているが、その第四の五百年、すなわち釈尊滅後千五百一

年から二千年までをいう。寺や塔が多く建てられ、法華経

の迹門の教えによつて救われる時代である。

竜の口 神奈川県鎌倉市腰越にある。文永八年九月十二日、

幕府は、日蓮大聖人をここで切ろうとしたが、諸天の加護

が厳然としてあり、大聖人を切ることはできなかった。こ

れを竜の口の法難という。日蓮大聖人発迹顕本の場合。

多宝如来 東方宝浄に住む仏。多宝如来は菩薩行のとき、誓

願して「我成仏して滅度の後十方の国土に於て法華經を説く所あらば我が塔廟是の經を聴かんが為の故にその前に涌現して、為に証明となつて讃めて善哉といわん」といった。この誓願のように、釈迦仏の法華經を説くにあたり善哉善哉と証明している。

他方の国土 娑婆世界以外の国土であつて、たとえば東方の金色世界、西方の極樂淨土というのがこれである。

多宝の塔 (要語解説一〇六頁参照)

多宝仏 法華經宝塔品第十一のとき、多宝の塔に乗つて法華經の会座に出現し「皆是真實」と証明する。多宝仏は自ら法を説くことなく法華經説法のとき、十方の国土に必ず出現して真實なりと証明する。

多宝仏証明 見宝塔品において多宝如来が出現し「善哉善哉、釈迦牟尼世尊、能く平等大慧、教菩薩法、仏所護念の妙法華經を以つて、大衆の為に説きたもう。是の如し、是の如し。釈迦牟尼世尊、所説の如きは。皆是れ真實なり」と証明したのをさす。

多宝涌現 多宝如来が釈尊所説の法が皆是真實であることを証明するために、法華經宝塔品第十一で、多宝仏塔に乗つて出現したこと。

多聞天王 四大天王の一つで、毘沙門天王ともいう。北方を護り、一般に人を悩まさしめず、護世と称す。

陀羅尼 總持・能持または咒・密語等と訳す。異説が多いが「法華經」には旋陀羅尼・百千万億旋陀羅尼・法音方便陀羅尼の三種が説かれ、「瑜伽略纂」には法・義・咒・能得忍の四種の陀羅尼が説いてある。要するに、一には一字一語のなかに諸種無量の徳を總持して、治病・滅罪・護法の功德の力があることをいう。二には無辺の事理や無數の法門を統攝するのをいう。御義口伝下(七七七頁)に「陀羅尼とは南無妙法蓮華經なり」とある。

陀羅尼品 (要語解説七六頁参照)

他力本願 他力とは、神や仏など、自分の力以外の力を認めることで、念仏宗では阿彌陀の本願力をさしていう。阿彌陀仏の願力に依頼するのを他力本願という。御本尊を拝む私たちは、自己の生命を逞しく湧現して生活するのであつて、他力本願とは根本的に違ふ。

達磨大師 中国禪宗の初祖。菩薩達磨道法と訳す。南インドの刹帝利種香至王の第三子である。普通元年中国にはいつて武帝に謁したが用いられず、嵩山少林寺にはいり、壁に向かつて坐禅した。

彈だん呵か 彈だんは彈だん効き、呵かは呵か責せの義ぎ。釈尊一代五時の仏經に對す

る天台の判釈の一つ。方等部の教意であり、方等經ほうとうきやう（權大乗教）で二乗の性をあばいて責めてゐるのをいう。

但空たんくうの理り 小乗經で説くところの宇宙觀。森羅万象、一切の現象はただ空くうのみとする考え方。

断常二見だんじやうにけん 外道の生命觀である。断見だんけんと常見じやうけんのこと。断見と

は心身ともにこの一生を限りとして断絶し、再び生まれることがないという思想。常見とは心身とも常住不滅である

と説くが、鳥は、いつも鳥、人は必ず人に生まれると説いて因果を説かぬ思想。いずれも偏見である。このような見

解に六十二種ある。ゆえに六十二断常の見という。

断諸法中惡だんしよほうちゆうあく 法華經方便品第二に「若し人仏に信歸すれば、

如来欺誑ごうきやうしたまわず、亦貪嫉またとんしつの意無し、諸法の中の惡を断

じたまえり」との文を引いて十界互具を否定する。すなわ

ち仏界の惡を断ずれば仏界に余の九界を具するはずがない

ことになってしまう。

但中たんちゆう 別教で説くところの究極きゆうきよくの理をいう。次第の三諦と

も但中の觀ともいう。別教では、空仮中の三諦を各別にあらわし、空仮の二諦を破って中諦を説くので隔歴きやくりきやくの三諦

ともいわれ、十界互具を説かない。ゆえに玄義卷第一に

「隔歴の三諦は麤法なり。円融三諦は妙法なり」とあるように、別教の但中の理は法華經の円融の三諦（不但中）に劣る。

断惑証果の二乘だんかくしやうが にじよう 惑を断じて聖果しやうがを証得した声聞、縁覺をい

う。（觀心本尊抄二四三頁参照）

断惑証理だんかくしやうり 眞智をもつて妄惑もうわくを施せば眞理が現われてそれを

証明すること。（当体義抄五一七頁参照）

數異抄 淨土眞宗の教義の肝要といわれる他力信仰たうりききやうの勸信かんじんが

八章にわたって和文で書かれている。親鸞しんらんの弟子が師の没

後に異説や誤解の生じたのを歎なげき、耳に残る親鸞の言葉や

法語をつづつたものといわれる。

湛然たんねん 妙樂大師のこと。

檀越だんのつ 檀とは梵語で、旋主せんしゆと訳す。越とは檀の功德によつ

て、貧窮びんぐやうの海を越えることを意味している。

檀婆羅蜜だんばらみつ 六波羅蜜の一つ、布施波羅蜜のこと。

檀弥羅王だんみらおう 北インドの罽賓國けいひんの王。邪見にして國中の寺塔を

壊し、付法藏の第二十四の師子尊者ししそんじやを殺した。

ち

竹林精舍ちくりんしやうしや インド五精舍の一つで、摩伽陀國まかだこくの王舍城おうしやじやうの北に

あつた寺で、迦蘭陀竹園ともいう。迦蘭陀長者が大竹林の中に精舎を起し、仏に奉つたもの。

竹林の七賢 後漢末期の不安定な世情を反映して、無為自然

の老莊思想があこがれをもたれ、山林に閉じ込めり、大酒にふけり、奔放な談話を交す清談が流行した。竹林の七賢は、この清談の代表者七人、すなわち、阮籍、嵇康、山濤、阮咸、向秀、劉伶、王戎をいう。

智儼 中国華嚴宗の第二祖。杜順の弟子、南山の至相寺に住して華嚴を弘めた。至相大師と称する。

智者 諱を智顗といい智者大師と尊称し、また天台山に住まれたから天台大師ともいう。中国の天台宗の祖であり、理の一念三千の法門を説いた像法時代の正師である。（要語

解説三七〇頁参照）

地神五代 日本における神代の神、天神七代の後の神である。すなわち天照大神、天忍穗耳尊、天津彦彦火瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊の五代。

中有 四有の一つ。四有とは生有・死有・中有・本有である。

すなわち中有とは現在の生を終わり死んでから、来世に再び生をうけるまでの中間をいう。中有の時間は一定しない。

紂王（殷の紂王の項参照）

中国への仏教伝来（要語解説三四四頁参照）

仲尼、顔回 仲尼は孔子で、顔回は孔子の第一の弟子である。

中道実相 あらゆる現象の本質、真実の相のこと。一念三千

の妙法のこと。中道とは、法華経で説く三諦円融の原理によつて、仮諦も空諦も共にそなえる中諦をいい、あらゆる現象を包含する生命の本質である。実相とは諸法の現象の真実の相をいう。中道実相とは、宇宙と共に永遠に存続する十界互具・一念三千の当体であり、大聖人の顕わされた三大秘法の大御本尊である。

中道主義 最高唯一の思想である大聖人の色心不二の生命哲学を根底とし、生命の尊嚴を基調として唯心主義、唯物主義、実存主義等のあらゆる思想を指導し統一し包含し、人類を救済する大哲理。中道主義はまた人間主義ともいえる。

中論 竜樹の作。三論の一つ。

重華 中国大古の舜王のこと。至孝の人であつたが、父は頑

愚で後婦の意を用い、たびたび重華を殺害しようとしたが果たさず、ついに父は盲になったが、重華は依然孝養を続けたという。良く天下を治めた。古来孝行の手本とされている。（開目抄上一八六頁参照）

澄観 中国唐代の華嚴宗の僧。五台山清凉寺に住し華嚴を弘

めた。九朝七帝の師となり清涼国師と号す。

超高 趙高に同じ。秦の始皇帝および二世皇帝の時の奸臣である。皇帝の詔を曲げて、太子・扶蘇を殺して末子・胡亥を立て二世皇帝とし、また多くの忠臣を殺して権力を専らにした。

長舌 仏の御舌をいう。広長舌の略で、舌が広く長く柔らかで、顔をおおって髪のはえぎわまでとどくこと。舌を出すのは、いうことの真実である証拠としたのがインドの習慣であり、神力品第二十一において「広長舌を出して、上梵世に至らしめ云云」また「衆の宝樹下の師子座上の諸仏も、亦復是の如く、広長舌を出し云云」とある。

調達 提婆達多のこと。斛飯王の子で、釈尊の十大弟子の一人である阿難尊者の兄にあたる。また釈尊のいとこにもあたる。学問にも武術にもすぐれていたが、耶輸多羅女を妃にすることができなかったことから釈尊を深くうらんで、三逆罪を犯した。大地が裂けて、生きながらにして地獄へはいったが、法華経で悪人成仏を説かれ、天王如来の記別をうけた。

張良 漢の人。前漢創業の功臣。蕭何、韓信と共に漢創業の三傑と称される。韓を滅した秦の始皇帝を博浪沙（河南）

で襲ったが失敗。後、江蘇省下邳の橋上で黄石老人から兵法を授けられ、劉邦が挙兵するや、帷幄に参画し功を立て、漢の統一後、留侯（江蘇）に封ぜられた。

鎮護国家の道場 天子本命の道場とも、王城鎮護の道場ともいわれ、国家安泰のために祈禱し経を読誦するための寺院をいう。この道場は仏法の習いとして王城の丑寅（東北）の方向に建立される。

つ

通教 天台の教判のなかの化法の四教の第二。大乘の初門では、藏教にも通じ後の別教にも通ずるゆえに通教という。

通力 自由自在に通達する力をいう。神通力ともいう。人間にまねのできないことを通力だとすれば、畜生にも通力があるが、これを拝んでも幸せにはなれない。法華経の寿量品に「如来秘密神通之力」と説かれており、日蓮大聖人は、御義口伝に衆生の一切の振舞いは、ことごとく神通力であり、また、凡夫が即身成仏し、絶対の幸福を獲得するそれ以外の通力はないと述べられている。また唱法華題目抄には「利根と通力とはよるべからず」（一六六）と述べられている。

塚原三昧堂

大聖人が文永八年に佐渡にご流罪、十一月一日

に塚原三昧堂につかれ、翌文永九年四月二日まで五か月間
住まわれた。その後、四月三日に一の谷に移られた。塚原
は佐渡の新穂村にあり、三昧堂は当時、一間四方のあばら
やで風雪雨の入り込むひどい所であった。

簡御器 竹筒の形をした器で、水や酒等の液体を入れる食器。

秋元御書（簡御器抄ともいう。一〇七一頁）に出てくる。

犬神人 祇園の奴僕で、平素は沓や弓弦を作って業とし、祭
礼のときには、神輿の前に行つて道路を清めたり、神輿を
警衛したりした。

て

剃頭の師 受戒の師と同じ意。

丁蘭 孝行の人、中国の孝子伝等にある。幼いときに母を失
い、十五のとき母を木像に刻み、人々の軽蔑にも屈せず、

生母のようにこれに仕えた。

弟子分帳 日興上人の「白蓮が弟子に分与申す御筆御本尊目

録の事」のこと。正本は北山本門寺にある。形式は個条書
きで内容は弟子分、俗弟子分、女子弟子分、在家弟子分に
区別され、御本尊の下付を受けた人の住所、氏名、下付後

の信心状態等が記されている。

天界 十法界の一つである。細別して三界二十八天がある。

三界とは欲界・色界・無色界である。欲界に、四王天・忉
利天（三十三天）・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天

の六欲天がある。色界に、初禪の三天・二禪の三天・三禪
の三天・四禪の九天の十八天がある。無色界に、空処・識
処・無所有処・非想非非想処の四無色天がある。

伝教大師 平安朝時代の天台宗の開祖。諱は最澄といい、像
法時代に法華経を流布し、叡山延暦寺に迹門の大乗戒壇を
建立した。（要語解説三七四頁参照）

天月・池月 天月とは天にある月の実体で、池月とは天月が
池に映つた影をいい、天台大師が、法華経の本門を天月に
譬え、迹門を池月に譬えて、迹門は本門の影であつて、本
門に劣ることを指摘した言葉である。

韶曲 心がひねくれてへつらうこと。

天竺 インドのこと。月支国ともいい、釈迦仏法が流布した

中心地。

伝持付嘱 仏が説いた法を仏の弟子が令法久住のために相伝
していくこと。日寛上人は撰時抄文段に、弘宣、伝持、守
護の三付嘱を立てている。弘宣付嘱は僧俗一致で、守護付

囑が在家の者が弘法のために戦うことで、この伝持付囑は僧が法を正しく伝えることである。

天子魔 三障四魔のなかで、第六天の魔王の所作によるものをいう。三沢抄(一四八七頁)に「仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、毆ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、其の六は且くをく第七の大難は天子魔と申す物なり」と三障四魔のなかで、天子魔を、最も恐るべきものであると説かれている。天子魔は、社会生活のなかで権力者の身にはいつて、仏道修行の邪魔をするのが特徴。釈尊在世の提婆達多、阿闍世王、日蓮大聖人ご在世の良観、平左衛門等がこれにあたる。(要語解説二九七頁参照)

雲志問答 (要語解説四一六頁参照)

転重軽受 涅槃經の文。「重きを転じて軽く受く」と読む。

御本尊の偉大な功德によって重い罪を転じて軽く受け、謗法の罪をことごとく消滅して即身成仏すること。転重軽受法門(一〇〇〇頁)に「涅槃經に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みばつときへ

て死に候へば人天・三乘・一乗の益をうる事の候」とある。長い期間で消滅すべき過去からの無量の謗法の罪を、現世に成仏するために軽く消している。(要語解説三〇六頁参照)

天照大神 「あまてらすおおみかみ」という。高天原の主神で、国土の安全を守る神という。

天親 (要語解説三六七頁参照)

天神七代 日本神代の最初に天上にあった七代の神で、その名は種々の説がある。一説によれば国常立尊、国狭槌尊、豊斟淳尊(以上三代陽神)、泥土煮尊(陽)、沙土煮尊(陰)、大戸之道尊(陽)、大苦辺尊(陰)、面足尊(陽)、惶根尊(陰)、伊奘諾尊(陽)、伊奘冊尊(陰)(陽陰で一代)の七代。

天台過時の迹 天台が像法時代に弘めた法華經を迹といい、すでに過ぎ去った過去の法で功德がぜんぜんなくなったことをさす。

天台座主 日本天台宗の管主すなわち延暦寺の管主のこと。

第一代座主は義真、第二代座主円澄まではおおむね正しく法を伝えたが、第三代座主慈覚、第四代座主智証から真言の邪義を入れ謗法となった。

天台沙門 天台の弟子であるということ。大聖人は立宗の始めに天台沙門といわれたことがある。しかし佐渡以後は本

朝沙門、釈子日蓮と申されている。大聖人滅後、五老僧は大聖人の御真意を知らず天台沙門と称し幕府からの難を逃がれたのである。

天台宗の教義 (要語解説一七頁参照)

天台真言宗 台密ともいう。これに三流あり、すなわち伝教を祖とするもの、第四祖慈覚を祖とするもの、第五祖智証を祖とするものである。教義は法華宗と大日経は理同事勝であるとの義を根本と立てた邪義である。

天台大師 智者大師ともいう。中国天台宗の事実上の開祖。

中国の南三北七の十師を破り、迹門の法華経を中国に広め、出世の本懐として摩訶止観を説きあかした。三千人の弟子があつたが章安に付法した。(要語解説三七〇頁参照)

天台大師講 大師のご入滅会で、毎年十一月二十四日に行なつた。

天台法華宗年分学生式 伝教作の山家学生式の一つ。伝教は

叡山に大乘円頓戒の戒壇建立を志し、学生式三篇を上表して許可を請うた。弘仁九年五月十三日、天台法華宗年分学生式を、同年八月二十七日、勸奨天台宗年分学生式を、同年三月十五日、天台法華宗年分度者回小大式を上表した。この学制によれば毎年二人の学生を選び年分度者とし

て十二年間、止観・遮那の両業を修学させるという制度であつた。そして学業成就のあかつきには、各自の能力・適性により、官符をもつて登用された。

天王如来 法華経で、罪惡の提婆達多が授けられた、来世の如来号。提婆が天王如来の記別を授けられたことは童女の成仏と共に即身成仏をあらわしている。

天変地天 台風、早魃、落雷、洪水、地震等の自然界の変動によつて起こる災害。

転法輪 仏の教を法輪といい、教を演説するのを法輪を転ずるといふ。

添品法華 法華経六訳三存の一つで、中国隋の闍那崛多と達磨の共訳した添品妙法蓮華経のこと。七卷二十七品よりなる。三存のなかでは羅什三蔵訳の妙法蓮華経が最高で、正法華経も添品法華経も誤りが多く、大聖人も羅什訳を用いられている。

天魔波旬 波旬とは訳して殺者または悪者ともいふ。悪魔のことをいふ。

天竜 天神と竜神。八部衆(天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽)の非人類のなかに含まれる。天神とは天神地祇、梵天四天等の諸神王衆をいふ。竜神と

は、竜王やその部衆をいい、人・国・法などを守るのを職としてゐる。これに反するのを毒竜、悪竜という。

転輪聖王 てんりんじやうおう 輪王、また転輪王ともいう。この王身に三十二相を具し、位につくとき天より輪宝を感得し、その輪宝を転じて四方を降伏するので転輪王という。その輪宝に金銀銅鉄の四種あつて金輪王は四州、銀輪王は東西南の三州、銅輪王は東南の二州、鉄輪王は南閩浮提えんまふだいの一洲である。現在は立派な指導者はみな転輪聖王といえる。

と

当位即妙 どういそくみやう そのままの位が、即仏の位であること。当位とはそのままの位。妙とは妙覺みやうかくのことをいう。

堂宇 どうう ①一般に殿堂、堂ののき。②仏教では、堂は仏像を安んずるところ、宇は経論を置くという意。転じて寺院をいう。

等覺一転名字妙覺 とうかくいつてんみやうじみやうかく 天台宗の口決くけつである宗大事口伝抄（等海集）に「等覺一転、理即に入る」とある。観心本尊抄（二四九頁）に「本門に至つて等妙に登らしむ」とある。日蓮正宗の相伝には「等覺一転名字妙覺」と。すなわち法華經本門文上で等覺位にはいり、一転して本門文底もんでいの名字妙覺の位にはいること、すなわち南無妙法蓮華經を悟さとったこと

である。

道鏡 どうきやう 弓削の道鏡。奈良時代の法相宗大和葛木山の僧で、孝謙天皇（女帝）に重く用いられて太政大臣となり法王の位を授与され権勢をほしいままにし、八幡の神託を偽いつわつて帝位を奪わんと企て和氣清麿わけのきよまろに妨さまたげられた奸臣かんしん。光仁天皇が即位のとき、その地位を追われた。

当詣道場 どうけいどうじやう 「まさに道場に詣いたる」と読む。法華經普賢菩薩勸発品第二十八に「此の人は久しからずして、当に道場に詣けいして、諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得」とある。

末法においては三大秘法の御本尊を受持するところが道場となる。したがつて当詣道場とは即身成仏の義である。

唐虞の国 とうぐ 唐虞とは唐堯とうぎやう、虞舜ぐしゆんの二世をさす。義農の世と同じく繁栄した幸福の世であつたという。

同居土 どうきうど 四土（四種の国土）のなかの一つ。凡聖同居土ぼんじやうどという。凡夫も聖者も同じく住するゆえにいう。同居の穢土えど（娑婆世界のごとし）と同居の浄土（極樂世界のごとし）とがある。しかしこれは爾前經にぜんの説である。

東寺 とうじ 京都市南区にある真言宗東寺派の総本山。弘仁十四年嵯峨天皇が空海に賜たまわつて真言宗の本山となる。建てられたのは延暦十五年である。

道士 どうし 老子や莊子が説いた道教を弘める者。漢の時代に活躍

したが、仏教に敗れた。

導師 どうし 衆生を正しく仏道に導引する師。大御本尊を絶対に信
じ折伏戦に勇敢に邁進していく者が導師である。大聖人は
全人類を救う大導師である。

道慈 どうじ 大和大安寺の三論宗の第三祖。

道緯 どうい 念仏の第二祖で中国の陳・唐の時代の人。第一祖
は曇鸞、第三祖は善導である。

動執生疑 どうしゅうしやうぎ 執着している心を動揺させて、疑いを生ぜしめ
て会得させる化導の一方法。法華経では涌出品第十五、方
便品第二および序品第一で、この化導が行なわれている。

折伏等 しやくふく 動執生疑である。(要語解説一五九頁参照)

東春 とうしゅん 妙楽大師の弟子・智度法師の著書「天台法華疏義續」
の異名である。東春とは本来は地名であって智度法師の居
所であるところから、その名を取って著書の名としたので
ある。この書は天台大師の文句および妙楽大師の記の註釈
書である。

道昭 どうしやう 日本の法相宗の開祖。欽明天皇の元年に生まれ、後出
家し、孝徳天皇の白雉四年に入唐、玄奘から法相宗を学び
これを日本に伝えた。

刀杖瓦礫 とうじやうかりやく 刀や杖や瓦や礫をいい、威音王仏の像法におい

て増上慢の四衆が不輕菩薩を迫害したことをいう。末法に
おいては法華経勸持品の予言どおり第一類の俗衆増上慢
が法華経の行者を迫害することをいう。

闍諍堅固 とらじやうけんこ 大集経の五箇の五百歳のうち、第五の五百歳(五
五百歳ともいう、末法のこと)にあたり、釈迦仏法が隠没
して争いの絶えない時代をいう。

東条左衛門尉景信 とうじやうさゑもんゐのじやうかげのゐ 大聖人の折伏弘法に激しく敵対した安房
国長狭郡東条郷の地頭。特に文永元年十一月十一日、東条

の郷にはいられた大聖人が華房蓮華寺より工藤吉隆の邸宅
に移られる途中、小松原で多数の部下を率いた景信に襲撃
された。鏡忍房と工藤吉隆は討ち死にし、大聖人も頭に傷
をうけられ左の手を折られた。景信はその後まもなく狂死
したと伝えられる。

同生同名 どうしやうどうみやう 人が生まれたときから常に人の両肩にあり、そ
の行動の善悪を記して天に報告し、その人を守護するとい
う同生天、同名天の二神。俱生神ともいう。(同生同名御

書一一四頁参照)

刀杖の難 とうじやうのなん 法華経勸持品第十三の予言どおり、末法の法華
経の行者が謗法の者に刀や杖で迫害される法難。大聖人の

小松原の法難、あるいは竜の口の法難のこと。

刀杖不加 法華經安樂行品第十四の文。刀や杖で迫害をうけないこと、あるいは諸天善神に守護されることをいう。

刀尋段段壞 法華經觀世音菩薩普門品第二十五の文で「刀尋いで段段に壞れなん」とある。七難をまぬかれる功德をあらわすなかの一つである。

道遠和尚 天台より七代の法孫で、中国の天台の正統を継ぎ、貞元二十年から二十一年にわたって、日本の伝教大師や義真師に、天台法門の奥底を伝えた。二十四歳で具足戒を受け、後に妙樂大師の弟子となり、「止観」と「弘決」を付嘱され、各地で正法を弘め、法を広修に伝えて死んだ。

(要語解説三七三頁参照)

刀星 刀は刀斗すなわち柄のついた鍋をいう。この星座の形が柄のついた鍋に似ているのでこの名がある。

道宣 中国の南山律宗の祖。南山律師ともいう。隋の開皇十六年乾封二年、七十二歳まで生存す。十五歳で出家し、智願律師によって法を受け、後、智首に従って律学を学んだ。行事抄を著わし、また玄奘の翻經を助けた。

道善房 安房の国清澄寺の住僧。大聖人の幼小の剃髪の師匠である。兄弟弟子の淨願房と義淨房の二人は入信したが、

道善房は憶病で晩年に心をひかれるものがあつたが、保身のため念仏を離れることができず、建治二年六月、一生を終わつた。大聖人は弟子の民部日向をつかわし報恩抄をもつて清澄寺に向かわせ故道善房の御墓の前で拝読させた。

同体異心 異体同心に対する言葉。体は同じで心が異なること。(異体同心事一四六三頁参照)

東大寺 奈良市にある華嚴宗の総本山。聖武天皇が天平十五年に造立した。

当体蓮華 総じては宇宙の森羅万象、一切の現象が当体蓮華

であり、妙法蓮華である。別していえば、日蓮大聖人の仏法を修行する私たちのみが当体蓮華であるが、さらに別しては、日蓮大聖人が当体蓮華である。当体義抄(五一〇頁)に「問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり……而も權教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体是なり」云々とある。十界三千の妙法の当体をただちに蓮華と名づけるゆえに、当体蓮華という。すなわち、これは宇宙の森羅万象の当体は、ことごとく妙法であることを蓮華といい、その当体蓮華とは森羅万象をいうのである。一切衆生の胸間の八葉を

蓮華と名づけ、これを当体蓮華という。この八葉の蓮華には二つの意味がある。その一つは、われわれの生命それ自体が妙法蓮華であるということである。二つには、われわれの生命自体が妙法蓮華即当体蓮華であるということをして、われわれの肉体の中から見いだしたことである。（要語解説二四七頁参照）

唐の東・羯の西 唐は中国・羯は沿海州の一带をさすと考えられる。すなわち唐の東・羯の西とは日本国をさす。

塔婆 死んだ人の身骨を安んじて、祭祠する建て物。日本では、塔形の木標の呼び名となっている。起塔供養の儀を模して、死者の冥福を回向する標としている。

刀兵劫起 兵乱が起こること。

当分跨節 当分は、そのままそこでの意。跨節は、その一関一節にまたがって一重立ち入りたるところの意である。同じく第一というも当分の第一か跨節の第一かを見きわめなければならぬ。

東方如来 薬師如来のこと。その国土が東方淨瑠璃世界であるので、このように呼ぶ。日本では薬師如来への信仰は奈良時代の後期に一般に弘まっていた。この薬師如来は法華經本門の釈尊の分身であり、三大秘法の御本尊に対しては

垂迹化他の仏となる。

東方の鷲王 鷲王は仏の異名、すなわち薬師如来である。

東密 弘法が立てた真言宗のこと。台密に対するもの。

等妙 別教で立てる五十二位のうち、五十一位が等覺で第五

十二位が妙覺で仏果の位となる。

同名同生の天 俱生神ともいう。同名同名御書（一一一五

頁）に「人の身には同生同名と申す二のつかひを天生るる

時よりつけさせ給いて影の身に・したがふがごとく須臾も

・はなれず、大罪・小罪・大功德・小功德すこしも・おと

さず・かはる・かはる天にのぼて申し候と仏説き給う」と

ある。

道門増上慢 法華經勸持品第十三に説かれた三類の強敵の第

二。邪宗の僧が爾前権經に執着して法華經の行者を誹謗し

敵対して迫害すること。

動亂塵劫 通教の菩薩の修行の時間をいう。この教の菩薩は

五十二位のうちの第七地に見思を断ずるが、断じ尽くせば

三界に生ずることができないから、第八地、第九地るとき

に誓って断じた残りの煩惱の習慣性（習氣という）をたも

って三界に生じ、衆生を化導する。その間に「動もすれば

塵劫（長い期間）を踰ゆる」をいう。

当来の世 未来世。

切利天 欲界六天の第二天で、帝釈天は、この天の主である。この天は須弥山の頂にあり分かれて三十三天となる。

時 (要語解説一三七頁参照)

富木常忍 (要語解説三八七頁参照)

得一 徳一とも書く。平安時代初期の法相宗の僧。初め興福

寺の修円について法相を学び、常陸の筑波山等を開いた。

伝教大師との間にしばしば法論をたたかわし、「中辺義鏡」

「恵日羽足」等の著書をつくり、法華経を誹謗し、伝教大

師を難じてついに舌が八つに裂けて死んだと伝えられる。

「得一云く」等の文は中辺義鏡にあるといわれている。

穢子 付仏法の外道の人名。小乗経を学び小乗の理に迷って

破仏法の説を立てた。

読誦雑行 浄土宗の邪義で、五種の雑行の一つ。往生浄土の

経以外を読誦すること。(立正安国論二二頁参照)

読誦多聞堅固 釈尊滅後の衆生が、いかなる教えによつて救

われていくかを予言された大集経の五箇の五百歳のうち、

第三の五百歳(釈尊滅後千一年〜千五百年)にあたり、経

文を読んだり、講説を聞くことが盛んな時代をいう。

徳勝童子 釈尊が王舎城に乞食をしたとき、土の餅を供養し

た。その功德によつて、釈尊滅後百年に阿育大王と生まれ

たという。付法藏経、阿育王経等に説かれている。

徳政 君主・宰官等が自らの財を貧民に施し、あるいは富豪

として慈善を行なわしむるをいう。

禿人 禿とは髪の毛のない人、食うために出家した偽坊主をい

う。涅槃経金剛身品にある言葉。

徳薄垢重 寿量品第十六に「薄徳の人は善根を種えず」と説

き、また「小法を楽える徳薄垢重の者」というのがこれ

ある。すなわち、善根のない、罪業の深い者の形容。

毒発等の一分 毒が体内にあればいつ発して死ぬかもしれな

いところから、爾前経を聞いて過去世の法華の下種を覚つ

た者を毒発の一分と譬えた。

得無生忍 無生忍の悟りを得ること。無生忍とは無生無滅の

理を認知して決定安住する位。初地、初住あるいは七、

八、九地の位にはいった菩薩をいう。

社順 隋の文帝、唐の太宗より崇敬をうけ、華嚴法界観門一

巻、忘尽遷原観一卷を著わして華嚴宗を弘めた。

都率天 六欲天の一つ。天界二十八天のうち、欲界第四天の

こと。弥勒は補処の菩薩として、この天にありとされて

いる。

都率の内院 天界二十八天のうち、欲界第四天の名。都率、

都率陀、都率哆、都術、都史多、觀史多、闍瑟哆、珊都史多等と称する。これが天処、内処の二処に分かれ、その内院を弥勒菩薩の浄土とし、外院を天界の衆生の欲樂する所としている。この弥勒菩薩の浄土を都率の内院という。これをまた都史多天宮とも呼ぶ。

獨覺 緣覺に同じ。仏法の滅亡した世に出て先世の因緣により自ら無常を觀じて空理を悟る者をいう。これに二種類あつて、一は單獨にして伴侶のないのを麟喻獨覺といい、二に伴侶があつて同一の獨覺を得るものを部行獨覺という。

毒鼓の緣 毒鼓とは毒藥を塗った太鼓のこと。折伏をうけてすなおに入信し、功德をうける者は順緣であり、反対して、ついに地獄の相で死んでいく者は逆緣である。謗法の罪によつて、いったんは地獄へ落ちてても、御本尊に縁をもつた功德によつて、将来、必ず、その罪を滅し終えて、再び御本尊に巡り会い、成仏する。これが逆緣の衆生であり、毒鼓の緣という。教機時国抄(四三八頁)に「謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし毒鼓の緣と成さんが為なり、例せば不輕菩薩の如し」とある。

兜羅綿 綿花のこと。柔軟な纖毛より成る綿のこと。非常に

柔らかい譬えに用いられている。

頓教 化儀の四教のうちの一つ。頓とは、速やか、ただちにの意。すなわち誘引の手段をとらず率直に大乘を説くのを頓教という。

貪瞋癡の酒 貪瞋癡の三毒が衆生の心を惑わすのは、あたかも酒が、人を酔わせ、本心を奪つてしまうようなものであると、三毒を酒に酔うのに譬えた。兄弟抄(一〇八一頁)に出ている。

曇無讖 中インドの人で法豊という。曇無讖とは梵語。十六歳で出家し、達磨耶舎にしたがつて学んだが、聰敏で群を抜いていた。初め小乗を学び、後に大乘に帰依した。大般涅槃四十卷を訳したほか、金光明經、大集經などの諸經を訳したが、梵本を求めて行く途中、四十九歳にして害せられた。

曇鸞 中国南北朝時代の浄土宗の開祖である。北魏孝文帝の承明元年、雁門で生まれ、五台山で出家した。「觀無量壽經」を菩提留支から受け、その修行に励み、魏主より神鸞という号を授けられた。大いに浄土教の弘布に努めたが、後、汾州の玄中寺に住し、興和四年、六十七歳で死んだ。真宗では、七祖中第三祖と立てている。「往生論註」を

著わす。

な

泥洹（泥洹）の夕（夕） 最後の説法の時ということ。泥洹とは涅槃寂滅と

同じ。

内外（内外）の賊起り 自界叛逆（自界叛逆）を示す。すなわち内とは内戚（内戚）（父

方の親戚）外とは外戚（外戚）（母方の親戚）であるから、父子・

兄弟・夫婦の間で互いに争うことをいう。仁王經にある。

内鑑（内鑑）冷然 心の中ではじゅうぶん知っているが外にいい出さ

ないこと、すなわち竜樹・天親は一念三千の法門を自ら知

っていたが、他人に対して説法することはなかった。「一

念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめ

たり、竜樹・天親・知つてしかも・いまだ・ひろい出（拾出）だ

さず云云」（開目抄上一八九頁）

内薰（内薰）外護 一切衆生の生命に内在する仏性が自己の内から動

き出し薰発して、仏性をおおい隠すもろもろの妄念（妄念）を払い

のけて顕現することを内薰といい、この内薰は自己を護り

助けて成仏の境涯を悟らせるから、これを外護という。

内外（内外）相對 （要語解説一四一頁参照）

内証（内証）の寿量品 三大秘法の事行の一念三千の南無妙法蓮華經

をいう。文底の寿量品のこと。

名越家 北条朝時一家のこと。執権・北条義時の次子、名越

に住していたので、名越殿といい、その家を名越家と称す

る。長狭郡東条の郷の領主である。朝時の妻を大尼御前、

名越の尼ともいい、その孫、公時の嫁を新尼という。大尼

より新尼の方が信心が強かった。

七つの畏るべき難 仁王經の七難をさす。すなわち、日月失

度難、衆星變改難、諸火梵燒難、時節反逆難、大風数起難、

天地亢陽難、四方賊来難。

那由佗劫 インドにおける大数の名目で極大で数えることの

できない数をいう。那由佗は阿由多の百倍の数といわれ、

万億とも千億とも数千万ともいう。劫は長時の意。

那羅延 那羅延は梵語で、那羅延那ともいう。慧琳音義第六

に「那羅延は欲界中の天の名なり、一に毘紐天と名く、多力

を求めんと欲する者、承事供養し、もし、精誠祈禱せば、

多く神力を獲るなり」とある。弘法は雜問答に「大日經こ

そ、余教で救うことができない者も救う。それは、大那羅

延力があるからだ」と邪義を述べている。

南閻浮提 須弥山の四州のなかで南に位置するから南閻浮提

という。この地球上、全世界をさす。

南岳大師

中国南北朝時代の法華經の持者で、天台の師にあ

たる。慧文禪師に法を承け、天台智者大師に伝えた。武津

の人で、出家後は常に法華經を誦し、あるとき法華三昧を

開悟した。陳の光大の初、南嶽に移り、大建九年に、端座

したまま六十三歳で入寂した。そのときの相は、身は柔

らかく、顔色は生きているような成仏の相であつたといわ

れている。著書には「四十二字門觀」「法華安樂行儀」「立

誓願文」などがある。(要語解説三七一頁参照)

南三北七 中国南北朝時代に江南地方には三派、江北に七派

合わせて十派に仏教が分かれていた。玄義卷第十上には天

台大師がこれらを打ち破っている。

兩条時光 (要語解説三八五頁参照)

難信難解 法華經法師品第十に「我が所説の經典、無量千万

億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に

於いて、此の法華經、最も為れ難信難解なり」との文をさ

す。易信易解に対する語で、一応の信解ではおおよびもつか

ないほどの甚深の義をいいあらわしている。

難陀 ①孫陀羅難陀。父は淨飯王で母は摩訶波闍波提比丘尼

であり、釈尊の異母弟である。②唯識十大論師の一人。

南斗 二十八宿中、北方の斗宿に属する。南と呼ばれるのは

夏秋の間は南方に見えるゆえである。この星に異変がある

と天子に憂事が起こるといわれる。

南都 京都を北都というのに対して、南都は奈良。

南都北嶺 南都は京都に対して奈良をいう。東大寺・興福

寺・法隆寺・藥師寺・大安寺・元興寺・西大寺を南都七大

寺という。京都の北にある比叡山を北嶺という。

南都六宗 奈良を中心として行なわれた華嚴・法相・三論・

俱舍・成実・律の六宗。伝教大師がこれ等を論破して天台

宗に統一した。

二界八番 法華經の説法の座に連なつた三衆(声聞衆・菩薩

衆・維衆)の第三の二界八番の維衆。二界とは欲界と色界。

八番とは①欲界天衆、②色界天衆、③竜王衆、④乾闥婆衆、

⑤阿修羅衆、⑥緊那羅衆、⑦迦楼羅衆、⑧人王民衆。詳し

くは法華經序品に名が連ねてある。

二經一法 法華經と般若經はその名は異なっているが、同じ

一法であるという。中国三論宗の開祖・吉蔵のいった邪義。

二教論 弘法の著で邪義を説いている。顯密二教論という。

釈尊の説く顕教は劣り、大日法身の説く金剛・胎藏両部の密教はまさると論ずる書。

肉眼 五眼のなかの一つ。肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼を五眼という。肉眼は普通の人間の眼、天眼は天界所具の眼で、近くでも遠くでも昼でも夜でも、物事を見ることのできる目で、人間界にも時々これを有する者がある。慧眼は二乗の人空無相の理を達見する智慧の眼で、われわれ凡夫においては深い知識体験にもとづく物事の判断力、法眼は菩薩が諸の仮名の法に達してあやまらず、一切衆生を度すのために法門を照了する智慧の目で、われわれにすれば仏教の法則のうえから一切の事物を判断する力、仏眼は三世十方にわたり一切の事物を見とおす仏の眼。

日向記 御講聞書ともいう。大聖人が身延で法華經の講義をされたのを六老の一人、日向が筆録したもの。日興上人の御義口伝よりも格段に劣る。

而強毒之 「而も強いて之を毒す」と読む。天台大師の法華文句にある。妙法を聞くのを好まない者に対しても、強いてこれを説いて毒心を起こさせること。毒心というのは貪瞋癡の三毒で、なかでも地獄の因である瞋恚をいう。文句には釈尊の教え方と、常不輕菩薩の教え方とを比べて、而

強毒之のゆえんが説かれているが、反対する者も、毒鼓の縁をむすんで、必ず御本尊にあえるという原理である。

二箇相承 (要語解説三三七頁参照)

二箇の疎曉 提婆品第十二における二大法門をいう。一には釈尊の弘經・提婆達多の成道、二には文殊の通經・竜女の作仏である。惡逆の限りを尽くして現身に地獄に落ちた提婆達多が、釈尊の仏法によって成仏したことは、煩惱即菩提の現証であり、竜女の女が即身成仏したとは、竜女成仏(女人成仏)を説いたものである。いずれも、衆生に対し、法華經の救済力の偉大さを示し、感奮興起させる大諫暁である。

二箇の大事 開目抄にある法華經の二箇の大事とは、一には迹門理の一念三千、二には本門事の一念三千をさす。

二十逆罪 主師親に背く二十の大罪。すなわち背主の八逆罪

(謀反・謀大逆・謀逆・惡逆・不道・大不敬・不孝・不義)

と背師の七逆罪(出仏身血・殺父・殺母・殺和上・殺阿闍梨・破羯磨轉法輪僧・殺聖人)と背親の五逆罪(殺父・殺

母・殺阿羅漢・出仏身血・破和合僧)の合わせて二十の逆罪。

二十行の偈 法華經勸持品第十三の偈文。法華經の虚空會で

八十万億那由他の菩薩が、仏滅後に三類の強敵の大難に耐

えて法華經の弘通を誓言した文。

二十五有 三界六道を二十五種に分けたもの。欲界の四趣

(地獄・餓鬼・畜生・修羅)、四洲(東弗婆提・西瞿耶尼・

南閼浮提・北鬱單越)、六欲天(四天王・三十三天・夜摩

天・兜率天・化樂天・他化自在天)と、大梵天と色界の四

禪(初禪天・二禪天・三禪天・四禪天)と無色界の四天

(空処・識処・無所有処・悲想非非想処)と無想天と、那含

天とを合して二十五である。これを有とする。法華經の藥

草喻品第五に「破有法王、出現世間」とあるように、この

有を破したのが、仏法である。

二十五法 摩訶止觀の第六方便章に説く二十五の方便であ

る。すなわち第七正觀章にはいる前に觀心の完全を期する

ため、心身を調え定慧を磨く等の方便である。一、具五緣

(持戒清淨・衣食具足・閑居靜處・息諸緣勝・近善知識)

二、呵五欲(色・声・香・味・触)三、棄五蓋(貪欲・瞋

恚・睡眠・掉悔・疑)四、調五事(調心・調身・調息・調

眠・調食)五、行五法(欲・精進・念・巧慧・一心)

二十八宿 二十八の星座の名。東西南北に七つずつある。東

井・鬼・柳・星・張・翼・轸である。

二十四字 不輕菩薩の説いた二十四字の法華經。常不輕菩薩

品第二十に「我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行

菩薩道、當得作仏」とある二十四字を指す。

二十四番勝負 日蓮大聖人の仏法が天台の仏法より勝れてい

ることを、二十四の点から述べたもの。(本因妙抄八七五

參照)

二種の生死 二死ともいう。分段の生死と變易の生死を合わ

せていう。生死とは苦しみの意と生命流轉の実相をあらわ

す意とのこと。分段の生死とは、前者で三界・六道の苦し

み悩む状態。變易の生死とは、後者で分段の生死を変え改

めた声聞・緣覺・菩薩等、聖者の生死である。

二聖 法華經陀羅尼品の会座で、法華經守護を誓った藥王・

勇施の二菩薩をいう場合と天台・伝教をさす場合とがある。

二乘 声聞、緣覺の階級の人。釈迦仏法では舍利弗・迦葉・

目連等が二乗といわれている。声聞とは、ある理論をつか

み、喜びを感じその思想によって人生觀とする人たち。ま

たわれわれが本を読んだりするとき、心を支配する生命状

態で、インテリ階級がそれである。緣覺とは、縁によって

覚る境涯で、畑を耕したり、花を活けたり、大工仕事、針

仕事をしたり、体を動かすことによって、そこに何ともいえない苦しみを忘れた三昧境ともいうべき状態を心に感ずるもので、芸術家、音楽家等である。

二乗作仏 二乗（声聞・縁覺）が仏になること。二乗作仏を説かないことが、始成正覺を説くこととならんで爾前二種の失の一つである。

二乘闡提 二乗は声聞と縁覺で、舍利弗、迦葉、目連等であり、闡提は一闡提の略で不信の者。爾前經で二乘闡提の不成仏を説き法華經で即身成仏を説くことは開目抄に詳しい。

二処三会 法華經の説處と説會。二処とは靈鷲山と虚空。三会とは前靈山會、虚空會、後靈山會である。すなわち法華經は宝塔品から囑累品までの十二品は虚空會で、前後の十六品は靈山會で説かれたのである。

爾前二種の失 法華經以前の經には二つの重大な根本的欠陥がある。一には爾前經には十界互具を説かず二乗不作仏であり一念三千も説かれていない。二には始成正覺を根底としており未發迹であるから久遠実成は説かれていない。

日有上人（要語解説三七七―参照）

日我 富士門流の保田妙本寺、小泉久遠寺兩寺の第十四代。

日我の立てた教義は大聖人を本仏と立て富士の正流に近い

が、不相伝家であるから興義については理解できなかった。日月 日天子・月天子をいう。明星天子を含めて三光天子といい、共に四天下を普照する。

日月燈明仏 文殊師利菩薩が過去世に妙光菩薩と称したときに出現した古仏。法華經序品で、釈尊が法華經を説こうとしたときに六瑞が起きたので弥勒菩薩がその因縁を文殊師利に質問した。過去世に日月燈明仏が法華經を説こうとしたときも同じく六瑞が起きたことを述べている。

日寛上人（要語解説三七七―参照）

日目上人（要語解説三七五―参照）

日蓮宗一致派（要語解説三九一―参照）

日蓮宗不受不施派（要語解説三九七―参照）

日蓮大聖人のご一生（要語解説三四八―参照）

肉髻 迹仏（釈尊）が化導のために具する色相莊嚴の三十二相の一つ。肉髻相とは仏の頭の頂上の肉が高く隆起して髻のごときゆえにこの名がある。無見頂相ともいう。一切の人々がその頂辺を見ることができないゆえである。

日興上人（要語解説三五一―参照）

二天三仙 外道の説。二天とは摩醯首羅天と毘紐天で外道の信仰の対象。三仙とは迦毘羅・徧樓僧伽・勒娑婆で仏出現

前八百年前後の外道の師で四韋陀教典を著わした。

二度の流難 大聖人がこうむった二度の流罪、伊東流罪と佐渡流罪。法華經勸持品第十三の数々見擯出にあたる。

二而不二 「二にして二ならず」と読む。一往は二つのものであるが、再往これをみれば、一体のものであること。

二百五十戒 戒の意義は非を防ぎ惡を止めさせるものである。戒に小乗戒と大乘戒とがあり、小乗戒の、僧が持つ具足戒のなかで、比丘が持つのはこの二百五十戒である。年齢二十歳以上、七十歳以下の比丘で諸根具足し、身体清

淨、過失なく、沙弥戒をうけた者のみ持つことを許される。

二仏並座 法華經の会座で、迹門の三周の説法が終わってから、宝塔品第十一から神力品第二十一に至るまで、虚空に

涌出した多宝塔中に、釈迦（右）多宝（左）の二仏が並び坐したのをいう。境智冥合の義をあらわす。

日本への仏教伝来 （要語解説三四六頁参照）

入仏知見 法華經方便品第二の四仏知見の一つ。

柔和忍辱 柔和は性質がやさしくおとなしいこと。忍辱は、

もろもろの侮辱を忍受し、逆境にあっても心が動揺しないこと。御本尊に信順することが柔和であり、世間にあつて

中傷を忍受し逆境を切り開く信心が、柔和忍辱である。

如意宝珠 意のままに、種々無量の宝を出すことができる

珠。仏舍利變じて如意宝珠となるとか、あるいは竜王の腦の中から出るとも、摩竭魚の腦中から出るともいわれる。

汝可取服 壽量品第十六の文。「汝取つて服すべし」と読む。

御義口伝下（七五六頁）に「汝とは末法の一切衆生なり取は法華經を受持する時の儀式なり、服するとは唱え奉ることなり」とある。信行に分けると、依義判文抄に「取は是

れ信心・服は是れ題目なり」とある。

如我等無異 法華經方便品第二の文で「我が如く等しくして異なること無からしむ」と読む。一切衆生を仏と同じ境涯

に入らしむるということ。

如去の二字 法華經（羅什訳）の冒頭に置かれた「如是我聞」の

「如」の字と、終わりに置かれた「作礼而去」の「去」の字。

法華經二十八品に説かれ文々句々を凝縮してあらわし、

生死の二法、理事の一念三千等、重要な法門をあらわす。

如是我聞 （要語解説八三頁参照）

如説修行 仏の説のごとく修行して違わないことであり、如

説修行の行者には、必ず三類の強敵がある。すなわち、釈

尊の予言どおり、三類の強敵にあつて法を弘めたのは、日

蓮大聖人である。末法は折伏の時であり、総じていえば折

伏をする学会員も、如説修行之者といえる。在世滅後を通じて三つの意味がある。一つは人法に約して、如説は法に約し修行は人に約すのである。釈尊の在世においていうならば、釈尊所説の一代の諸経は法であり、その所説のごとく自らこれを行ずるのは修行である。二つには師弟相對に約して、如説は師説であり、修行とは弟子に約するのである。師の所説のごとくに弟子がこれを修行するのは如説修行である。三つには、自行化他に約す、如説とは化他であり、修行は自行である。（要語解説三一七頁参照）

如如 真如ともいう。三世常住にして、また一瞬一瞬の縁にしたがつて種々の相を現ずる。生命の眞実の姿をいう。

女人成仏 凡夫の女人在に成ること。法華經にいたつて初めて説かれる法門で、提婆品第十二では、八歳の童女の即身成仏をもつて現証を示している。爾前經では「女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず」等と不成仏を説いている。

（要語解説三三二頁参照）

如法一日の兩經 如法經と一日經のこと。法華經書寫の行を如法經といい、大勢集まつて一部の經を一日に写しおえることを一日經という。これは共に末法の修行ではない。

如法經 法華經を書寫する行で慈覺大師より始まる。

如來一切自在の神力 法華經神力品第二十一の結要付囑の

文。如來が一切の諸法に對する自在の神力であり、五重玄の妙用にあたる。三大秘法に配すと、本門の戒壇にあたる。

如來一切所有の法 法華經神力品第二十一の結要付囑の文。

如來が持ち有りする所の一切の法ということである。天台大師は五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とせられたのである。三大秘法總在の御本尊にあたる。

如來一切甚深の事 法華經神力品第二十一の結要付囑の文。

如來の修得する一切の因果で甚深の事であり、五重玄に配すと妙宗にあたる。三大秘法に配して本門の題目にあたる。

如來一切秘要の藏 法華經神力品第二十一の結要付囑の文。

如來の証得する一切の実相で、秘密にたち通達している藏ということであり、五重玄に配して、妙体にあたる。三

大秘法に配すと本門の本尊にあたる。

如來壽量品 （要語解説六九頁参照）

如來神力品 （要語解説七三頁参照）

如來禪 禪の三種の一つ。如來所伝の禪法。如來所得の禪定

に悟入し、化他の行を行なう。祖師禪の對。

如來秘密神通之力 法華經壽量品第十六の文。無作三身および本門の本尊の依文である。三大秘法の御本尊のみが、一

切衆生を即身成仏させる如来秘密神通之力をもっている。

如来とは仏、秘密とは仏の甚深の働きをいい、神通之力とは仏の至妙なる力をいう。(要語解説二七三頁参照)

如来滅後五五百歳 如来滅後とは釈尊入滅後の正像末の三時

をいう。正像二千年、四箇の五百歳を過ぎた末法の始めの

第五の五百歳をもつて如来滅後五五百歳という。釈尊は大

集経に滅後第五の五百歳を予言して「次の五百年は我が法

中において、闢諍言訟して白法隠没して堅固なり」と述べて

いる。この予言は現実の世相とよく一致しており、この

動乱の世相の中に、末法の御本仏日蓮大聖人が御出現にな

つて、三大秘法の御本尊を広宣流布されるのである。如来

滅後五五百歳に始む観心の本尊抄に詳しい。

如蓮華在水 涌出品第十五で、本化の地涌の菩薩の姿が、あ

まりにも立派なのに驚いて、弥勒が「不染世間法、如蓮華

在水」といった。本化の菩薩が、よごれきつた世間にあつ

ても、汚れず清らかなことは、あたかも蓮華が泥水の中か

ら出てきて、しかもその泥水に汚されないようなものだ

の譬え。現在では、五濁惡世に民衆の苦悩を救い、大衆の

なかに前進している創価学会こそ、如蓮華在水に譬えら

人衆疾疫の難 伝染病・流行病等がはやって多くの人が死ぬ

難をいう。薬師経の七難のなかの一つ。

人天大会 仏の説法の会座に大衆が集合したことを大会とい

い、別して仏出世の対告衆である人界天界の衆生の名をあ

げて人天大会という。

仁徳王子 人皇第十六代で応神天皇の第四子である。即位

後、都を摂津の難波に定め大いに徳政を施したという。

忍辱の鎧 勅持品第十三に「当に忍辱の鎧を着るべし」また

法師品第十には「柔和忍辱を衣とす」とあるが、仏が本化

の菩薩に付属をされた理由の一つは、末法の難を忍ぶこと

ができるからである。鎧は刀杖箭槍の傷害をふせぐ武具で

あるが、忍は大慈悲から出る。慈悲なくして、大難を忍び

仏法流布することはできない。

仁王経 羅什が訳した仁王般若波羅蜜経と、不空が訳した仁

王護国般若波羅蜜経があるが、御書に引用されているのは

羅什訳の方で、法が滅尽せんとする時、悪業のゆえに種々

の災いが起こることが説かれている。法華・金光明両経と

共に、護国の三経とも数えられている。

忍波羅蜜 六波羅蜜の第三、忍辱波羅蜜のこと。

人法一箇 (要語解説二四六頁参照)

涅槃 滅・滅度・寂滅・解脱・円寂等と訳す。生死の境を出離するのを涅槃という。また自由・安樂・清淨・平和・永遠等をそなえた幸福境で、慈悲・智慧・福德・寿命の万徳を具備している理想的境界。小乗では、たんに煩惱を断じ灰身滅智した境界を涅槃とし、有余・無余の二種の涅槃を説く。しかし、日蓮大聖人の下種仏法では生死即涅槃と説き明かされている。

涅槃經 大般涅槃經の略。釈尊の入涅槃、ならびにその際説かれた説法を記録した經典。小乗經では、東晋の法願が訳した大般涅槃經三卷がある。(釈尊入涅槃の際、仏弟子に對して懇切に、四念所、四正勤等を説いたのを記し、さらに、入滅前後の状況が詳述されている大乘の涅槃經は二ある) ①北凉の曇無讖三蔵の訳で四十卷あり「北本涅槃」と呼ばれている。(釈尊涅槃に入らんとするとき、無量の大衆に對して説かれた大乘の教義で、法身常住、涅槃の因縁など十三品ある) ②劉宋の慧嚴、慧觀、謝靈運等が前記の法願訳を対照し、北本を修訂した三十六卷で、南本と呼ぶ。涅槃經は「此の法華經に説く所の仏性常住を重ねて之を説

いて歸本せしめ涅槃經の円常を以て法華經に摂す、涅槃經の得分は但・前三教に限る、天台の玄義の三に云く『涅槃は贖命の重宝なり重ねて掌を抵つのみ』(寺泊御書九五二頁)と述べられているように、法華經の流通文となる。**拈華** 華を拈ること。禪宗で依用している大梵天王問仏決疑經に「涅槃の時、世尊座に登り拈華して衆に示す」と説いているが、この經は偽經と断定されており、日蓮大聖人も聖愚問答抄(四八七頁)などで破しておられる。ゆえに拈華の説も信すべきものは何もない。

燃燈仏 法華經序品第一に説かれる。過去の日月燈明仏の八王子のなかの末子である。他の七王子と共に、父の高弟である妙光に従って法華經を修行し、八王子がしだいに成仏し、その最後に成仏した仏である。生まれた時に身の光りが燈のようであったために、成仏後も燃燈仏と称した。釈尊が因位の時に、儒童菩薩として蓮華を供養したのは、この仏である。燃燈仏は釈尊の師であり、文殊の弟子(文殊は当時の妙光)であるところから、文殊を、釈尊の九代の師という。寿量品の文上では、燃燈仏は久遠実成の釈尊が中間に出現した仏ともなる。文底の仏法では、この燃燈仏も、久遠実成の釈迦仏も、共に久遠元初の自受用身が中間

に、分身仏として出現した仏なのである。

の

納衣のうい 粗衣のこと。

能化のうけ 弟子を所化というのに対し師を能化という。菩薩に対

すれば仏は能化であり、菩薩は衆生に対すれば能化となる。

能所のうしよ 「能」は自動的・能動的で、相対して関係をあらわす

ときに働きかける立ち場をいう。これに対し、働きかけら

れるほうが「所」で、他動的・受動的になる。一例をあげ

れば、法を説いた仏が、能説の教主、説かれた法は所説の

教法。化導するほうの師匠は能化、化導されるほうの弟子

は所化、よく説き明かすほうの文や教は能詮、説き明かさ

れる義や理は所詮にあたる。そのほか、能弘の教主、所弘

の法、能持の人、所持の法などがある。本門戒壇の大御本

尊は、あらゆる諸仏を生み出した「能生」の根源であり、

十方三世のすべての諸仏や功德は、大御本尊から生み出さ

れた「所生」である。

能通方便のうつうほうべん 三方便の一つ。小乗教や権大乘経で用いる方便で、

衆生が低い経によって悟ったと思つてゐるのを彈呵だんかして、

真実の門に引いてくる方便。方便品の真意は秘妙方便ひみょうほうべん。

能忍のうにん 釈迦の意、能仁ともいう。能く忍んで娑婆世界に出現した人の義。仏のこと。

は

沛公・項羽はいこう・こうう 沛公は漢の高祖劉邦、項羽は同時代の武将で、

共に協力して秦を滅したが、後、沛公は項羽と八年にわた

る戦いの後、項羽を破り、天下を統一して漢王となった。

魔講散衆はいこうさんしゅう 講義をやめて弟子たちを解散すること。

魔權立実はいごんりゅうじつ 爾前権教を廢して一実乗の法華經を立てること。

天台が説いた蓮華三喻の一つ、華洛蓮成の譬たとえが示すもの。

魔事存理はいじぞんり 法華文句の文語。「事を廢して理を存せば」と読

む。事とは布施・持戒・忍辱・精進・禪定の五波羅蜜ごはらみつのこ

と。天台流では、このような爾前經における五波羅蜜の修

行（事）を廢して、理觀（理の一念三千）を立てる。この

場合の天台でいう事は、日蓮大聖人の事（事行の題目の一

念三千）とは、根本的に異なることはもちろんである。日

蓮大聖人の仏法では事の一念三千（文底下種もんていげしゅ仏法の場合の

事は久遠元初くおんげんじよの御本仏の御振舞い）を立て、天台の理觀を

破折するのである。

敗種はいしゅ 敗根と同じ。二乗を彈呵だんかする語で、二乗の永不成仏ようふじょうぶつに

譬^{たと}えている。すなわち草木の種子が腐敗^{ふはい}しているように、

二乗は煩惱を断^{こと}尽^{こと}して成仏を求めようとしないうから、成仏の功徳^{くどく}をうけることができない、という意。

排仏毀^{はいぶつぎ}釈 仏教を排撃^{はいげき}し釈教を破毀^{はき}すること。初めわが国における運動は仏教伝来をめぐって飛鳥時代に起こり、二度目は明治時代に「神仏分離令」に端を発して起こった。

破戒^{はかい} 戒に対する語。犯戒ともいい、一度受持した戒律を破ること。なお無戒とは戒律を持たぬこと。

墓輪番^{はかりんばん} 墓所輪番制度のこと。日蓮大聖人の墓所を守るべく六老僧が中心となり、さらに高弟十二人を加えた十八人が一か月交代で当たる制度が定められていたが、五老僧はこれを守らず、師敵対の謗法^{ぼうぼう}を犯した。

波木井六郎実長^{はきりろうさねなが} 波木井六郎実長入道法寂房日円（西紀一二二二年—一二九七年）のこと。甲州（山梨県）波木井郷に地頭として住した。日興上人の法縁で大聖人に帰伏し身延山に草庵をつくり大聖人をお招きしたが、滅後、日興上人に違背^{へいはい}し、大謗法^{ぼうぼう}を犯した。

伯夷^{はくい}・叔齊^{しゆくせい} 中国周代初期、河北にあった小国・胡竹^{こちく}の二太子。兄を伯夷、弟を叔齊^{しゆくせい}といい、忠孝の手本として後世に伝えられた。父王の死後、互いに王位を譲り合い共に国を去

る。周の武王を諫め山中にはいるが、天は白鹿となり乳で二人を養うが、肉を求めたため白鹿は去り飢え死にする。

白馬の教^{はくばのきょう} 後漢の明帝が瑞夢^{ずいむ}によつて、使を西天に遣わし、仏法を求めた。その使が天竺^{てんじく}（インド）に行つて、摩騰^{またう}迦^か、竺法蘭^{じくほうらん}の二師に会い請願する。二師は、仏像經卷などを白馬に乗せて漢土^{かんど}におもむくのである。したがって仏教を白馬の教という。

白楽天^{はくらくてん} 白居易のこと。（西紀七七二年—八四二年）中国唐代中期の代表的詩人。政治をうたい社会の混乱を厳しく指摘した。代表作に「新樂府」などがある。

波斯匿王^{はしのくおう} 釈尊在世の大檀那。

婆沙論^{はしやろん} 迦旃延子の阿毘達磨發智論を五百の羅漢^{らかん}が広く釈したものの。旧訳は、阿毘曇毘婆沙論、迦旃延子の造、五百羅漢の釈。北涼の天竺沙門浮陀跋摩^{てんじくしやもんふだはつま}、道泰と共に訳す、六十卷。もとは百十卷に分けられていたが、兵乱にあつて一部亡失したという。新訳は、阿毘達磨大毘婆沙論、五百大阿羅漢^{あらかん}の造、唐の玄奘三蔵^{げんじようさんざう}の訳、二百卷。

波旬^{はじん} 悪魔の梵名。正法を妨げようとする魔王の名、またはその働きのこと。

婆薮仙人^{はそせんじん} パラモンの仙人である。変現を示して自在天とな

つて三目を通じたという。

罰 利益に対する語。個人または一社会が法に背く結果うける損、不幸の報い。總罰、別罰、冥罰、顯罰の四種類ある。

婆稚阿修羅王 婆稚とは被縛といふことで、修羅軍の先鋒となつて戦うが、帝釈に縛られてしまつたゆゑに、こゝにわられた。

八逆 一に國を危うくする謀をする謀叛、二に山陵宮闕をあばくをはかる謀大逆、三に國に背くをはかる謀逆、四に尊長に害を加えるをはかる惡逆、五に過ちなき人に害を加える不道、六に神や國王に不敬を加える大不敬、七に不孝、八に不義で、主として主に対する逆罪である。

八自在 涅槃經徳王品に説かれている。すなわち一多・小大・輕重・色心・五根・得法・説法・令見の八つの自在神通をいう。

八邪 邪見・邪思惟・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定で、八正道の反對。

八十萬億那由佗の菩薩 法華經勸持品第十三で、末法に法華經弘通を誓つた大菩薩は、八十萬億那由佗の数であり、みな不退の位に住していた。

八十種好 迹仏応化のために、三十二相・八十種好を具し、

色相莊嚴して仏身をあらわす。ただし三十二相は總であり、八十種好は別である。三十二相も八十種好がないと円満でない。すなわち輪王・帝釈・梵王も三十二相をそなえているが、八十種好がないために微妙でない。好とは色相莊嚴にするゆゑに一切世間の天人が好むからいう。一、二の例をあげれば、鼻高好にして孔現れず、身一時に廻ること象王の如し等々。

八大地獄 最も業障の深い者が墮する地獄。八熱と八寒があるが、普通には八大地獄をいう。八大地獄とは等活・黑繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・大阿鼻（無間）をいう。顯謗法抄（四四三）にある。八寒地獄とは阿波波・阿吒吒・阿羅羅・阿婆婆・優鉢羅・波頭摩・拘物頭・芬陀利をいう。

八難 八處の障礙をいう。それぞれ異なるが、仏を見奉ることと、正法を聞くことができないのはおの同じである。一に在地獄難（八寒・八熱・無間地獄等）、二に在畜生難、三に在餓鬼難、四に在長壽天難（色界四禪天上の無想天）、五に在北鬱單越難、六に盲聾瘡難、七に世智弁聰難（邪智利根のために外道の書を読み正法を信ずることができぬ難）八に生在仏前仏後難（縁が薄く仏の出世の時

に会わぬ難し。維摩詰所説經に出てゐる。

八部衆 天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・

摩睺羅伽をいう。いずれも非人類である。天とは天神等の

諸神王衆をいう。竜とは竜神で竜王やその部衆をいう。夜

叉とは梵語であり、勇健・暴悪等と訳し、地夜叉・虚空夜

叉・天夜叉の三種がある。乾闥婆とは訳して食香、嗅香と

いい、帝釈の樂神であり、須弥山の南、金剛窟中におり、

常に香のみを食して、虚空を飛行するという。阿修羅とは

非類、非天等と訳し、海岸・海底・山窟等に住み、嫉妬の

心強く争いを好む。迦楼羅はインド神話に存する怪鳥の

名、訳して金翅鳥という。一切鳥類の王と伝えられる。緊

那羅とは疑人・疑神・人非人等と訳し、または歌神・歌樂

神という。歌舞をもつて帝釈天に仕える。摩睺羅伽とは

大蟒神・大腹行と訳す。大蛇のことである。

八万威儀 八万の細行をいう。二百五十戒を行住坐臥の四威

儀のおのおのにわたして、一千の威儀になり、これをさら

に過去・現在・未来の三世に約して三千の威儀となり、こ

の三千を、また殺・盜・淫・妄・綺・惡・兩の七支に分配

すれば二万一千となり、この二万一千を、またさらに貪・

八万十二 八万は八万法藏で、十二は十二分經すなわち共に

仏教のこと。

八幡大菩薩 諫曉八幡抄(五七九・五八七頁)に、八幡大菩

薩は、人王第十六代応神天皇が、人王第三十代欽明天皇の

三十二年に神となつてあらわれたこと、また、平城天皇の

代に八幡が「我は是れ日本の鎮守八幡大菩薩なり百王を守

護せん誓願あり」と託宣していること、またその本地は釈

迦仏であること等が示されているが、立正安国論にお示し

のように、邪宗・邪義がはびこつてゐるときは、南無妙法

蓮華經の法味を失つて国を去り、八幡大菩薩などの守護は

ない。日蓮大聖人が、鎌倉鶴岡八幡宮の前で八幡を責めた

のは、己心の八幡をそこに呼ばれて叱咤されたのである。

八万法藏 釈尊一代の聖教全部をいう。八万は実数でなく多

数の意。八万四千の法門ともいい、八万藏と略称し八万宝

藏とも書く。

八葉九尊・三十七尊 八葉九尊等とは、真言密家には、胎藏

界の中台院すなわち胎藏界曼荼羅の中央の一院は八葉の蓮

華であつて、その中台に大日如来、周囲の八葉には四仏四

菩薩の八尊がすわつてゐるのをいう。三十七尊とは金剛

頂經に説かれる金剛界曼荼羅中の羯磨會、すなわち金剛界

根本会の中心である三十七の仏菩薩をいう。中央の大日如

来、四方の四仏、十六菩薩、それに四波羅蜜、内四供養、

外四供養、四摂の十六菩薩である。

八葉の蓮華 一般には、八枚の花弁の蓮華のことをいう。ま

た、われわれの胸間の心臓と肺臓の形が蓮華に似ているの
で、八葉の蓮華という。この身の胸間の八葉の蓮華に二つ
の意義がある。一つは、われわれの生命それ自体が妙法蓮
華の当体である。二つには、具体的に、心臓と肺臓の形が
八葉の蓮華によく似ているので、それをもって、われわれ
の生命の中に当体蓮華を見いだすことができる。

八戒 八齋戒ともいう。小乗教の在家の俗男・俗女に対する

戒律で、不殺、不盗、不姪、不妄語、不飲酒、不坐高大牀、

不作倡妓樂、不過中食の八戒。

八寒地獄 八種の極寒の地獄界のこと。涅槃經では、阿波波

地獄、阿吒吒地獄、阿羅羅地獄、阿婆婆地獄、優鉢羅地

獄、波頭摩地獄、拘物頭地獄、芬陀利地獄をあげている。

白居易 白樂天のこと。中国、唐時代の大詩人で、翻林学士

に任ぜられたが、後讒言のため江州の司馬に左遷された。

八教 (要語解説五ページ参照)

拔苦与樂 苦を除き樂を与えること。一切衆生を苦から救い

幸福を与える仏の崇高で絶対的な慈悲の行為をいう。

八齋戒 小乗律で在家の男女が一日一夜修行する戒で、八罪

を禁閉して犯さぬ戒律をいう。八罪とは殺生・偷盜・邪淫・

妄語・飲酒・身を裝飾し歌舞を見聞すること・高広嚴麗な牀

に坐臥すること・昼を過ぎて後に物を食べることである。

八識 法相宗等の大乘唯識家において、有情の心識について

立てた八種の区別のこと。眼・耳・鼻・舌・身・意の六識

に第七末那識、第八阿頼耶識の二つを加えた八種をいう。

八宗 俱舍・成実・律・法相・三論・華嚴・天台・真言の八

宗をいう。いずれも日蓮大聖人ご出現前に日本で盛んであ

ったが、すべて破折され尽くした。

八正道 正見・正思惟・正語・正業・正命・正方便・正念・

正定で、八邪の反対。

八相作仏 仏が応身または化身を現じて作仏(または成道)

を中心とする八種の相を示現して説法教化することはい

う。八相とは下天・託胎・出胎・出家・降魔・成道・轉法

輪・入涅槃をいう。(要語解説三四ページ参照)

跋提河 中インド拘尸那揭羅国を流れる河の名。照連河とも

呼ばれる。釈迦はこの河の西岸にある拘尸那沙で涅槃した。

拔陀婆羅 不軽菩薩を輕毀して、地獄に落ちた大衆中の代表

者で、後、不輕菩薩に教化されて菩提を証した。

般泥洹經 釈尊入滅前後の模様を記したもの。泥洹經、大般

泥洹經、方等泥洹經ともいう。

般涅槃 槃泥洹とも書き、寂滅・円寂・入滅などと訳すが略

して涅槃という。

八風 利・衰・毀・譽・称・譏・苦・樂の八。四条金吾殿御

返事(一一五一頁)に「賢人は八風と申して八のかぜにをか

されぬを賢人と申すなり、利・衰・毀・譽・称・譏・

苦・樂なり、をを心は利あるに、よろこばず・をとる

うるになげかず等の事なり、此の八風にをかされぬ人をば

必ず天はまほらせ給うなり」とある。

八品 迹門の八品は、方便品第二から人記品第九にいたるま

で、迹門熟益三段の正宗分となる。本門の八品とは、

涌出品より囑累品にいたる八品であり、この八品の間に、地

涌の菩薩が来現していた。本門の八品は、付囑の儀式がな

されていた期間で、肝要である本尊は、寿量品に開顯され

ている。八品派は、八品正意などと邪義を立てているが、

大きな誤りである。

八品派 日蓮宗勝劣派の一つである本門法華宗およびその門

流の別称。大聖人滅後百三十年ごろ日隆が立てたもので、

観心本尊抄(二四八頁)の「但八品に限る」の文により八

品正意、八品所顯の本尊等の邪義を立てた。本門仏立宗や

在家日蓮宗浄風会などはこの亜流である。「但八品に限る」

とは、付囑流通の段を示されたもので、本尊は寿量品文底

に限るのである。

破法の国 正法を破る国のこと。無智・悪人の充滿する悪国

に対して、邪智・謗法の者が充滿する国をいう。正法を破

るがゆえに邪法が横行し三災七難が相ついで起こる。日寛

上人の開目抄文段下(富要四卷三二九頁)には「日本国の

当世は破法の国なること分明なり。ゆえに折伏をさきとな

すべきなり」とある。

波羅夷罪 訳して墮負処、極悪深重、断頭、絶命等の意。す

なわち極重悪罪のこと。小乗では、出家戒として殺・盜・

淫・妄の四本を根本重悪とし、権大乘では梵網の十戒を十

波羅夷罪とする。

波羅提木叉 別解脱とも、正順解脱とも訳す。波羅提木叉の

戒を受持すれば、成仏できるといわれている。末法におい

ては、御本尊を受持することがただ一つの戒。

原殿御書 正応二年十二月十六日、日興上人四十三歳の時の

御述作で、原殿に与えられた。学頭・民部日向と波木井実

長の数々の謗法、それに対する再三再四の訓誡制止、そして身延離山を決意された心境等について述べられている。

(要語解説三六〇頁参照)

波羅奈 はらな 中インドの地名。いまのベナーレス。その王城を波羅奈城らなじやうといい、訳名は幾河城という。すなわち河水が、この国城を繞るゆえである。

波羅痾斯・仙人墮処・施鹿林 はらな 波羅痾斯は波羅奈とも呼び、インドの恒河ごうがの流域にある国の名。鹿野苑ろくやえんはこの国にある。仙人墮処、施鹿林はいずれも鹿野苑の別名で釈尊成道後はじめての四諦の法が説かれた場所である。むかし五百の仙人が空から王宮の采子みこを見て欲心を起こし、ために通力を失って空より林中に墮ちたという故事。また菩薩の七身たる鹿主が姪胎の鹿を助けたのに感じて、梵達多王ぼんだつたが大林を群鹿に施し与えたという故事等によって、これらの名がある。

婆羅門 ばらもん 古代インドの四姓の一つ。訳して淨行という。惡法を捨てて大梵天に奉事し淨事を修する一族。その種族の人は、自ら梵天の口から生じた四姓中の最勝最貴であると称している。博學多聞で四韋陀論を伝えている。

波瑠璃王 はるりおう 毘盧釈迦王のこと。釈尊在世の舍衛国の王であ

り、生まれたとき、琉璃宝と一緒にであったために毘琉璃びるりという。この王の父は、波斯匿王はしのくおうで、釈迦族の卑賤な婢と結婚した。ある日、釈尊がくるまでは昇ってはならないとされていた大講堂に波瑠璃王が昇ったため「卑賤な婢の生んだ子が、堂を穢した」といわれた。波瑠璃は釈迦族をうらみ、即位してから、釈迦族を全滅させた。しかし、釈尊の予言どおり、七日目にして無間地獄へ落ちた。

破和合僧 はわごうそう 五逆罪の一つ。和合して仏道修行をする僧の団結を破る謗法行為をいう。正法のすなわち広宣流布に前進する創価学会の団結を破るのも、破和合僧の罪になる。

半偈成道 はんげじやうどう ①即身成仏、直達正觀をいう。②雪山童子が仏道修行のときに鬼神の残り半偈を聞くため自分の身を鬼神に与えたことによって、悟りを開き成仏したこと。

般若經 はんにやきやう 釈尊が、方等部の後、法華經以前に説いた經文であり、説法の地は、鷲峯山・白鷺池。大般若會、摩訶般若經などの略。また、般若部に含まれている諸經のことをいう場合もある。仁王般若經を除く他の大部分は、玄奘訳の六百卷の中に含まれる。

般若の千仏 はんにやせんぶつ 大品般若經無作実相品に千仏が現じて同じく般若波羅蜜を説くこと。

僻目 ^{ひがめ} ① ひがんだ見方、または見あやまり。② ひがめのこ
と。僻とはさける、かくれる、かたよる、あやまる、よこ
しま、などの意がある。

飛花落葉 ^{ひからくよう} 飛華落葉ともかく。花が散り、木の葉が落ちるこ
と。縁覚はこれらを外縁とし、世の無常の相を感じる。

比干 ^{ひかん} 中国の人。殷の紂王の無道を諫めて殺されたが、間も
なく殷の世も滅亡した。

彼岸 ^{ひがん} ① 生死・煩惱の世界を此岸とし、涅槃・成仏の境涯を
彼岸という。三大秘法の御本尊に縁することにより、此岸
である娑婆世界がそのまま仏国土・彼岸となるのである。

② 彼岸会の略。春分、秋分をはさむ七日間に行なわれる
法会、観無量寿経の日想観にもとづいて、太陽が真東から
出て、真西に没する春分・秋分に彼岸を観ずるという浄土
宗の思想にその源を発する。日本特有のものである。

微管 ^{びくわん} 細い管、すなわち狭い見解という意。細い管の中から
広い所をのぞくという譬えからきた語で。

比企谷 ^{ひきがや} 現在の神奈川県鎌倉市大町一丁目付近の古名。比企
能員の子。比企能本は大聖人の信者

で、妙本寺の開基となった。

比企大学三郎能本 ^{ひきだいがくさぶろうよしもと} 比企谷に住み、比企能員の子で、学者で
あったが、大聖人の信者となり、妙本寺の開基となった。

比丘・比丘尼 ^{びく・びくに} 比丘は男の出家、比丘尼は女の出家。
非時風雨の難 ^{ひじふううのなん} 季節はずれの暴風があつたり、梅雨期でない

のに長雨が続きたりする天候の異変で、風も雨も適度でな
いこと。薬師経の七難の一つ。

毘沙門天 ^{びしゃもんてん} 帝釈天に所属する四天王の一つである。東は持国
天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天である。多聞天

を毘沙門天という。
非情の成仏 ^{ひじょうのじょうぶつ} 草木や石などの非情の生命も成仏すること。草
木成仏と同じ。

警説周 ^{けいせつしゅう} 法華経迹門の三周の説法の一つ。喻説周ともいう。
釈尊が中根の声聞（須菩提・迦旃延・迦葉・目連など）に

対し、譬喩品第三から薬草喩品第五まで譬喩をもつて、三
乗即一乗の法を説き、領解させて、授記品第六で成仏得道

の記別を授けたことをいう。（要語解説九〇頁参照）

微善根 ^{びぜんこん} 微少の善根。
非想天 ^{ひそうてん} 非有想非無想天の略で、非想非非想天のこと。無色

界の第四天で三界の最頂にある天である。色界の最頂を有

頂天ちやうてんというが、非想天を有頂天うてんてんというときもある。

毘盧東春の明鏡びるどうしゆんめいきやう 毘盧は妙樂大師みやうらくだいしの住する所、毘陵びりやうともい

う。東春は智度法師ちどほふしの住処。妙樂大師の「疏記」智度法師

の「義續」を、開目抄に明鏡みやうきやうと述べられている。

毘紐天ひちゆうてん 遍淨へんじやうといい、色界しきかいの第三禪の第三天。色界十八天の

第九天にあたる。

非長非短不二ひちやうひたんふにの義 法華經如来寿量品第十六の久遠円仏の寿

命は長短の二義を超越したもので量ることができない。し

かし、時により機により、あるいは長く、あるいは短くも

示すことができ、自由自在であるということ。

筆受の相承ふっじゆそうじやうを混みじ 依憑集えひやうしゆで伝教大師が弘法こうぼうの真言を破した

文。筆受の相承とは、中国の真言宗の一行阿闍梨いちぎやうあじりが、善無

畏三蔵より筆受した真言の相承をいい、善無畏は、天台宗

の意によって釈したものであるのに、弘法の真言では、法

華經を大日經だいにちに対し、三重さんじゆの劣と下したのは善無畏一行の

真言の相承（もとより法華經より盗んだものであるが）を

破つたものであるという意味。

畢定ひじやうていの菩薩 菩薩を分けて二とし、畢定・不畢定とする。畢

定とは、ただちに修行を積み不退ふたいの位にはいつて必ず作仏さぶつする菩薩をいう。

譬如良医ひにやうい 法華經如来寿量品第十六の文。七譬のなかの良医

病子の譬え。良医とは久遠元初自受用身如来、また再誕た

る御本仏日蓮大聖人である。

非人ひにん 人にあらざる衆生のこと。①仏法上は天竜八部のこ

と。すなわち天、竜、夜叉、乾闥婆けんたつば、阿修羅あしゆら、迦楼羅かろうら、緊

那羅なら、摩睺羅迦まごらかの八部衆をいう。②世間的には、身分の低

い人。人権を無視され、人並みの扱いをうけない人々。日

本においては、近世になるまで乞食、物もらいなどの賤民せんみん

をいった。インドにおいては、ヒンズー教のカースト制度

のわく外の階層、すなわち不可触賤民ふかしかくせんみんをさす。

秘密教ひみつぎやう 秘は秘奥ひおうの義、その法門の深奥なるをいう。密は隠

密みつの義で、容易よういに人に示さないこと。すなわち、最もすぐ

れた経教のこと。これには三種がある。①天台が釈尊五十

年の説法を五時八教に配立したうちの化儀の四教の一つ。

②真言宗で立てる顕密の教判の秘密教。③久遠元初の自受

用身が久遠元初いらい秘伝してきた法、すなわち三大秘法

の南無妙法蓮華經。

秘密主ひみつしゆ 金剛薩埵こんぎやうさつたのこと。金剛手秘密主とも訳す。

秘妙方便ひみやうほうべん 爾前經にぜんに説く方便は法用方便・能通方便であり、

法華經方便品第二の方便は秘妙方便という。法用・能通は

衆生の機根に応じてそれぞれの法を用い、よく通達せしめるのを主眼とするに對し、秘妙方便は、方便がそのまま眞実に直通する。すなわち、われわれの場合は御本尊に罰と功德のあることが秘妙方便となつて、強盛に信行を励むならば、ついに即身成仏の大利益を得ることができるのである。

(要語解説二〇五頁参照)

白衣 びやくい 在家の信者のこと。釈尊在世のインドでは俗人が皆、

白衣を着ていたので、このように呼ぶ。

百王 ひやくおう 平城天皇の御代に八幡大菩薩の託宣があつて、必ず百王を護ると誓言された。すなわち八幡大菩薩が必ず守護すべき百代の天皇のこと。

白毫相 びやくこうそう 白毛相、眉間白毫などともいう。仏身に具足する三十二相の一つ。仏の眉間には清浄で柔軟な白い纖毛が、右回りにはえていて、眉間からたえず光りを放っているとき、その光りを白毫光という。仏が仏智をもつてあまねく一切を見通していくことをあらわしている。(要語解説三五頁参照)

五頁参照)

百座百講 ひやくざひやくこう 仁王經護国品に、国難鎮圧の法を説いて「大王、

昔日釈提桓因有り、頂生王天上にして其の国を滅さんと欲す、時に帝釈天王七仏の法用の如く百高座を敷き百法師

を講じて般若を講説するに頂生王即ち退く」とあるので、

天台大師が隋の文帝の勅を奉じて仁王講を開いたのがはじめの例で、日本では斎明天皇の六年に仁王会を修し、以後国を祈るのに用いた儀式であり、百の法師が百か所において仁王經を講ずる儀式をいう。

辟支仏 びやくしぶつ 縁覺をいう。縁覺は独覺ともいい、仏のない世界に

出て飛華落葉等の現象を見、これを縁として空理を悟る境界をいう。

百即百生 ひやくそくひやくしやう 中国の善導が往生礼讃に「十即十生、百即百

生」といつている。念仏をやると百人が百人とも、必ず極樂浄土へ往生できるという意であるが、仏説を無視した邪

義である。

百八煩惱 ひやくはちぼんのう 一切の衆生がもっているといわれる百八種の煩惱をいう。

白法隱没 びやくほういんもつ 大集經の文。白法とは、釈尊の仏法であり、隱没とは、功德が消えてなくなること。大集經には「釈尊滅後、二千年すぎると、白法隱没する。そのときに大白法が起こ

る」と釈尊が予言している。この大白法は日蓮大聖人の仏法であることは明々白々である。(要語解説一七五頁参照)

白蓮華 びやくれんげ 睡蓮科の一種。梵語では分陀梨華という。池や沼に

生ずる多年生の水草。泥中より出てなお清浄無垢であり、因果俱時をあらわすので妙法蓮華に譬えられる。また胸間の八葉の蓮華は白蓮華であるとされる。（要語解説一七五

（参照）

白鷺池 はんにや 大般若經を説いた四処十六会のなかの第十六会の説法場所である。摩竭陀国の王舎城の竹林精舎の付近らしいが、いまはその遺跡が見当たらない。この会には種々の仏士より、無量無數の菩薩摩訶薩の等覺補処の位にあるものが来集して、釈尊を圍繞したという。

百論 ひやくろん 三論の一つ。提婆菩薩の著。師の竜樹菩薩の空觀により外道の數論、勝論、正理派等の世界觀、人生論、解脫論を破して仏法の正見をあらわしたもの。

百界千如 ひやくかいせんによ 天台が生命の本質を説明した哲理で、一念三千の法門の骨子である。百界とは百法界で十界互具の意、千如とは百界にそれぞれ十如を具すること。

譬喩 ひやく たとえ。難解の法を、わかりやすいものに譬えて喩すること。譬喩に二あり、一は現在の事実をあげて説き示し、二は事実を仮定して説き示す。その他、順喩・逆喩等諸種の別がある。

譬喩即法体 ひやくそくほつたい 法体即譬喩または法譬一体と同意。法の本体と

その法を説明する譬えが一体であること。当体義抄（五一六）に「伝教大師釈して云く『故に譬喩の外に法体無く法体の外に譬喩無し、但し法体とは法性の理体なり譬喩とは即ち妙法の事相の体なり』と。

譬喩の蓮華 ひやくれんげ 天台大師が、法華玄義において説いたもので、華草の蓮華が因果俱時であって、妙法蓮華に似ているので、この蓮華をかりて、難解の当体蓮華を説明したもの。

譬喩品 ひやくゐん 法華經の第三。迹門の正宗分のうち、広開三顯一（方便品から人記品）は三周の説法で始終するが、法說周の舍利弗が、方便品第二で領解し、釈尊から授記を与えられる。そこで舍利弗は、他の未領解の声聞のために、釈尊に詳説を請うと、釈尊は、三車火宅の譬えを説く。三車火宅の譬えによって三乗の權を開し、一乘を顯わしているのがこの品の中心である。また「若し人信ぜずして、此の經を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と、十四謗法が説かれている。（要語解説六〇（参照））

兵革 ひやうかく 兵は劍等の武器、革は甲冑の意で、戦争のこと。

病氣の原因 びやうき げんいん （要語解説三〇（三）参照）

標釈結 ひょうしやくけつ 文章、言語の表現形式や文体の構成法をいう。標

とは標示・標出の義で、総体に共通した大意・主旨を示す

こと。釈とは解釈であり、標示された題号や要旨を、客観的な見解により具体化すること。結とは結論であり、経論においては本義を明かし、自説・主張を説明すること。

病即消滅不老不死

法華経薬王品第二十三の文に「此の経は

則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに、

是の経を聞く事を得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」

とあり、御義口伝下(七七四六)に「然らば病とは謗法なり、

此の経を受持し奉る者は病即消滅疑無きなり」とある。

平等意趣

四意趣(仏の方便の説における四種の意向で、平

等意趣、別時意趣、別義意趣、衆生意樂意趣)の一つ。無

著菩薩の撰大乘論に出ている。仏の説かれた法は平等であ

るということ。これに通平等と別平等とがある。

平等大慧

法華経見宝塔品第十一のなかで多宝如来が法華経

を証明した説。「平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華

経」と法華経を説明している。すなわち、一切法の根底に一

貫している平等性を覚知する、広大な御本仏の智慧、すな

わち御本尊の智慧をいう。

兵奴の果報

兵隊となつて戦争をし、あるいは奴隷のように

人に使われ常に屈從して楽しみのない報い。

毘羅尊者

付法蔵の第十二祖。摩竭陀国の人で、初め外道で

三千の弟子をもっていたとき、神通力をもって馬鳴(付法蔵第十一)を落とし入れようとして、かえって論破されて弟子となり、馬鳴滅後、付法を受けて南インド・西インド一帯を化導し、竜樹に付した。著書には「無我論」があり、その外道を破折しているようすは、金剛石が、一切のものを破るごときであるといわれている。

毘盧遮那

梵語である。遍一切処の義であり、法身仏の名と

している。

貧窮下賤

まずしく、いやしい者。大聖人が自ら貧窮下賤と

申されたのは、民衆を化導するため示同凡夫として出現されたことをあらわす。

頻婆娑羅王

天竺摩竭陀国の王であり、阿闍世王の父にあた

る。釈尊に深く帰依し、多くの供養をしていたが、提婆達

多はこれを嫉み、阿闍世王をそそのかした。王は阿闍世に

幽閉されるが、釈尊を深く信じていたので恐れもせず、か

えって阿闍世の大不幸を悲しみ、諫めるが、阿闍世は獄吏

に命じて食を絶ててしまふ。頻婆娑羅王の夫人である韋提

希夫人が、身に蜜を塗り、王のもとへ行って、それで命を

ながらえていたが、これを知った阿闍世にとどめられ、つ

いに王は命終した。王は、釈尊の光明に照らされ、阿那

含果を得たといわれている。後に阿闍世は釈尊に信伏し大いに仏法を護持した。

ふ

符 ①わりふ。昔、中国で、木や竹に文字を書き、両分して一半をとどめおき、他の半分を与えて、他日の証拠としたもの。②官府の公文書の名称。③神社、寺院などで頒布する守り札。④日蓮正宗では護秘符のこと。

怖畏懺悔 恐れ謹みて懺悔する。

風星 二十八宿のうち、昂あるいは箕に属する星、または木星のことという。

武王 周の武王。名は発という。殷の紂王が暴虐の君主で人民がみな苦しむのを見て、父の文王と共にこれを討った。

不改本位の成仏 本位を改めず、すなわち九界の衆生が各自の位を改めることなく、そのまま即身成仏することという。

当位即妙と同義。爾前經の歷劫修行に対して法華經で説かれた即身成仏。また草木成仏の一つ。

不可見無対色 可見有対色に対する語。体(色)がなく、見ることができないことをいう。不可見とは、可見、有見に

対する語。目で見ることができないこと。無対色とは、相

対する色(体)がないこと。

不可思議境 不可思議とは「思議すべからざる」の意で、あると思えばなく、ないと思えばある、われわれの生命が正しく不可思議である。境とは客観のことで、生命を客観的に見れば不可思議境である。われわれは十界・十如・三千世間を整えられた本仏日蓮大聖人のご生命——大御本尊を不可思議境とし妙境としている。

不輕菩薩 法華經不輕品第二十に説かれている。過去世に威

音王仏という仏がいた。この仏の滅後像法年間に常不輕菩

薩という菩薩がいて「我深く汝等を敬う、敢て輕慢せず、

所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを

得べし」といって、一切の人々をことごとく礼拝してい

た。時に国中に謗法者が充満しており、不輕菩薩を見てこ

れを迫害した。しかし、いかなる迫害にも屈することなく

不輕菩薩はもっぱらただ礼拝し仏身を成就することを得た

が、不輕を輕賤した者はその罪によって千劫阿鼻地獄に落

ちて大苦惱をうけ、この罪を畢え已って、また不輕菩薩の

教化をうけることができた。日蓮大聖人は毒鼓の縁という

お立ち場から、御書の各所に御自身と対比されながらお引

きになっている。

不經品の意義（要語解説一一二頁参照）

不空三蔵 中国唐代の人で、真言宗三三蔵の一人。梵名は阿

目佉跋折羅、訳して不空金剛といい、不空はその略。もと

は北インドのバラモン族で、幼いときから孤独で、十四歳

で闍婆国で金剛智三蔵に師事した。師と共に中国の洛陽に

いたり、五部三密の法を授けられたが、開元二十年、金剛

智が滅したので、二十九年帰国の途につき、師子国に達し

竜智菩薩にあつて、密教や、諸経論五百余部をえて、再び

唐都へ帰った。後、尊崇はますます厚く、密教を弘めて、

七十歳で死んだ。（西紀七〇五—七七四年）

福過十号（要語解説三〇八頁参照）

福過十号 妙楽大師が、文句記に「供養する有らん者は福十

号に過ぐ」と、法華経、すなわち末法に日蓮大聖人の仏法

を信ずる者の功德を賛嘆している。十号とは仏の十種の尊

称で「如来・応供・正徧知・明行足・善逝・世間解（無

上士）・調御丈夫・天人師・仏・世尊」であり、舍利弗や

迦葉等の声聞は、法華経の迹門に未来の成仏を許されてこ

の十号を授けられた。このような十号を具足した仏を供養

するよりも、末代の法華経の行者を供養する功德は勝れて

いるのである。（要語解説二八三頁参照）

伏義 中国古代の伝説である三皇の一人。名君とされている。

福田 ①仏または僧の徳称。②福利を生ずる田の義。③幸福

を受ける下地のこと。

覆漏汗雑 妙楽の記に「覆とは、聞慧なきがゆえに、器の現

に覆するがごとく、思慧を闕くがゆえに器の漏るがごと

く、修慧なきがゆえに器の汗雑せるがごとし」と過去の結

縁が浅いために、現世で仏法にあつても成仏できないと、

器にたとえて謗法の失を述べている。

普賢経 正しくは、観普賢菩薩行法経という。法華経を説き

終わつて涅槃経の前に説かれた。阿難の質問に答えて普賢

菩薩の功德を説いているが、その功德は、すなわち妙法蓮

華経の功德である。この経の説処は毘舍離国の大林精舎で

あり、釈尊入滅の三月前の説法である。御義口伝下（七八

五頁）に「依正の二法 悉く法華経なりと結し納めたる経

なれば此の普賢経を結経とは云うなり」とあるように法華

経の結経とされている。特に懺悔ということについて述べ

られている。懺悔とは、キリスト教でやるようなものでは

なく、仏法でいう懺悔とは御本尊の前にすわつて題目を唱

え、今後の精進を誓つていくことである。普賢経には「若

し懺悔せんと欲せば、端坐して実相（御本尊）を思え、衆

罪は霜露の如し、慧日（末法当今、日蓮大聖人所弘の南無妙法蓮華經）能く消除す」と、三大秘法の御本尊を信受する功德を述べている。

普現色身 釈迦仏法で、観音の三十三身のごとく機に随つて、普く種々の身相を現するのをいう。仏や菩薩が衆生教化のためにする行化の一つである。

普賢菩薩 宝威仏の弟子、東方宝威徳上王仏の国にいたといわれ、釈尊の法華經の説法がまさに終わろうとしたときに、娑婆世界に來至して、釈尊に、仏滅後いかにしてこの經を持つべきかを問う。そして、後五百歳の濁惡世に法華經を受持する行者を守護し、法を守ることを誓った。文殊が智徳をあらわすのに対し、普賢は理徳をあらわす。

普賢菩薩勸発品（要語解説七六頁参照）

普光天子 諸天善神の一つ。法華經序品第一に出ず。法華經の行者を守護することを約束している。

不思議解脱 小乗の悟りでは思議すべからざる大乘法身の菩薩の悟りをいう。この悟りを究竟するのを仏とし、分々にこれを得たるを登住登地の菩薩としている。

不識天月但觀池月 「天月を識らずして但池月を觀ず」と読む。天台の玄義卷第七上の文。日寛上人は、久遠の本地を

覚知しないことを不識天月に譬え、今日の垂迹のみ知っていることを但觀池月に譬えている。

不自惜身命（要語解説三二二頁参照）

不縱不横 縱横並列に対する語。縦に言えば時間的に、横に言えば空間的に、隔たりや次第がなく相即であつて、混然一体となつているさまをいう。天台家の奥義で、円融、不

次第と同義。

不受余經一偈 法華經譬喻品第三に「余經の一偈をも受けざれ」と説かれている。釈迦仏法では法華經第一のゆえ、その他の經々の一偈をも受けてはならないことを示し、末法では大御本尊が唯一無二の成仏の教えであることを示す。

補処 仏の跡を繼いで、やがて仏位に上り仏處を補う位。すなわち等覺の菩薩をいう。しかも一生を隔てて成仏するので一生補処という。釈尊の仏位の補処は弥勒菩薩である。

輔正記 法華經文句輔正記全十巻のこと。唐・道暹の著。法

華天台文句輔正記、文句輔正記、また略して輔ともいう。

天台の法華文句および妙樂の法華文句記の注釈書である。**不定業** 定業に対する語。果報をうけると決まってい

ない業、または果報を招く時が定まってい

いことといえる。

不生不滅 生滅に対する語。常住の異名。大涅槃の意。不生とは一般的には、生じない、生存しない等の意。仏法上では①如来の異名。②涅槃の意。涅槃經卷第二十一に「不生は名づけて涅槃となす」とある。

覆相教 眞実を覆い隠している低い教えをいう。すなわち觀心本尊抄には、文底下種の一品二半（大御本尊）のほかのあらゆる教えはぜんぶ覆相教であると説かれている。

扶桑国 日本国のこと。中国の古書にある語で、中国の東方の国を指した。東方架空国という説もあるが、大聖人は日本国の意に用いられた。

扶桑沙門 扶桑とは日本をいい、沙門とは通じて出家の僧をいう。一宗一派に偏せず仏道を修し、日本国の一切衆生を救う日本国の僧という意で、大聖人が法華取要抄（三三一頁）等に用いられた。

付囑 相承、相伝と同義。師弟相對の原理により、仏が弟子に法を伝授し、広宣流布ならびに令法久住を託すこと。

武宗皇帝 唐の第十五代の王で、初め念仏を擁護したが、しだ

いに国が乱れるにおよんで、仏法を破り、寺僧を圧迫した。

傳大士 呵責謗法滅罪抄（一一二八頁）に「弥勒菩薩は傳大

士となれり」とある。東陽大士ともいい、中国南北時代、南齊の人で、姓を傅といった。輪藏の創始者として有名であり、藏經内に必ず大士の像を安置するという。秀句十勝抄に「梵僧具にきたりて弥勒を東陽に拝す」とある。七十歳で寂した。

仏陀伽耶 釈尊初成道の地。インド・ビハール州ガヤ市の南方十一*にあり、現在はボドガヤーという。摩訶菩提、菩薩道場ともいう。

補陀落山 補陀落迦山の略。インドの南海岸にある山。光明、海島、小花樹の三詠名があり、形は八角といわれている。華嚴經には、この山を觀世音菩薩の住处と説かれている。

不但空 但空に対する語。通教で説く空觀。たんなる空ではなく、仮（現象）に即した空のこと。通教においては宇宙の生滅の現象の当体をそのまま空とし、因果の事相もそのままあるものではなく、無生無滅のものであるとして四諦の理（苦樂の因果）を教える。

不但中 但中に対する語。円教で明かす中道の妙理をいう。

円融三諦の中道、空諦・仮諦を包含した中諦をいう。

富單那 陀羅尼品にあげられている餓鬼の梵名。餓鬼のなか

でも福が最もすぐれた者。

仏海ぶつかいの白浪はくろう

仏海は、仏法を総称したもの、白浪はもとは白波と書き、賊ぞくの住所で、賊の意に通じて使われている。すなわち仏法の賊という意味で、念仏の僧などをさす。

仏經ぶつぎょう 仏像と経卷

仏禁ぶつぎんの違い 仏の戒めに違反する人々、すなわち謗法ぼうぼうの人々。

仏家の棟梁どうりやう 仏教のなかでの主人、すなわち最高の教えを弘める人のこと。

仏性ぶつじやう 性とは不改の義。本然的にそなわって、無始無終に存続している仏になる性分を仏性という。

仏乗ぶつじやう 乗とは梵語の衍えん(那な)の訳。運載、運出、運用の義。

仏乗とは仏法を乗り物に譬たとえて、煩惱業苦ぼんのうごうくに苦しんでいる一切衆生に仏界の生命を与え、一生成仏させる仏法をいう。

仏所護念ぶつじよこんねん 法華經序品第一に「諸の菩薩ための為に、大乘經の無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう」とある。

三世の諸仏が一同に護念してきたところのものとの意。その本体は三大秘法の南無妙法蓮華經である。

仏心ぶつしん 仏の心。また仏心宗という場合は禅宗の異名。

仏祖不伝ぶつそふでん 禅宗が立てる邪義。仏の真意は禅によって自己が直接悟るものであって、仏祖によって伝えられるものではないとする。しかるに禅宗では、伝法王宗記等において、西

天の二十八祖として摩訶迦葉まかやしやう、阿難あなん、商那和修等しやうなわじやうと東土の六祖として達磨だるま、慧可等えかを立てている。これは自語相違である。

仏智ぶつち 事理に通じて日月のように明るい仏の智慧。智の最高を仏智という。仏を信ずることによつてのみ得ることができ。

仏意ぶつち 仏の意。二意に分かれる。①機情に対する語。教え授ける側・能化の意。②仏の観心をいう。末法今時においては、三大秘法の御本尊、すなわち南無妙法蓮華經のこと。

仏知見ぶつちけん 仏の悟り。仏の知識、見識。(四仏知見の項参照)
仏法中怨ぶつぽうちゆうおん 涅槃經の文で、法を破る者を見て置いて呵責かしやくし駈遣けんし挙処こしよしなければ、この人は「仏法の中の怨」であると説いている。

仏法東漸ぶつぽうとうぜん 正法・像法時代に、仏教がインドから中国、日本へと漸次東方に伝わったこと。(要語解説・仏教史参照)
仏隴寺ぶつろうじ 天台山中の寺。初め修禅寺といい、後、禅林寺と名づくが、仏隴峰ぶつろうほうにあったので、仏隴寺(仏隴寺とも書く)ともいった。天台大師が修行した道場の遺跡で、国清寺から二十里上にある。

武帝ぶてい 中国の武帝。武帝の名をもつ王は七人いるが、仏典や御書等に出てくる武帝の多くは、南朝仏教文化の黄金時代

を現出せしめた梁の武帝をさす。

不動明王

①真言宗の本尊で、五大明王の一つ。大日如來の

化身とも、大日如來の命をうけて真言の行者を守る使者で

あるともいう。②法華經においては、法華經の行者を守る

諸天善神の一つ。文底よりみれば、生死即涅槃をあらわす。

富那奢 富那夜奢ともいう。付法藏の第十で、インドの華氏

国の人で仏滅後五百年ごろ生まれ、脇比丘から法を受け、

波羅奈国に行化して、馬鳴尊者を化導したといわれる。

船守弥三郎 伊豆伊東の川奈の住人で、大聖人が弘長元年五

月十二日、伊東にご流罪になった時、夫婦そろって大聖人

を守護し、入信して門下の一人となった。

付仏教 本来は外道でありながら仏法の教えを盗んで自義に

混入して小乗教の義を立てるものをいう。付仏法成の外道

ともいう。天理教等はこれにあたる。(学仏法成参照)

不變真如 永遠に変わらない真理。迹門の十界互具一念三千

の理法は不變真如である。天台は御本尊の出現に先立ち、

仏法の極理である一念三千を説いたが、寿量品の文底に秘

沈されている三大秘法の南無妙法蓮華經の法体を説いた理

であるゆえに、不變である。不變真如の理に対し、それを

実践する随縁真如の智は、本門である。御義口伝上(七〇

八ツ)に「帰と云うは迹門不變真如の理に帰するなり命と

は本門隨縁真如の智に命くなり」とあるが、隨縁の智も不

變の理も、全部この生命の中に含まれている。

付法藏 釈尊の付嘱を受けて、仏滅後の正法千年の間に出現

して仏法を弘めたといわれる二十四人、摩訶迦葉・阿難・

末田地・商那和修・憂婆塞多・提多迦・弥遮迦・仏陀難提・

仏陀密多・脇比丘・富那奢・馬鳴・毘羅・竜樹・迦那提婆・

羅睺羅多・僧伽難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜多・婆修

槃陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子。二十三人という場合は、

末田地を除き、二十五人というときは釈迦仏を入れて数え

る。付法藏經にこれらの予言がある。(要語解説三三七ツ

参照)

付法藏經 付法藏因縁伝。付法藏二十四人が記されている。

浮木の穴 一眼の亀にとって、最も願っているのは、穴のあ

いている赤栴檀にあらうことである。しかし、これにあうた

めに大變な苦勞をする。法華經妙莊嚴王品にこの譬えが

ある。すなわち、末法の衆生が三大秘法の大御本尊にあら

うことがひじょうに困難であることを譬えている。(松野殿

後家尼御前御返事一三九一ツ参照)

覆面舌 迹仏(釈尊等)は色相莊嚴すなわち三十二相・八十

種好を具備して法を説くが、覆面舌とは三十二相のなかの
広長舌相のことである。すなわち舌が大きくて薄く面をお
おつて髮際にいたるといふ舌相である。

不妄語 妄語または綺語に対する語。真実の言葉、実語。

不妄語戒 虚妄不実の語をもつて人をあざむくことを禁ずる
戒律。小乗教における戒、および大乘戒の十重禁戒などの
一つになっている。

附文 元意に対する語。經文の再往深秘の究極の読み方を元
意の辺とし、一往淺近の読み方を附文の辺という。

芙蓉 ①アオジ科の落葉かん木。②蓮の異名。

不立文字 「教外別伝不立文字」と禪宗が立てている邪義。

不了義經 了義經に対する語で、大般涅槃經如来性品第四に
「了義經に依りて不了義經に依らざれ」とある。了義經と
は最高の極理を説いた經の意で法華經をいい、不了義經と
は義を対了せざる經で爾前經をいう。

富樓那 富樓那は梵語。釈尊十大弟子の一人で説法第一であ
った。浄飯王の国師バラモンの家に生まれ、釈尊と同時に
出生し、釈尊に先立って出家した。友三十名と雪山にはい
つて外道の法を学んだが、後、釈尊に帰依し、法華經の五
百弟子受記品第八で法明如来の記別を授けられた。

不老不死 藥王品第二十三に「此の經は則ち為れ閻浮提の人
の病の良藥なり。若し人病有らんに是の經を聞くことを得
ば、病即消滅して不老不死ならん」と、法華經の功德が大
であることが説かれている。また、御義口伝下(七七四頁)
に「不老は釈尊不死は地涌の類たり、是は滅後当今の衆生
の為に説かれたり、然らば病とは謗法なり、此の經を受持
し奉る者は病即消滅疑無きなり、今日蓮等の類い南無妙
法蓮華經と唱え奉る者はなり云云」とある。不老不死と
は、永遠の生命ということである。

分身散体 中心となる本仏の身体を分けて他の世界に出現
し、本仏と同じ仏法と力をもつて衆生を利益する働きをい
う。日蓮正宗の各寺院・家庭に安置されている御本尊は、
弘安二年十月十二日御建立の本門戒壇の大御本尊が分身散
体されたものといえよう。

分真即 六即位(理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、
究竟即)の一つ。天台が立てた法華經の修行の六段階の第
五。御義口伝下(七五二頁)には「化他に出づるを分真即
と云うなり」とある。

分段同居の古栖 迷いの衆生の住所のこと。分段は分段生死
の身をいい、同居は四土のなかの凡聖同居土をいう。すな

わち、われら凡夫の住んでいるこの娑婆世界をさす。

分段の生死ぶんだん しんじう 三界六道の生死。いわゆる迷いの生死であり、

不善業・煩惱・業の因縁で、六道の間に、それぞれの果報の身を現ずる。分段段落の差があるので分段という。

分別功德品ぶんべつ くとく ほん 法華經の第十七。略広開近顯遠して、菩薩をは

じめ大衆は種々の功德を得たが、その功德の浅深不同を分別することを説いたので分別功德品という。前半（一品二半の一半）は、本門の正宗分で、寿量品を聞いて得道した者に法身の記を授け、大衆の供養、領解、分別供養がある。

後半は、流通分。寿量品を聞いて一念信解する者は、八十万億那由佗劫の五波羅蜜の行にも過ぎると、現在の四信、

滅後の五品の位が説かれている。（要語解説七〇頁参照）

分別説三 妙法蓮華經の一仏乗から立ち返って、分別して三乗を説くとの意。



平王 周朝第十三代の王で、大戎の侵略のため都を東方の洛

邑に遷した。

炳誠 炳は明らか。誠はいましめ。明らかないましめ。転じて強い処罰のこと。

平左衛門尉頼綱 鎌倉幕府の侍所の権力者。大聖人を迫害

し、門下を弾圧した張本人。竜の口の法難や佐渡流罪で法によらない弾圧を加え、熱原法難でも三烈士を断罪にしたが、その後十四年にして謀叛の罪で一家ことごとく滅ぼされた。これ法華の現罰というべきである。

平左近入道行智 天台宗滝泉寺の院主代・行智のこと。弘安元年から約三年間にわたる熱原法難の元凶として邪智奸策のかぎりを尽くした。

璧珠玉。「二離壁を合わせ」とは、日と月が昼と夜、東と

西に相對するをいう。

別円四藏 別は別教、円は円教である。四藏は玄義に声聞

藏、菩薩藏、雜藏、仏藏と説き、上からしだいに藏・通・

別・円に配している。観心本尊抄（二四六頁）に「華嚴經・

大日經等は一往之を見るに別円四藏等に似たれども再往之

を勘うれば藏通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三

因之れ無し何を以てか仏の種子を定めん」とある。

別円二教 天台大師は、釈尊一代の經教を五時と八教に分類

し、八教はまた化儀の四教と化法の四教に分ける。化法の

四教とは藏・通・別・円である。これは教の内容から分類

したもので、別円二教とは別教と円教で、藏通に比較すれ

ば、さらに高い教えである。別教は華嚴經等、円教は法華經である。

別教 天台の教判である化法の四教（藏・通・別・円）の一つ。別教と名づける理由は、二乗の人をまじえずに説くがゆえに、また前の二教（藏教・通教）に別し後の円教に別するがゆえである。

別時意趣 別時意・別時・時節意趣ともいい、四意趣の一つである。四意趣とは平等意趣・別時意趣・別義意趣・衆生意樂意趣である。意趣とは仏の説法における言外の意趣のことである。別時意趣とは、たとえば阿弥陀の名を唱えること、極樂に往生するというふうに、方便によって道に入れ、漸次に別時において達せしめるということであり、ただちに得道はしない。事は別時（他日）にあるのに、ただちに得るように説く方法である。

別受戒 通受戒に対する語。別受戒とは、小乗は小乗だけ、大乘は大乘だけの受戒をいう。小乗の別受戒は小乗律部に明かす二百五十戒等の律儀戒（具足戒）をいい、別して出家だけが受ける戒。大乘の別受戒とは一般の大乘戒が三聚淨戒を通じて受ける通受戒に対して別に法華と梵網の戒を受けるのをいう。

別体 ①總体に対する語。總体のなかの各別をいう。②または本体に対して別体という。別体の地涌、別体の受持、別体の本尊等がある。

別体の地涌 總体の地涌に対する語。在世における上行、無辺行、淨行、安立行の四大菩薩のそれぞれを別体の地涌という。これに対して四菩薩の働きを一人の身に現ずるのが總体の地涌である。

別体の受持 別体とは總体に対する語。總体の中のそれぞれをいう。受持の一行に五種の妙行を収めるときは總体の受持であり、五種の妙行の一つとして受持を論ずるときは別体の受持である。

別体の本尊 日蓮聖人年譜（富要五卷一一八頁）に「本尊に二あり先ずは總体の本尊、謂く一幅の大曼荼羅なり、次には別体の本尊なり、別体に付いて又二つあり人の本尊と法の本尊となり」とある。

別付嘱 寿量品第十六の文底に秘沈された三大秘法は、法華經神力品第二十一で、上行菩薩、すなわち日蓮大聖人御一人に付嘱された。これを嘱累品第二十二の總付嘱に対して、別付嘱という。また、二箇の相承についてみれば、池上相承は別付嘱である。

弁阿闍梨 べんあじり 六老の一人、日昭のこと。

下和 げわ 中国の楚の人で、荆山で玉璣を得て、楚の厲王に献じ

た。王は玉人に鑑定させると玉ではないというので、怒つ

て和の左足を切った。厲王の死後、武王に献じたが、また

石と鑑定され右足を切られた。その後、文王の時、和は

璣を抱いて荆山の下で三日泣き暮らし、文王に知られ鑑定

の結果、はたして宝玉であったので和氏の璧（連城の璧）

と名づけ天下の宝玉となった。日蓮大聖人が宝玉たる大白

法を弘められるのに大迫害をうけられたことを、下和が宝

玉を献上して両足を切られたことに譬えられた。

辺見 へんけん 片寄った意見、公正でない見方のこと。仏法では真実

の因果を説かない片寄った生命観。見惑の一つで、断見と

常見に大別される。断見とは生命を現在だけでとらえ、生

で始まり死で終わるとする考え方。常見とは死んでも常に

靈魂だけは存生しているという説。どちらも三世の生命、

因果の理法を無視した偏頗な見方であるから辺見という。

弁財天 べんさいてん 略して弁天。インドの女神で弁才、音楽、財福、智

慧をつかさどる神。金光明経には「智慧を益し、言説弁を

具足し莊嚴せしむ」とある。

扁鵲 へんじやく 中国古代の名医。春秋時代の人で、長桑君より医術を

学び、斉や趙で活躍した。

辺執家 へんしゅうけ 片寄った教えに執着して仏の真実の教えに従わない

宗派の人々のこと。

変成男子 へんじようなんし 提婆達多品第十二の文。「変じて男子と成る」と読

む。竜女が男子に変じて即身成仏を証明したこと。

偏眞の理 へんしんり 円眞の理に対する言葉。藏・通二教の説く空理の

こと。これに対して別・円二教の中道の理を円眞の理とい

う。ただし別教の中道の理は隔歴の三諦であり、法華経

の円理も三大秘法の説明にすぎない。

変毒為藥 へんどくゐやく （要語解説三〇四頁参照）

変易の生死 へんにやくしじう 三界六道を出た生死。見思の惑を断じた声聞・

縁覚・菩薩等の聖者の生死である。すなわち修行の過程で

分段の身を変易して煩惱をたち智慧をひらいていくゆえに

変易という。分段・変易の生死を合わせて二種生死とい

う。三世諸仏總勘文教相廢立（五七一頁）には「菩薩の道

を修行して仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて

次第に進み昇り劫数を経て成仏の遠きを待つを變易の生死

と云うなり、下位を捨つるを死と云い上位に進むをば生と

云う是くの如く變易する生死は浄土の苦惱にて有るなり」とある。

ほ

法位 ほうい 諸法しよほうの住すべき当然の位置、森羅万象しんらばんしやうの本来あるべき

位置をいう。また無明むみやう（衆生）と法性ほつしやう（仏界）とが一如の位、すなわち妙法蓮華經をいう。また事物の個性、性質、本性等を法位ということもできる。

傍依經 ぼういきやう 正依經に対する語。一切經のなかで、本論であり中心的存在である正依經を、側面から助証する立ち場の經をいう。開会の立ち場からいえば、正依經は三大秘法の南無妙法蓮華經であり、他の一切經は傍依經である。

法苑林 ほつえんりん 法相宗・慈恩の著「大乘法苑義林章」という。七巻からなり、各巻は上下があり、十四巻に分かれる。この著のなかに、一乗（仏乗）方便三乘真実という妄説もうせつが述べられてゐる。

法界 ほうかい 御義口伝下（七六九頁）には「法界とは広ひろきに非ず狭せまきに非ず惣そうじて法とは諸法なり界とは境界なり云云」とある。すなわち法とは諸法すなわち宇宙万有をいい、また界とは差別して混乱のない境界をいう。ゆえに法界というのは宇宙万有のすべてである。おのおのは相性体等が異なり、また十界に差別される。

法界一如 ほうかいいちによ 森羅万象が、無差別、平等であること。法界と

は、十界三千の森羅万象の境界であり、一如とは、無差別、平等、不二の義である。

法界円融・頓極微妙 ほうかいえんゆう とんごくみせう 華嚴經の十玄六相の哲学と華嚴經の功德を贊嘆した言葉。

伯耆房 はくしきぼう 第二祖日興上人のこと。出家したとき、伯耆公と呼ばれた。

方広 ほうこう 附仏法の外道の一人。大乘を学び大乘の理に迷つて外道の見解に墮だした。

亡国の音 ぼうこくのおん 念仏の哀音のこと。

法山之緑林 ほうざんのりよくりん 緑林とは、中国の故事から出た、盜賊の異称。

昔、荊州に緑林山という山があつたが、前漢の末に、亡命した多くの人々が、この山に集まっていたところから、緑林といえは、賊をいつた。法山とは仏法のことだから「法山之緑林」とは、仏法の賊、一念三千の法門を盗みとつた真言や、南無妙法蓮華經を唱える邪宗日蓮宗などはこれにあたる。

忘持經事 ぼうじきやうじ 富木殿が、母親の遺骨を日蓮大聖人のおられる身延へ納め、仏事をすませて帰るとき、持經を忘れた。日蓮大聖人はすぐ修行者に持たせると共に、親子ともに成仏で

きることを述べたお手紙をそえてくださった。この御書を忘持経事（九七六頁）という。日蓮大聖人は、在世には真言宗、念仏宗、禪宗など、釈尊の本意を知らない者は忘持経のものであり、また、それ以上に経を忘れている者は、末法において日蓮大聖人を誹謗している邪宗教の輩であると申されている。

鳳詔 天子のみことのりをいう。鳳は鳳凰で、鳥のなかの王をいい、天子をあらわす言葉に用いられる。

防尚光基 神防・嘉尚・普光・窺基の略で、いずれも玄奘の弟子である。

宝浄世界 法華経見宝塔品第十一の時に来至して、法華経は

「皆是れ真実なり」と証明した多宝如来の本土。

法勝人劣 人法一箇に対する語。「法は勝れ人は劣る」と読

み、人法勝劣と同意。釈迦仏法は迹中化他の教えであり、

仏も世情に随順する色相莊嚴の虚仏であるから、法勝人劣

である。しかし、大聖人の仏法は本地自行の教えであり、

仏は久遠元初の自受用身という御本仏であるから、人法一

箇である。

報身如来 法報応の三身の一つ。仏の智慧、働き、精神、性

分、性質をいう。末法今時では久遠元初の自受用身の智慧

をいう。

宝刹 仏国土の尊称。また仏寺をさすこともある。刹は梵語で土田と訳す。

法蔵 華嚴宗の祖師、賢首大師とも、また香象大師とも称す。玄奘三蔵、あるいは義浄三蔵と共に、經典の翻訳に力を尽くした。金獅子章一卷を著わして華嚴経の十玄六相の釈を説いている。

報中論三 「報中、三を論ず」と読む。報身を主体として法

報応の三身を論ずること。すなわち法華経に三身を説くといっても、正しく自受用報身をもって正意とするのである。ゆえに一身即三身、三身即一身である。われらの生活も法報応の三身のうち報身すなわち智慧が大事である。

宝土 金、銀、瑠璃、砗磲、瑪瑙、真珠、玫瑰の七宝で立派

に飾られた仏の国土をいう。仏国土。

宝塔 法華経見宝塔品第十一の時、虚空に七宝の塔が現われ、

多宝如来が塔の中から釈尊の法華経を「皆是真実」と証明

し（証前の宝塔）、ついで本門を説き明かす（起後の宝塔）

前段となる。この宝塔は本尊の儀式を顕わす。すなわち久

遠元初の自受用身が宝塔であり、妙法の大御本尊を信ずる

われら衆生の肉身が、またそのまま宝塔である。釈尊は宝

塔の儀式をもつて、己心の十界互具一念三千をあらわしているのであり、日蓮大聖人は同じく宝塔の儀式をかりて、寿命文底下種の法門を一幅の御本尊として建立されたのである。阿仏房御書（一三〇四頁）に「若し然れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり、妙法蓮華經より外に宝塔なきなり、法華經の題目・宝塔なり宝塔又南無妙法蓮華經なり……然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿仏房」とある。

等經 一には大乘經の意である。また五時のなかには、釈尊が三十歳で成道し、華嚴經三七日間、阿含經十二年間説かれた後に、十六年にわたって説かれた大集經・深密經・楞伽經・淨土三部經・真言三部經等の権大乘經をいう。

等經典 方広平等な大乘經典という意。釈迦一代のもろもろの大乘方等經典をいう。

道三蔵 もと永道と称し、宋の徽宗皇帝の高僧。宣和元年、帝が詔して仏僧の称号を改めようとしたときに、法道上書して、これを諫め、これにより帝怒って法道の面に火印をおし、江南の道州に放逐した。しかし同七年に許されて帰り、名を法道と改めた。僧史という著がある。

方等十二部經

仏經の經本の、形式上の類別を十二に分かつゆえに十二部經という。方等とは諸々の大乘經は、いずれも三諦（空・仮・中）の法門を述べることが広博なので大乘方等經典というのであり、すなわち大乘經のことをいう。方とは広であり、等とは平等である。すなわち方等十二部經とは大乘の一切經のことをいう。五時に配立した方等部だけでないことに注意。

方等部

釈尊一代の説法を天台が判じて五時（華嚴、阿含、

方等、般若、法華涅槃）に分けた説法の第三方等時の經文を總括して方等部という。教の高低では釈尊一代教説中では阿含部につぐ低い教で、権大乘經である。華嚴、阿含に次いで十六年間に説かれ、勝鬘經、解深密經、楞伽經、首楞嚴經、觀經、双觀經、阿弥陀經、大日經、金光明經、蘇悉地經、維摩經などが、これに含まれる。

宝塔品

見宝塔品第十一。弘經の功德が深重であることを説いて、流通を勧めるうちに七宝の塔が大地から涌出して、

虚空に立った。その塔を人々が見るので、見宝塔品という。三変土田があり、二仏並座し、三箇の鳳詔をなし、六難九易を示して流通を勧めている。（要語解説六五頁参照）
法爾の道理 法爾とは自然、天然のこと。宇宙に本来存在す

る自然の道理のこと。

然^{なん} わが国念仏宗の開祖で諱^{いみな}は源空という。崇徳^{すうとく}天皇長承二年四月七日に生まれ、十五歳で出家し、比叡^{ひえい}山で天台学を学んだが、四十三歳の時、慧心の「往生要集」を読み念仏者となった。承元の初め著書のことから土佐に流罪され、建暦元年、順徳帝のときに大赦に浴して帰されたが、翌年死去した。

便現涅槃^{べんげんねはん} 法華経如来寿量品第十六の文で「方便して涅槃を現ず」と読む。仏は衆生を救わんがために、方便のため涅槃すなわち死を現ずること。生命は永遠であり本有常住であるが、仏は生死の理^{ことわり}を示すために死を現ずるのであり、次の新しい生の生命のための方便である。

便土^{べんど} 四土（四種の仏土）のなかの一つ。方便有余土ともいう。方便道を修行して見思^{けんじ}の惑を断じて、まだ塵沙^{じんじや}・無明^{みよう}の惑を残している二乗・菩薩の住所。

方便品^{べんぽん} 妙法蓮華経方便品第二のこと。十如実相を説いて、

理の一念三千を明かしている。（要語解説五七頁参照）

方便品・寿量品を説誦する意味^{いみ} （要語解説三三三頁参照）

法^{ほう} 誹謗^{ひぼう}正法の略。正法を謗じて信受しないこと。正法に背くこと。正法不信のこと。また謗法行為の人をさして単

に謗法ということもある。（要語解説三〇〇頁参照）

謗法嚴戒^{ぼうほうげんかい} （要語解説三〇〇頁参照）

鳳文・龜鏡^{ほうもんきやうきやう} 鳳文とは「賢聖の文章」という意で、龜鏡とは、龜は未来を見通すことを意味し、古い鏡は形をよく写すの意に用いられる。

法用方便^{ほうゆうほうべん} 天台が方便を三義に解釈した、その第一が法用方便である。衆生の機根に応じた説法をして、真実の門に誘引^{いん}する教えの説き方で、小乗経、権大乘経で用いられる。たとえば、声聞には四諦^{しだい}の法を説き、縁覚には十二因縁、菩薩には六度の法を説いたのは、法用方便である。

蓬来山^{ほうらいざん} 中国の伝説にある神仙の山。すなわち伝説によれば、渤海^{ぼく}のなかにあり、山の高さ三万里、頂上の平地が九千里、金山であり、不老不死の薬があるという。

法楽^{ほうらく} ①法の楽しみ。妙法により福運を積み自ら法味を楽しむこと。②法会の終わりに伎楽を奏したり詩歌・連歌などを

もって本尊に供養すること。③なぐさみ。④素焼きの土鍋。

墨子^{ぼくし} 中国春秋時代の思想家。魯^ろの人。姓は墨、名は翟。一説には、顔が黒かったので墨と呼ばれたという。著書「墨子」は、兼愛説と非戦論とを唱えたものといわれる。

北狄^{ほくてき} 中国北方塞外の民族。匈奴^{きやうと}、鮮卑、ウイグル、だった

んなどの遊牧民族の称。古来しばしば漢土を脅かした。

北嶺 南都に対する言葉で、比叡山延暦寺のことをいう。

法華經の行者 法華經を身口意の三業によって説くごとく修

行する者のことである。別しては末法の御本仏日蓮大聖人

であり、総じてはその門下の弟子檀那。

法華經の新訳・旧訳 (要語解説三四五頁参照)

法華經の明鏡 法華經を三世を照らす明鏡に譬えていう。末

法今時においては三大秘法の南無妙法蓮華經である。

法華經八卷二十八品 (要語解説五六頁参照)

諸刃の劍に長い柄をつけた武器。槍と用途は同じ。

菩薩 梵語を音訳した菩提薩埵の略。覺有情、大心衆生、大

士、高士、開士などと訳す。菩提とは悟りのこと。薩埵は

有情、生命あるものをいう。生命論からいえば自己の徳性

を発揮して他に尽くそうとする生命状態をいう。初発心の

時に四弘誓願を立てる。爾前經の菩薩、迹化の菩薩、本化

の菩薩等がある。

菩薩の示現生 菩薩が誓願して畜生等の六道の姿をもつてこ

の世に生まれているものをいう。

細草檀林 寛永十九年(一六四二年)六月三日、日蓮正宗
(當時は富士派)と八品派の合同で創立された檀林。旧地

名は上総国山辺郡細草村、いまは千葉県山武郡大網白里町
にある。

菩提 梵語である。旧訳では道といい、新訳では覺という。

成仏の境涯をいう。大論には五種菩提を説いており、煩惱

を断尽したときを菩提であるといっている。日蓮大聖人は

煩惱即菩提と仰せられ、煩惱は断尽できるものではないと

説かれる。

菩提樹 道場樹ともいう。釈尊が、この樹下の金剛宝座に座

して仏道を得たために、菩提樹という。釈尊在世には、高

さ数百尺で、伐つても高さ四十五丈であり、茎は黄色く枝

葉は青翠で、四季を通じてしぼまず、光り鮮やかに色を変

えなかった。ところが、釈尊が涅槃する日に、葉がみんな

落ちてしまった。しかし、またすぐもとにもどったといわ

れている。菩提樹の付近に史跡が多い。

菩提心論 竜猛(顕教では竜樹)造、不空訳といわれた

り、不空の集となつたり一定していない。

発起・影響・当機・結縁 法華文句に説かれている説会の四

衆である。発起衆とは、仏に對し説法を請い、あるいは特

に疑問を出し、また問答などを起こして、仏の説法を発起
し、その化導を助けるのをいう。影響衆とは仏に随侍する

衆生である。当機衆とは、過去の宿善があつて時が熟し、縁が合して、仏の説法の当処で得益する機を有する衆生である。すなわち法華經の説法の座において舍利弗等の声聞が受記作仏したのは、この当機衆にあたる。結縁衆とは、未来に得益すべき縁を、その場所で結ぶ衆生である。

法華玄義 天台の三大部の一つ、妙法蓮華經玄義十卷のこと。法華經二十八品の總題である。妙法蓮華經の玄義（幽玄の義）を釈したものである。五重玄義などを説いている。**法華三昧** ①法華經の悟り、または悟りを得ようとして一心に修行している境地。三昧とは心を一所に定めて動かないことをいう。末法今時では三大秘法の御本尊を信じ一心に唱題すること。②般若部の法華三昧經一卷をさす。③天台の法華三昧懺儀一卷をいう。

法華折伏破權門理 法華玄義に、法華經と爾前經との教理の相違を述べた言葉で「法華は折伏にして、權門の理を破す」と読む。法華經の開顯は爾前の低い權理を破して、法華經の高い実理をあらわす。法華經は折伏の教法である。

法華宗（要語解説四〇三頁参照）

法華秀句 伝教が弘仁十二年（八二一年）に著わした書。全三卷。内容は法華の秀れた句を十種集め諸經より法華經の

勝れていることを説示している。

法華文句 天台の三大部の一つで、妙法蓮華經文句十卷の略称。法華經二十八品の文々句々について、科段を分割し、字句を解釈し、旧解を批評訂正して法華独尊の旨義を明かしている。

法華文句記 妙樂の三大部の一つで、妙法蓮華經文句記の略称。天台の法華文句の注釈書。

法華論 法華經を解釈した最古のもので、天台宗、法相宗等はこのを用いる。ただし、法相宗は曲解して五性各別等の論議を立て、天台学とはまったく相反する。

法師功德品 法華經の法師功德品第十九。流通分のなかの、弘經の功德が深いことを明らかにしたなかで、この品は初隨喜品の果の功德を明かして流通を勧めている。総じては六根の功德を明かし、別してはおのおの清淨を得ることが説かれている。（要語解説七二頁参照）

法師品 法華經の第十番目の品で、この品から安樂行品第十四までの五品が、迹門の流通分で、在世の人々だけでなく、来世の人々をも利益する説法である。弘經の功德が深重であることを説き、特に、末法の弘經の人法と、弘經の方程式を示されている。衣座室の三軌もこの品にある。（要

語解説六四(参照)

発迹願本 インドに出現して始めて成仏した釈尊は、衆生を化導するための垂迹であり、その本地は、五百塵点劫以来三世常住の仏である。この始成正覺の迹の姿をひらいて、寿量品において、本地の久遠実成をあらわすのをいう。(要語解説九七(参照))

弗沙弥多羅王 阿育大王の末孫にあたる天竺の国王である。

王は名徳をあげようとし、群臣にはかったが悪臣の言を入れ、阿育大王と逆のことをやった。すなわち兵をあげ、全インドを回らせて、僧侶を殺し、塔寺を焼き尽くした。しかし多くの神変が起こって、王はついに滅んだという。

法性 諸法の天性。本来みずからそなわっており、他によつて改まらないものである。換言すると諸法の実体すなわち悟りというものである。無明に対する言葉である。

法性の淵底 天台の法華文句卷第九上の文。生命の奥底、宇宙の本源、万有の法理である南無妙法蓮華經のこと。(總勘文抄五七一(参照))

発心下種 仏の下種をうけて発心すること。聞法下種に対する語。聞法下種は下種をうけてただ法を聞いても信受しない未発心であるが、発心下種とは法を聞き実践修行を心に

発願することである。(要語解説三一九(参照))

法身の舍利 生身の舍利に対する語。文句卷第八上に「碎骨は是れ生身の舍利、經卷は是れ法身の舍利なり」とある。

末法今時では三大秘法の御本尊が法身の舍利である。

法身・報身・応身 仏の三身で、一身即三身、三身即一身である。法身は万物の境、報身は智慧、応身は慈悲である。

法水 仏の教法を水に譬えた。法の水をそそいで、枯れた衆生を救う。また、衆生の心の垢を洗う。水に浅深があるように、教にも、大小があるなどと譬えられる。

法相宗の三時 法相宗では、有教・空教・中道教の名で一代仏教を判別する、これを三時教という。

法相の唯識 法相宗では一切の諸法がことごとく阿頼耶識(第八識)の影像であり唯識の所変であるとする。

法体 法の本体。妙法の法体は、三大秘法の御本尊。

法譬 法説と譬説とをならべていう。譬とは法に対する譬え。本已有善 「本已に善あり」と読む。本未有善に対する語。

本已有善とは釈迦仏法に機縁のあること。

本因 一般的には、ある現象面の根本原因。仏法では成仏するための本源の因のこと。本果に対する語。種熟脱の三益からみれば下種益が本因となる。釈迦仏法では本因初住の

文底に三大秘法が秘沈ひちんされている。が、大聖人の仏法における本因こそ真実の本因である。(要語解説二七六頁参照)

本因下種 本因とは成仏・得道の根本原因のこと。下種とは仏が衆生に成仏・得道の種子をおろすこと。三大秘法の南無妙法蓮華經の種子をおろすことをいう。

本因初住の文底 初住とは、菩薩の五十二位のなかの十住の初めの発心住のことをいい、釈迦仏法で不退の位としている。天台は法華經壽量品第十六の「我れ本菩薩の道を行じ」の文を本因の初住位とした。本因初住に登るには妙法五字の前の修行があった。三重秘伝抄には「本因初住の文底に久遠名字・事の一念三千を秘沈し給えり云云、応に知るべし後後の位に登るは前前の行に由るなり云云」とある。

本因の境智行位 (要語解説二七五頁参照)

本因本果 本門の十界の因果のことで、十界の因果とは地獄界・仏界等の十界にまたおのおの十界を具足しているという場合もあり、九界を因となし、仏界を果となすという場合もあるが、これは後者の意である。すなわち仏界を打ち破ればその九界も破られ、壽量品においては仏界の常住と共に九界の常住を説き顯わすゆえに、本有常住の十界が説き顯わされ、これを本因本果の法門というのである。

本因名字 成仏の根源となる最初の修行の位、すなわち南無

妙法蓮華經を初めて受持した位。本因とは仏になる根本の原因で、名字とは名字即の凡夫である。

本果 成仏したという結果。本因に対する語。釈迦仏法は

五百塵点劫の第一番成道をいう。

梵漢 梵と漢、インドと中国をさす。

本化の四菩薩 涌出品第十五のときに、地から涌出した本化の菩薩の上首である上行、無辺行、淨行、安立行の四人の菩薩、神力品第二十一で、三大秘法を付囑された。

本化付囑と迹化付囑 (要語解説一一五頁参照)

本眷屬妙 本門が、他の經より勝れている妙義を十種に天台

が分別した、本門の十妙の一つ。久遠本仏の説法をうけた本眷屬であるという妙。

本国土妙 本門の十妙の一つ。壽量品第十六の「娑婆世界、

説法教化」の文。仏は淨土のみにいて、娑婆世界にはいないというのが、法華經以前の学説である。しかし壽量品には「娑婆世界」という本国土妙が説かれている。それは仏が娑婆世界に、凡夫と共に、菩薩と共に、また声聞・縁覺と共に、あるいは畜生・餓鬼などと共に、みな一緒に十界のおの同居している。この不思議さを本国土の妙という。

本極法身ほんごくほつしん 究極の真身、生命という意で、寿量品の仏を法身

からみたならば、縦横に比べることのできない唯一の法身であるという。玄義に「本極法身微妙深遠ほんごくほつしん みみょうしんのん」とある。

本時ほんじ 寿量品第十六に、本因・本果・本国土が説かれ、久遠常住が説かれたときをいう。しかし、その文底の意は、末法に三大秘法の大御本尊が建立されるときを本時という。

本迹相對ほんしやくさうたい (要語解説一四二頁参照)

凡聖同居土んしやうどうど 四土の一つ。天台宗所立の四土の第一にある。

同居土、染淨同居土、染淨国ともいう。凡夫も聖人も共に住む国土という意。

本尊んぞん 本尊とは外道内道・大乘小乘・權教実教・迹門本門・脱迹種本だつしやくしゆほんに通じて、皆それぞれの本尊がある。すなわち本尊とは「根本となして、尊崇する」の義である。

本地自行んちじぎやう 大聖人の仏法たる三大秘法の南無妙法蓮華經のこと。

と。釈迦仏法の迹中化他しやくちゆうけたに対する語。この場合の自行化他は修行ではなく法門に約し、自行とは仏の随自意ずいじの教え、化他とは随他意の教えをさす。

本朝の六統ほんちやうろくとう 本朝は日本国のこと。六統は統とは僧統で僧侶

のこと。また六統とは六人の僧統、すなわち伝教大師の法華經大乘戒に反対した南都(奈良)の大僧都・護命ごみやう、興福

寺の少僧都・長慧、唐招提寺の律師・豐安ほうあん、興福寺の律師・

修円、西大寺の律師・泰演たいえん、元興寺の律師・施平せひやうの六人をさす。

梵天ぼんてん 色界の初禪天しよぜんてんにいて娑婆世界を統領する色界諸天王の通号である。

本土ほんど 迹土に対していう。真実の本仏、円仏の住所のことで常寂光土ともいう。開目抄下(二一四頁)に「此の土は本土なり」とある。

本因妙ほんにんみやう 天台が玄義卷第七に本門の十妙を説いたが、その第一が本因妙であり境智行位きやうちぎやういを説く。天台家の本因妙とは寿量品の我本行菩薩道の文であり、大聖人の仏法の本因妙とは久遠元初の大昔に一迷先達の時をいう。本因妙、本果妙、本国土妙を三妙という。

本因妙の教主ほんにんみやうきやうしゆ 久遠元初の自受用身、末法の御本仏日蓮大聖人をいう。大聖人の仏法は本因妙を主体とするゆえである。釈尊は本果妙の教主である。

本有常住ほんゆじやうぢやう 法華經寿量品で説く生命觀。本有とは、生命が、もともと、大宇宙と共に、有ったものということ。常住とは、その生命は、大宇宙と共に、永遠に続いているということであり、無始無終であり、常にこの大宇宙にあるとい

うことである。

本有の三因 さんいん 三因は正因・了因・縁因の三因仏性であり、本

有は久遠より常住しているの意。

煩惱障 ぼんのうしやう 天台の摩訶止観第五にあり、兄弟抄などの御書に出

ている三障の一つ。貪 どん（むさぼり）瞋 じん（いかり）癡 ち（おろ

か）などによって起こるわざわい。

煩惱即菩提 ぼんのうそくぼだい 煩惱がなければ悟りはない。着物がほしいと思

う心は煩惱で、買って満足することが菩提である。人生に

は悩みがあるが、その悩みが悩みでなくなったところが菩

提である。悩みがあるので信仰し、信仰するから願いがか

なつて幸福になる。これが煩惱即菩提である。御義口伝上

（七一〇頁）に「今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉

るは……煩惱の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり煩惱即

菩提と開覚するを焼則物不生とは云うなり」とある。（要

語解説二六六頁参照）

梵音聲 ぼんのんじやう 仏の優れた音声をいう。仏の三十二相の一つ。

凡夫 ぼんぷ 梵語で波羅といい、旧訳では凡夫といい新語では異生

という。聖者に対する言葉。法華經譬喻品第三に「凡夫淺

識の深く五欲に著せるは、聞くとも解すること能わず」と

説かれている。

凡夫僧 ぼんぷそう 末法の御本仏日蓮大聖人は凡夫僧として出生され

た。御義口伝下（七六六頁）には「末法の仏とは凡夫なり

凡夫僧なり」とある。色相莊嚴の仏は迹仏である。

凡夫即極 ぼんぷそくごく 三大秘法の仏法は、凡夫が即身成仏できる仏法で

ある。三大秘法を信じて凡夫が即仏になることをいう。

本仏・迹仏 ほんぶつ しやくぶつ ①本仏とは、本門久成の釈尊のこと。迹仏と

は、本門久成の釈尊が垂迹して本無今有の一念三千十界の

理常住を説く仏。②凡夫は体の三身だから本仏であるに對

して、用の三身たる仏を迹仏という。③本地仏、乗迹化現

の迹仏。御本仏日蓮大聖人以外はすべて迹仏である。

本仏論の遮難 ほんぶつろん しやなん （要語解説二七八頁参照）

本問六郎左衛門尉 ほんもんろくさゑもんじやう 本問重連。佐渡の国の新穂の地頭で、そ

の管内に塚原の三昧堂がある。相模の依智に本館があつ

た。塚原問答の席におり、大聖人より内乱を知らされ、的

中に驚き、心では信心の気持ちを起こす。

本末有善 ほんまうぜん 釈迦仏法に機縁のない衆生。すなわち末法の衆生

は本末有善である。末法の衆生は大聖人の仏法に有縁なの

である。

本無今有 ほんむこんぬ 迹門で成仏を許された者は、本が無くて今仏にな

るといわれ、また仏も久遠を説いてないから本が無く今有

る。したがって、説く法門も本が無くて今有る法を説いて
いるにすぎない。本門の本有常住に對していう。

本面述裏 迹面本裏に對する語。文底独一本門事の一念三千
から立ちかえってみれば、本迹二門も迹門理の一念三千と
なる。天台は、法華經迹門を面とし、法華經本門を裏とし
て、一念三千の法門を説いた。これを、迹面本裏といい、
これに對して、末法の御本仏日蓮大聖人は、文底独一本門
を面とし、迹門理の一念三千を裏として、事の一念三千を
説かれた。これを、本面迹裏という。

梵網 梵網經に説かれている戒律で、十重禁戒・四十八輕戒
をさす。いずれも大乘戒である。

梵網經 二卷あり、鳩摩羅什の訳。上巻には菩薩の三十心・
十地の法門を説き、下巻には釈尊の成道を示して、十重禁
戒・四十八輕戒を明かす。下巻は、もっぱら戒について説
かれているので「菩薩戒經」といわれる。

本門戒壇の大御本尊 (要語解説二二五頁参照)

本門の戒壇 三大秘法の一つ。本門の本尊の御安置されたと
ころが、すなわち本門の戒壇である。

本門の肝心 本門の言は迹門を簡び、肝心の言は文上脱迹
を簡び、文底種本を顯わす。肝心、肝要というのは、文底

をさす。本門の肝心とは南無妙法蓮華經のことである。

本門八品の意味 (要語解説一〇二頁参照)

本門法華宗および仏立宗等 (要語解説三九七頁参照)

ま

魔 梵語。能奪命・障礙・奪功德者などと訳す。人命を害
し、人の善事を妨げる性質をもち、三魔・四魔・十魔等に
分け、主領は欲界に住む第六天の魔王である。末法今時に
おいては、三大秘法の御本尊を信受し成仏を目指すものを
妨げる働きをいう。兄弟抄(一〇八七頁)に「此の法門を
申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべから
ず」とある。

摩訶衍 梵語、詳しくは摩訶衍那。大乘と訳す。

摩訶迦葉 摩訶は大の義、迦葉は梵語。釈尊十大弟子のなか
で、頭陀第一といわれ、難行苦行の徳がある。迦葉尊者と
もいい、生まれたときは、身に一由旬を照らす光明を放っ
ていたという。法華經の授記品第六で光明如来の記別を受
け、釈尊涅槃の座に連なり、正法の付嘱を受けて付法蔵の
第一として、仏滅後二十年間、小乗教を弘通した。

摩訶迦旃延 釈尊十大弟子の一人で、論議第一であった。法

華經にきて、授記品第六で、閻浮那提金光如来の記別を受けた。

摩訶止観 (要語解説一七三頁参照)

摩竭提国 インドの摩竭提地方の、仏教に最も縁のある王国である。西紀前六百年より最初の王朝が始まり何回も王朝が変わった。釈尊在世には有名な頻婆沙羅ならびに阿闍世が国王であった。孔雀王朝には阿育大王、賓頭沙羅王が諸国を併呑して君臨し、玄奘三蔵の代には戒日王が統治した。この国には仏教の事跡が多い。すなわち伽耶城・王舎城・竹林精舎・菩提樹・提婆と馬鳴の史跡・鷄園寺・鷄足山・目連の故郷等々である。

摩訶波闍提比丘尼 釈尊のおばで、憍曇弥という。

摩醯首羅天 自在天といい、色界の頂に在る。目が三つ臂が八本あり大白牛に乗る。欲界の頂にも自在天がおり同名異体である。

摩睺羅伽 八部衆の一つ。大蟒神・大腹行と訳す。

摩頂付嘱 法華經嘱累品第二十二において説かれる付嘱で、

總付嘱とも三摩の付嘱ともいう。すなわち、仏は法座から立って、右の手で無量の菩薩の頂を三度摩で弘経を付嘱する儀式をいう。

末法 釈尊滅後二千年以後、第五の五百歳闍維堅固・白法隱

没以後を末法といい、釈迦仏法の功德がなくなり、日蓮大聖人の文底秘沈の大白法が流布するときである。

末法の観心 (要語解説二六〇頁参照)

末法の弘通 (要語解説一七三頁参照)

末法の御本仏 (要語解説二四一頁参照)

末法の四故 天台の四故に対する語。釈迦滅後、三大秘法を日蓮大聖人のみが、よく弘通された四つの理由(①自身能堪のゆえ。②所被の機縁に由るがゆえ。③仏より譲り与るゆえ。④時すでに来たるゆえ)をいう。

末法無戒 釈迦仏法の細かい戒律は末法に必要なことをいう。末法においては、受持即持戒といって、三大秘法の大御本尊を受持し、唱題・折伏に励むことが、そのまま戒を持つことになる。

末田地 付法蔵第三祖・阿難の弟子といわれ罽賓国に布教

し、また竜王教化のことも、西域記に伝えられている。

摩騰 摩騰迦の略称。中インドの人で大小乗経を解し、ある

とき、西インドで一小国のために金光明経を講じて敵国の侵害を防いで、大いに名をあらわしたという。後に竺法蘭と共に、漢の明帝の請いをうけて中国にはいり、道士の褚

善信等と法論して破り、中国仏教開宣の端を開いた。

摩訶 教論派の学者で広学多聞であつたが、徳惠菩薩のために折伏され六日目に血を吐いて死んだと、西域記にある。

摩騰 略して摩騰という。

魔の通力 (要語解説三二七頁参照)

麻畝の性 麻のようにまっすぐには生じない草でも、麻畝の中に生ずれば、周囲の麻と共に自然にまっすぐに成長することをいう。すなわち、邪法を信じ、誤った思想に陥った者も、正法を持つ正しい思想をもった者に感化されて、正しい思想をもつようになること。

摩耶經 上下二巻からなり、肅斉の曇景の訳。「仏昇忉利天為母說法經」ともいう。この經には仏が忉利天にのぼり母である摩耶夫人のために說法して初果の益を得させ、後に、

仏涅槃の時、摩耶が棺所におもむくと、仏棺が開いて千の化仏が現われて母子相見えたとすることが説かれてある。

摩耶夫人 釈尊の生母。善覺者の長娘であり、浄飯王の后となった。悉達太子、後の釈迦牟尼仏を生んでほどなく亡くなり、忉利天に生まれたので、釈尊は摩訶摩耶經を、母のために説いている。

摩梨山 南天竺の秣羅矩吒国にあり、栴檀の木が茂っている

といわれている。大智度論などに、栴檀は、摩梨山以外にないと説かれている。

曼荼羅 梵語。功德聚ともいう。御本尊のこと。

み

未有一人得者 法華經では、未だ一人も得道した者がなく、

という念仏宗の邪義。中国における浄土宗の僧・道綽が安樂集のなかで、法華以前の經を聖道門と浄土門に分け、歴劫修行の聖道門を捨てよと説いた。これを法然が法華經をも歴劫修行の聖道門に含め、これらでは、いまだ一人も得道した者はないと説いた。

御教書 鎌倉時代の幕府の命令書であり、現在の国家の姿からみれば、国会の議決によって公布される文書にあたる。

未顯真實 法華經の開經たる無量義經說法品第二において「四十余年には未だ真實を顯わさず」と説かれている。

未顯と已顯 法華經の開經である無量義經に「四十余年未顯真實」とあるので、法華經以前はまだ真實でなく、法華經にいたって真實が説かれるから、法華經を已顯とするのである。

未生怨 阿闍世王のこと。未だ生まれないときから怨みをも

っているというので未生怨と名づけられた。大成して後、

父・頻婆沙羅王の怨となつた。(阿闍世王の項参照)

味・浄・無漏 三種の禪定である。禪には世間禪、出世間

禪、上上禪があるが、味・浄・無漏とはこのうちの世間

禪、出世間禪のことである。すなわち世間禪に根本味禪、

根本浄禪の二つがあり、無漏禪とは、出世間の禪で二乗・

菩薩もこれを修するという。

未曾習魔 法華經壽量品第十六の文。「未だ曾て暫くも魔せ

ず」と読む。仏は衆生を救うことを少しもやめないこと。

弥陀三尊 阿弥陀仏とその脇士である観音菩薩、勢至菩薩。

密教 真言宗の判釈で真言宗以外の教を顕教、真言宗の教を

密教と立てている。東寺真言(東密)と天台真言(台密)

とがある。しかし真実に文底下種の法門こそ密教である。

未得道教 得道教に対する語。成仏できない教え。法華經は

得道教であり、爾前は未得道教である。

身延の教義と本尊 (要語解説三九四頁参照)

身延離山 (要語解説三五八、三九二頁参照)

未萌 未萌とは、草木のいまだ萌芽を生じないことをいい、こ

れより転じて、将来必ず起こるべくして、いまだ起こらな

い状態をいう。外典では「聖人は未萌を知る」と説いて

いる。聖人知三世事(九七四頁)に「委細に三世を知るを

聖人と云う」とある。

未発迹 未だ迹を発わず、ということ。顕本以前・始成正覺

の迹仏の説く爾前經および法華經迹門をいう。

名異体同 名は異なるが、その説く法体は同じであるとの意。

妙音菩薩品 (要語解説七四頁参照)

妙覺 天台の立てた五十二位の菩薩道の究竟の位で、一切の

煩惱を断じ尽くした仏果の位をいう。

名号 一般には、名前、名称尊号、徳号のこと。仏教では東

方の善徳仏、東南方の無憂徳仏、南方の栴檀徳仏、華光如

來等々それぞれの仏の名称をいう。しかし、念仏宗で名号

というとは阿弥陀の名号を意味し、南無阿弥陀仏の口唱を

名号という。

名字即 天台大師が法華經を修行する人を六段階に分けたう

ちの第二で、初めて仏法の信仰にはいった位を名字即とい

う。三世諸仏總勘文抄(五六六頁)に「一切の法は皆是れ

仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位よ

り即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し」とあり、

日蓮大聖人の仏法には、修行の段階はないが、御義口伝下

(七五二頁)に「頭に南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時名字

即なり」と仰せられてゐるように、御本尊を拝んで題目を唱える者が名字即である。しかも日蓮大聖人の仏法では、

ただ信心唱題するだけで、名字即がそのまま究竟即という

最高の成仏の境涯になるのである。

名字の凡夫 名字即の凡夫をいう。

名字妙覺 名字とは名字即の凡夫、妙覺とは五十二位の最高

位で成仏の境涯。すなわち名字妙覺とは、名字即の凡夫が

三大秘法を信じて、そのまま即身成仏することをいう。

明珠淤泥 涅槃經のなかに、一闍提の成仏できないことを譬

えた十譬のなかの第三の譬えの言葉、すなわち明珠を濁水

の中に入れるときは、その威徳によって水を澄ませることが

ができるが、もし泥の中に投げ込めば清水にすることがで

きないとして、五無間罪四重禁を犯した衆生を濁水に譬

え、一闍提を泥に譬えてある。

妙莊嚴王 法華經妙莊嚴王品に説かれる王。初め外道を信

じていたが、淨徳夫人と淨藏・淨眼の二人の子供の導きで

雲雷音宿王華智仏の化導で正法にはいり、国を弟に譲つて

出家し、法華經を信じ娑羅樹王仏と記別された。そして釈尊の法華經説法の会座で華徳菩薩として釈尊の説法を助けた。その過去の因縁をたずねれば、仏道を修行しようと志

した四人のうち、食事などの給仕をして三人の仏道修行を助けた功徳によつて国王に生まれたのである。

妙莊嚴王本事品 (要語解説七六頁参照)

明星天子 三光天子の一つ。法華經を行ずる者を守護する。

名体宗用教の五重玄 名は名称、体はその本体、宗は他と

區別される特質、用は働き・作用、教はその活動の影響。

天台は法華玄義において、この五重玄の範疇で、法華經の

深い義を明かした。万法は、すべてこの五重玄をそなえて

いる。妙法蓮華經の題目も、仏の法体(体)、因行果徳(宗)、

力用(用)、化導(教)等いっさいをそなえている。

冥伏 本質的に実在しているが、現実には顕現せず、空の状態にあることをいう。たとえば、いま笑っている人にも怒

りの心がある。しかし、笑いと同時に怒りは出てこない。

このようなとき、怒りが無いとはいわず、冥伏していると

いう。私たちの生活には常に十界が冥伏しており、縁によ

れて瞬間瞬間に一界を現するのである。

弥勒菩薩 慈氏と訳す。名は阿逸多、無能勝とも訳す。天竺

波羅奈国のバラモンの家の生まれ、釈尊の仏位を継ぐべき

補処の菩薩となり、釈尊に先立って入滅し兜率の内院に生じた。法華經では重要な菩薩で序品第一では文殊に、涌出

品第十四では釈尊に問いを發し、寿量品第十六・分別功德品第十七・隨喜功德品第十八では對告衆である。また弥勒のために菩薩の行法を説いた弥勒問經がある。觀心にて拜すれば御義口伝下(七六〇頁)には「彼の為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」のゆえに、弥勒(慈氏)とは末法の法華經の行者(御本仏日蓮大聖人)であると仰せられている。

む

無為涅槃 有為涅槃に対する言葉。無為とは、造作遷流のない意味で、因縁和合によってつくられた仮の法でないこと。無為の境涯に達するのを涅槃といい、このゆえに無為涅槃という。この無為の境涯にも、小乗、大乘、權実等の別があり、眞の無為涅槃は、大御本尊なしには論じられない。成仏こそ「無為」の境涯である。日蓮大聖人は聖愚問答抄(四九四頁)に「無為の宮に優遊せん事疑なかるべし」と、正法に帰依すれば、永遠の幸福に、悠々と遊び楽しむことができるかと仰せられている。

無依無得大乘四論玄義記 略して大乘四論玄義ともいう。唐の均正(恵均僧正)の著で十巻からなる。

無戒 持戒に対して、戒を受けず、また、無用なり、という

こと。①無戒・邪見の者という場合は、戒も受けず、勝手な邪義をかまえるものの意。②末法無戒という場合は、末法に釈迦仏法の戒律は無用であるという意である。

無眼の者・一眼の者・邪見の者 それぞれ仏法にまったく無知の者、仏教の一部しか知らない生かじりの者、仏法を自己流に曲げて解釈し邪説を立てる者をいう。

無垢世界 法華經の提婆達多品に説かれた八歳の竜女が作仏した国土の号で、離垢世界ともいう。

無垢論師 小乗の見をもつて大乘を誹謗し、天親菩薩に反對して舌が五つにやぶれ地獄へ落ちた。

無解有信 解とは智慧の異名であり、實際生活にあつて具体的に働く智慧の意味。信とは大御本尊を信ずること。すなわち、智慧・學問はなくとも信心のあること。

無間地獄 八大地獄の一つ。第八の阿鼻地獄のことで、顯謗法抄(四四七頁)に「前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦を以て一分として大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり」また

「若し仏・此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聴いて血をはいて死すべき故にくわしく仏説き給はず」等と仰せである。五逆罪をつくる者、正法誹謗の者はこの地獄に落ちる。

無作の三身 無作とは、つくるわず、はたらかさず、ありの

ままということ。生命にはすべて法身（生命）、応身（肉体）、報身（智慧）の三身を具している。法身が永遠であることは、すでに諸経に説き明かされているが、寿命品で初めて三身がそのまま本有常住であると、三身の常住を説いた。三身の常住は、仏法の核心であり、一身即三身の無作三身如来は、別しては日蓮大聖人である。御義口伝下（七五九頁）に「一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」また同じく「無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり」とある。

無色界 仏教の世界観である三界の一つ。精神の世界であり、物質のない世界で最上の天上界。

無師智 仏の智慧をいう。仏は師無くして悟りを得るのであるからこのようにいう。

無常 二乗は世間の無常を觀じて空寂の涅槃に歸するのを極地となした。常住に対する言葉である。

無性有情 法相宗で立てている五性各別のなかの一つ。五性各別とは一切衆生に本来五種の性があって、仏の経教はその五種に対して別々に説かれたと説く。成仏できない有情を無性有情という。

無上道 この上もない道、仏法の最高峰すなわち三大秘法の大法のこと。御義口伝下（七五九頁）に「無上道とは寿命品の無作の三身なり此の外に成就仏身之れ無し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は成就仏身疑無きなり」とある。

無勝童子 釈尊に、土の餅を供養した童子。釈尊が、弟子を連れ、王舎城に乞食をしたとき、無勝、徳勝という二童子があつて、砂で遊んでいたが、釈尊のすばらしい姿に歓喜し、何もなかったので、土でつくった餅を釈尊に奉った。この無勝童子は、釈尊滅後百年に土の餅を供養したその功德によつて阿育大王として生まれた。阿育王は、正法をもつて世を治め、八万四千の塔を造り仏法を興隆した。

無生忍 法華經で、阿闍世王が得たといわれる悟り。円教の初地あるいは七八九地。

無上宝聚不求自得 法華經信解品第四で四大声聞が領解したときの語。声聞が、阿羅漢の法に満足していたところ、法華經の会座にきて、舍利弗が成仏したのを見、自分たちも仏になれるのだと喜んで「無上の宝聚、求めずして自ら得たり」と述べた。無上宝聚とは、爾前有上・迹門無上、迹門有上・本門無上、脱益有上・下種無上と読むべきで、文

底下種の大御本尊に釈尊の因位の万行、果位の万徳の宝を集めているゆえに無上宝聚である。何の辛勞も、行も積まずに、ただ信心、題目を唱えることによって、功德を得ることができるので不求自得という。(御義口伝上七二七頁参照)

無生法忍 菩薩の悟り。大智度論卷第五十に「無生法忍とは、生滅無き諸法実相の中に於いて、信受し通達して、無礙不退なり」とあり、大智度論卷第八十六には「是の無生忍を得るが故に、即ち菩薩の位に入る」とある。

無上菩提 無上とは、有上に対する言葉で、この上もない、最もすぐれていること。菩提とは、成就であり、悟り。

無著菩薩 正法時代の末、インドの健駄羅国に生まれた。世親菩薩の兄で、世親は初め小乗の論師であつたが、無著の論破にあつて、ついに大乘の論師となつた。著に「撰大乘論」等がある。

無二亦無三 法華經方便品第二のなかの文で「十方仏土のなかには、唯一乗の法のみ有り、二無く亦三無し、仏の方便の説をば除く」とある。すなわち宇宙には成仏できる最高の法は、法華經(末法では南無妙法蓮華經)のみであつて、他には二もなく三もないとの意。

無の玄 老子は虚無を本として教を立て、虚無の道は天地を分かつた万物を生じないところに立てた道理としている。

無問自説果分勝 法華秀句に、法華經がことに勝れていると、十の特色が述べられていて、これを十勝というが、これはそのうちの一つ。法華經は、釈尊が、二乗や菩薩の問いを待たずに自ら説き出すが、この説法の方式を「無問自説」という。内証の果分の妙法、果分の神力、果分の秘藏、果分の深事がいずれもすぐれていることが説かれている。

無余涅槃 小乗教で説く二乗の最高の悟り。有余涅槃に対する言葉であり、一切の煩惱を断じ尽くした境涯。この境涯をつかむためには煩惱を断じ尽くして、灰身滅智する、身体も心も焼き尽くしてしまい、再び生まれてこないようにすると説く低い教えである。

無量阿僧祇劫 別教の菩薩は、歴劫修行を重ね、無量阿僧祇劫を過ぎるといふ。

無量義 無量の義。爾前の四十余年の經教に、教・行・人・理ともに無量の義が説いてある。無量義經に「無量義とは一法より生ず」とあり、眞実は無量の義は南無妙法蓮華經の一法より生ずるのである。

無量義經 (要語解説七七頁参照)

無量壽經三昧

三昧とは、梵語であり、訳せば、定、正受、

正心行処などといい、心を一つのことと定めて動かさず、
仏法の哲理を思索すること。序品第一で、釈尊がこの三昧
にはいつていた。すなわち、無量義經に説かれて「無
量の義とは一法より生ず」という仏法の哲理を深く思索し
た。一法とは三大秘法の南無妙法蓮華經のことで、宇宙の
あらゆる現象は、南無妙法蓮華經の一法より生ずるという
こと。文底では、一心に御本尊を拝んでいる境涯をいう。
無量壽佛 阿彌陀佛のこと。また無量光佛ともいう。すなわ
ち、浄土三部經に説かれた浄土宗の本尊であるが、權佛で
ある。

無漏智 漏とは煩惱の異名。無漏とは煩惱のなくなったこと
で、声聞緣覺の悟りである。煩惱がなくなれば、物事を正
しく分別し判断することができるといので、無漏智とい
う。大御本尊の智慧とは比較できないほど低い智慧である。

め

冥途 亡者が迷って行く道、死後の世界。

馬鳴菩薩 付法藏の第十一祖、仏滅後六百年ごろに出現し

て、大いに大乘教を弘通した正法時代の正師である。

面授口決

深秘の法門を直授すること。面授は、まのあたり

授ける。口決は口伝と同じ。日蓮大聖人は三大秘法を、地
涌の菩薩の上首として、教主大覺世尊から口決相承したと
いわれているが、文底は御本仏である。三大秘法抄（一〇
二三頁）に「此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の
上首として日蓮慥かに教主大覺世尊より口決相承せしな
り、今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき色
も替らぬ壽量品の事の三大事なり」とある。

も

毛宝が龜はあをの恩をわすれず

搜神記、蒙求、事文類聚等

の諸書に伝えられる中国の故事から引かれたもので、大要
は、毛宝という者がある日川へ行き、漁夫が一匹きの白龜
を獲ったのに会い、その龜を自分の着物と交換して買い受
けこれを救った。後年、毛宝が邾城の警備の任についたと
き、敵の大軍に攻撃され、陥落した城をのがれて川岸にい
たったとき、むかし救った龜に会い、その背に乗って川を
渡り、危難をまぬかれたという。あお（襖）とは一義に衣
類の意で、衣類を売って買われた恩といい、また一義には
「ふすま」の意で、ふすまの陰にて養われた恩ともいう。

前説をとるべきである。

魔霧の迷 まき もや、霧の中で迷っているように、宗教の正邪に迷い正法を見失っていること。

目連 もくれん 大目犍連ともいう。釈尊十大弟子の一人で、神通第一であった。目連の過去世の母・青提女が、慳貪の罪によって、五百生もの間、餓鬼道に落ちているのを、目連の神通力によって知ることができた。目連は、その苦しみを抜こうとするがかなわず、法華經によってやっと救うことができた。目連は授記品で多摩羅跋栴檀香仏の記を受けた。釈尊入滅の前に、羅閱城にはいり托鉢していたとき、竹杖外道に囲まれ、脱出はするが、過去の業であることを知り、外道に殺されて業を滅した。

目連尊者 もくれんそんじや 目連のこと。

物類冥召 もつるいみょうしやう 同類が秘かに通じ合わせる、ということ。

文義意 もんぎい 文とは説かれた經文。義とは、その經文の所詮の真理。意とは根本、肝要、元意である。四信五品抄（三四二頁）には「妙法蓮華經の五字は經文に非ず其の義に非ず唯

一部の意なるのみ」とある。

文殊 もんじゆ 文殊師利菩薩をいう。吉祥等と訳し、迹化の菩薩の上首で諸經に活躍する。法華經序品では、過去世に妙光菩薩

として生現したというので、釈迦仏の九代前の師となっている。また提婆品では、竜宮におもむき、八歳の竜女を化導している。また観心本尊抄（二五一頁）の下の文には、東方金色世界の不動仏の弟子となっている。

文証 もんしやう （要語解説一四七頁参照）

文上顯本 もんじやうけんぽん 発迹顯本に文上と文底と二種あり、文上顯本とは法華經本門寿量品で釈尊が五百塵点劫の本地を顯わしたことをさす。

文底下種三段 もんていげしゆさんだん （要語解説一五四頁参照）

文底顯本 もんていけんぽん 文上顯本に対する言葉。顯本とは、久遠の本地を開顯すること。文上顯本では始成正覚の迹を発つて五百塵点劫の本地を開顯するが、文底顯本では、その五百塵点劫の迹を発つて、久遠元初の本地を顯わす。

文底独一本門 もんていどくいつぽんもん 仏教の極理である日蓮大聖人の本因妙・事の一念三千の仏法。文上の本迹二門を通じて迹門・理の一念三千とし、それとは峻別して一重立ち入って立てるから独一本門という。

文底秘沈 もんていひちん （要語解説一五三頁参照）

聞法下種 もんぽうげしゆ 仏の下種をうけて、ただ法を聞いたが、まだ信受しない未発心の姿をいう。発心下種に対する語。（要語解

説三一九(参照)

蟲戒 蟲は蚊。蟲は虻。法華經の戒に対して、小乗の戒を難じてこのようにいう。三大秘法の本門の大戒壇に対しては、すべて蟲戒に等しい。

や

亦有亦無 三玄の一つで莊子が立てた。自然を本とし、自然には有の辺もあり無の辺もあるとする。

藥王 藥王菩薩。星宿光といい、瑠璃光照仏の滅後、日藏比丘が正法を宣言するとき、雪山の上薬をもつて衆僧に供養し、未来世において、衆生の心身の二病を治せんと誓願を立てた。それ以後、藥王といわれるようになった。法華經の会座に列しては迹門流通の対告衆の首位となっている。

藥王菩薩本事品 (要語解説七四(参照))

藥師經 唐の義浄、玄奘など四訳があるが、多くは、玄奘の訳。七難が説かれている。

藥師如来 東方淨瑠璃国の教主で、十二誓願を起こし衆生の病氣を治すことを誓った。日光菩薩と月光菩薩は脇士である。伝教は比叡山の根本中堂の本尊を、法華經寿量品の釈尊の分身、良医を本として藥師如来を本尊とした。しかし

久遠元初自受用身よりみれば、迹中化他の迹仏にすぎない。

藥草喻品 (要語解説六二(参照))

夜叉吉連 夜叉は、八部鬼衆の一つ。暴悪を事とする鬼類で、天夜叉、地夜叉、虚空夜叉があり、天と虚空の二夜叉はよく飛行するといわれる。吉連は、死者を起たしめ、怨ある人を害せしむといわれている。

耶輸多羅比丘尼 釈尊が悉達太子であったときの妃である。

耶輒陀羅、耶檀といひ、華色、名聞と釈す。羅睺羅を生み、釈尊の成道の後、願つて出家し初めての比丘尼となった。

約教約部 天台の立てた義。約教とは八教(藏・通・別・円・頓・漸・秘密・不定)に約することをいい、約部とは部すなわち五時(華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃)に約すのをいう。共に天台の三種教相の一つである根性の融不融の下にあつて、約教は約部に対して部内の教当分(五時の一)について融不融を判ずる当分の義である。約部は約教に対して釈尊一代五時の全体に通じて、その化導の各部節を越えて化導のさまを明かす跨節の義をいい、このことを

約教当分、約部跨節という。

宿谷左衛門入道光則 鎌倉幕府の臣で、北条時頼、時宗に近く仕えていた。立正安国論は大聖人より、宿谷入道の手を

經て献上された。極樂寺良觀等に帰依していたが、のち改宗し、日蓮大聖人に帰依した。宿谷は宿屋とも書く。宿屋禪門 宿屋左衛門入道光則のことである。時頼、時宗の側近の士。日蓮大聖人はこの宿屋入道を通して「立正安國論」を時頼に上書したのである。

ゆ

唯我一人能為救護 法華經譬喻品第三の文。「唯我一人のみ能く救護を為す」と読む。釈尊が、娑婆世界の一切衆生の主・師・親であることを明かしているうちの師の徳を表わす文である。文底から読めば「能く救護をする唯我一人」とは日蓮大聖人である。

唯心法界 旧華嚴廿六に「三界は唯一色なり、心の他の法なし」と説かれている。すなわち華嚴宗の根本とする法門。

唯仏与仏乃能究竟 法華經方便品第二に「唯仏と仏といましかく諸法の実相を究尽したまえり」と説いて、爾前經では秘し隠してきた一念三千の法門を諸法実相に約していることをいう。文底から拝すと、仏と仏とのみ知るとは日蓮大聖人と日興上人のみがよく知るということ。迹仏の境涯の仏では仏法の奥底をあらわすことはできないのである。

維摩經 後漢の嚴仏調以来、七回以上訳せられた方等部の經典。現存するのは次の三訳だけ。①呉の支謙訳、二卷、維摩詰經。②姚秦の鳩摩羅什訳、三卷、維摩詰所説經。③唐の玄奘訳、六卷、説無垢稱經。このうち、普通は、羅什訳が用いられる。

莢言 正に似ていて邪であり、かえって正を破毀する言葉。勇猛精進 心をもっぱらにして仏道修行に励むこと。日蓮

大聖人の仏法では、信心・唱題に励むこと。宝塔品に「此の經は持ち難し若し暫く持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり、是くの如き人は諸仏の歎る所是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり」とある。釈にいわく「敢て為すを勇と言ひ智を竭すを猛と言ふ」また「無雜の故に精・無間の故に進」と。

(要語解説三三五参照)

瑜伽論 瑜伽師地論といい、弥勒菩薩の説。唐の三藏玄奘の訳が百卷ある。

涌出品 從地涌出品といい、法華經二十八品の第十五、本門の最初にあたり、この品から經末までの十四品が本門である。涌出品は、滅後末法に、法華經を弘めるべく、本化の菩薩が出現する品であり、法華經の肝心である寿命品の直前でもあり、大切な意義をもつ。前半で、他方から来た

迹化の八恒河沙の大菩薩が弘経を請うが、釈尊は許さず「止ね善男子」と制止したとき、大地が割れ、上行などの四菩薩を上首として地涌の菩薩が涌出する。三十二相を具した六万恒河沙もの本化の出現に疑いをもち、代表して弥勒が質問するので、後半ではそれに対し、略開近顕遠を説き、動執生疑するのである。そして、ついに寿量品が説かれることになる。(要語解説六八頁参照)

勇施菩薩 法華経の陀羅尼品第二十四で、法華経の行者を守護すべき誓いを立てた。一切衆生に布施をする力を惜しまないで「勇施」といわれる。

猶多怨嫉 法華経法師品第十の文。如来(釈尊)の在世においてすら難をうけたのだから、いわんや、釈尊の滅後に法華経を弘める者は、多くの怨嫉をうけ、大難にあうのは当然であるということ。日蓮大聖人は、この文を身業読誦された。

よ

影堅王 頻婆娑羅王のことで、摩竭陀国の王。釈尊の出家をとどめたが、後、仏に帰依し竹林精舎を建て釈尊に奉った。晩年、阿闍世太子のために幽閉せられて獄死した。

要当説真実 法華経方便品第二の偈文。「世尊は法久しくして後、要当に真実を説きたもうべし」という。釈尊は、

初めから法華経を説こうと思つたが、衆生の機根が未熟なので、四十余年の長い間、權教を説いてきたが、いよいよ八年で、法華経の真実の法を説くということ。

永不成仏 声聞・縁覚の二乗は、無余涅槃にはいつて仏種を断ずるゆえに、未来永劫、成仏できないのであると爾前の諸経に説かれている。法華経にきて、初めて十界互具が明かされ、成仏できた。

要法寺 京都要法寺のこと。要山ともいわれ、建武元年(一三三四年)の建立。開山は日尊。日本門宗七本山の一つ。戦後、単独で日蓮本宗と名のついている。

要略広 (広略要の項参照)

与奪 仏教の判釈上の重要語。与は容与の意で、しばらく正義を隠して寛容の義をなす。奪は斥奪の意で、ただちに正義によつて劣っているものを奪うこと。たとえば機情に随つて説くときには、いちおう与えていい、随自意の折伏には奪つていう。

欲界の一切処 欲界は仏教の世界観の一つで、欲界、色界、無色界の三界の一つにあたり、下は地獄界より上は欲界の

最上である他化自在天宮にいたるすべてをさす。

与同罪 叛逆人の事情を知りながら、いたわったり、見て見ぬふりをすれば、後でわかったときに、同罪になるように、謗法を知って責めなかったり、同志に対する怨嫉を聞いて同調しては罪となり、罰をうける。これを与同罪という。

余の有漏・劣の無漏種 天親菩薩の唯識論のなかの語。煩惱障と所智障を断しても、なお余すところの有漏と劣れる無漏の種ということ。

ら

羅漢 小乗の果位で、声聞の四種の聖果の最高位。

羅睺羅 ①釈尊十大弟子の一人、密行第一といわれた。釈尊が出家するまえに耶輸多羅姫との間にできた子。釈尊の出家を恐れて、魔が六年間も生まれさせなかったといわれている。二十歳で仏弟子となり、舍利弗について修行した。

途中、おごる心が起こったが、釈尊に戒められ、ついに密行第一といわれるまでになり、法華経で跢七宝華如来の記別を受けた。②付法藏の第十五で、インドの迦毘羅衛国の浄徳尊者の子にあたり、生来聡明であった。

羅什 鳩摩羅什の略。羅什三蔵は、中国の後秦の時代に活躍した。「妙法蓮華経」の訳者として有名。

羅刹 悪鬼。

蘭室 高德の人、善人の居室の意味。香りの高い蘭のある室にいる者は、しばらくするとその香りが身体にしみてくるように、徳の高い貴人と共にいる者は、いつの間にかその徳の感化をうけるといふ譬えからきた語。

り

理具の一念三千 天台の一念三千は、その義を具してはいるが、ただそれが理性に具していることを論じ、諸法の実相は一念三千の当体であるというにすぎない。ゆえにこれを理具の一念三千という。

利剣即是 念仏の祖である善導が般舟讃に三千仏名経の「罪の繩は心に繫つて九百劫を経るとも解け難く脱し難し、唯仏名猛利の剣耳に在るのみ」ととって、人間の煩惱・業・苦を断ち切る利剣は、西方安養浄土の弥陀の名号を唱えるのが第一であると阿弥陀を信仰せしめたことをいう。

理証 (要語解説一四八頁参照)

理深解微 念仏の祖・道綽の語。「安樂集」にある。法華経の

理は深いが、この理を解り得道する者はないという意味。

理即 天台所立の六即位の第一。理のうえで論ずれば、一切衆生にことごとく仏性があるゆえ理即の凡夫という。

律宗 小乗経で、律を所依とするので律宗という。中国唐朝に、南山の道宣律師が戒律を弘通したのが初めである。比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒の具足戒をたもつ修行をする。日本では、聖武天皇のとき、唐僧・鑑真が来朝し、東大寺に戒壇を築いた。また天平宝字三年に唐招提寺を築き、戒律を講じた。また下野の薬師寺、筑紫の観世音寺に小乗の戒壇を築き、東大寺と合わせて、以上の三つを日本三所の小乗の戒壇という。律宗は、戒を根本として国の宝だといっているが、日蓮大聖人は、末法においては律宗は国賊であると破折されている。

律宗の教義 (要語解説一五〇参照)

律宗の道宣 道宣は中国唐代の僧で、南山律宗の祖、玄奘の訳経を援助し、堅く戒をたもち随一の大学者であった。その天台に帰伏した意は、修南山の道宣律師、天台大師を賛嘆して「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり」(撰時抄二七〇頁)といっている。

立正安国論 文応元年七月、三十九歳の御作で、宿屋入道を

通じて、執権の北条時頼に与えられた第一回の国家諫曉の御書。末法の一切衆生に対する強烈な指南書であり、一大予言書である。七百年前、日蓮大聖人は、当時の民衆が飢饉、疫病、地震などの難に苦しめられているのをごらんになり、その根本原因は邪宗・邪義にあることを示されて、もし、邪教の念仏を捨て、三大秘法の大御本尊を信じなければ、自界叛逆、他国侵逼の二難が現われると予言されている。十大部の一つである。(要語解説二一三参照)

立正佼成会 (要語解説四〇七参照)

理同事勝 法華経と大日経を比較すると釈尊も大日如来も一念三千にほかならぬと、理の上で同一とし、この教理を形の上からあらわす印や真言等の作法は法華経にないから、大日経の方がすぐれているとする、真言宗の邪義である。

(要語解説一三三参照)

略開三顯一 (要語解説九五、一五八参照)

略開三顯一 法華経方便品第二の十如实相の文。釈尊は、インドで成道して以来、四十二年にわたって方便権教を説いてきたが、方便品では十如实相を説いて一念三千を明かし、権を開いて実を示した。これが開三顯一であり、方便

品に「唯一乗の法のみ有り、二無く亦三無し」とある。この開三願一は、略開三と広開三に二段され、略開三願一は、十如是の文である。釈尊は、五千の衆が礼仏而退の後「増上慢の人、退くも亦佳し」として広開三願一を説かれ、三周の説法がある。すなわち、人生に対する目的観を教えるもので、一仏乗・最高の幸福を獲得することが、人生最大の目的であると説く。(要語解説八八頁参照)

歴劫修行 爾前経で説かれている菩薩の修行は、初発心の後、三阿僧祇百大劫、また動踰塵劫など、無量無辺の長い劫を経て、六波羅蜜などの菩薩を行ない、成仏すると説かれている。末法では、三大秘法の大御本尊を受持するときに、歴劫修行をしなくても一切の功德をうけることができる。観心本尊抄(二四六頁)に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う」とある。

竜火 落雷のようなものが原因で起こる火災。

竜樹 釈尊滅後七百年のころ、南天竺に生まれた。付法蔵の

第十三祖。仏法の奥底をきわめ、大智度論、十住毘婆娑論、中觀論、十二門論等を著作し、その義とするところは、中道実相にあり、これは法華經の義によったものである。

(要語解説三六七頁参照)

竜神 八部衆の一つ。金翅鳥、修羅、竜神は、共に地動を起こすといわれる。

竜象 比べる物のない巨大な動物である竜と象を例として、名僧の傑出してゐる代名詞に用いる。

竜女 竜女とは竜の女神をいい、別して竜王の女をいう。なかでも大海の娑伽羅竜王の女で、年が八歳の竜女をさす。

この竜女が、文殊菩薩が竜宮で法華經を説いたのを聞いて菩提心を起こし、次に靈鷲山で釈尊の説法を聞いて即身成仏の相を示し、女人成仏の現証を現わした(法華經提婆品第十二)。これを竜女作仏といい、法華經にのみ説かれた法門である。(要語解説九九頁参照)

竜門 天台山の境内にある瀑布の名。大井莊司入道御書(三七七頁)等にある。

楞伽經 禅宗の依經の一。詳しくは楞伽阿跋多羅宝經。釈迦が楞伽山頂において大慧菩薩の問いに対して答えたもの。権大乘經、方等部の經典。

両火房 真言律宗の惡僧、極樂寺良觀のこと。建治元年三月二十三日、極樂寺から出火して、鎌倉の將軍家の御所に飛び火して炎上した。極樂寺良觀の謗法の心火がその原因で

あるが、日蓮大聖人は、この極楽寺と御所の二か所の焼失を両火と呼び、良観房の音にかけて、皮肉の意味であだ名されたもの。（王舎城事一一三七が参照）

良観・念阿 良観は、もと律宗の僧、奈良西大寺に学び、鎌倉にきて極楽寺において律、真言、念仏等を弘めた。日蓮大聖人御在世当時の事跡は諸御書に詳しい。念阿は念阿弥陀仏の略、浄土宗鎮西派の第四祖・良忠のこと、法然の弟子・聖光に師事した鎌倉光明寺の開山である。

了義經・不了義經 法の四依の一つ。「了義經によつて、不了義經によらざれ」と読む。了義經とは、最高の極理を説いた經の意で、不了義經の対語。これは相對概念であつて、大乘・小乗を相對すれば、大乘經は了義經、小乗經は不了義經、また權經・實經を相對すれば、爾前の權大乘經が不了義經、法華經が了義經であり、種脱相對すれば、三秘法の南無妙法蓮華經が了義經であり、二十八品の法華經は不了義經となる。

領解 法華經で三周の説法するとき、正説、領解、述成、授記、歡喜の五段に分けて説かれている。正説は仏の説法、領解は正機の弟子が説法を聞いて理解したことを述べる。述成は、仏がさらに領解を補足し、授記は成仏の記別を授け、

歡喜は四衆の歡喜するありさまを述べている。

料簡 料度簡括ということよく考えて、事理を選びわけること。また物のすじみちを分別して決定すること。

了洪 伝不詳で、あるいは奈良の華嚴宗の僧かといわれる。

靈鷲山 梵語では、耆闍崛山という。インドのベンガル州にある山で、三千年前、釈尊が法華經を説いた場所。その南が尸陀林で死人捨て場となつてゐるため、鷲が飛來するので「鷲山」といい、三世諸仏の心法である法華經がとどまるので「靈山」という。日蓮大聖人の仏法からみれば、本門の大御本尊に題目を唱える者の住所は、いかなる所も靈鷲山である。別しては、本門の本尊の住所こそ靈鷲山である。（要語解説一〇八が参照）

良諤和尚 唐代天台宗の僧で、天台大師より九代の弟子にあたる。智証大師入唐のときの師といわれる。

令初發道心 法華經涌出品第十五の偈文。「初めて道心を發さしむ」すなわち、釈尊が地涌の菩薩をいちばん最初に自分の弟子として仏道修行の心を起こさせたとの意。

靈山一会儼然未散 天台の言葉。「靈山一会儼然として未だ散らず」と読む。靈山一会とは、法華經が説かれた靈鷲山の會座のこと。儼然未散とは、靈山の儀式がいまなお儼然

としてなくならず、永遠に常住しているとの意。今日、総本山および創価学会の姿こそ、靈山一会儼然未散である。

靈山八年 靈山は法華經の説處、八年は法華經説法の期間。

令法久住 「法をして久しく住せしめん」と読む。三大秘法の

の仏法を末法万年までも弘めるということ。

李陵 漢の人。騎射をよくし、人を愛するので重用視され、

騎都尉に任ぜられ、匈奴を征する軍に加わったがとりこ

になった。前漢武帝の時（西紀前一〇〇年）に、蘇武という

人が、匈奴に使いしたが、その王のために岩岨に幽閉され

た。その翌年、李陵も胡国にはいり、同じく辛酸をなめ

た。（法蓮抄一〇五二頁参照）

麒麟の角は稀なるゆえに、極めて少ないこと、なかなか

ありえないことに譬えたもの。

臨終 人がまさに死なんとするときをいう。この世における

善業・悪業の総決算が臨終であり、来世への第一歩ともな

る。したがって臨終の相は、ひじょうに大切である。日蓮

大聖人は「なにと・なくとも一度の死は一定なり、いろ

ばしあしくて人に・わらはれさせ給うなよ」（兄弟抄一〇八

四頁）と仰せられている。

臨終正念 臨終にあたり、心が迷わないこと。御本尊を拜

む以外に、正念はありえない。

臨終の相 （要語解説三三一頁参照）

輪陀王 馬鳴菩薩の過去の因縁を説いたなかに出てくる王。

釈摩訶衍論にある。（内房女房御返事一四二三頁・曾谷殿

御返事一〇六一頁参照）

輪廻六趣、六趣とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六

道、輪廻とはこの六道の生命を転々として、しかもこれ以

外には出ない生命の姿をいう。六道輪廻に同じ。

輪王 転輪聖王、また転輪王ともいう。この王身に三十二相

を具し、位につくとき天より輪宝を感得し、その輪宝を転

じて四方を降伏すれば転輪王という。その輪宝に金・銀・

銅・鉄の四種あつて金輪王は四州、銀輪王は東西南の三

州、銅輪王は東南の二州、鉄輪王は南閩浮提の一州である

（俱舍論）。現在では指導者はみな輪王であるといえる。ゆ

えに輪王にも大小がある。

輪王の優曇華 優曇鉢羅華の略。世界を統一する転輪聖王の

出現するとき、その先兆として海中に開くといわれる。古

代インド人の理想とした花。このようなことは、何千年、

何万年の間にごくまれに起こるとされる。日蓮大聖人は、

末法に生まれて三大秘法の大御本尊に巡り会うことが、い

かにむずかしいかの譬えとして、輪王の優曇華を引かれて
いる。

る

類聚伝 類をもつて聚めた伝記という意味。この本には、善導が念仏修行をやって氣違ひとなり、柳の木で首をつり、ナワから落ちて腰を打ち、七日七夜苦しんで死んだという有名な話などが書いてある。

盧舎那 毘盧舎那が法身をさすのに対して、盧舎那は報身をさす。

流通 序分・正宗分・流通分のなかの第三流通分と同じ、仏教典はすべてこの三段に分けて説かれてある。序分とはまさに説こうとする教を開明する準備段階。正宗分は、その中心たる教の本体を開説する部分であり、流通分は、正宗分の中心の教に基づいて、この弘通を明かす部分である。釈尊一代の經典を序正流通の三段に分けると涅槃經が流通分となる。（要語解説一五五頁参照）

れ

衆民 万民、人民。

劣謂勝見 我見にとらわれて、劣れるものを勝れているというもの。見取見と同じ。三惑のなかの見惑に十使があり、

五利使と五鈍使に分けられるが、見取見とは五利使のなかの第三番目にある迷いの思想である。

劣応身 一丈六尺、八相成道、老比丘の相を現する小乘三蔵の仏身である。（要語解説四八頁参照）

蓮宮 僧院のこと。

蓮華蔵世界 華蔵世界ともいう。華蔵經に説かれている華蔵經の他受用身仏の国土のこと。

蓮華比丘尼 華色比丘尼とも云う。阿羅漢果を得た、釈迦在世の比丘尼。提婆達多の謗法を呵責し、打ち殺された。立正安国論（三〇頁）には「提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや久しく阿鼻の焰に咽ぶ」とある。

ろ

六師外道 釈迦在世のころ中インドに勢力のあった六人の外

道論師（富蘭那迦葉・末伽梨拘舍離子・瑠闍耶毘羅胝子・阿耆多翅舍欽婆羅迦羅鳩駄迦梅延・尼乾陀若提子）のこと
をいう。

勒婆婆 苦行をいう。

六宗 南都の六宗をいう。すなわち俱舎・成実・律・法相・三論・華嚴の六宗。奈良時代、平安初期に隆盛であったが、日本の天台宗の開祖である伝教大師にことごとく打ち破られた。

六十巻 天台の著述した玄義・文句・止観の三十巻および妙楽の釈した釈籤・疏記・輔行の三十巻。

六神通 六種の神通力。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意身通、漏尽通である。前の五つは菩薩の所得であるが、最後の漏尽通は、ただ仏の所得である。

六瑞 法華經序品第一の説法のととき示された大瑞相で、説法瑞・入定瑞・雨華瑞・地動瑞・衆喜瑞・放光瑞をいう。

六相 華嚴宗の教相で、大玄門の一々に六相（総・別・円・異・成・壊）があるとしている。

六即 天台大師が法華經の円意で立てた修行の位。また、その法門。すなわち理即・名字即・觀行即・相似即・分真即・究竟即の六即位である。天台宗の六即は法華淨土問答抄（一一七頁）に、また末法修行の六即の配立は御義口伝下（七五二頁）に述べられている。理即の位は、いまだ信心しない人。名字即とは御本尊をいただいて信心した人。觀行即は朝晩の勤行をきちんとやり、功德を感じている人。

相似即とは三障四魔を粉碎していく人。分真即とは折伏に励み御本尊流布に邁進している人。究竟即の仏とは永遠の生命を感じ得し、成仏の境涯に達した方で、別しては無作三身如来であられる御本仏日蓮大聖人御一人である。末法の信心のあり方は、折伏に励み自他ともに功德をうけきる分真即の位でなければならぬといえる。しかし、日蓮大聖人の下種仏法では即身成仏なるがゆえに「名字妙覺」と仰せのように、名字即の凡夫が御本尊を拝んで仏の生命を感じ得したときが、すなわち妙覺の仏である。ゆえに天台宗のように嚴密な立て分けはいらないのである。總勘文抄（五六六頁）に「名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し」とある。（要語解説一一八頁参照）

六即位 天台が法華經によって立てた修行の位。大聖人の仏法には位の次第はないが、御義口伝下（七五二頁）では寿量品の如来は理即の凡夫、頭に南無妙法蓮華經を頂戴した時は名字即、修行するは觀行即、惑障を伏するのは相似即、化他に出ずるは分真即、無作の三身の仏と究竟したのを究竟即の仏という。

六通羅漢 六神通を得た阿羅漢。六神通とは天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏尽通。

六道輪廻

六道とは、十界のうち地獄、餓鬼、畜生、修羅、

人界、天界であり、私たち凡夫の一日の生活は、この六種

類の生命の状態を、縁にふれて、瞬間瞬間くり返してい

る。これを六道輪廻という。

六度万行

菩薩の修行する六波羅蜜の行で布施波羅蜜、持戒

波羅蜜等の六である。菩薩は無量劫の長きにわたってこの

修行を積んでいくので歴劫修行という。

録内・録外

古来、日蓮宗門流において立てる偽説。録内は

四十八巻、百四十八編をいい、日蓮大聖人の一周忌を六老

僧が池上で営んだとき、結集したものであるとする。録外

は二十五巻、二百五十九通で、大聖人の三回忌に録内に漏

れたものを集めたという。しかしこれらの説は何の根拠も

ない。録内について記録が現われたのは大聖人滅後百八十

年ごろであり、版本になったのは元和八年（一六二二年）

の本国寺版が最初である。

六難九易

法華經宝塔品第十一に説かれている。法華經をた

もつことのむずかしさを、譬えをもつて示したもの。六難

は一広説此經難・二書持此經難・三暫説此經難・四少説此

經難・五聴聞此經難・六受持此經難。九易は、一余經説法

易・二須弥擲置易・三世界足投易・四有頂説法易・五把空

遊行易・六足地昇天易・七大火不燒易・八広説得通易・九

大衆羅漢易。（要語解説九八頁参照）

六入 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根または、色・声・香・

味・触・法の六境をいう。

六波羅蜜 波羅蜜は梵語で「彼岸にいたる」の意、度とも訳

す。六波羅蜜とは一に檀（布施）波羅蜜、二に尸羅（持

戒）波羅蜜、三に羼提（忍辱）波羅蜜、四に毘梨耶（精

進）波羅蜜、五に禪那（禪）波羅蜜、六に般若（智慧）波

羅蜜。（要語解説三一頁参照）

鹿野苑 中インド波羅奈国にある園の名。古くは神仙の住所

とされ、国王が狩をし、鹿をつかまえても、放しておいた

地だといわれている。釈尊は、最初に正覺を成じたその座

で、三七日間華嚴經を説いたあと、鹿野苑で、橋陳如など

の五人を済度して比丘とした。その後十二年間、十六大国

で、阿含と名づけられる經を説いたが、阿含時とも、ある

いは、最初の説処にちなんで、鹿苑時ともいう。

六欲天 欲界に六重の天あり、四王天・忉利天・夜摩天・兜

率天・化樂天・他化自在天である。右のうち四王天は須弥

の半腹にあり、忉利天は須弥山頂にあり、これを地居天ま

た三十三天と名づけ、兜率天以上は空中にあるので空居天

と名づける。

六老僧 日蓮大聖人が御入滅にあたって、弘安五年十月八日

に定められた六人の本弟子。日昭、日朗、日興、日向、日

頂、日持である。(要語解説三五五頁参照)

漏尽 欲漏・有漏・無明漏の煩惱を断尽するのを漏尽という。

六巻抄 (要語解説三七八頁参照)

六根 眼・耳・鼻・舌・身・意を六根という。

わ

我が身即妙法蓮華經 (要語解説二八二頁参照)

惑耳驚心 妙樂が弘決のなかで天台の止観の円頓章を釈した

言葉。法華經に示された一念三千や草木成仏の法門を、一

般学者が信ずることができず、耳を惑わし、心を驚かした

ことをいう。

和合僧 出家の比丘が、一所に集まり仏道修行すること。こ

の和合僧を破って、その修行を妨げるのを破和合僧とい

い、五逆罪の一つとされている。僧とは、限定されたもの

ではなく、現在、創価学会が信心修行に、折伏に励んでい

るこの姿こそ、和合僧というべきである。

和光同塵 仏や菩薩が、自らの光りをやわらげて、衆生の塵

に同じ、種々の姿で現われ、化導して利益を与えることをいう。摩訶止観には「和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は以って其の終わりを論ず」とある。末法においては、「和光」とは御本尊の、一切衆生を救う力、功德であり、その人の悩みに応じて、また信力・行力に応じて利益を与えられる。

年表凡例

○この年表は、日蓮大聖人ご誕生の貞応元年（西紀一二二二年）より御入滅の弘安五年（西紀一二八二年）までを収めた。

○年号欄中、改元の月日は右端に数字で表した。

○立宗以後の聖寿欄に、その年の主な御在所を示した。

○全ての事項の冒頭には○印と▽印（年月不確定の項目の意）をつけた。なお、⑤のごとく数字を○でかこんであるのは閏月を示す。

○出典名の正式名称は、左記の通りである。なお、富要集は、巻数とページ数のみで記した。

略符号一覧

あ行

吾妻鏡
熱原法難史年譜
一代要記
同書奥書

か行

過
同寺過去帳
関東評定伝
関東評定伝

画讃	該書	吉続	近文	鎌志	鎌日	古刻	皇記	綱義	高書	高統	公補
日蓮聖人註画讃	その書	吉続記	近衛家文書	新編鎌倉志	鎌倉大日記	日本古刻書史	皇代略記	選撰集文前綱義	高野山文書	真宗高田派正統	公卿補任

さ行

座記	師守	釈書	宗全	性譜	寺誌	世縁	世過	聖蔵	石蔵	石蔵	全	全付伝	全付表	僧伝	増史	続史	大過去帳	帝編	東通		
天台座主記	師守記	元亨釈書	日蓮宗学全集	性公大徳譜	同寺寺誌	佐渡世尊寺縁起	佐渡世尊寺過去帳	日蓮正宗聖典	大石寺蔵	大石寺蔵	日蓮大聖人御書	全集	日蓮大聖人御書	那等列伝	全集付録年表	本朝高僧伝	増鏡	続史愚抄	大石寺大過去帳	帝王編年紀	東国通鑑

道元録 道元禪師和尚行

な行

日興詳伝 富士日興上人
詳伝
年譜 日蓮宗年表
本化高祖年譜

は行

百錬 百錬抄
別統 本化別頭仏祖統
墓銘 紀 其の墓銘

ま行

宮図 陸前宮野氏系図
妙蓮寺過 富士妙蓮寺過

明義 明義進行録
明義 明義進行録
蒙牒奥 蒙古国牒状奥書

ら行

鸞伝 本願寺聖人親鸞
鸞伝 本願寺聖人親鸞

隆伝 隆寛律師略伝
竜文 竜造寺文書

靈記 法華靈場記
蓮誌 富士妙蓮寺寺誌
蓮書 富士妙蓮寺文書

1 2 2 6	1 2 2 5	1 2 2 4	1 2 2 3	1 2 2 2	西紀
2	嘉禄 4.20	元仁 11.20	2	貞応 4.13	年号
後 堀 河					天皇
泰 時		義 時		武家	
5	4	3	2	1	聖寿
				○2・16 安房東条郷小湊に誕生幼名善日曆(聖元七)	日蓮大聖人並門下
	○9・25 慈円寂71 (座記)	○1月 親鸞教行 信証を著す(高統) ○8・5 幕府専修 念仏を禁ず(皇記)	○2月 道元入宋 (道元録)		一般宗教
○1・27 源頼経征夷大 將軍に任ぜらる(公補) ○8・1 幕府准布を停 め銅錢を通用せしむ	○6・10 大江広元卒78 (吾妻)○7・11 平政子 卒69(吾妻)○10・29 朝 廷新制36条を下す(百 鍊)○12・21 幕府評定 衆を置く(関評)	○6・13 北条義時卒62 (吾妻)	○5月 幕府土御門上 皇を阿波に遠流(吾妻)	○7月 鎌倉大地震 (吾妻)	日本
○(中ア)チ ヤガタイ汗 国の基礎で きる	○(東南ア) 安南に陳朝 おこる	○(中ア)オ ゴタイ汗国 成立	○(東欧)蒙 古ロシア諸 公を破る	○(東南ア) 蒙古回々国 を滅しイン ドに迫る	世界

[illegible]

1 2 3 5	1 2 3 4	1 2 3 3	1 2 3 2	1 2 3 1	西紀
嘉 禎 9.19	文 暦 11.5	天 福 4.15	貞 永 4.2	寛 喜 3	年号
四 条				後 堀 河	天皇
泰 時					武家
14	13	12	11	10	聖寿
		○春、安房清澄寺に登る(聖武七)			日 蓮 大 聖 人 並 門 下
○7・24 幕府専修 念仏を禁ず(吾妻) ○奈良の衆徒春日 神木を奉じて入京 せんとして宇治に 到る(百鍊)	○6・30 幕府専修 念仏を禁ず(全94)	○春道元山城宇治 に興聖寺を創す (道元録)	○1月 梶尾高弁 「明恵」寂60(釈書) ○親鸞関東を発し 京に向かう(高統)		一 般 宗 教
○3・28 摂政九条教実 卒26(明月)	○7・27 源頼経室竹子 卒23(明月)○8・6 後 堀河上皇崩す23(明月)	○5・29 摂政近衛基通 卒74(明月)	○5・14 泰時式目51ヶ 条を定む(吾妻)○10・ 2 藤原定家新勅撰和 歌集を上る(該書)	○春大飢饉(吾妻)○10 11 土御門上皇阿波に 崩す37(一代)○11・ 3 朝廷新制42条を下す (近文)	日 本
○(仏)ノ トルダム寺 院成る	○(東ア)金 滅亡	○(東ア)蒙 古軍洛陽を おとす。宋 軍と共同、 金軍を破る	○(東ア)イ ルトウト ミシユ、イ グンド中部 を征服	○(朝)蒙古 高麗へ侵入	世 界

1 2 4 0	1 2 3 9	1 2 3 8	1 2 3 7	1 2 3 6
仁治 7.16	延応 2.7	暦 仁 11.23	3	2
四 条				
泰 時				
19	18	17	16	15
		○11・14 安房清澄寺において円多羅義集を写す(奥)	○道善房について得度し是聖房蓮長と名乗る(聖五・全四七)	
○5月 祇園犬神人山徒の命により念仏を停止す(全94)		○②・29 浄土宗鎮西寂77(聖光上人伝)○7・11 北条泰時大蔵経を園城寺へ奉納(吾妻)	○6・25 幕府諸社寺及び国司領家の訴訟は式目に不拠とす(吾妻)	○1・2 奈良の衆徒神木を宇治に棄て退散す(百鍊) ○2・14 幕府使いを宇治に遣わし興福寺を諭す(吾妻)
○1・24 北条時房卒66(吾妻)○3・18 幕府御家人郎党の任官を禁ず(吾妻)	○2・22 後鳥羽上皇隠岐に崩す(吾妻)○5・1 綸旨を下して人身売買を禁ず(吾妻)○12・5 三浦義村卒(関評)	○1・28 將軍頼經上京(吾妻)○2・23 將軍頼經参内す(吾妻)	○3・10 近衛兼経摂政に任ぜらる(公補) ○4・9 藤原家隆卒80(公補)	
○(露)蒙古軍、露国諸侯を臣従せしむ	○(朝)蒙古軍、高麗より撤兵	○(西)グラナダ回教王国成立	○(東欧)蒙古軍の將バドウ、モスクワ、キエフを攻略	○(東欧)蒙古のバツの西征、43

	1 2 4 4	1 2 4 3	1 2 4 2	1 2 4 1	西紀
	2	寛元 2.26	3	仁治 2	年号
	後	嵯	峨		天皇
	經		時		武家
	23	22	21	20	聖寿
			○叡山遊学(別統)	○鶴岡八幡において大藏經を閲す(別統)	日蓮大聖人並門下
	○6・4 幕府後鳥羽院追福のため法華經百部摺写(吾妻)				一般宗教
○3・2 幕府殺生を禁ず(帝編)○5・3 幕府守護地頭等六波羅の	○3・18 御書所を置く(百鍊)○4・28 藤原頼嗣將軍となる(公補)○8・29 前太政大臣西園寺公經卒74(公補)	○12・22 幕府奴婢雑人の10歳未満の子女は其の父母に付せしむの令を下す(吾妻)	○6・15 北条泰時卒60(関代)○6・15 北条経時執権となる(吾妻)○9・12 順徳上皇佐渡に崩す46(増)	○2・7 鎌倉大地震(吾妻)○8・20 藤原定家卒80(公補)○10・22 幕府武蔵野に水田を開く(吾妻)	日本
○(教)リヨン宗教会議	○(伊)ローマ大学創立	○(東欧)キプチャク汗国建国	○(中ア)蒙古軍、小アジアに侵入する	○(欧)蒙古軍、中欧諸侯と戦う	世界

1 2 4 7	1 2 4 6	1 2 4 5
宝 治 2.28	4	3
後 深 草	後 嵯 峨	後 嵯 峨
時	頼	経 時
26	25	24
○南都薬師寺に大藏經を関す(別統)	○三井及び南都に遊學し又京泉涌寺に道隆を訪う(別統) ○3・8 日興甲斐大井庄鯨沢に生まる(聖雲五)	○叡山横川定光院に住す(別統) ○4・8 日朗下総平賀に生まる(別統)
○10月 聖徳太子著法華義疏を開版(古刻) ○11・26 法然弟子証空寂71(僧伝)	○6・15 越前大仏寺を永平寺と改む(道元録) ○宋僧道隆来朝(釈書)	
○1・19 近衛兼経摂政となる(公補) ○4・25 幕府後鳥羽院の祠を鶴ヶ岡に新宮す(吾妻) ○6・5 北条時頼三浦泰村を討つ(閏評) ○12・12 幕府本地頭と新地頭の徴租法式を定む(吾妻)	○3・23 北条時頼執権となる(公補) ○4・1 北条経時卒33(吾妻) ○5・24 北条光時頼経と謀り執権時頼を除かんとす(吾妻) ○6・13 北条光時伊豆に流罪(吾妻) ○7・11 前將軍頼経京に帰る(吾妻)	命に背き出京せざる者の罰を定む(吾妻) ○7・5 將軍頼経出家法名行智(公補) ○12・17 幕府諸国の悪党を隠匿するものの所領を没収せしむ(吾妻)
○(朝)蒙古軍、高麗を討つ	○(中)蒙古軍、京湖江淮を侵す	○(中ア)小アルメニア王ヘートン憲宗を訪問

	1 2 5 1	1 2 5 0	1 2 4 9	1 2 4 8	西紀
	3	2	建 長 3.18	宝治 2	年号
後	深 草				天皇
時	頼				武家
	30	29	28	27	聖寿
○8月 叡山を下り三井に遊学(靈記)○11・15 寂日 房日華甲斐二十日村(秋山氏)に生まる(蓮書)○日 頂駿河重須に生まる(別統)	○11・24 京五条坊門富小路に五輪九字秘釈を写す(奥)	○浄本を介して摂津天王寺に遊学(別統)○日持駿河 松野に生まる(別統)	○叡山に帰り定光院に住す(別統)	○藤原為家に歌道及び書道を学ぶ(別統)○高野・三 井等遊学、又法印真広を介して東寺・仁和寺に遊学 (別統)	日蓮大聖人並門下
	○北条長時鎌倉に 浄光明寺を創す (鎌志)	○波多野義重大蔵 経を越前永平寺へ 寄進(道元録)			一般宗教
○2・20 北条時頼將軍 頼嗣を廃す(吾妻) ○2・21 九条道家卒60	○2・10 鎌倉大火(吾 妻)○12・3 幕府鎌倉 市街商売の区域を定む (吾妻)	○4・20 幕府庶民の帯 刀を禁ず(吾妻)	○2・1 京大火、閑院 内裏焼失(百鍊)○7・ 20 佐渡院に順徳院の 追号を上る(帝編) ○10・8 朝廷沽価法を 定む(百鍊)	○5・18 安達兼盛卒 (吾妻)○12・23 幕府 百姓と地頭との訴訟の 法を定む(吾妻)	日本
○(中ア)フ ビライ大理 を撃つ	○(中ア)蒙 古第4代憲 宗即位	○(中近)エ ジプト、ア イユー、朝 滅び、マク ルーク朝興 る		○第6次十 字軍、54 (独)ケルン 大学院成る	世界

1255	1254	1253	1252
7	6	5	4
後		深	
時		草	
時		頼	
34 鎌倉	33 鎌倉	32 鎌倉	31
○蓮盛抄を著す○諸宗問答抄を著す○念仏無間地獄抄を著す○一生成仏抄を著す○主師親書を著す	○1・1、1・15 生身の愛染・不動を感見模写（聖実） ○日朗得度（別統）○富木常忍入信（別統）	○3・28 安房清澄寺に宗旨建立の内証を宣示（聖実） ○4・28 安房清澄寺に立教開宗（金全）○父母を授戒し日蓮と更名（高祖伝）○8・26 草庵を鎌倉松葉ヶ谷に構う（画讃）○11月 日昭入門（別統）○日向安房尾金に生まる（別統）	
		○8・28 道元寂54（道元録）○11・8 時頼鎌倉に建長寺を創し道隆を請ず（吾妻）	
	○1・10 鎌倉大火（吾妻）○4・29 幕府宋船入泊の員数を定めて五艘となす（吾妻）○11・21 足利義氏卒29（吾妻）	○10・1 幕府奴婢雑人の法を定む（吾妻）	（公補）○4・1 宗尊親王征夷大將軍に任ぜらる（吾妻）○4・2 頼嗣鎌倉から京に帰る（吾妻）○8・17 宗尊親王の病氣平癒を祈念し大仏を造り深沢に安置す（吾妻）○9・30 幕府諸国に沽酒の禁制を下す（吾妻）
○（西ア）蒙古軍、西南夷を平ぐ	○（独）ライオン同盟成立	○（西ア）フラグの西南アジア遠征始まる	

1 2 5 9	1 2 5 8	1 2 5 7	1 2 5 6	西紀
正元 3.26	2	正嘉 3.14	康元 10.5	年号
	後	深	草	天皇
長		時		武家
38 鎌倉	37 鎌倉	36 鎌倉	35 鎌倉	聖寿
○念仏者追放宣旨之事を著す○十法界事を著す○守護国家論を著す○爾前二乗菩薩不作仏事を著す○南条時光生まる(妙蓮寺過)	○2月 駿河岩本実相寺に大藏經を閲す(聖実○天)○駿河岩本実相寺学徒甲斐公「日興」入室し名を伯耆房と賜わる(聖実○天)○2・14大聖人父妙日卒(大過去帳)○2・14 一代聖教大意を著す○一念三千理事を著す○一念三千法門を著す○和泉公日法下野小山に生まる(聖実○天)○十如是事を著す		○四條頼基・進士善春・工藤吉隆・池上宗仲・荏原義宗等入信(別統)	日蓮大聖人並門下
	○1・17 鎌倉寿福寺及び若宮宝蔵・同別当坊等焼失(吾妻)	○7・1 加賀法印祈雨(吾妻)○8・23 鎌倉社寺大地震により一字も残さず倒壊(全三・吾妻)	○11・23 時頼道隆により落飾、法名覚了房道崇(吾妻)	一般宗教
○春大飢饉・大疫病(全三・皇記)○5・4 近衛兼経卒50(公補)	○8・1 大風雨諸国田園損亡(全三・吾妻)○8・7 皇弟恒仁親王を皇太弟となす(百鍊)	○2・10 太政官庁焼失(帝編)○5・18 鎌倉大地震(吾妻)○8・1 鎌倉大地震(吾妻)○11・8 鎌倉大地震(吾妻)	○8・6 鎌倉大風・洪水・疫病流行(関評)○8・11 藤原頼経卒39(吾妻)○9・25 藤原頼嗣卒17(公補)	日本
○(中)蒙古軍、宋に侵入を始める	○(朝)蒙古、高麗征服、アッパス朝を滅ぼす、イル汗国建国	○(仏)ソルボンヌ大学創立	○(独)大空位時代はじまる	世界

1 2 6 3	1 2 6 2	1 2 6 1	1 2 6 0
3	2	弘長 2.20	文 応 4.13
亀		山	
長		時	
42 鎌倉	41 伊豆	40 伊豆	39 鎌倉
○2・22 流罪赦免鎌倉に帰る(聖云・全三三)○7・13 熱海小沢大乗寺2代金剛阿行満日行寂(墓銘)○持妙法華問答抄を著す	○1・16 四恩抄を著す(伊豆御勘氣抄)○2・10 教機時国抄を著す○寂仙房日澄生まる(聖云)○顯勝法抄を著す▽熱海真言僧金剛院行満日興により改衣して日行と名乗り自坊を大乗寺と号す(日興詳伝)	○4・28 書を椎地四郎に与う○5・12 伊豆配流日興供奉(全二六九・聖云)○日興伊豆宇佐美・吉田の地に弘教(聖云)○伊東の地頭八郎左衛門より海中出現の仏像を受く(全四四)○6・27 書を船守弥三郎に与う○同一鹹味抄を著す	○2月 災難対治抄を著す○4・21 十法界明因果抄を著す○5・28 唱法華題目抄を著す○7・16 立正安国論を幕府に献ず(第1国諫)(全二六九・聖云)○8・27 松葉ヶ谷法難(全三三三・靈記)○下総富木邸に百日間説法(靈記)○比企大学三郎・太田乗明・曾谷教信・秋元太郎等入信(別統)○一代五時図を著す○日目伊豆仁田郡島郷に生まる(聖云)
	○11・28 親鸞寂90(鸞伝)		○6・12 幕府諸国寺社に疾疫退治の祈禱を命ず(吾妻)
○4月 高麗牒使を送りて邦民の沿岸を侵すを禁ぜんことを請う(東通)○9・10 幕府切錢を禁ず(吾妻)○11・22 北条時頼法名道崇最明寺に卒37(吾妻)○12・10 幕府時頼逝去による御家人の出家を禁ず(吾妻)	○この年幕府沽酒法年紀法、負物利子法などを定める	○3・13 幕府政所・公文所・問注所焼失(吾妻)○11・3 北条重時卒64(吾妻)	○諸国飢疫止まず(全三三)
○(蒙)太廟を建つ	○(蒙)安国王に任ず	○(東欧)東ローマ帝国復興	○(蒙)フビライ汗即位世祖となる

1266	1265	1264	西紀
3	2	文 永 2.28	年号
龜		山	天皇
政		村	武家
45 鎌倉	44 鎌倉	43 鎌倉	聖寿
○1・16 法華題目抄を著す○2月伊東八郎左衛門尉祐光卒(年)○8・11 千日尼父卒(全三四)	○3・8 南条兵衛七郎法号行増(時光父)卒(大過去帳) ○上総興津佐久間重貞弟竹寿麻呂(日家)同長男長寿麻呂(日保)得度(別統)○女人成仏抄を著す○薬王品得意抄を著す○太夫阿日尊陸前玉野に生まる(聖七)セ○聖愚問答抄上下を著す	○3・1 書を三位日行に報ず(御興振御書)○4・17 書を大学三郎妻に報ず(月水御書)○7・29 法華真言勝劣の事を著す○7月 日目父新田五郎重綱卒(年一三三)○9・22 当世念仏者無間地獄事(淨円抄)を著す○秋安房に帰り母の病氣平癒を祈る(全九五・画讀)○9月書を南部六郎恒長に与う○11・11 安房東条小松原にて地頭景信に要撃さる、鏡忍房・工藤吉隆殉難(全四九)○11・14 安房花房蓮華寺に師道善房と会す(全六九)○12・13 書を南条兵衛七郎に与う(慰勞書)○日向得度(別統)○題目弥陀名号勝劣事を著す○木絵二像開眼之事(法華骨目肝心)を著す	日蓮大聖人並門下
	○4月 幕府延暦寺衆徒の武装を禁止する	○3月 山徒自ら延暦寺を焼く(続史)○5月 山徒園城寺戒壇を焼き梵鐘を奪う(続史)	一般宗教
○3・6 幕府引付衆を廃し問注所に命じ評定衆をして聴訴せしむ(関評)○7・4 北条時宗將軍宗尊親王を廃す(吾妻)○7・20 吾妻鏡記述終わる(該書)	○12月 藤原為家「続古今和歌集」を撰進	○8・21 北条長時卒(関評) ○10月 幕府越訴奉行を置く	日本
○(蒙)高麗に日本招諭の元使を出す	○(英)国会開催	○(英)イングラントの諸侯、国王ヘンリー3世と争う、諸侯シモン・ド・モンフォールら国王を捕える	世界

1270	1269	1268	1267
7	6	5	4
亀		山	
時		宗	
49 鎌倉	48 鎌倉	47 鎌倉	46 鎌倉
○9・26 書を富木入道に報ず「真間釈迦仏供養逐状」 ○10・23 書を某に報ず「大豆御書」○11・28 書を太田金吾に報ず「大師講御書」○真言天台勝劣之事を著す ○善無畏三藏抄を著す○書を富木入道に報ず○真言七重勝劣事を著す○日持・和泉公日法・治部公日位得度(別統)	○5・9 書を富木入道等に報ず「問注得意抄」○6・7 書を富木入道に報ず ○12・8 駿河実相寺大衆幕府に訴状を呈す(二〇三七)○12・8 立正安国論を書写し奥書す(全三)○書を三位日行に与う(法門可被申様之事)○龍華院日像下総平賀に生まる(別統)	○3・23 北条時宗駿河岩本実相寺山内肅正につき下文を与う(二〇三六)○4・5 書を法鑒房に与う「安国論御勘由来」○8・21 書を宿屋入道に報ず○10・11 書を北条時宗へ送る○10・11 書を宿屋左衛門光則へ送る ○10・11 書を平左衛門尉頼綱へ送る○10・11 書を北条弥源太へ送る○10・11 書を建長寺道隆へ送る○10・11 書を極楽寺良観へ送る○10・11 書が大仏殿別当へ送る ○10・11 書を寿福寺へ送る○10・11 書を浄光明寺へ送る○10・11 書を多宝寺へ送る○10・11 書を長楽寺へ送る○10・11 書を弟子檀那中に与う	○8・15 大聖人母妙蓮尼卒(大過去帳)○12・5 書を星名五郎に報ず○安房より上総藻原を経て下総富木邸に越年(別統)○日頂得度(別統)
		○1・29 凝念八宗綱要2巻を著す(奥)○4月 幕府諸社寺に蒙古調伏を祈らしむ(寇記)	○8月 良観鎌倉極楽寺に入る(性譜)
○1・11 蒙古船対馬に至る(鎌日)	○4・27 幕府問注所を罷め五方引付衆を置く(関評)○9月 蒙古重ねて来牒(関評)	○①・18 蒙古国牒状鎌倉到着(全三三)○2・7 幕府蒙古・高麗の国書を奏す(八愚)○2月 時宗蒙古の使を退く(蒙牒奥)	
○第7次十字軍	○(蒙)クビライ、パスバ文字を制定	○(蒙)日本に牒状を出す ○(中ア)カイドウの乱起る	○(伊)トマス・アキナスの「神学大全」成る

	1271	西紀
	文永 8	年号
亀	山	天皇
時	宗	武家
	50 佐渡	聖寿
○1・16―17 塚原問答（全九六・全九五）○1・16 本間重連に自界叛逆を予言（全九六・全九二九）○1・17 法華浄土問答抄を著す○2月 初旬最蓮房入信（全二三〇）	○1・11 書を秋元太郎兵衛に報ず〔五節句事〕○4・17 寿量品得意抄を著す○5・7 書を四条金吾女房に報ず○5・8 書を四条金吾に報ず〔月満御前御書〕○5月 書を三位房に与う〔十章抄〕○7・12 書を四条金吾に報ず〔施餓鬼御書〕○7・13 浄土僧行敏の難状に答う〔行敏御返事〕○7月 良観等の訴状を論破す〔行敏訴状御会通〕（全二八〇）○9・10 問注所に召出され平頼綱に見参す〔第2国諫〕（全二八三）○9・12 書を平頼綱に与う〔一昨日御書〕○9・12 龍口法難（全九二二）○9・13 相模依智本間邸に送らる（全三三三）○9・13 日朗等5人投獄さる（全三三三）○9・14 書を富木入道に報ず○9・21 書を四条金吾に報ず○10・3 書を日朗等5人に与う〔五人土籠御書〕○10・5 書を太田・曾谷・金原等の3人に与う〔転重輕受法門〕○10月 書を清澄寺大衆中に与う〔佐渡御勘氣抄〕○10・9 書を日朗に与う〔土籠御書〕○10・10 相模依智本間邸を發し佐渡に向かう（全三三二）日興供奉（聖五九六）○10・21 越後寺泊に着く（全三三二）○10・22 書を富木入道に与う〔寺泊御書〕○10・28 佐渡に着く（全九二六）○11・1 佐渡塚原の配所に入る（全九二六）○11・23 書を富木入道に報ず○早勝問答を著す▽三位日行京より鎌倉に帰る（全三二五）▽阿仏房・千日尼入信（別統）	日蓮 大聖人 並 門 下
○冬覚信尼、親鸞の墓を京大谷より吉水に移し庵室を	○6・18―7・4 良観雨を祈る（全九二二）○7・8 浄土僧行敏大聖人を問難（全二五九）	一般宗教
○2・11 評定衆名越時章、同教時伏誅（全三六・関評）○2・15 南方六	○9・2 幕府高麗牒状を奏す（吉統）○9・23 蒙古三度來牒（吉統）○10・23 法皇公卿をして蒙古の牒状を議せしむ（吉統）○12・16 勅使を伊勢に遣わして異国降伏を祈らしむ（吉統）	日本
○十字軍終わる ○（伊）イタ	○（蒙）国号を元とす （伊）マルコ・ポーロ、イタリアを出発	世界

1273	1272
10	9
亀 時	山 宗
52 佐渡	51 佐渡
○1・28 選法華經文〔祈禱經〕を最蓮房へ送る〔祈禱經送狀〕（全三三六）○3・13 佐渡妙円尼〔世尊寺2代下江房日増室〕卒（世過）○4・25 観心本尊抄を著す○4・26 観心本尊抄を富木入道に送る（全三三三）○5・17 諸法実相抄を最蓮房に与う○5・28 書を義浄房に報ず〔己心仏界抄〕○5月 如説修行抄を弟子檀那中に与う〔隨身不離抄〕○5月 四条金吾鎌倉より佐渡に詣る（全付表四）○5・11 願仏未来記を著す○7・6 書を富木入道に報ず○8・3 書を南部六郎三郎に報ず○8・15 書を経王御前に報ず○9・19 書を弁殿尼御前に報ず	○2・11 書を最蓮房に報ず〔生死一大事血脈抄〕○2・18 書を富木入道に与う〔八宗違目抄〕○2・20 本間重連入信（全九二五）○2・20 書を最蓮房に報ず〔草木成仏口決〕○2月 開目抄2巻を著す○3・13 書を阿仏房に報ず○3・20 書を弟子檀那中へ与う〔佐渡御書〕○4・3 一ノ谷へ移居（全三三六・全付表二四）▽中興入道・一谷入道入信（全付表三・全付表二四）○4・10 書を富木入道に報ず○4・13 書を最蓮房に報ず〔供物書〕○4月 書を四条金吾に報ず〔煩惱即菩提書〕○5・5 書を2書を四条金吾に報ず〔真言諸宗違目〕○乙御前母〔日妙〕鎌倉より佐渡へ詣る（全三三三）○5・25 書を乙御前母に与う〔日妙聖人御書・樂法梵志抄〕○7・26 書を日昭等3人に与う○7月 真言見聞を著す○9月 日目走湯山円蔵坊に入る〔13才〕（聖三三三）○9月 書を四条金吾に報ず〔梵音声書〕○祈禱抄を著す○書を四条金吾に報ず〔経王御前御書〕▽本尊を願す（八一三三）▽本尊を願す（八一三三）
○12・7 良観弟子道観等の訴えにより佐渡の領主武蔵前司宣時私の御教書をもって大聖人の外護を禁ず（全三三〇・全三六六）○一遍時宗を開く（聖六）	建つ（鸞伝）
○3月 元使趙良弼太宰府に來り京に入るを得ずして去る（東通）○5・27 北条政村卒69（関評）○7月 佐渡に石灰虫降り稲害（全三六六・全九六六）	波羅探題、北条時輔伏誅（全三六六・関評）○5月 高麗の使元の牒状を携えて来る（関評）
○（西欧）ハプスブルク家のルドルフ1世帝位につく	リア人ボルゲサノ、紡車による糸機を發明○（元）劉整を燕王に封ず、日本に元使を出す

1274	西紀
文 永 11	年号
後 宇 多	天皇
時 宗	武家
53 鎌倉・身延	52 聖寿
○1・14 書を富木常忍等門下中に与う〔法華行者逢難事〕○2・14 幕府赦免状を発す(全三三・聖五六)○2・21 書を弥源太入道に報ず○3・8 赦免状佐渡に着く(全三三)○3・12 書を遠藤左衛門尉に与う○3・13 一ノ谷を發つ日興等供奉(全九六・聖五六)○3・14 網羅滞留(全九六)○3・16 越後柏崎へ着く(全九六)○3・26 鎌倉へ着く(全三六)○4・8 平頼綱に見参〔第3国諫〕(全三三)○5・12 鎌倉を發つ(全三三)○5・15 駿河大宮黒田に宿す(全九六)○5・17 波木井郷に着く(全九六)○5・17 書を富木常忍に報ず○5・24 法華取要抄を著す○6・17 身延沢に庵室成る(全二五三)▽日興駿河岩本実相寺方面に往復して弘教す(熱原譜)○7・11 書を南条後家尼に報ず○7・26 書を南条時光に報ず○8・10 南条七郎太郎〔行忍〕水死(蓮誌)○9・17 書を弥源太入道に報ず○9・26 書を四条金吾に報ず〔主君耳入此法門免与同罪事〕○11・11 書を南条時光に報ず〔二管書〕○11・20 書を曾谷入道に報ず〔自界叛逆御書〕○12・15 顯立正意抄を著す○12月本尊を願す〔万年救護本尊〕(聖六七・保田妙本寺藏)○立正觀抄を著す〔法華止觀同異決〕○日月初めて日興に謁す15才(聖三三)○陸前一ノ迫宮野陸前守弘次〔葛西氏〕受法し身延山に参詣(宮図)	日蓮大聖人並門下 ○当体義抄を最蓮房に与う○小乗大乘分別抄を著す○書を四条金吾に報ず〔阿耨勝法滅罪抄〕○妙法曼荼羅供養事を著す○曾谷教信本尊抄を拜し迹門不読の義を唱う(全九三・別統)○遠藤四郎盛国改宗して下江房日増と称す(世縁)
○4・10 加賀法印祈雨(全九三)	一般宗教
○4・12 鎌倉大風(聖三六)○8・1 宗尊親王卒33(一代)○10月蒙古来襲〔文永の役〕(全二三九)	日本
○(東ア)元日本第1次侵寇に失敗	世界

後
時

宇

多
宗

54 身 延

○1・24 書を太田金吾入道に与う○1・27 書を四条金吾妻に報ず○1月下旬書を南条家に与う〔春の祝御書〕○1月下旬日興南条家に到り故兵衛七郎行増の墓に代参し富士下方に弘教す〔全三三〇〕○2・7 書を富木常忍に報ず○2・16 書を安房の新尼に報ず○書を三沢某に与う○2・28 立正觀抄を最蓮房に送る〔同送状〕○3・6 書を四条金吾に報ず〔此経難持書〕○3・10 書を曾谷入道・大田金吾に与う○3・21 教行証御書を三位房に与う○3月 書を曾谷入道に報ず〔方便品長行事〕○4・12 書を四条金吾に報ず〔王舎城事〕○4・12 書を国府入道に報ず○4・16 書を池上兄弟に与う〔兄弟抄〕○書を曾谷法蓮に与う〔法蓮抄〕○5・3 書を南条時光に報ず〔造営書〕○5・8 書を一谷入道妻に与う○5・25 書を棧敷女房に報ず○5月 書を妙一尼に与う○6・22 佐渡世尊寺2代下江房日増寂84〔過〕○6・10 撰時抄2巻を著す○6月 佐渡国府入道身延に参詣〔全三三四〕○6・16 書を佐渡国府尼に与う○6・22 書を西山入道に報ず〔三三藏祈雨事〕○6・27 書を浄蓮房に報ず〔細見抄〕▽日興の教化により駿河熱原滝泉寺寺家下野房日秀・越後房日弁・少輔房日禅・三河房頼田及び在家若干帰伏して弟子となる〔熱原譜〕○6月滝泉寺大衆の改宗により院主等謗徒の迫害起くる〔熱原譜〕○7・2 書を南条時光に報ず○7・2 書を大學三郎に与う○7・2 書を太田金吾妻〔即身成仏抄〕に報ず▽日興及び日向・覚乗房富士加島高橋家に在りて弘教す〔全三三三〕○7・12 書を高橋入道に報ず〔加島書〕○7・12 書を南条時光に報ず○7・22 書を四条金吾に報ず○7・26 書を高橋入道に報ず○8・4 書を日妙尼に報ず〔乙御前御消息〕○8・6 書を高橋入道に

○4・27 山徒竜象の坊を焼く〔座記〕○12・26 真言僧強仁勘状を大聖人に呈す〔全一八四〕

○4・15 蒙古の使者杜世忠等長門室津に至るついで幕府之を鎌倉に召す〔閏評〕○9・7 幕府蒙古使者杜世忠等を龍口に斬る、朝廷、幕府の公事を減じ民力を休養して兵備を嚴にす〔閏評〕○11月 幕府元寇によりて北条実政を鎮西に遣わす〔帝編〕

○〔元〕マルコポーロ、世祖に謁す○〔朝〕高麗元の日本遠征を援助し財政困難。官制を元の風に改める

	1275	西紀
	建治 4.25	年号
後	宇	天皇
時	多	武家
	54 身 延	聖寿
○1・11 書を清澄寺大衆中に与う〔虚空蔵菩薩書〕○1・19 書を南条時光に報ず〔初春書〕○2・5 本尊を顕す〔八一三〕・西山本門寺藏〕○2・15 船守弥三郎卒〔蓮慶寺過〕○2・17 書を松野六郎左衛門尉に報ず○2月	報ず〔異体同心事〕○8・18 書を南条時光に報ず○8・21 書を池上兵衛志に報ず○8・23 書を富木常忍に与う〔不可親近謗法者事〕○8・25 書を妙心尼に報ず○8月 書を南条内方に報ず〔単衣抄〕○9・3 書を佐渡千日尼に報ず○9・20 書を石本日仲に報ず○9・28 書を富木常忍妻に報ず〔御衣並單衣御書〕○10月 本尊を南条時光に授与〔八一三〕○10月 高橋六郎兵衛入道卒〔全二八三〕○11・3 書を太田入道に報ず〔転重輕受事〕○11・20 書を池上兵衛志に報ず○11・23 書を富木常忍に報ず〔観心本尊得意抄〕○11月 本尊を顯す〔八一七・石蔵〕○12・22 書を南条時光母に報ず〔上野殿母尼御前御返事〕○12・26 真言僧強仁の勸状に答え公場対決を促す〔全二八四〕○書を西山殿に報ず〔蒙古使御書〕○書を四条金吾に与う〔瑞相御書・真言所破之事〕○書を某女に与う〔善無畏抄〕○書を南条時光に与う〔神国王御書・真言亡国抄〕○書を南条時光に与う〔本門取要抄〕○上行菩薩結要付嘱口伝を著す○日法〔日弁弟子〕日興を介し大聖人の室に入る〔聖三三〕○最蓮房流罪赦免〔別統〕○大進房をして故高橋入道の墓に代参せしめ兼ねて書を妙心尼に与う〔滅劫御書〕〔全二四七〕○書を富木常忍に与う〔聖人知三世事〕	日蓮大聖人並門下
○1・9 山徒蜂起 (座記)		一般宗教
○5・4 花山院通雅卒 44〔公補〕○10・23 北 条実時卒53〔関評〕		日本
○〔元〕臨安 を落し、宋 の恭宗を捕 える		世界

後
時

宇

多
宗

55 身 延

本尊を願す(八一三三)○2月 本尊を願す(鉄砲曼荼羅)
 (八一三三)○3・16 清澄の道善房寂(大過去帳)○3・
 18 書を南条時光に報ず○3・27 書を富木尼に報ず○
 3月 書を光日房に与う○3月 三位房・日向等安房に
 在り(全九三)○3・5 書を妙密に報ず○3・24 書を南
 条時光に報ず(大橋書)▽因幡房日永改衣(全三三)
 ○4・8 日目伊豆走湯山円蔵坊において日興により得
 度(聖六三)○4・8 寂日房日華身延に入室し二十家阿
 闍梨と賜う(蓮誌)○4・12 書を佐渡国府入道に報ず
 ○4月 本尊を願す(八一三三)○6・27 書を四条金吾
 に報ず○7・15 書を四条金吾に報ず(釈迦仏供養事)
 ○7・21 書を日昭に与う(弁殿御消息)○7・21 報恩
 抄2巻を著し日向等をして道善房の墓前に読ましむ
 (聖三六・全三三)○7月 宗論準備のため日向等をして經
 論を諸寺に探訪せしむ(全三三)○8・3 書を曾谷入道に
 与う(成仏用心抄)○8・10 書を道妙禅門に報ず○8
 ・13 本尊を願す(八一三三・日向定善寺藏)○8・13 本
 尊を願す(病即消滅不老不死本尊)(八一七・石藏)○
 8・13 本尊を願す(八一三三)○9・6 書を四条金吾に報
 ず(有智弘正法事)○9・15 書を南条九郎太郎に報ず
 ○11・24 日目身延山に詣で常随給仕す(聖六三)○11・29
 書を富木常忍に報ず○12・9 三位房を使いとし書を松
 野六郎左衛門に報ず(十四誹謗書)○12・13 書を富木
 常忍に報ず(道場神守護事)○12月 書を南条平七郎
 に報ず(本尊供養書)○書を富木常忍に与う(忘持經
 事)▽書を光日房に与う(種々御振舞御書)○書を大
 井莊司入道に報ず○書を西山入道に報ず○書を松野六
 郎左衛門に報ず○滝泉寺院主代行智遂に下野房日秀
 ・越後房日弁・少輔房日禅・三河房頼円に称名念仏の
 誓状を求む、頼円之に応じ三師擯出せらる、日禅は河
 合に日秀・日弁は寺中に在りて弘教す(全六三)

○3月 幕府鎮西將士
 に命令して石塁を築く

西紀 年号 天皇 武家 聖寿	1277 建治 3 後 宇 多 時 宗 56 身 延
日蓮大聖人並門下	○2月 日身延において五戒口決伝受を書写す(聖室三)○3・2 書を池上兵衛志妻に報ず○3・19 書を六郎次郎に報ず○3・20 三位房を加島に遣わす(全二四四)○3月 法華初心成仏抄を駿河岡宮妙法尼に与う○3・23 富木常忍不審状を呈す(宗全一一八〇)○4・10 四信五品抄を富木常忍に与う「末代法華行者位並用心事」○4・12 書を太田乘明に報ず「金珠女書」○5・15 書を南条時光に報ず○6・9 三位公鎌倉桑ケ谷にて竜象房と問答す(全二五三)○6・23 四条金吾江馬入道より勘氣を蒙る(全二五三)○6・25 四条金吾に代わりて陳狀を書く「頼基陳狀」○6月 因幡房日永に代わりて書を下山兵庫光基へ与う「下山抄」○7・13 書を治部房祖母へ報ず「孟蘭盆御書」○7月 書を四条金吾に報ず「為法華經不可惜所領事」○8・4 書を弥三郎に報ず○8・23 書を日女御前に報ず「多宝塔中本門本尊事」○9・9 書を松野六郎左衛門に報ず○9・9 書を池上兵衛志に与う○9・11 書を四条金吾に報ず「崇峻天皇御書・同地獄抄」○10・13 船守弥三郎妻卒(蓮慶寺過)○11・1 書を富木常忍に報ず「稟権出界抄・常忍抄」○11・7 書を池上兵衛志妻に報ず○11・18 書を太田入道妻に報ず「八寒地獄事」○11・28 書を曾谷入道に報ず「如是我聞抄」○12・17 書を南条七郎次郎に報ず「大白牛車書」○12・30 示病(全二九)▽身延の草庵を修理す(全二五三)○書を四条金吾に報ず「八風抄」○書を四条金吾に報ず「告誡書」○書を四条金吾に報ず○書を聖密房に遣わす○書を南条時光に与う「庵室修復書」
一般宗教	○5・8 興福寺僧徒春日神木を揺がす(統史)
日本	○12・19 幕府六波羅政務の条規を議定す(建治三年日記)
世界	○(伊)ヴィスコンティ家、ミラノの支配権をにぎる。このころ、眼鏡發明される ○(元)文天祥の兵を破る、ピルマを征討開始

後
時

宇

多
宗

57 身 延

○1・1 御義口伝成る(聖元)▽駿河岩本実相寺衆・四十九院衆謗言怨嫉をなす(全一聖三)○1・16 書を実相寺豊前公に報ず「実相寺御書」○1・25 書を四条金吾に与う▽四条金吾勘氣を解かる(全一五)○2・13 書を松野六郎左衛門に報ず○熱原神四郎・弥五郎・弥六郎入信(九一三)○2・17 書を棧敷女房に報ず○2・23 書を駿河三沢小次郎に報じ熱原の誘徒の迫害に抗すべく駿河僧俗の結束を励ます「三沢抄」(全一四七)○2・25 書を南条時光に報ず「蹲鴟書」○2・28 書を富木常忍に報ず「始聞仏乘義・種々相待抄」▽立正安国論を再治す「建治の広本」(全一六四)○3・19 門弟に法華經の講を始む「御聞講書」(全一七〇)○3・21 公場対決の使者並びに書状到来す(全一三四)○3・21 書を門下一同に与う(諸人御返事)○3・24 石河新兵衛道念日実室妙大(南条時光姉)卒(家譜)○3月 四十九院申状 ○4・1 書を南条時光に報ず「法要書」○4・11 書を檀越某に報ず○4・23 書を太田左衛門尉に報ず○4月 書を浄顯・義浄房に与う「華果成就御書」○5・1 書を妙法尼に報ず「松野殿御返事」○5・3 書を西山窪尼に報ず○5・24 書を南条時光妻に報ず「八木書」○6・22 尾張次郎兵衛卒(全一四六)○6・25 書を日女御前に報ず「死活抄」○6・26 書を池上兵衛志に報ず○6・26 書を四条金吾に報ず「二病書」○6・27 書を窪尼に報ず○7・3 書を妙法尼に報ず「六難九易御書」○7・7 書を南条平七郎に報ず「種々物御消息」○7・8 書を南条時光に報ず○7・14 書を妙法尼に報ず○7・27 佐渡阿仏房日得身延に三度参詣(全一三四)○7・28 書を千日尼に報ず○8・11 書を弥源太入道に報ず○8・16 書を妙心尼に報ず○8月 本尊を日頂に授与(八一三三)○9・6 書を

○5・15 山徒園城寺長吏隆弁の鹿谷坊を焼く(続史)
○7・24 建長寺道隆寂66(釈書)
○京建仁寺焼失(一代)

○11月元の世祖、日本商船の交易を許可する

○(元)文天祥を捕える

1279		西紀
弘安2		年号
後	宇	天皇
時	多宗	武家
58 身 延	57	聖寿
○1・3 書を南条時光に報ず ○1月 興津時業、日興書写の法華經一部を請く(九一巻首) ○2・2 書を四条金吾妻日眼に報ず「日眼女釈迦仏供養事」 ○2・21 書を池上宗長に与り「孝子御書」 ○2月 本尊を日目に授与(八一三三) ○3・21 阿仏房日得佐渡に卒91(全三三) ○3・26 書を松野後家尼に報ず ○4・8 法華行人四郎男駿河三日月市場浅間神社分社に法敵のために傷害さる(全六三) ○4・20 書を南条時光に報ず「杖木書」 ○三位房日行寂(全六九) ○5・2 書を新池左衛門尉に報ず「八木抄」 ○5・4 書を西山窪尼に報ず ○5・11 書を西山入道へ報ず「宝経法重事」 ○5・17 書を富木入道に報ず「四菩薩造立抄」 ○5月 書を弟子某に与り「出家功德御書」 ○武藏金龜山浅草寺座主寂海改宗し日寂と賜わる(長昌寺寺誌) ○6・2 日寂武蔵橋場(鐘ヶ淵)に長昌寺を創す(寺誌) ○6・20 書を松野六郎左衛門尉妻に報ず ○7・2 遠藤守綱・父阿仏房日得の遺骨を身延に葬る(全三三) ○7・27 書を太田乗明に報ず ○8・8 書を南条時光に報ず ○8・17 書を曾谷道宗に報ず「五		日蓮大聖人並門下 妙法尼に報ず ○9・15 書を四条金吾に報ず ○9・19 書を南条時光に報ず「塩一駄書」 ○9・24 書を太田入道妻に報ず ○9月 本尊問答抄を浄願房に与り ○10月 書を四条金吾に報ず「所領書」 ○10・12 書を南条時光に報ず「柑子書」 ○10・19 書を千日尼に報ず ○10・22 書を四条金吾に報ず「必仮心固神守則強書」 ○11・1 書を南条九郎太郎に報ず ○11・29 書を池上兵衛志に報ず
		一般宗教
○6月 宋僧祖元北条時宗の請により来朝(釈書) ○7・29 幕府元使を博多に斬る(師守) ○12・27 前権大納言藤原為氏龜山上皇の院宣により続拾遺和歌集20巻を選進す(増)		日本
○(東ア)元南宋を滅ぼす ○(印)ベンガルにトラグルルの反乱		世界

後
時

宇

多
宗

58 身 延

味主抄」○8・18 本尊を佑盛日合に授与（八一七・石蔵）○8月 弥四郎男法敵に首を斬らる（全八三）○9・16 書を寂日坊に与う ○9・21 大進房等落馬悶死（全二五・日興詳伝）○9・21 駿河熱原の信士神四郎等20人滝泉寺行智等に讒せられ鎌倉に送らる（熱原法難）（全六九・全二五）○10・12 本門戒壇の大御本尊を造立す ○10・12 和泉公日法一体三寸の造り初めの御影を造立す大聖人印可（聖三）○10・12 書を日興・日秀・日弁等に報じ滝泉寺申状草案を与う（全六九・全二五）○10・15 下野房日秀・越後房日弁等滝泉寺申状を幕府に上る（全四〇・全二五）○10・15 日興等鎌倉より大聖人に法難の状を急報（全二五）○10・17 書を日興・日秀・日弁等に報ず（聖人等御返事・変毒為薬御書）○10・20 書を日朗・池上宗仲に報ず（兩人御中御書）○10・23 書を四条金吾に報ず（剣形書）○10月 四条金吾要撃さる（全二五）○10月 三世諸仏總勘文教相廃立を著す ○11・2 書を妙心尼御前に報ず ○11・6 書を南条時光に報じ熱原信徒の法難を賞す（竜門書）（全二五・石蔵）○11・25 書を富城入道尼に与う ○11・25 大聖人、日頂に付して下野房日秀・越後房日弁を富木入道の許へ赴かしむ（全五〇）○11・30 書の中興入道に報ず ○11月 本尊を俗日増に授与（八一七・石蔵）○12・3 書を池上宗仲に報ず ○12・27 書を南条時光に報ず ○12・27 書を西山窪尼に報ず ○日興三大秘法口決を記す（聖三）○日興に文永11年12月の本尊（万年救護本尊）を賜う（聖三・保田妙本寺蔵）▽本尊を顕す（八一三）○書を富木常忍妻に与う（可延定業書）

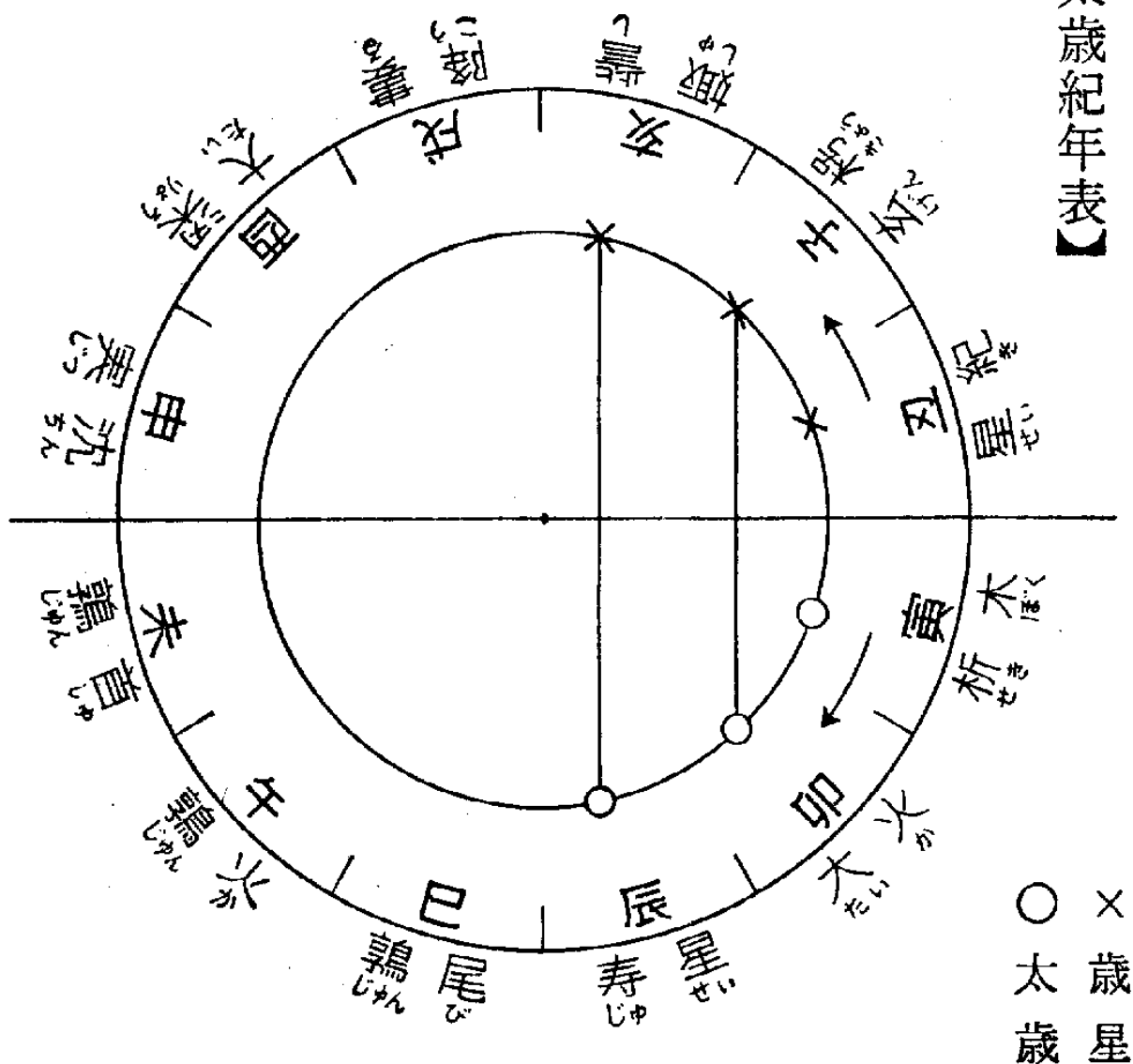
西紀 年号 天皇 武家 聖寿	1280 弘安3 多 宇 御時 59 身 延
日蓮大聖人並門下	○1・11 日興に法華本門宗血脈相承「百六箇抄」を相伝す(聖三臺・聖三・全六五) ○1・11 書を南条時光に報ず ○1・27 書を太田入道に報ず「慈覺大師事」 ○1・27 書を秋元太郎兵衛に報ず「簡御器抄」 ○2月 書を新池左衛門尉に与う ○2月 本尊を優婆塞日安に授与(六・三三) ○2月 本尊を願す(六・一五・土浦永井藤藏藏) ○2月 日興遠江の新池家に在り(全一四四) ○3・3 書を日住禪門に報ず ○3・8 書を南条時光に報ず ○3月 本尊を願す「紫宸殿本尊」(六・一五・石蔵) ○3月 本尊を願す(六・三三) ○4・8 熱原神四郎・弥五郎・弥六郎鎌倉に刑死す他17人放免(日興詳伝八四) ○4・10 書を富木入道に報ず ○4月 本尊を願す(六・一五・下総富久成寺蔵) ○5・3 書を窪尼に報ず「三物書」 ○5・4 書を妙心尼御前に報ず ○5・8 本尊を寂日坊日華に授与(六・三三) ○5・9 本尊を少輔公日禪に授与(六・一五・東京法道院蔵) ○5・18 書を妙一尼に報ず ○5・26 本尊を民部日向に授与(六・一五・石蔵) ○5・26 書を富木入道に報ず「諸経与法華経難易事」 ○5・28 門弟への法華経の講終る「御講聞書」(全六七) ○6・15 南条七郎次郎・七郎五郎兄弟身延に参詣(全二五・全二五七) ○6・27 書を窪尼に報ず ○6月 本尊を願す(六・三三・仙台仏眼寺蔵) ○7・1 佐渡遠藤守綱再度身延に参詣(全三三) ○7・2 書を佐渡阿仏房尼に報ず ○7・2 書を南条時光に報じ神主等の身辺を案ず(全二五七) ○7・7 書を某に報ず「浄藏浄眼御書」 ○7・14 書を妙一尼に報ず「真言法華即身成仏抄」
一般宗教	○6・24 山徒園城寺北院を焼く(一代・続史) ○11・14 鎌倉八幡宝殿焼く(全二六)
日本	○2月 朝廷、諸寺に異国降伏の祈禱を命ずる ○12月 幕府、鎮西の守護・御家人などに異賊警固に同心することを命令する ○この年、阿仏尼「十六夜日記」成る
世界	○(中近東) インド貿易の中心エジプトに集中。紅海沿岸の諸港繁栄。マムルーク朝の黄金時代

1281	1280
4	3
後	宇 多
時	宗
60 身 延	59 身 延
○1・13 書を南条母尼に報ず(石蔵) ○3・18 書を南条時光に報じ神馬を労わる(全三毛七) ○3月 本尊を俗日大に授与(八一三三・讃岐本門寺蔵) ○4・8 書を太田金吾に報ず(三大秘法裏承事) ○4・25 本尊を顕す(六一一六・東京常泉寺蔵) ○4・25 本尊を比丘尼持円に授与(八一三三) ○5・26 書を池上兄弟に与う(八幡宮造営事) ○6・16 蒙古来襲につき門下一同の言動を誠む(小蒙古御書)(全三三六) ○6・18 書を池上兵衛志に報ず ○7・1 書を曾谷二郎入道に報ず ○8・8 書を光日房に報ず ○8・22 書を治部房に報ず ○9・11 書を南条時光に報ず(鶏冠書) ○9・20 書を南条時光に報ず ○10・22 書を富城入道に報ず ○10月 本尊を平太	○8・14 書を内房女房に報ず ○8月 日若生まる(南条時光長男)(全二五六) ○8・26 書を南条時光に報ず(子財書) ○9・1 書を松野六郎左衛門妻に報ず ○9・3 本尊を俗日目に授与(八一三三) ○9・5 南条七郎五郎(時光弟)卒(全二五三) ○9・6 書を南条時光に報ず(石蔵) ○9・11 天王寺屋浄本卒(年譜) ○10・5 書を妙一尼に報ず(法華即身成仏抄) ○10・8 書を四条金吾に報ず ○10・21 書を刑部左衛門尉妻に報ず ○10・24 書を南条母尼に報ず(中陰書) ○11・3 十八円満抄を著し最蓮房に送る ○11・29 書を日蔵尼に報ず ○11月 本尊を日崇に授与(八一三三) ○11月 本尊を和泉公日法に授与(八一三六) ○12・16 書を四条金吾妻日眼に報ず(八幡抄) ○12・18 書を智妙房に報ず ○12・27 書を南条時光に報ず ○12月 諫晚八幡抄を著す(石蔵) ○12月 書を南条時光に報ず ○書を南条時光に報ず(石蔵) ○書を南条時光に報ず ○書を池上宗仲に報ず ○書を王日女に報ず ○書を某に報ず(法衣書)
○2月 東寺真広身延登詣開法(年譜) ○10・18 興福寺僧徒入洛嗽訴す(続史・一代)	
○4・28 鎌倉大風(全二二七) ○5月 蒙古来襲(弘安の役)(全九三三) ○6・6 元・高麗の軍船志賀島等を襲う(八愚) ○7・2 竜造寺季時等敵軍と竜岐に戦う(竜文) ○7・1 蒙古船大風に遭い難破大敗す(全九三三)	
○(東ア)元日本第2次侵寇に失敗する	

1282		西紀
弘安5		年号
後	宇	多
時		宗
61 池上	60	武家
▽諸要文により法華經を注す〔注経〕○日興、法華本門本尊問答抄を写す〔下総富久成寺蔵〕○1・7 書を四条金吾に報ず〔八日講御書〕○1・14 書を内記左近入道に報ず○2・22 岡宮妙法尼寂〔年〕○2・28 南条時光の病につき法華証明抄を著し日興に与う〔死活抄〕〔全三六〕○2・29 園城寺御下文を賜わる〔石蔵写〕○3月 書を南条時光に報ず〔延三枚御書〕〔石蔵〕○6・26 書を富木常忍に報ず〔治病大小権実違目〕○此夏首題について奥義口伝等日興に相伝す〔聖二四〕○9月 日興を唯授一人本門弘通の大導師と定め日蓮一期弘法付嘱書を賜う〔聖三九〕○9・8 身延出山〔聖二四〕○池上への途次大聖人の命により日目、伊勢法印を論破す〔聖三三〕○9・18 池上着〔聖五一・全三三〕○9・19 書を波木井実長に報ず○9・25 池上に立正安国論を講ず〔聖二四〕○10・8 日興に産湯相承を相伝す〔聖五八〕○10・8 六老僧を定む〔聖六一〕○10・10 日		聖寿
○12・19 興福寺僧徒の訴えによりて権中納言久我具房・按察使源資平を配流す〔帝編〕○12月 北条時宗円覚寺を創し宋僧祖元を請ず〔統史〕		日蓮大聖人並門下
		一般宗教
		日本
○〔英〕イングラント王エドワード1世、ウェールズを征服。アラゴン王ペドロ3世シチリア島を併合。 ○〔伊〕フィレンツェにギルド首脳者からなる執政委員会成立。民主政治を実施。		世界

興に御本尊七箇之相承・教化弘經七箇之口決大事を相
 伝す(聖三三・聖二四・宗全三三三)○10・10 日興神天上
 勘文を著す(聖三三)○10・11 日興に法華本門宗血脈相
 承事〔本因妙抄〕を賜う(聖四一・全六七)○10・13 日
 興を身延山久遠寺の別当と定め身延山付囑書を賜う
 (聖三三)○10・13 辰の刻池上宗仲の館にて御入滅(聖
 天二)○10・14 戌の刻入棺、子の刻葬送〔御火葬〕(聖
 天二)○10・16 日興〔大聖人御遷化記録〕を記す(聖天三)
 ○10・21 日興遺骨を奉じ池上を発す(聖一四)○10・21
 夜、飯田宿所(聖一四)○10・22 湯本宿所(聖一四)
 ○10・23 車返宿所(聖一四)○10・24 上野南条時光館
 宿所(聖一四)○10・25 身延に帰山(聖一四)○12・11
 波木井実長書を日興に奉る(西山文書)

【太歳紀年表】



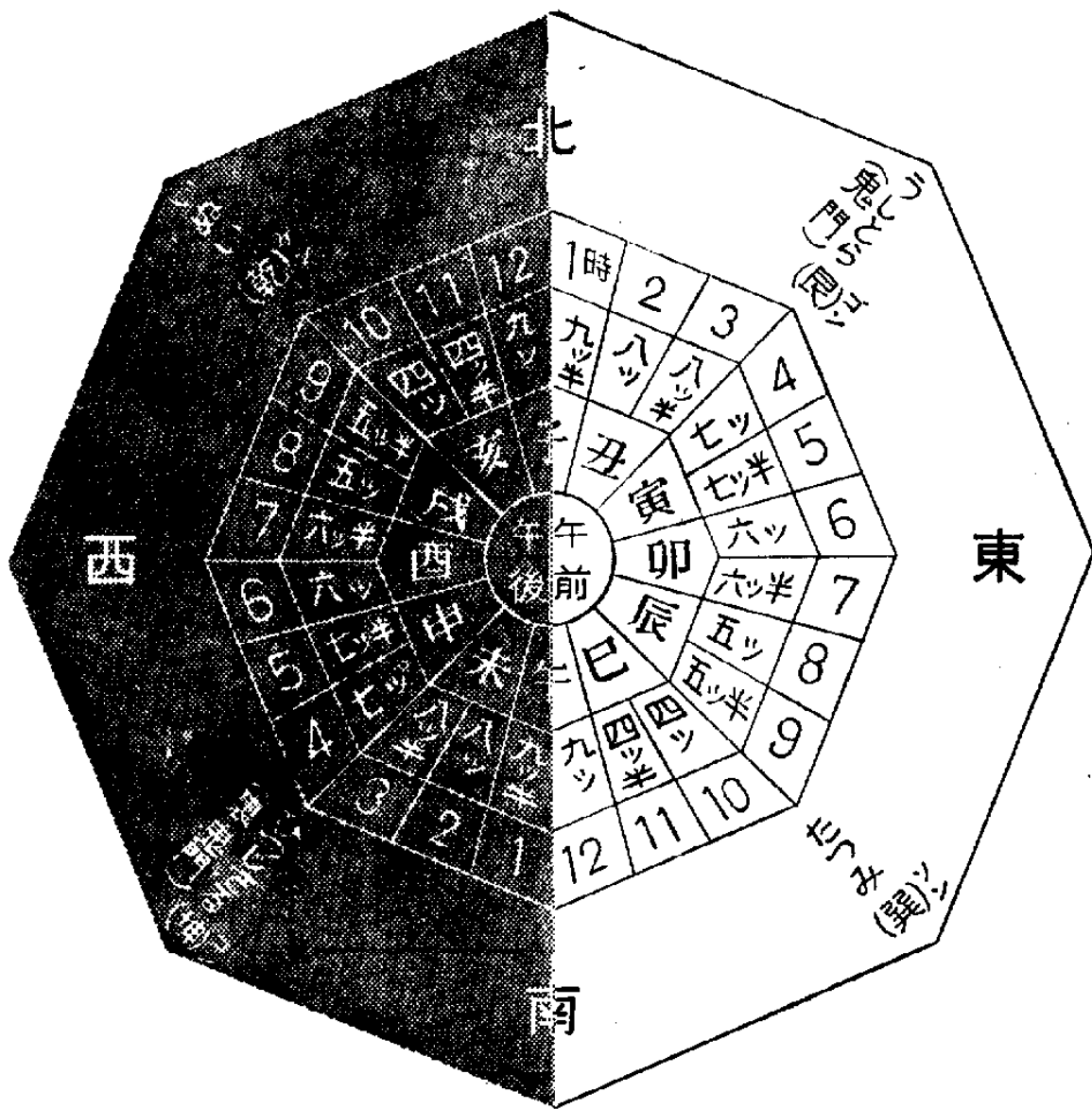
太歳について

木星（歳星）は十二年の周期をもって天を一周するので、十二支の運行に当てはめて、歳星のあるところの干支をもって歳を記するようになった。

しかし歳星の運行は十二支の配当とは逆方向なので歳星と逆方向に進む仮想の太歳を設定し、その太歳の位置をもってその歳に名づけた。これを太歳紀年法といい、現行の干支紀年法の前身である。

御書における太歳は、とくに公文書等、年代を明確にする必要がある場合に、用いられたように思われる。

【方位時刻表】



【月の異名】

十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月
しわす(師走)	しもつき(霜月)	かなづき(神無月)	ながつき(長月)	はづき(葉月)	ふづき(文月)	みなづき(水無月)	さつき(皐月)	うづき(卯月)	やよい(弥生)	きさらぎ(如月)	むつき(睦月)
季冬・晩冬	仲冬	孟冬・初冬	季秋・晩秋	仲秋	孟秋・初秋	季夏・晩夏	仲夏	孟夏・初夏	季春・晩春	仲春	孟春・初春

【十干十二支】

(十干)

癸 (き)	壬 (んじ)	辛 (んし)	庚 (うこ)	己 (き)	戊 (ぼ)	丁 (いて)	丙 (い)	乙 (つお)	甲 (うこ)
水		金		土		火		木	
弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄
みずのと	みずのえ	かのと	かのえ	つちのと	つちのえ	ひのと	ひのえ	きのと	きのえ

(十二支)

亥 (いが)	戌 (つゆ)	酉 (うゆ)	申 (んし)	未 (び)	午 (こ)	巳 (し)	辰 (んし)	卯 (うぼ)	寅 (い)	丑 (うちゅ)	子 (し)
い	い	と	さ	ひ	う	み	た	う	と	う	ね
	ぬ	り	る	つ	じ	ま	つ		ら	し	

(干支組み合わせ表)

干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号
きのえ 甲子	1	きのえ いぬ 甲戌	11	きのえ さる 甲申	21	きのえ うま 甲午	31	きのえ たつ 甲辰	41	きのえ とら 甲寅	51
きのと うし 乙丑	2	きのと い 乙亥	12	きのと とり 乙酉	22	きのと ひつじ 乙未	32	きのと み 乙巳	42	きのと う 乙卯	52
ひのえ とら 丙寅	3	ひのえ ね子 丙子	13	ひのえ いぬ 丙戌	23	ひのえ さる 丙申	33	ひのえ うま 丙午	43	ひのえ たつ 丙辰	53
ひのと う 丁卯	4	ひのと うし 丁丑	14	ひのと い 丁亥	24	ひのと とり 丁酉	34	ひのと ひつじ 丁未	44	ひのと み 丁巳	54
つちのえ たつ 戊辰	5	つちのえ とら 戊寅	15	つちのえ ね子 戊子	25	つちのえ いぬ 戊戌	35	つちのえ さる 戊申	45	つちのえ うま 戊午	55
つちのと み 己巳	6	つちのと う 己卯	16	つちのと うし 己丑	26	つちのと い 己亥	36	つちのと とり 己酉	46	つちのと ひつじ 己未	56
かのえ うま 庚午	7	かのえ たつ 庚辰	17	かのえ とら 庚寅	27	かのえ ね子 庚子	37	かのえ いぬ 庚戌	47	かのえ さる 庚申	57
かのと ひつじ 辛未	8	かのと み 辛巳	18	かのと う 辛卯	28	かのと うし 辛丑	38	かのと い 辛亥	48	かのと とり 辛酉	58
みずのえ さる 壬申	9	みずのえ うま 壬午	19	みずのえ たつ 壬辰	29	みずのえ とら 壬寅	39	みずのえ ね子 壬子	49	みずのえ いぬ 壬戌	59
みずのと とり 癸酉	10	みずのと ひつじ 癸未	20	みずのと み 癸巳	30	みずのと う 癸卯	50	みずのと うし 癸丑	50	みずのと い 癸亥	60

仏教流布の国 西域 仏典の結集 インド全図 鎌倉 安房の国 下総の国 旧国名、近国・中国・遠国 日蓮大聖人逢難の跡 富士大石寺周辺図 日興上人行蹟図

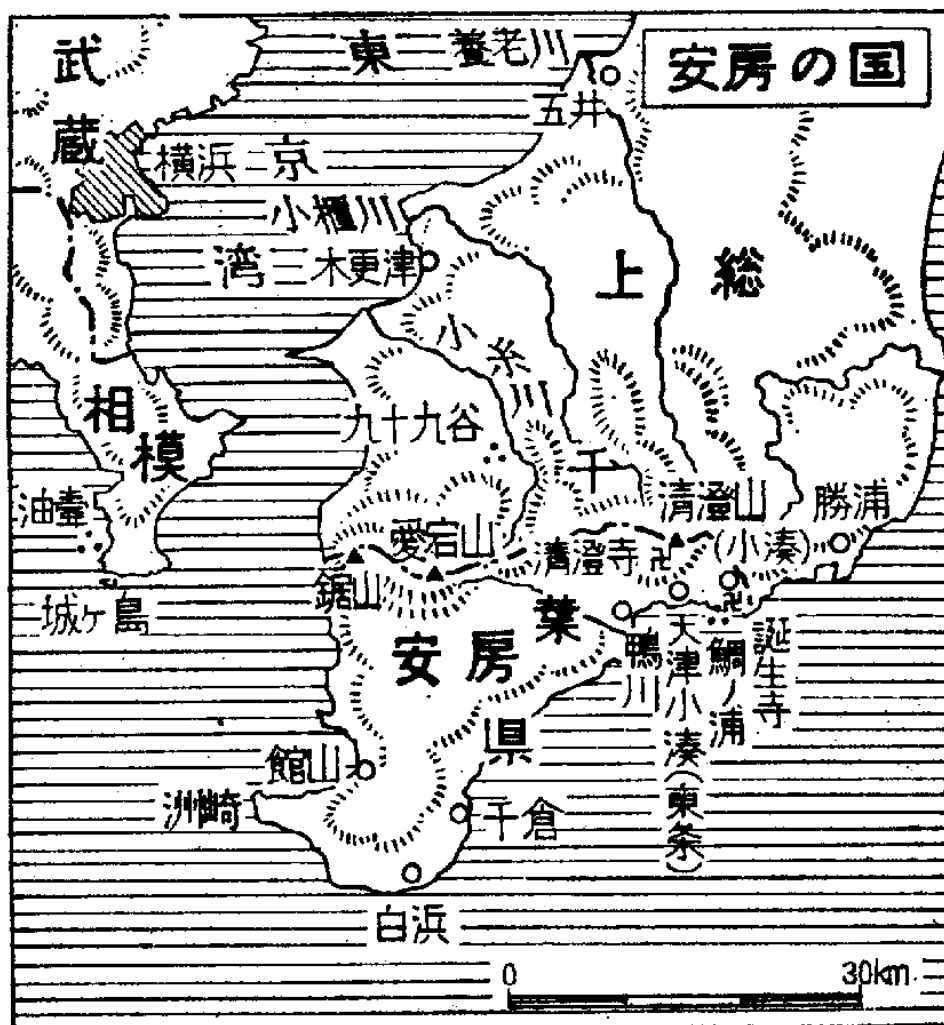
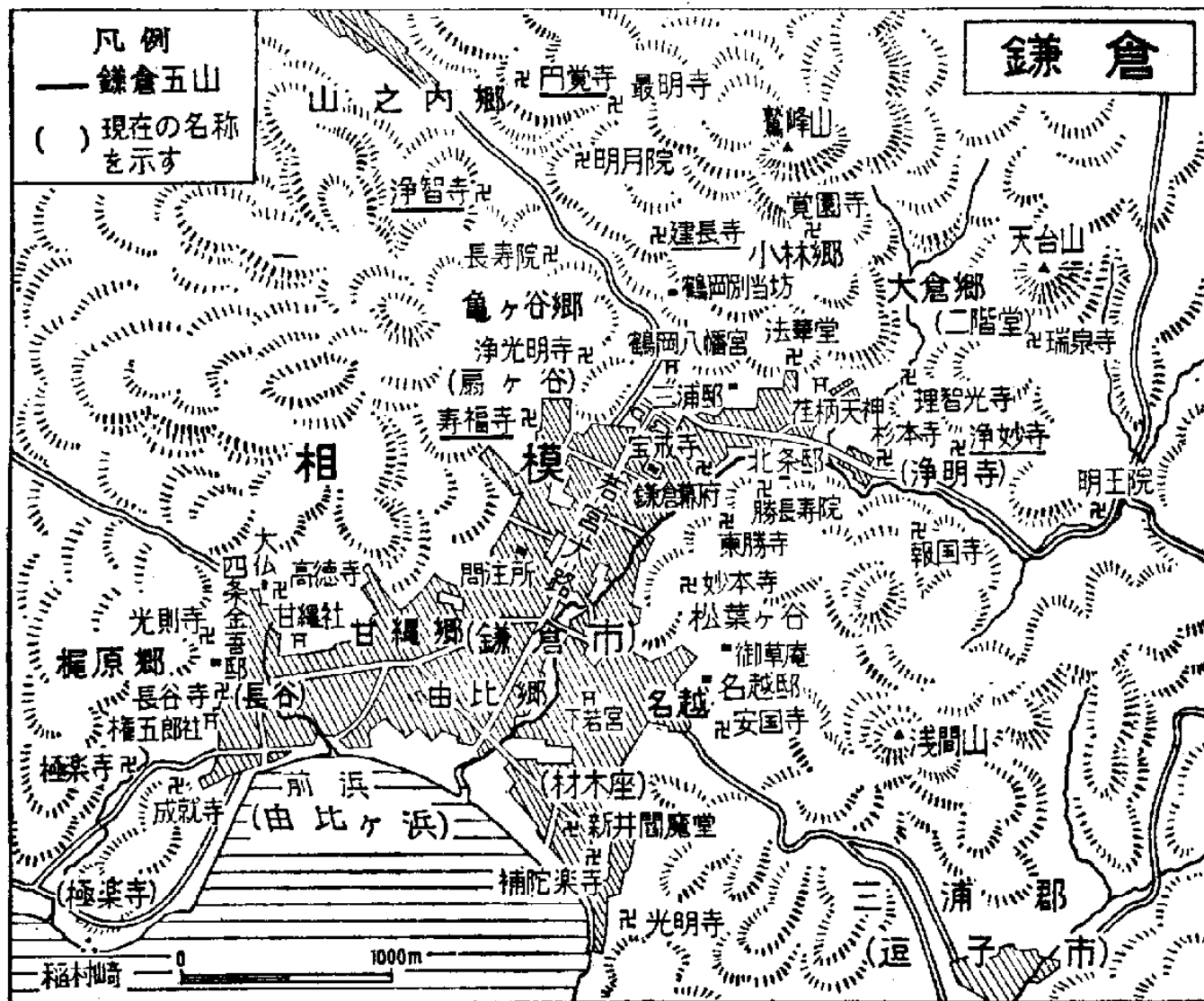




上 インド全図ならびにインド最古の都の一つで仏教遺跡の多い王舎城。

右上 西域とシルクロード。

右下 仏典の結集。第1回は釈尊入滅の年。第2回は釈尊滅後100年ごろ。第3回は釈尊滅後200年ごろ。第4回は釈尊滅後400年ごろ。



左 日蓮大聖人逢難の跡

下 平安京を中心とした近国，中国，遠国の図。

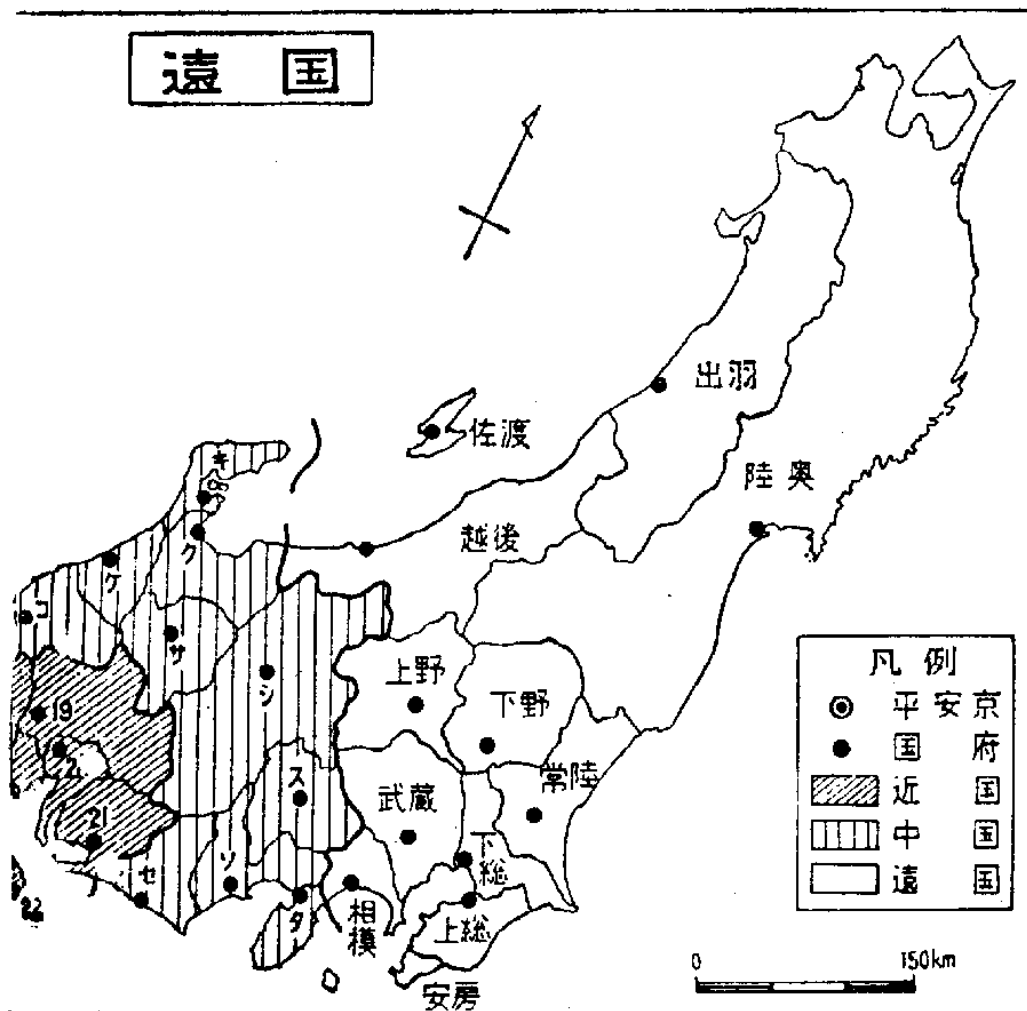
近国と中国の名称は次のとおりである。

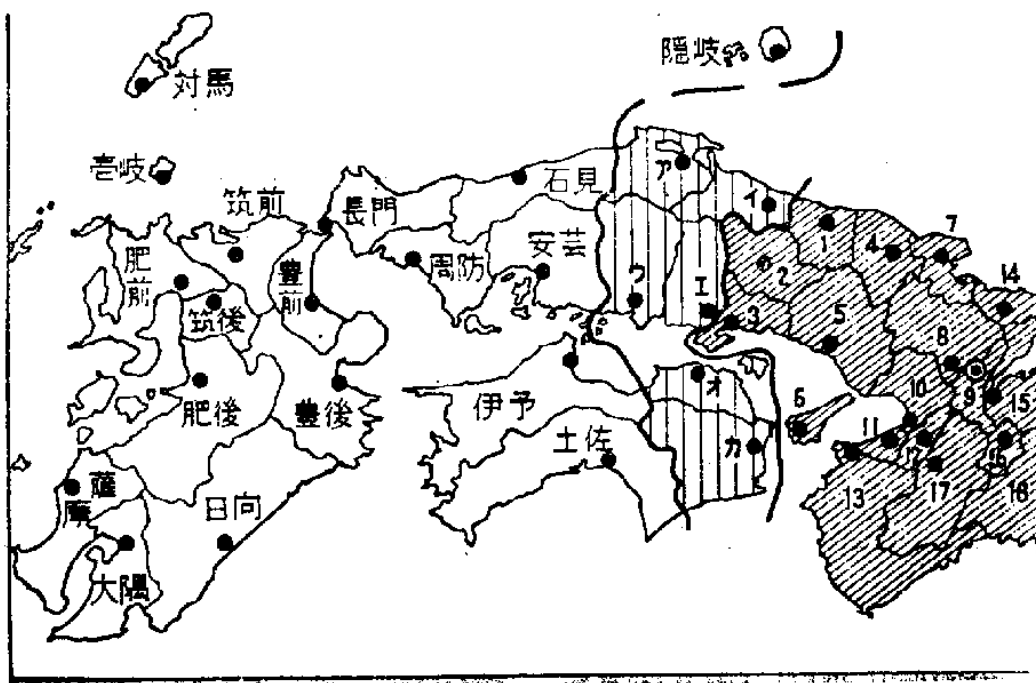
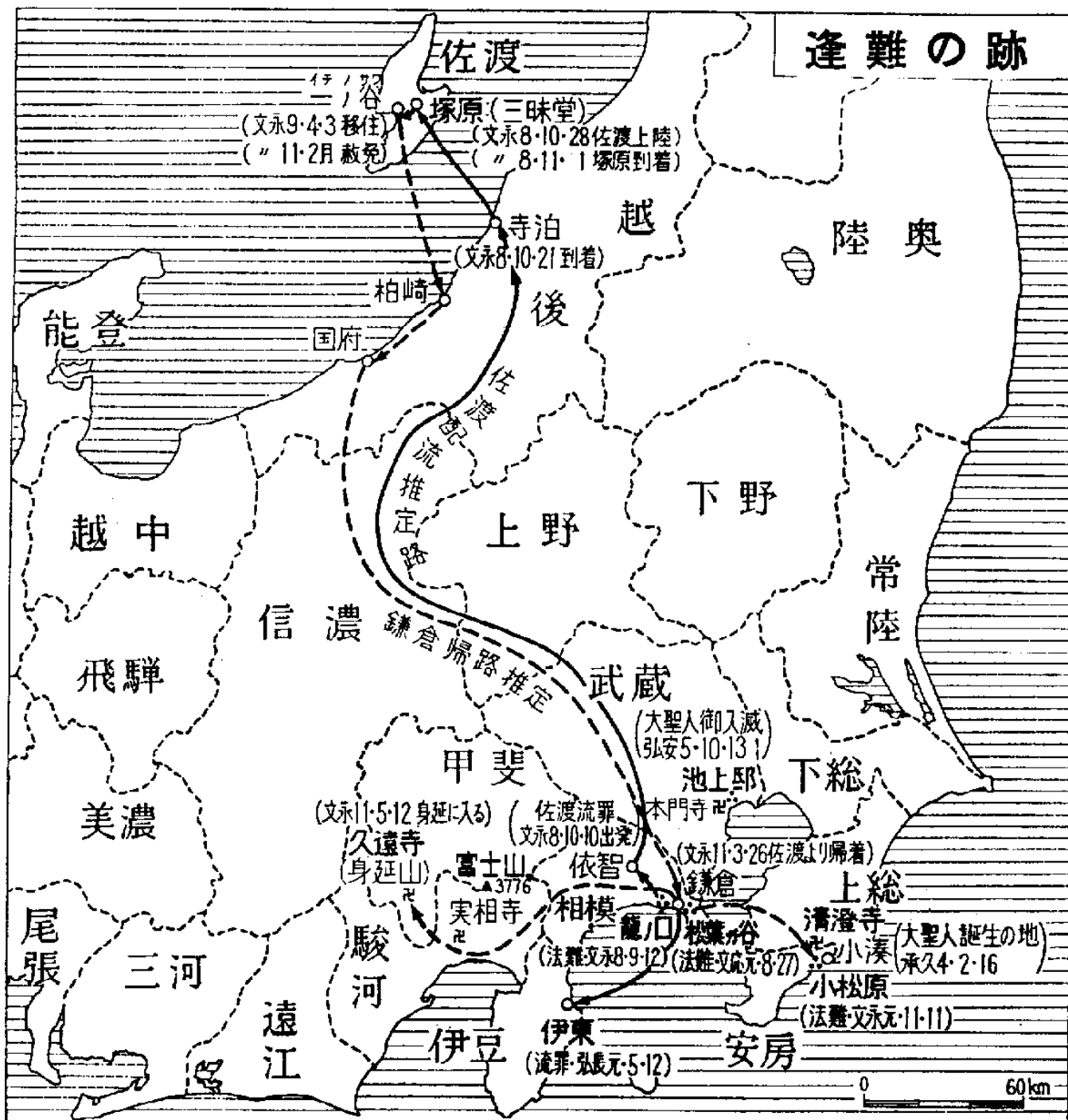
近国

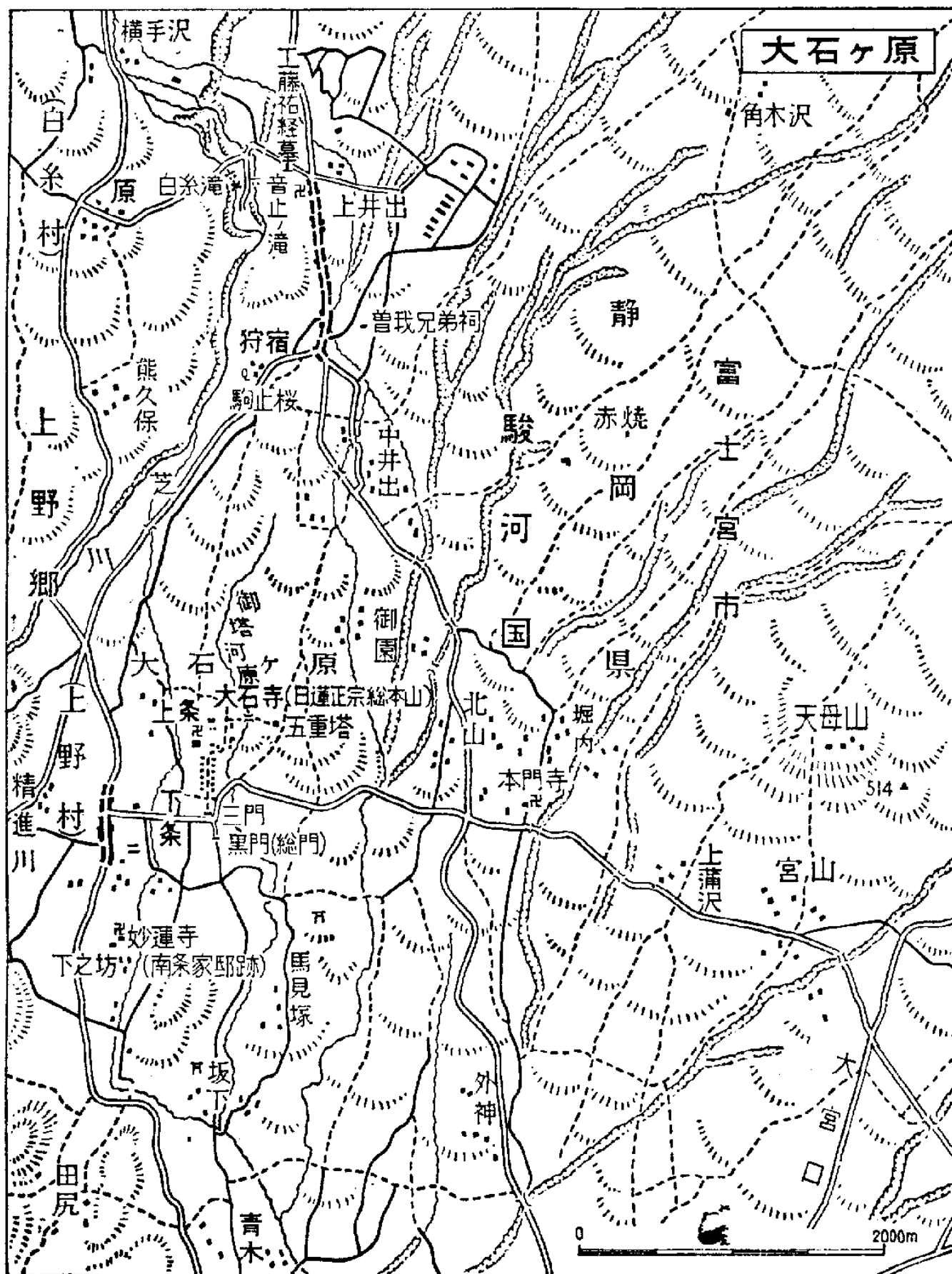
1 因幡	7 丹後	13 紀伊	19 美濃
2 美作	8 丹波	14 若狭	20 尾張
3 備前	9 山城	15 近江	21 三河
4 但馬	10 摂津	16 伊賀	22 志摩
5 播磨	11 和泉	17 大和	
6 淡路	12 河内	18 伊勢	

中国

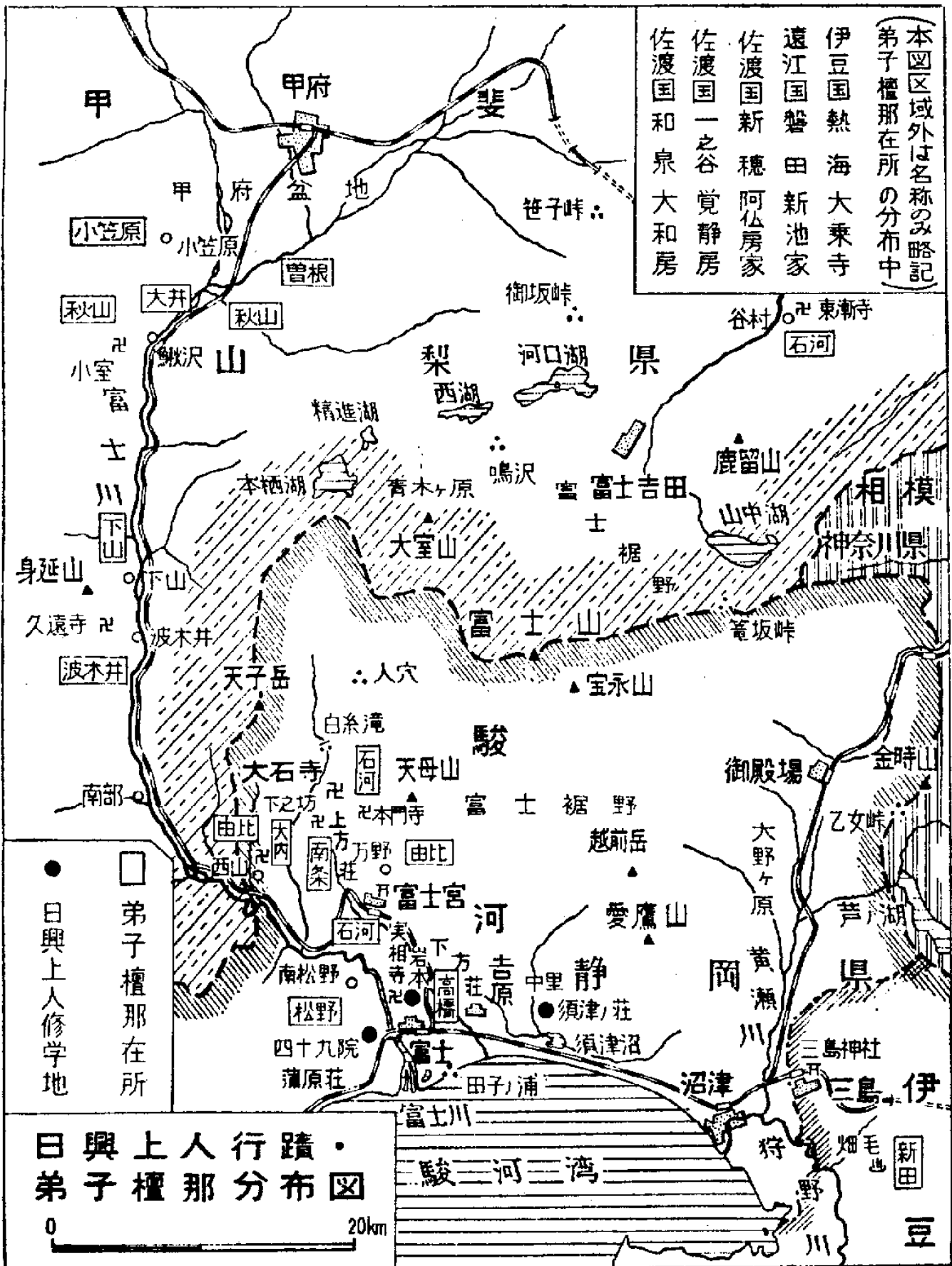
ア 出雲	オ 讃岐	ケ 加賀	ス 甲斐
イ 伯耆	カ 阿波	コ 越前	セ 遠江
ウ 備後	キ 能登	サ 飛騨	ソ 駿河
エ 備中	ク 越中	シ 信濃	タ 伊豆







(本図区域外は名称のみ略記)
 弟子檀那在所の分布中
 伊豆国熱海大乘寺
 遠江国磐田新池家
 佐渡国新穂阿仏房家
 佐渡国一之谷覚静房
 佐渡国和泉大和房



日興上人行蹟・弟子檀那分布図

御書にみる御供養品一覽

〔通貨〕

青鳧(せいふ)

青い鴨の意。一貫文ごとに銭の穴にひもを通して束ね、一結、一さし、一連などと呼んだ。

鷺目一結(がもくひとゆい)

鷺鳥の目のように丸く、また、そのひとみのような四角の穴があいている通貨。

銭三貫(せにさんがん)

金、銀、銅、鉄、真鍮で鑄造した通貨の総称。

〔穀物〕

米(こめ)

八木(こめ)

鹽牙(こめ、しらよね)

白米(しらよね)

乃米一だ(しらよねいちだ)

白米とは、精白された米のこと。一駄とは、馬一頭に積んだ量二俵をもって一駄といふ。

麦一箱(むぎひとこ)

白麦(しろむぎ)

春麦(つきむぎ)

麦の白米

あわの米(あわのよね)

大豆一石(だいずいっこく)

焼米(やきこめ)

焼米とは、新米をもみのまま炒(い)り、ついて殻をとったもの。

干飯(ほしい)

干飯とは、ほしてかわかして貯えておく飯、これを水にひたせば、すぐたべられる。

青麴(あおざし)

青麦をいり、臼でひいて糸のようによったもの。

餅(もち)

餐(もち)

十字(むしもち)

角粽(ちまき)

粽(ちまき)

ちまきとは、古代中国より日本に伝えられた菓子類。もち米をチガヤ(茅)の葉で巻くから「ちまき」という。

洗芋(あらいいも)

洗ってある芋。さといもであらう。

家の芋(いえのいも)

さといもの古称。

蹲鴟(いものかしら)

さといものこと。蹲とはすわるの意。鴟は鷲の一種の鳥。芋の形が鳥のすわった姿に似ているので、こう呼んだ。

芋の頭(いものかしら)

芋(いも)

八頭(サトイモの一種)のこと。

毛芋(けいも)

「かしゅういも」ともいう。中国の原産。

根芋(ねいも)

里芋などの芽ばえを食用にするもの。

薯蕷(やまのいも)

やまのいも科の多年生蔓草。別称じねんじょう。

〔野菜・総菜〕

枝大豆(えだまめ)

山葵(えびね・わさび)

莖立(くぐたち)

野菜のとうをいう。とくにスズナのとう(莖)。

牛房一束(ごぼうひとたば)

豇豆穂尖(ささげひげこ)

ささげとは豆の一種。ひげことは竹籠の一種。すなわち竹籠入りのささげの意。

山椒(さんせう)

生姜(はじかみ)

しょうかう・はしかみ

しょうがのこと。根茎を食用に供し、粉末にしたものは香料となる。

大根(だいこん)

筍(たかな)

筍(たかな)

筍(たかな・たけのこ)

靈芝(たこ)

きのこ、たけのこ等の説あり。

土筆(つくづくし)

つくしのこと。スズナの地下茎から出る胞子茎。

野老(ところ)

やまいも科の蔓草。

茄子(なすび)

名荷(みようが)

蕨若十枚(こんやく)

摺豆腐(すりどうふ)

一般に今の高野豆腐といわれている。

〔果 物〕

栗一籠（くりひとかご）

柚（ゆず）

泡消柿（あわしがき）

あわしがきとは灰汁で洗い、十数日保存して渋味を抜いた柿。

串柿（くしがき）

柘榴（ざくろ）

瓜（うり）

柑子一籠（こうじひとかご）

ミカンの一種、風味は淡白である。

梨（なし）

〔海産物〕

海苔（のり）

海紫菜（あまのり）

河苔二帳（かわのり）

山間の溪谷の清流に、岩石に附着している緑藻でつくったのり。日本特産種である。

昆布（こぶ）

小藻（こも）

海藻の一種、石蓴（せきじゆん）ともいう。ひるむしろ科の多年草。食用のほか、むしろ、ふとんの中身となる。

鶏冠菜（とつさかな）

とさかのりのこと。紅藻類トサカノリ科の海藻。塩づけ、または乾燥して保存食とする。

生ひじき（なまひじき）

干ひじき（ひるひじき）

生和布（なまわかめ）

海藻（わかめ）

裙帶菜（わかめ）

荒布（かちめ）

かちめとは、温暖な海水に生ずる褐藻類コンブ科の海藻。於胡（をこ）

おごのりのこと。紅藻類オゴノリ科の海藻。現在は寒天や刺身のつまなどに用いられる。

〔酒・その他〕

聖人（すみざけ）

清酒（せいす）

聖人を清酒といひ、濁酒（にぎりざけ）を賢人という。

あまざけひとをけモチゴメにこうじを入れてつくる酒。

千日ひとつ（さけひとつ）

千日とは、千日酒のこと。良い酒をいひ、中国の故事にある。

古酒（ふるざけ）

古酒とは、去年作った酒。

酒大筒・小筒

油筒一（あぶらひとつづつ）

塩一駄（しおいちだ）

酢一桶（すひとおけ）

酢筒（すずつ）

味文字（みもじ）

味噌の女房詞。

みそをけ

飴桶（あめおけ）

もち米をむし、大麦のもやしを入れ、熱湯を加えてしばらく練ったもの。

菓子一籠（かしひとこ）

〔衣服〕

袈裟一帳（けさいつちよう）

絹の袈裟（きぬのけさ）

薄墨染衣（うすずみごろも）

御衣（おころも）

薄墨染衣とは、淡い墨色に染めた衣。日蓮正宗の僧侶のみこの色の衣を着用する。

単衣（ひとえ）

単衣とは、盛装用の衣服の一。

御単衣（おんひとえ）

単衣布（ひとえぎぬふ）

御衣布（おころもふ）

絹片裏（きぬかたうら）

厚綿の白小袖

あつわたの小袖

白小袖（しろこそで）

青き裏の小袖

柿のあをうらの小袖わた

小袖とは、小さい袖の衣服のこと。また、絹の綿入れのこと。

帷一領（かたびらいちりよう）

帷とは夏の着物の一種。片方という意。

細美帷（さいみかたびら）

細美帷とは、麻布の帷。

明衣（ゆかたびら）

明衣とは、ゆかたの一種。

太布帷子（たふかたびら）

たふかたびらとは太糸で織った目のあらい布の帷のこと。

腰三具（こしさんぐ）

衣服・袴・裳などの腰部にあたる部分。また、その辺に結ぶ紐の称。

直垂三具（ひたたれさんぐ）

もと庶人の平服で、後に武家の礼服となり堂上の人にも用いた。

帽子一（ぼうしひとつ）

昔、布帛（ぬのわた）で造ったかぶりものの総称。頭巾。

をび一すじ

〔什器・用度品〕

銅の御器（かねのごき）

御器とは食器のこと。また、仏前を荘嚴にする五器（一対の花瓶と一対の燭台と一個の香炉をいうこともある）。

御ざの筵（ござのむしろ）

筵（むしろ）

陶（り）の茎を織って作った敷物。

焼香二両（しょうこうにりょう）

灯明・立華・焼香の三具足の一つ。香炉のこと。

筒（つつ）

竹筒の形をした器で、水や酒等の液体を入れる食器のこと。漆（うるし）ぬりである。

筒御器一具付

提子（ひさげ）

つるのある小鍋形の具。

筆十管（ふでじゅつかん）

墨五丁（すみごちよう）

紙（かみ）

太刀（たち）

扇（おうぎ）

五明（おうぎ）

舞（しゅん）の作った扇を五明扇という。